

伊勢物語講義

全

310-118

X

310

118

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5

始





今泉定介先生講述

# 伊勢物語講義

東京書肆

誠之堂藏版

現今世に講義社講の類書多し、其の出版は各書店に就き、誠之堂出版の伊勢物語講義と題指名あらん事あり

## 伊勢物語講義

今泉定介

### 講述の目的

此の書は、古來、大に世に行はれたれば、之を解釋せるものも、甚、れほし。其のれほかたを舉ぐれば

(一) 伊勢物語愚見抄(五卷)	一條 兼良	(六) 同	拾穂抄(二卷)	北村 季吟	
(二) 同	宗祇抄(一卷)	宗祇 法師	(七) 勢語臆斷	(四卷)	沙門 契沖
(三) 同	關疑抄(五卷)	細川 幽齋	(八) 伊勢物語童子問(十三卷)	荷田 春滿	
(四) 同	難義註(一卷)	作者 不詳	(九) 同	古意(六卷)	賀茂 真淵
(五) 同	集註(十二卷)	一華堂切臨	(十) 同	新釋(六卷)	藤井 高尙

などなり。此の外、なほ多し、中にも新釋は、出版の時代、最、あたらしければ、説も亦新しく、いはゆる、古註をあつめて、大成せるものともいふべし。故に余もおほやう新釋により、またいかかと思ふかしは、他の古註をも取り、斷見をも加ふべし。但、余の此の書を講ずるは、中等教育の程度を目的とすれば、緻密を欲せず、高尙を望まず。唯、簡易にして、讀者の會得しやすからん事を期せり。さて講述の順序は、まづ、語を解し、次に文章の大意を述べ、(語釋のみにて、おのづから、大意の聞てゆる處には、殊更に述べず)歴史に涉れる處には、まづ事實をも説明すべし

すべての物語

○伊勢物語講義



世に名高き浦島子の話などは、物語のうちにあるものなり。もと、物語とは、話説の義にして、ふる日本紀には、談の一字をも訓みたり。されば、物語といふは、平安朝特有のものにはあらねど、或は人生の盛衰を述べ、或は脚色を設けて、人情を寫し、以て消閑の具とするに至りしは、當時をもて始とす。さてすべての物語の文体と、結構とを見るに、おほかたは同じけれども、亦ふのく異なる所なきにあらず、之を分類せば、左の三種となるべし

(一) 實事を其のまゝに記録せるもの

(二) 虚實相半するもの

(三) 全く虚なるもの

第一に屬せるは、榮花物語の類にて、名は物語といへども、其の實は即記録なり。歴史なり。故に古來これを雜史と稱して、物語と分つ。第二の虚實相半するものは、即、伊勢物語の類にして、大和物語、今昔物語なども亦こゝに屬すべし。第三は、竹取物語、源氏物語の類にして、全く作者の想像により、趣向を構へたる空中の樓閣なるものなり

右に云へる第一類のものは、歴史的の記録にして、第二類と、第三類とは、小説的の記録なり。故に當時の世態人情を知らんとせば、此の第二類と、第三類との物語に據らざるべからず、其の故は、小説は殊に歴史の参考となること多かればなり。されば、物語を研究する結果は、たゞに文辭に富むのみならず、併せて當時の歴史を明らかにするを得べし。伊勢物語の如きは、殊に然とす。ただ、其の記事、敗徳亂倫の譏なきにあらずれども、これやがて社會の真相をうつし出だせるものなれば、ひとり此の書

を責むべきにあらざるなり

さて物語の中にて、ふるきは竹取と伊勢となるべし。此の二書、いづれかさきいづれか後といふこと詳ならず。文の体は、竹取は、詞のつき、てにをはの用方、古文の格に近し。伊勢は詞少く、意を含めて、事もなきさまに書きなしたれど、道勁にして、しかも優美なるは、老練の筆といふべし。此の他住吉、大和、今昔等の物語あれども、まづは源氏物語なるべし。言毎に意を含めて、照應の巧妙なる、文藻の富麗なること、誠に古今に其のたくひを見ざる所なり

### 此の書の作者および名稱

此の事は、余さきに「伊勢物語は詞花言葉のみを事とせざる説」といふ一篇の文を草して、國文學雜誌第二十四號に掲げた事ありき。文中おのづから作者及題號の事に涉れり。又、本書の全篇に、多少の關係あり。故に全文をかゝけて、あらかじめ、讀者に本書の大様を示さんとす

此の物語の詞短くして、趣の長きことは、はやく定家卿も、歌よまん人は、古今和歌集に次ぎて、斷ぶべき書なりといはれたり。されば、世人もこよなきものにめではやし、先輩の之を註釋せられしものもいと多し。されど、多くは徒に詞花言葉の雅なるを愛づるにとまりて、深意の潜める處、また、その事實の國史を補ふに足るものあるに至りては、之を看破りしものいと希なり。作者もいかに夜の餘の心地しつらん。今その深意のある所と、事實の國史を補ふに足る事とを謂はんには、まづ、この物語の作者、并にその時の勢を論せざるべからず。これ余が説の杜撰ならざることを欲すればなり

### ○伊勢物語講義



さて此の書の作者の事につきては、古來、種々説あれども、まづ、清輔朝臣の袋草紙に、伊勢物語和歌二百五十首、業平朝臣所作也、偏非彼人作歌耳、古今間、歌有興書載歟、又不論自他、隨便同人歌、様書列之、若是密事令混之故歟、云々と云はれたるをはじめとして、定家卿は、其の奥書に、只いふかしのみ記して、何人の記とも定められず。平田篤胤氏（古史本、辭經）は、もと業平朝臣のれも旨ありて、自記せられし歌集にて、在五中將物語といひしものなりしを、後人の佗事も取りまじへて、かく名つけしものならんと云はれたり。其の他細川幽齋（伊勢物語關疑抄）伴信友（假字本末）富士谷御枝（北邊隨筆）加納諸平（伊勢物語論）野々口隆正（在五中將日記復古解）海量法師の諸氏その説は、同じくして、皆、業平朝臣の自記せるものならんと云へるは、實にさる事なり。さるを春滿（伊勢物語童子問）眞淵（伊勢物語古意）の兩翁は、この物語の中には、業平と同時の人、また天曆のはじめまでおはしまさんに、御母後の密事を、あらはならずも、文につくりいでんことあるべからず。この書を以て、業平の自記とするは、本を極めざるいまだしき説なりといはれたれど、はやく大鏡にも、二條の后をつれまゐらせて、業平が奈良へ行きかくれしを、堀川大臣國經卿のとりかへしに來り給ふよし見たり。且、時代の差違あるは、作者のあたし事を加へて、あらぬさまにかきなしたるにこそあらめ。又、二條の后に通はれたることを、いみじき罪にたれも、くいと、其の代のさまをしらぬ或にて、あらぬ強説なり。實に今の世などにてこそ、さる事あらんには、いみじき事なれど、男女の道いたくみだりがはしき當時なるがうへに、入内したまはぬ凡人にてさへおはするほどのこと

なれば、何ばかりの事にかあらん。又かく密事などをほのめかし、さたかなる事をも、あらぬさまにかきなしたるなところ、物語書の體なれ。もしかゝる事だにもせずば、いかなる書をか、物語といはん。但、業平朝臣と二條の后と、密通の事あるによりて、陽成天皇は、實は業平の子なりなといふ妄説は、年代をも考へざる僻説なること、土肥經平氏が、春湊浪話に、國史に参照して、詳に辨せられたることし

右の證と論とによりて見たらんには、業平朝臣の自記ならずといふ説は、立つまじけれど、いよく余が説を確にせんために、猶、一二の徴をあげんに、はやく藤原兼範卿の、和歌童蒙抄にも、業平が手づからかみや紙に書ける、伊勢物語の朱雀院の塗籠にありけるには云々と見え、顯昭が古今秘注にも、此の書は古今集より前なるものとしければ、業平朝臣の自記とせしこと著し。されば、信友も、古今集はこの物語をとりて載せられたるなり。そは、其の詞書、集中なべての例に似ず、いたづらなるばかり長くて、皆、此の物語に見えたる詞に、おほかた異ならざるをもて知るべしと云ひ、平田翁は、この物語をもて、平假名文の祖とせられたりき。業平朝臣のみづからかき記したるものとせば、身まかられしは、元慶四年なれば、其の近き世にもせられたりとせんにも、古今集撰ばれたる頃よりは、二十餘年前の事なればなり。また、或説に、この物語は、伊勢の御の筆ならんといへり。其の説に云はく、少年十三幼書之、似家集文體、故號伊勢物語、又曰、非彼筆者、何稱伊勢乎と見えたり。されど、此の文体、女のかけるさまならず。男のしかも文に巧なる人のかけるにて、文の体いと老いたりと、眞淵翁のいはれたるが如し。且、非彼筆者、何稱伊勢乎といへるは、云ふにもたらぬ事と



もなり、此の物語は、僻事物語といふ、なま／＼なることは、清輔朝臣のはやく云はれたるものをや。又、眞字本に、村上天皇第八皇子、六條宮具平親王御撰とあるは、本居宣長翁が、玉勝間に云はれたるが如く、後人のさがしに、かきいれたるものなるべし。但、眞字本と、假字本との優劣は、強ち本居翁の説にも従ひがたし。ろは、藤井高尚の、伊勢物語新釋に云へる如く、互によきあしきどころ／＼あればなり

さて粗云へる如く、この物語は、業平朝臣の時勢をうとましよう思ふ頃、來し方の事ども詠める歌など、心やりにみづからかきおかれし記の、笥の底などに残りて、世に傳はりけるを、後に事好める人のあらぬさまに作りなして、初冠より身まがれるまで、業平朝臣の事にて、業平朝臣ならず。慥にそれとわきがたく、書き僻めたるなん作り主の心しらびにて、ろれやがて袋草紙にいへる、僻事物語の義なりける。されば、孰れを自記のくだり、いづれを加へたる條ども、作者をわきては、當時も猶わかたかりけん。まして、今の世にして、まさにわきなんや。さるを、野々口隆正の復古解に、中將自記の章を撰み出でたるは、穿ち過ぎたりとやいはん。かく作者は、巧に書きひがめれば、一わたり見れば、ろの詞花言葉のみこそ雅なれ。その事實は、いとみだりがはしく、健なる人のつまはじきは、のがれざるべし。されど、源氏物語の當時のさまを褒貶し、落久保物語の繼母を戒しめしなど、均しく、深き心ありて、かけるものと覺ゆ。ろの故は、三代實錄、元慶四年五月二十八日の條に、從四位上行右近衛中將兼美濃權守在原朝臣業平者、故阿保親王之子、正三位行中納言行平之弟也、阿保親王娶桓武天皇女伊登内親王生業平、中畧業平体貌閑麗、放縱不拘、畧無才學、

善作和歌云々と見たり。此の無の字は、有の字の誤ならんと或説にいへり。實に畧無とては種ならぬ心地すれば、有の誤ならん。大日本史の傳には、畧無才學の四字を削られたり。貞觀十四年五月十七日、敕遣正五位下右馬頭在原朝臣業平、向鴻臚館勞問渤海客、是日客徒賜宴と國史に見えたり。此の日の宴には、客人と言談、贈和の遊などもありしなるべければ、猶無の字は、有の字の誤とする方よけん。かくはかくしき人がらなるを、大日本史の贊には、雖居歌仙之一、而輕薄放蕩、名檢掃地ともしも云はれて、古今集に載せられて、さしも惟喬親王に忠なりしてとは其の傳に載せられざるはいかにや。また、此の物語の深意のある所を知らざる過といひつべきのみ。服部南郭の在五中將の論と云ふに

夫在中將者、該達哉、其文也、不假追琢而巧爲微辭、乃託古昔鄙事自述、諧語自出、割名  
蠲婉、蓋亦穢德玩世之徒、豈可引繩墨而論哉、(中畧)至如其好色牀第不修、世固疾焉、然  
觀其世、宜淫是競、一時貴遊子弟、乘堦垣望復闕者、握手無罰、目眇不禁、則習尙之使然  
也、乃病其風俗乎可也、奚獨責在中將爲姪首哉、昔司馬相如、自作傳叙其臨邛之奔、且  
文辭靡麗、不爲行蔽、古之人乎、亦不足怪已、後世刻剝之流、好揚惡德、令古人無所容  
足、則莫取諸風雅也、和歌者流、家傳戶誦、而不問其人、可謂厚矣、(中畧)夫小野王、矢志自  
匿也、紀氏雖微、亦傲世、不改其樂也、乃在中將之周旋、其際、締交歎曲、終始如一、豈不偉  
哉云々

と、此の論實に云はれたり



今此の物語を以て、三代實錄大鏡書等の書に照しておもふに、この中將、おほやけの事にあづからしめ給はゞ、いどめでかるべきを、當時文德帝第一の皇子惟喬親王を、儲位に定めたまはんの御心なりしに、外舅眞房大臣に憚りたまひて、或は神に祈り、又は秘法を修し給ひしも、御本意を遂げたまはず。遂に染殿の後(眞房の女)の腹に生れたまひし、惟仁親王を太子に立て給へり。この時、惟仁親王生れたまひて、僅に九月なりき。是れ藤氏專權のはじめにして、やがて王室の衰頽をまねく基とは成りにしなり。そもいかなる枉律日のあらぶる世なりけん。かゝる未曾有のことさへ出で來にける時なれば、志あらん人は、いかでか憤らざるべき。はた惟喬親王は、第一の皇子におはしまして、帝もかねて、儲君とほほしたれば、ゆめ違ふまじきを、眞房大臣の權威にれされて、お立ちたまはず。御弟の惟仁親王に越えられ給ひければ、惟喬親王は、いかに憤りたはしましけん。封戸をさへ、三度まで辭じたまひ、貞觀十四年七月、頓に出家して、沙門となりたまへるさまは、三代實錄に見わたるが如し。此の物語の中に、惟喬親王、小野にすみたまひし時、まゐられたる條に「や、久しくさふらひて、古への事など聞えたり」また「なくく來にける」などあるを按ふに、業平朝臣も、この皇子を御位につけ奉らまほしくたぼしたること明けし。然るに、當時王室といへども勢なく、政をとるものは、藤原氏の一族に外ならず。帝の御志も得とげさせ給はぬ勢なれば、朝臣、深くそのはからひの公平ならぬ事を憤りて、遂に身をはからかしたるなるべし。是れ一人の力、よく左右し得べき時勢にあらざりしが故なり。然れども、此の事、おほやけにもはゞかりありければ、二條の後の御事によりてのみ、世をうとみしやうに書きまぎらしたるは、例の作者の心しらびなりけり。又「昔男ありけり、身はいといや

しなから、母なんみこなりける」と見わたるは、伊豆内親王(桓武天皇の皇女)の御子にて、阿保親王は御父なればなり。是れはたいかなる官位をも給はるべきに、さもあらぬは。時勢にあはざるがゆゑなりと、憤られしこと推して知るべし。又「これにはや、女をば一口にくひてけり」などいへるは、かくばかり契りしなからひなるを、御兄達やがて昭宣公國經卿などの、いどきびしく制し玉へるを喻へたるものにて、やがて、當時藤原氏の威權のきびしかりしことを、おもしくほのめかしたるものとぞ聞こむし。

又、末段に至りて、「ひかし男いかなりける事をおもひけるにかよめる」

おもふこといはずたゞにやみぬべき、われどひとしき人しなれば

と云はれたるは、實に此の書の骨髓一首の歌にあらはれつといふべし。凡、其の器ありて時にあはぬ人は、我有二寶、劍といひ、白玉はよしならずとも、われしゝらばな思よみて、和漢ともに、慷慨悲憤の情は異ならぬものなりけり。彼れにては、演義小説と云ひ、こゝには物語といふ。それ作り出づる人は、身の幸なきをなげき、世を憤るあまりに、昔の全盛なりし世をしのび、今の世の中、咲く花のほふが如く、榮ゆるを見ては、やうくうつろひなんことを思ひ、或は時めく人をあさみなどして、寓言にかけるもの多し。この書も、唯、當時の聞をはかりて、あらぬさまにかきひがめてこそあれ。藤原氏の專權を、痛く惡みてものせるものなれば、終に我にひとしき人しなればと云ふやうに、誇りかに歎きせられしこそ、後の世までも、心やりとはなりつらめ。實にその世のさま、今より思ひやるだにうれたし。



また、東降の事は、先輩諸氏は、三代實錄、文德實錄、公卿補任等のたしかなる國史に見えねば、取るにも足らぬ作り事なりと云はれたれど、ろは國史に昵みすぎたる説と云ふべし。ろの條にも、あらぬ事まで、書きろへられたるは論なけれど、余は國史に漏れたる事の、なか／＼に、この書にのみ傳はりたることゝ、こゝろ覺ゆれ。さるは、眞淵翁、かつて萬葉集を評して、例へば正史は笏を正しくして、朝に立てるものゝ如く、萬葉は宴席にうちどけたる如きさまをあらはしたるものなれば、正史と照らして、その事を知らんには、萬葉ばかり便なるはなしと云はれたりき。故に余は、物語書もまた正史のうちを見るには、こよなきものよといひてん。さる卓識なる眞淵翁も、一向にこの物語は、あらぬことのみをものせる如く論せられたるは、いかに予や。さて東降の事は、古今集にのせられたるも、この物語と同一ければ、さだかなる事實とは知られたり。もとより古今集は、この物語より取りてのせられたるものなるべけれど、業平朝臣の身まがられし、元慶四年より、古今集の成れる、延喜五年までは、僅に二十余年なれば、もしあらぬ僻事ならば、其の時、勅撰の古今集に、ろのまゝのせらるべうもあらず。業平朝臣の陸奥の島の八十島めぐられし趣しるせり。且、盧實相半したるものなれば、うけばりては得いふべからねど、古事談にも、業平朝臣、盜二條后將去之間、兄弟達追至、奪返之時、切業平之本鳥云々、仍生髮之程、稱見歌枕、發向關東云々と見えたるなとも、何かより所のありしものならん。又續日本後記之、嘉祥三年正月丙辰朔壬戌授無位在原朝臣業平從五位下、この時、業平朝臣は、二十五歳なり。三代實錄、貞觀四年三月七日乙亥授正六位上在原朝臣業平從五位上とあり。この時、三十八歳なり。文德實錄には、一所も所見なし。從五位下にぞく級

せられし人の、かへりて一等を降して、四十歳に及ぶまで、六位にてあられけるは、唯に當時執政家の意にかなはざるのみならず。二條后の事などありて後は、しばらく身をはからかして、東國に居られるなるべし。「名にしおはよいさ」とは「都鳥」の歌などは、遠き東國にありて、ろの鳥の名につきて、京人を思ひやれる歌なることいふまでもなし。其の他、此の物語中に、東國に流浪して、年を経ぬる證とすべきこといと多し。且、源氏物語、總角卷に、在五が日記とあるを、上田秋成（よしやあしや）は、この物語なるべしといへども、或は東降の時の日記の別にありしかも知りがたし。いづれにまれ、東降の時の日記とは、覺ゆるなり。大日本史には、古今集によりて、東降の事を、其の傳に擧げられたるは、さすがに見識ありと云ふべし。

以上論ずる所によりて見れば、此の物語は、いたづらに詞花言葉の雅なるのみならず。また大に事實の取るべきものあることは、知る事を得べし。あはれ、世の物語書を繕く人々よ、其の作者の深意を究めずば、いたづらなる事のみとれもひすてん。ゆめ、このこゝろを念るべからず。此の物語の作者の深意の埋れぬをいたひあまりに、管見をも省みず。先輩諸氏の説を取捨して、いさゝか、臆見をも加へて、かくなん

## 伊勢物語

(初段)むかし男ありけり。うひかうぶりして、ならのみやこ、かすがの里に、しるよとして、かりにいきけり。



(語釋) ひかし男ありけりは、冒頭なり。此の物語、凡百二十餘段ある中、おほかたは、此の冒頭の詞あり。今昔物語、宇治拾遺物語などに、毎段、「今はむかし」といふ冒頭を用ひたるに同じさまなり。さて此のむかし男とは、暗に業平朝臣をさしたるなり。○うひかうぶりしては、元服してなり。うひかうぶりととは、初冠の義にて、元服して、初めて冠を着くるをいふ。○ならのみやこは、大和の奈良京なり。關疑抄に、ならの京に、平城天皇もたはしゝなり。業平は、平城の御孫、阿保親王の御子にて、奈良京にそだちし人なれば、舊跡なりといへり。○春日の里は、地名。○しるよしして、しるは知行の意。よしは由緒のこゝろ。してはありての意なり。すなはち、春日の里に、業平の知行がありての義なり。○かりは、狩にて、鷹狩なり。

(大意) 徳川時代に、大名の子などが、おどなになりては、鷹狩しがてら、領地を廻り見る風俗のありける如く、業平が初冠して、をどこになりて、即、春日の里の領地を見んために、鷹狩しがてらいきたりとなり。

其の里に、いとなまめきたる女はらからすみけり、かのをどこ、かいまみてけり、おもほえず、ふるさどに、いともはしたなくありければ、こゝちまどひにけり。

(語釋) なまめきたる女とは、若く美しき女の意。婀娜また窈窕などの義なり。○はらからは、兄弟をいふ。こゝは、女はらからなれば、姉妹の事なり。○かいまみは、もと、垣間見の義なれど、うつりては、たゞ、物の間より見ることをいふ。○おもほはずは、思ひもよらずなり。○ふるさどに、いとも云云は、かやうの古里に、甚、不似合の女にてありければその意なり。はしたなくは、不都合の義なり。

れば、不似合の意味にも用ふるなり。○こゝちまどひにけりは、男の心迷ふなり。

(大意) たゞはらからすみと云ひて、親なしの姉妹なることを知らせたる文の巧なり。さて古里のさびしげなるに、親もなき姉妹が住みたらんは、まことにあはれにて、見る人の心とまるべきさまなれば、これを見たる男は、愛憐の情しきりに起りて、心も迷ひきとなり。

男きたりける、かりきぬのすろをきりて、歌をかきてやる。其のをどこ、信夫すりのかりきぬをなんきたりける。

春日野のわか紫のすり衣、しのぶのみだれかきりしられず

となんれひつきて、いひやりける。ついでおもしろきこと、やおもひけん。

(語釋) かりきぬは、狩衣にて、後には、官服にもなりつれど、もとは、鷹狩に着たるなり。○すろをきりては、狩衣の裾を少し切りて、ろれに歌をかきつけてやりしなり。○しのぶすりは、諸説あれども、臍断に、陸奥の信夫郡より、昔、すりて出だせる名物なりといへる。よき。東鑑にも、信夫毛、地摺千端などいふ事見たり。顯昭の古今秘註にも、陸奥の國信夫郡に、もじすりとして、髪をみだしたるやうにすりたるを、しのぶすりといふといへり。今、福島の名産なる信夫摺は、後世のものなるべけれど、おもふに、いにしへ此のあたりにては、衣を染むるわざをしらで、石の面の平らなるに、色よき草花をならべ置き、布をおほひて、丸き小石をもて、うへより摺りて、草花の色を布へうつし、なるべし。○春日野の歌、春日野は、大和なり。春日野の里の女なれば、彼の野にある紫草にたとへ、



また、今きたる狩衣も、紫にすりたれば、やがて、若紫のすり衣とつゞけたるのみにて、上の句は、全く序なり。しのぶのみだれとは、信夫摺は、其の模様のみだれてあるものゆゑに、我が心のかぎりなく、思ひ亂れたるにかけていへるなり。○おひつぎては、追續なり。すぐにといふが如し。今の語に、唯今まゐらんといふ意を、追付まゐらんといふも、こゝと同じかるべし。○ついで云々、ついでに、順序の意なり。をりからの順序が、風流でおもしろき事なりと、女の方にも思ひしならんとなり。こゝにて、業平朝臣の狩りに行きし物語は終れり。以下の文は、作者がいふ意なり。物語文の上にては、これを草紙地といふ。然るに、舊註には、次の源融公の歌を引きたるを、女の返歌のこゝろにしては、非なり。

(大意) 男、その頃、賞賛せる摺狩衣を着てありしが、姉妹の女を見て、愛憐の情たへ難く、狩衣の裾を切りて、歌をかきつけて贈りしが、其の歌は、おのが今きたる摺衣によそへて、心の亂れたる事をあらはしつる、即妙の歌なりしかば、折につけて、女も風流にたもしるき事と、思ひけんとなり。

みちのくのしのぶもちすりたれゆゑに、みだれろめにしわれならなくにといふ歌のこゝろはへなり。むかし人は、かくいちはやきみやびをなんまける。

(語釋) みちのくの云々、此の歌は、古今集戀の部に出で、源融公(河原左大臣)の歌なり。さて上の歌に、しのぶのみだれといへるは、信夫摺のみだれといふ心なるよしを知らさんとて、此のうたを引き出でたるなり。大意は、上は序にて、信夫もちすりの如く、我が心の亂れしは、誰ゆゑに亂れそめしならん。我が心から亂れしにはあらず。君ゆゑであるといひて、戀人に贈りし歌なり。但

古今集には、「みだれろめにし」を、「みだれんとおもふ」とあり。○かくいちはやきは、かやうに、こざかしきなり。いちはやきは、もと、逸速の意にて、おだやかならず荒ぶる意なれど、轉りては、ただやかならず、こざかしきことにも用ふ。○みやびは、風流の義なり。○なんしける、なんは、やなど、同じ係辭けるは、結詞なり。

(大意) きのお今日初冠したる、わかきをこの事なれば、今の世の人ならば、よろづつとましくて歌よみかくることおせじを、昔人は、わかなくても、かくこざかしき風流をしけりといふ意にて、はじめに初冠して、狩にいきけりといへるに照し合はせて、見ん人の心うるやうにたくみにおもしろく、書きたるなり。

(二段) 昔をどこありけり。ならのみやこははなれ、此のみやこは、人の家、まださだまらざりける時に、西のみやこに、女ありけり。

(語釋) ならのみやこは、前にいへり。○此のみやこは、平安城の事にて、すなはち、今の西京なり。仲桓武天皇の延暦三年に、奈良の京を離れて、山城の長岡に都をうつされ、同じく十三年に、又、平安城にうつされたるなれば、こゝは、長岡の京をいふとも思はるれど、長岡には、僅に十年の間なれば、なほ、平安城といふ方よろしかるべし。○人の家、まださだまらざりける時に云々、まだは、いまだなり。さていまだ家々もといふのは、さるをいふは、都うつされて後、ほゞ無きをしらせたるなり。かく、わざと、此の京のはじめをいへるは、業平朝臣の歌を、全くあげたれど、其の人ならぬさまに、時代をたがへて、かきなしたるなり。此の物語の心づかひ、皆、しかり。平安城の始は、業平朝臣のう



まれざる三十年前の事なり○西のみやて、皇城の大門を朱雀門といふ。此の朱雀門より、羅城門までの道を、朱雀大道といふ。この大道より、東の方を、東の京といひ、(左京、また、洛陽といふ)西の方を、西の京といふ。(右京、また、長安といふ)

(大意) 昔男ありき。此の頃は、奈良の京は、舊都となり、新都の平安城も、極めてはじめつ方なれば、いまだ、皇都市區のわりかたもどのはず、人家も、おほからぬ時なりしが、西の京に、また一人の女ありけりとなり。さて其の男は、暗に業平朝臣を指せるなり

其の女、世の人にはまさりけり。かたちよりは、心なんまさりたりける。

(語釋) 世の人にまさりとは、容貌と心となり。氏姓の尊くまさる義といへるは、わろし○心なんまさりたりけるは、姿も心も、世の人には立ちまさりたるが、殊に心だてよろしく、情示かく、物のあはれを知れる女なりとなり。なんは、指し示す意の係詞にて、ぞといふに似て、平穩なり。けるのるはなんの結詞

(大意) こゝは、女の様子の大體をまづいひて、次につばらかに解く文の體なり。古文には、此の體おほし。今人の文にも、「何處ろこに遊びぬ」なまづいひて、あとに、其のくはしき様子をしるすは、やがて此の體なり

ひとりのみにあらざりけらし。

(語釋) のみは、一ありて、二なき意をあらはす詞。こゝに、一人ばかりにもあらずとなり○けらしは「けるらし」の約にて、推し測る意の助動詞。今言に「サウナ」なを譯すべし

(大意) こゝは、此の物語つくりぬしの心にて、推し測りていふ言にて、彼の女は、外にもまた、思ふ人のあるさうなどの意をあらはせるなり

うれを、かのみめ男、うちものがたらひて

(語釋) それをとは、彼の女を指す○まめ男、まめとは、信實また忠誠などの文字をよめり。こゝもそれらの字の義にて、心のあだくしからぬ男をいふ。好色人の心の、あだくしき男は、かへりて女を思ふもせちならず。信實なる人ぞ、心づくしなる戀はするものなり。まして「世の人に心も貌もまさりたる女」なれば、まめ男の、深く心をとめたるやうに、書きなしたるなり。眞淵翁などの説に、こゝのみめ男といふは、あだくしき男の事を、反對に信實人と云へるならんと解かれたれど、わろし○うち物かたらひて、うちは添へていふ語にて、意味なし。物かたらふとは、何事にまれ、談話することをいふ

かへりきて、いかゞおもひけん。時はやよひのついたり、雨ろばふるにやりける。  
(語釋) かへりきては、まめ男が、彼の女の家より歸り來てなり○いかかおもひけんは、作者の詞にて、信實男の心中を、想像せる詞なり○やよひは、陰曆三月をいふ。やよひは彌生の義にて、草木のいよく生ひ茂れる月なればいふとぞ○ついたりとは、「月立」の意にて、いつにても、翌月に入れるをいふ。されば、必しも朔日(月の第一の日)の事のみならず。其の月の初旬などいふ義に廣くいふ。こゝも然り。古註に、二月晦日の夜あひて、朔日の朝歌をつかはせるにやといへるは、穿ち過ぎてわろし。かへりきてといへばとて、曉にかへりて、其の日の事とせずとも、よろしからん○



をばふるは、しよぼくふる義なり。春雨のさまをいふ○やりけるは、歌をなり

(大意) 大休、信實男は、心の中には、たどひいかほを戀ひしく思ひたりとも、詞に出だしては、とやかくいはぬものなるに「おきもせず」の歌をよみてやりしは、彼の女のひとりのみにもあらぬやうに見ゆれば、彼是と思ひみだれての、しわざならんと、記者の推測なり

おきもせずねもせでよるをあかしては、

春のものどてながめくらしつ

(語釋) おきもせず、ねもせでとは、物思ひ亂れて、終夜ねられぬをいふ。かゝる折のつねどて、おきてもをられぬが故に、かしてつくく物おもふさまなり○春のものどては、春のつねどての意○ながめは、今は唯眺望する意にのみいへど、古言の意は、黙然として、物おもひする事をいふ。それ、こゝは、長雨をかけたなり○つは、ぬといふに粗おなじく、其の事のしはて、止まる意を示す詞なりと知るべし○此の歌、古今集、戀の部にあり。さて其の詞がきに「やよひのついたちばかり、しのびに人に物らいひて後に、雨のをぼふりけるに、よみてつかはしける」とあり。此の詞がきによりても、歌の意は、こゝと異ならず。たゞ、わざとはしがきをたがへて、もとのよみ人ならぬさまに紛らしたるは、例の作者の心なり。さて此の歌、かへり来て、すゞといふよりは、二三日のちに贈れりといふ方よろし、ろの故は、ながめとは、前にもいへる如く、黙然として、物おもふさまなればなり。直に其の日おくれりどては、此の歌の詞にもかなはず

(大意) この歌の一首の意は、夜をほしれきるとも、ぬるともなく、思ひあかし、もし、明けなば、ま

ぎれて思ひ慰みやせんと、曉をまちしに、又をりから打ちくもりたる空のけしきに、春雨さへ、しよくふれば、いと物おもひ加はりて、いかにともせんかたなし。されど、かくはれくしからぬは、春のならひじやと、ながめくらしつとなり

(三段) むかし男ありけり。けさうしける女のもどに、ひじきともいふものをやるどて、

(語釋) けさうは、懸想の字音なり。戀のおもひをかくることをいふ。こゝは、男の心を懸けたる女をいふ○ひじきもは、和名抄に、鹿尾菜を比須木毛と訓めり。海藻の名なり。これは、海中の石上に生ずるものにて、長さ二三寸ばかり、鼠尾の如くにして、蒼黒なり。煮れば黒くして、味、淡泊なるものなり。今ひじきといふ。男より、今、この物を女の許へおくるどてなり

おもひあらばむぐらの宿にねもしなん、

ひじきものには袖をしつゝも

(語釋) おもひあらばは、我を思ふ心あらばなり。さてこゝを、藤井高尙の新釋には、おもひなくばの誤なりとて、改めたり。さて我がかく苦しく君を思ふおもひなくばとの意に解したり。其の説あしからねど、諸本共におもひなくとある本なければ、しばらく、舊説による○むぐらは、葎にて草名なり。荒野れよび人家の庭前などにも生ずる草なり。莖細くして長く延び、葉と共に毛あり。葉はあかねに似て小さく、七八葉車輪の如く、一處に着きて、八九層をなすものなり。むぐらのやどとは、草のあれはてたる家の義○ねもしなんは「寝モシヤウ」なり○ひじきものとは、引き敷き物と



いふ意にて、前の鹿尾菜シズメを含めたるなり。○袖をしつゝもは敷き物には、袖をしながらもの意なり  
(大意) 此の歌のすべての意は、金銀珠玉を以て、飾れる家も、何かせん。妹とし居らば、八重むぐら茂れるいふせき小屋に、敷物なく、袖をかたしくとも、厭はじとの意なり。高尙は、初の句をおもひなくばと改めて、さて一首の意は、「けさうしても、女のつれなく、とやかく物おもひするにうんじて、つらく思ふには、此のくるしきれもひのなくば、君がかくつれなくて、獨袖をかたしきつゝ、いふせきむぐらの宿にねても、堪へられなんを、くるしきおもひのあるゆゑに、ひとりねの堪へがたきといふ意なり云々」と説きたり。其の方こそ明らかなり。たゞ私に改めたるなれば、たしかにそれと定めがたし。いづれにても見ん人のとるにまかす

「二條の後の、まだみかどにもつかうまつりたまはで、たゞうどにて、れはしける時のことなり」

(語釋) 二條の後は、藤原長良公の第二女、御名を高子と申せり。貞觀八年十二月、清和天皇の女御となり給ひぬ。陽成天皇、貞保親王、教子内親王などの御母に涉らせ給ふ○まだみかどにもつかうまつりたまはでは、いまだ、女御ともなり給はで、家にあられるをりの事となり○たゞうどは、凡人の音便にて、いまだ無位無官におはせる時をいふ、○此の二條の後云々は、後人の側へ書きそへたるが、のちに、本文に混じたるなるべし。男女の間の、いたく亂れたる事なれば、あながちこの事のみ責むべきにあらぬは、いふも更なれど、かく二條の後云々と、きはやかに御名を出だしたるは、この物語のすべての文体にも叶はねばなり。暗に、業平朝臣なる事をしらせながらも、皆、む

かし男ありけり」とやうに、おぼめかして、かけるものをや。其の外、時代をたがへ、官位を改め、事實か、またはあらぬ事か、殆、知りがたきまでに、書きひがめたるぞ、記者の心にはありける

(四段) むかしひんがしの五條におほきさいの宮おはしましける西のたいに住む人ありけり

(語釋) ひんがしの五條は、東の五條にて、地名○おほきさいとは、大后オホキサキの意。いはきの音便なり。これは、五條皇太后順子の御事なり。五條の後は、藤原冬嗣公の御女、仁明天皇の御后なり。文徳天皇には御母。清和天皇には御祖母に涉らせ給へり○おはしましけるは、御座オハシマシケルけるにて、そこに御すまひ遊ばされきとなり○西のたいに住む人ありけり。西の對とは、皇太后のおはします御殿の、西むかひにある局やうの所をいふ。そこに住む人を、たれともいはぬこそ、此の物がたりのふりなれ。さるを、こゝは、二條の後の御幼少の頃、こゝにおはせるを指せりといふ説あれど、いかゞ

ろれをほいにあらで、ゆきとふらふ人、こゝろさしふか、りけるを、む月のとるかばかりに、ほかにかくれにけり。

(語釋) それを、夫ツレをにて、前を承けたる代名詞。こゝは、西の對に住む婦人を指せり○ほいは、本意の字音なり。良き事にも、悪しき事にも、己がしかせんと思ひ込みたることを、本意とはいふ。さもあらぬを本意にはあらでといふなり。始より、此の女をと思ひ込みたるにはあらで、何となく、事の序に行きかよひそめて、懇にたづねとひなとするより、かたらひつきて、志の深くなれるを、ほいにはあらで云々といへるなり○ゆきとふらふは、往き訪ツクふにて、懇に尋ね訪ふことをいふ○人



は、男を指せり。こゝろざしふかゝりけるをば、男の志、親切なりしとなり○ひ月は陰曆の正月をいふ。名義は、諸説あり。一説には、睦月にて、正月は、殊に人々の親睦する月なればいふ。又、一説には、生月の約にて、春陽發生の意なりと。また、一説には、元月の約にて、一年の月のはじめなればいふ。いづれかよからん。看ん人の撰にまかす○ををかばかりは、十日計なり。ばかりは、頃の意なり○ほかにかくれにけりは、女がなり。志かかく、親切に思ふ男をすて、隠れたるは、密事のあらはれん事をはかりてなるべし

(文意) 彼の西の對に住める婦人の許へはじめは、わさく、通ふにはあらで、事の序に行き通ひたりしが、互に知り合ふほど親しくなるが人情なり。まして、男女の間は、互に親密になりやすきものなれば、此の男も、次第々々に、志かかく、何事にも、すべて懇切に心を盡くし居たり。さるを、如何なる事情かありけん。正月十日頃に、其の婦人は、男に一言のこと傳もなく、又、一封の書をも贈らずして、外へ移りて、姿をかくしきとなり。さばかり思ふ男をすて、隠れたるは、心あさき女のやうなれども、さにはあらず。心ある男が、かく思ひしめたる女なれば、さる薄情のものにあらず、然るに、姿をかくしたるは、上ほど憚るべき事のありしがゆゑなりとなり

ありどころは聞けど、人のいきかよふべき所にもあらざりければ、なほ、うしと思ひつゝなんありける。

(語釋) ありどころは、在處にて、隠れたる婦人のありかなり○人のいきかよふべき所にもあらざりければ、他人の往き通ふべき所にあらずとなり。其の故は、此の女、然るべきゆかりある人の家などに、隠れたるなるべければ、男は殊に憚りて、往くこと能はぬなり○なほは、今言に「ヤツハリ」又「其ノ上」など譯す。こゝは「ヤツハリ」の意なり。始、行方もしらす、隠れたる時、いどうしと思ひつるが、在處の知れたれば、喜ぶべきに、他人の往き通ふべき所にあらずれば、ヤツハリ憂しとおもひてなり○うしは、憂の義、思ふまゝならで、心の苦しむをいふ、今言に「ツチシ」などいふに當たるべし○思ひつは、思ひながらなり○なんは、係詞にて、るが結詞なる事、既に前にいへり。此の思ひつゝなんありけるといふ詞にて、憂しとおもひながら、月日經たることを含めたるなり

(文意) 女のゆくへ知られずして、憂しと思ひをりしに、あり所を聞きては、よろこぶべきを、さても道はれねば、やはうしと思ひきとなり

又のどしのむ月に、梅の花さかりに、こづを思ひ出で、かの西のたいに、いきて、たちて見、おて見、みれど、こづに似るべくもあらず。

(語釋) 又のどしのむ月は、さきの西の對にて、女に睦みし次の年の正月なり○梅の花は、其の男の家なる庭の梅の花なり○こぞは、去年をいふ。名義は、或説に、昨日をきよといふに通せりと、又一説に、去歲の字音なるべしといふ、いづれかよからん。定めがたし○西のたいは、西の對にて、前の婦人の住みたる所なり○いきては、往きてなり○たちて見、おて見は、立ちつ居つして、見るをいふ。思ひあまりて、心配のさまなり○みれどは、見れどもなり。あまりくどきやうなれど、古文には、かゝる例多きことなり。下文にも「と見から見みれど」などもあり。同じさまなり。語勢これがために強し。味ふべし○似るべくもあらずは、如何に見ても、去年の梅花に似たりとは、思はれず



となり

(文意) 女に親しみし次の年正月、梅花の盛なる頃、せめて彼の女のありし所だに見んと思ひたちて、西の對に往きて、立ちつ居つ思ひあまりて見れども、去年の梅花の如くならず。是いかなる譯かといふに、梅花の去年に異なるにはあらざるべく、我が親しみし女のあらぬが爲なるべしとの意を含めたるなり。さて梅の花のさかりとしも、此にいへるは、歌に「春や昔の春ならぬ」とある、春の文字のためにおける伏線の文なり

うちなきて、あばらなるいたじきに、月のかたふくまでふせりて、こぞを戀ひてよめる。

(語釋) うちなきては、打ち歎きてなり。打ちは、例の添詞にて、意味なし○あばらなるいたじきあばらは荒れ頽れたるをいふ。いたじきは、板敷なり。床の疊なくして、板のみ敷きたる所をいふ。さてこゝは、荒れ頽れて、住む人の無き所なるをあらはせるなり○月のかたふくは、月の西に傾き落つるまでなり○ふせりては、臥してなり○去年を戀ひては、去年親しみし人を戀ひ慕ひて、せめてもの心やりに、歌を詠みきとなり

(文意) 同じ梅の花ながら、去年のやうに思はれぬは、我が思ふ人のあらぬがためなりと、いろいろに思ひ亂れて、はては、打ちなきぬ。さて住む人もなく、荒れ頽れて、戸障もなき西の對に臥しながら、月の落つるまで眺めやりて、遂に一首の歌を詠みぬとなり

月やあらぬ春やむかしの春ならぬ

わが身ひとつはもとの身に

(語釋) や春やのやの字は、「やは」といふ意味にて、打ち返し詞なり。上の句は、月やむかしの月ならぬ、春やむかしの春ならぬ、月も春も皆むかしのまゝなりとなり○むかしのまゝは、思ふ人に逢ひたりし時を指す○本の身とは、思ふ人に逢ひ見たる時の身といふことなり。さて身にしてといふは、「身ナガラ」の義にて、かく終めたる所に、昔のやうにもあらぬことよといふ意、おのづから含まりたるなり。「にして」といふ語の勢、上の句に、月も春も、昔のまゝなるにといふと「應じて、しか聞てゆるなり。味ふべし」

(大意) 此の一首の意は、月やはむかしの月にあらぬ、月もむかしのまゝの月なり。春やはむかしの春にあらざる、春もむかしのまゝの春なり。然るに、たゞ、我が身ひとつのみは、本のむかしのまゝの身ながら、昔のやうにもあらぬ事よとなり。さて歌は、をさなく詠めとは、古人の教なり。この歌など、まことに幼きさまにて、れほかたの人情にて考ふる時は、いはゆる馬鹿々々しきほどなるべし。されど、實際に、悲しくも、苦しくもある時は、かゝる事にまで、思ひ感ふが、人情の常なり。うたはさる思の切なる場合に、あふるゝものなれば、かくをさなきが、却りて、あはれに、身にしむ心地するものなり。さる理を知らずして、論理的にことわりめきたる事のみ詠まんとするがゆゑに、今人の歌は、なかくに見處なきが多きやかし

とよみて、夜のほのくどあくるに、なくなく、かへりにけり。

(語釋) ほのくどは、夜の明けかゝる頃なり。仄に物の見ゆるほどになるをいふ○なくなくへ、體



きつ泣きつゝの義、泣きながらなり

(文意) ひかしのなごりを慕ひて、かへりかねたるに、夜が明けては、さすがに、人目をはよかる事なれば、泣きながらかへりけりとなり。あはれなるさま、想ふべし

(五段) むかし男あり。東の五條わたりに、いとしのびていきけり。みろかなる所なれば、門よりもえいらで、わらはべのふみあけたる、ついひちのくづれよりかよひけり。

(語釋) 東の五條は、前に解せり〇わたりは、あたりといふに同じ。近邊の意なり、こゝも、女は何人ともわからぬさまに書きひがめたるなり〇いとほは「甚く」「最も」「極めて」などの意なり〇しのびては、隠れてなり。「世をしのぶ」また「人目をしのぶ」などいふこれなり〇いきけりは、性きけりなり〇みそかなる所とは、密かに通ふ所といふ意なり。今言に「表はれぬ所」などいふに同じ語なり〇門よりもぬいらでは、人の通行する門口より入る事はせずとなり。隠れて通ふなればなり〇わらはべのふみあけたるとは、童子等の遊戯して、踏み穿けたるなり〇ついひちは、築土の音便なり。又、中略して、ツイチともいふ。土墻のことなり。さてむかしのついひちは、近世の土墻の如く、かたく築きかため、瓦などをかきたるものならねば、崩れ易きなり。大鏡などに、ついひの上へ、なでしてこの種を蒔きて、さかりに咲き満ちたる事などあれば、上まで、たゞ、土を築きたるのみなりしなり

(文意) 昔、一人の男ありしが、此の男、東の五條近邊に、人しれず通ひけり。因より表むきに往く

べき處ならねば、門よりは入らずて、土墻の自然にくづれたる所を、童子等が遊ぶとて、たびく踏み越ゆるゆゑに、いとよくづれて、道のおきたるをたよりに、此の男かよひきとなり

人しげくもあらねど、たびかさなりければ、

(語釋) 人しげくもあらねどは、内の人も、又、出入の人も、たほからねどなり〇たびかさなりければは、男の通ふ度、しばしくになりければなり

(文意) 土墻のくづれだに修復せぬのみか、童子等の踏みあくるほど衰へたる家なれば、人目まれなるはいふまでもなければ、しかし、通ふこと度々になりければとなり

あるじ、聞きつけて、其のかよひちに、夜ごと、人をすゑて、まもらせければ、彼のをとこ、いけどもえあはで、かへりけり。さてよめる

(語釋) あるじは、主人なり。原語は「有主」の義ならんといふ〇かよひちは、彼の男の通ふついひちの崩れたる處をいふ〇人をすゑては、人を置きてなり〇いけどもは、往けどもなり。さてこのいけどもは、いけどもいけどもの意にて、毎夜の義を含めたる、一種の格と知るべし〇えあはでは、彼の女に逢ふことできずして、歸りきとなり

(文意) 今は主人の耳に入りて、夜ごとに、番人を置けば、男は例の如く往きたるも、まもる人あれば、あやしと思ひてかへり、又いけどもいけども、毎夜人をおきて守らせければ、いつもえ逢はで、かへりぬどの意なり

人しれぬわがかよひちの關守は



よひくことけうちもねなゝん

(語釋) 人しれぬは「人にしられぬ」といふべきを約めたるなり。文章には、文字の制限なきがゆゑに、かかる詞を用ふべからざれど、歌詞には、まゝある事なり。古今集に「人しれぬおもひをつねにするがなる、ふじの山ころわが身なりけれ」などあるも、こゝと同しく「人しれぬ」の意なり。關守は、關所を守る役人をいふことなれど、こゝは、土牆を守るものに、うつしていへるなり。よひくは、晝々なり。每宵をいふ。よひは、夜のいまだ深けぬをいふ詞なり。うちは、例の添詞。ねなゝんは、寝よかしとの意。なんは、ねがふ義なり。

(大意) 一首の意は、人にしられぬ、我が通ひぢなれば、關守のねなば、外に咎むべき人なし。此の關守は、每宵うちも寝よかし。さらば、通ひてあはんものごととなり。此の歌も、をさなきは、心のせちなることをあらはして、なかくにあはれおかし。

とよみけるを聞きて、いといたうゑんじけり。あるじ、ゆるしてけり。

(語釋) いたうは、痛くの音便なり。今言に「ヒドク」また「キツク」などいふに當たる。ゑんじは、怨の字音なり。やはり、うらむをいふ。男が「人しれぬ」の歌を詠みたる事を、娘が聞きて、父のなさけなき事を怨みたるなり。○あるじ、ゆるしてけりは、娘のゑんするに困りて、あるじも心ぐるしくおもひしかば、土牆の番人をやめて、通ふ事をゆるしけりとなり。

(文意) うちもねなゝんのわび歌を、人づてなごに、娘の聞きて、あはれにいとほしく思ふあまりに、關守のこゝを、なさけなしとうち想じたりしかば、あるじもゆるしたるなり。主、ハも娘も、情あ

かきさまに作りなしたしたるは、此の物語の骨髄なり

二條の后にしのびて、まわりけるを、世のきこえありければ、せうとたちの、まもらせかまひけるとぞ

(語釋) 二條の后は、前に云へり。○世のきこえは、世の中への外聞なり。○せうとは、兄人の音便なり。兄をいふ。二條の后の御兄たちならば、照宣公、國經卿なり。さて前にもいへるが如く、此の二條の后云々の文は、後人の書きろへたるものなり。或は、業平朝臣が、二條の后のいまだ入内し給はぬ前に通ひけるを、かく書き僻めたるものなるかも計り難し。されど、其の名を公然出だして、かゝんことは、此の作者の本意にあらぬこと、前々よりいへるが如し。

(六段) むかし男ありけり、女のいあふまじかりけるを、年をへて、よばひはたりけるを、からうじて、女こゝろあはせて、ぬすみ出でて、いとくらきにてゆきけり。

(語釋) 女のえあふまじかりけるとは、女の方に、ゆゑありて、此の男には、さらに逢ひがたきよしなり。○年をへては、年を歴てにて、幾年にもわたりてなり。○よばひは、萬葉集に、結婚とかき、靈異記には、伉儷の字を訓めり。言の意は、呼より出でたらん。今世の語に、婦をよぶといふも、是なり。さるを、男女の情を通せんために、夜に隠れて、這ひわたる意にいふ事とされるは、其のわざの似つかはしきが故なり。又、此の夜延の意より轉りて、すべて、戀する人の、女のもとに往くをいふ。こゝも然り。○けるをのを、今言に、がといふ義に心得べし。○からうじては、辛の字の義なり、今言に



「ヤット」と譯す○女の心あはせてとは、始より、女も此の男をきらひて、逢はぬにはあらず。逢ひがたき事情ありて、逢はざりしが、年を歴て、通ふことの、あはれに絆されて、女も今は心を合はせたるさまなり○ひてゆくとは率て往くなり。今言に、つれてゆくといふに同じ。暗夜は、人目を忍ぶに便宜なれば、夜にまぎれてつれて、往きぬとなり

(文意) 事情ありて、逢ひがたき女のありしが、男はよろながら、女のもとに年へて絶えず通ひて、其の召しつかふ人などによりて、どかくいひ入れき。然るに、女も此の男をきらふにはあらず。たゞ、深きゆゑありて、逢ひ難ければ、つれなく答へて、過ぎぬれど、年へていふが、いとほしくて、今は身をすてて、あひなんと女も心を定め、かくては、逢ひがたし。共に外へゆかんとて、しのび出づるかまへして、ぬすみ出でられたりとなり

あくた川といふ河をいきければ、草のうへにおきたりける露を、かれは、なにぞとなん男にとひけるを、ゆくさきは、いとどほく、夜も更けにければ、

(語釋) あくた川は、芥川なり。延喜式に、攝津の國、島下郡に、阿久刀神社あり。此の處の河なるべし○河をいくとは、河に沿ひて行くをいふ○草のうへにおきたりける露とは、水のほとりは、草の露も殊にかかければ、似つかはしきなり○かれはなにぞは、彼は何ぞにて、其の深き露の、やみ夜の星の光に、きら／＼と映するを、「白玉かなにぞ」と男に問ひたりとなり。さるを、下の歌に「白玉か」とある故に、詞を省きて、おのづからしか聞てゆるは、文の妙なり。すべて、古代には、歌にいへると、同じやうなる事をば、はしがきにはかゝざりき。又、眞淵翁は、いかなる人か露を知らざら

んといはれたれど、いかゞ。こゝは、フト見たるまゝに、怪しみたる情にて、これぞ古文の常なる。櫻の花を雪か雲かと思ふも、亦、これと同じ。いかでか、こゝのみを疑ふべき○男にとひけるをの下に二句ばかり脱ちたるならん。かくては、文章とゝのはすと、上田秋成の、よしやあしやといふ書にいへれど、いかゞ。こゝは、男も答へんと思ひければ、行くさきは、いと遠く、夜もふけにければ、いろ／＼心にこたへもせずといふ意を含めたる文なり。此の物語は、詞少く、意を含められたれば、かゝる例はおほきやかし。又、ろのうへ「神なり雨ふれば、たにある所ども知らで、あばらなる倉のありけるに」云々といふ文勢なり。くりかへし見て、其の文脈をささるべし

(文意) 芥川といふ河につきて往きしが、こゝは、水邊の事とて、川岸の草における露も、こゝのはか多く、星の光にさへ相映して、きら／＼と見えき。女は、フト其の露を見たるに、「白玉か」とおもはるゝほとなりしかば、男に問ひしかど、男は、性くさきまだ遠く、殊に夜もふけわたりにて、さきをいろがるゝゆゑ、答もせざりきとなり

おにあるところとも知らで、かみさへいとみじうなり、雨もいたうふりければ、

(語釋) 鬼ある所ども知らで、「あばらなる倉のありけるに」と、つゞく文勢なり。次の詞も同じく、あばらなるといふ所へかゝれり○かみは、鳴神なり。雷をいふ○いとみじうは、すべて、甚すやれたるをいふ詞なり。こゝは「キビシウ」また「ハナハダ」などの義なり○いたうは、痛くの音便なり。「ヒドク」の意なり。さて當時の書には、鬼の出でたる事、しば／＼しるせり。三代實録には、仁和



三年八月十七日の夜、武徳殿の東の松原に、鬼の出で、女を食ひし事見え、其のほか、百鬼夜行などの事、諸書に見えたり。眞淵翁は、こゝも狐狸などのしわざなるべしといはれき。されど、前の作者の傳の處にもいへるが如く、實は業平朝臣が、かくまで、苦心して、かつは、深くかたらひける、高子を、御兄たち、即、昭宣公、國經卿などが、なさけなくも、制し止めて、取りかへしたるを、例の作者が、書き僻めて、虚か實か、わからぬやうに作りなしたるにてもあらんか

(文意) 夜もやうやう深けわたるに、鳴神さへ甚きびしく、雨も篠をつくが如く、男はともかくも、女ハ所詮ゆくべくもあらざりしかば、鬼ある所どもしらすで、里ばなれたるさびしきところなれどもやどりぬとなり

あばらなる倉のありけるに、女をばおくにおしいれて、男は、弓、やなぐひをおひて、戸口に、はや夜もあけなんと思ひつゝ、おたりけるに、

(語釋) あばらなる倉とは、戸などもなく、荒れ頽れたる倉をいふ。古の郷には、公の稻を納め置く倉、必ありき。それが稻を出だしては、内むなく荒れ頽れてありしなるべし。徳川時代までも、諸國の村里に、年貢米を秋の末より冬にかけて納むる倉あり。それを郷倉といひき。こゝも此の郷倉の類なるべし。○女をばおくにおしいれて云々、此の「おしい」などの詞にても、荒れ頽れて戸なども無きさまなる事を知らるべく、又、ほどなく鬼に喰はるべき女なれば、ものおそろしく覺えて、くらき倉の中には入りかねたるさまをも知らるべし。○やなぐひは、胡録、また、弓箭の字を調ひ。言意は、矢之代やなぐひの轉ならん。矢を盛りて負ふ具なり。箆エヒヤに似て、輕粗なり。十矢を挿す。其の

たちハ、細く高く、筒の如きを壺胡録と唱へ、平たきを平胡録といふ。さて大寶の律令のさためにては、私に兵器を貯ふる事ハ、違令なりしが、此の制やうやく衰へて、此の物語のなれる比には、豪族諸國に勢をなし、盗人も多かりしかば、都の内にてすら、遠く行くにも、夜行なとするにも、たゞ人さへ弓箭を負ひたるなり、此のこと、今昔物語などに多く見えたり。殊にこゝは、女を偷てみ、行くさまなれば、男も弓矢刀などを帯びたるは、時世のありさまに適へるのみならず。こゝの文勢にも適へりといふべし

(文意) 何處の村里にても、郷倉は火をさけて、殊に里ばなれたる、河邊などの、いとさびしき處にあるがつねなるに、其の郷倉の稻を出だして、守人もなく、戸なども荒れくづれたるを幸に見つけて、女は恐ろしかるを、無理に奥へおし入れて、我は戸口に用意しつゝ居て、夜の明るるを待ちきとなり

はや夜もあけなんと思ひつゝ、おたりけるに、鬼はや、女をばひと口にくひてけり。あなやといひけれど、神のなるさわきにえきかざりけり。

(語釋) はや夜もあけなは、早く夜も明けよかしなり。なんは願の辭なり。○鬼はやは、鬼がモハヤの意なり。此のはやも、早く、疾くやくの義なること言ふも更なり。鬼の事は、前にいへり。さてかく鬼一口にくひたりといひて、つぎにあなやといひけれど、あるは、異様なるが如くなれど、然らず。これはまづひとわたり云ひ終りて、たちかへりて、事の上しをこまかにいふ文法なり。かゝる類、文章にはいとほし。○あなやは、あなも、やも歎息の辭なり。今言に「アリアア」と叫ぶと同じ。



神のなるさわざは、雷鳴の音の烈しきにまぎれてなり○えきかさりけりは、たゞに聞かさりけりといふとは異なり。奥なる女をおぼつかなく思ひて、氣はつけたれどもその意を含めたるなり

(文意) さらぬだに、物さびしく里ばなれたる郷倉なるに、夜さへ深く、雷さへいたく響きわたらしかば、男は弓やなぐひ負ひて、たけき装はしたれども、尙、心には恐ろしく、うとましく思ひて、はやく夜も明けよかしと思ひつゝ居たるに、鬼は、はやく、女をば、一口に食ひて、形だになし。女は定めし「アリヤア」と大聲を揚げて、叫びしなるべけれど、神鳴の烈しき音にて、氣は始終つけ居しが、其の聲だに聞てえず。まことに口をしきことなりきとなり

やうやう夜もあけゆくに見れば、おてこし女なし。あしずりをして、なけどもかひなし。

(語釋) やうやうは、次第次第に、又、マンダンになぞ譯す、こゝは「ソロソロ」なといふ方、最、よくあたるべし○おてこしは、率て來したり。引きつれて來たる女はなしとなし○足ずりは、左右の足をすりて、泣くをいふ。すべて心の切なる時のわざにて、今の世にも、いふ詞なり。殊に小兒などは、つねにこのわざをするなり。

(文意) 今まで辛苦したるかひもなく、武装して守れるせんもなく、夜あけて見れば、女の形だになし。口をしさ遣らんかたなく、立ちをとり、足ずりして泣きさけびしかども、今更せんかたをいふの意なり

白玉かなにぞと人のとひし時

露とこたへてけなましものを

(語釋) 白玉かなにぞと人のとひし時は、前の草の上の露を電の光に見て「かれはなにぞ」と問ひし時なり○けなましものをは、消えなんものをなり。けは消えの約言なり。露なりと答へて、我が身もろのはかなき露と共に消え失せなば、かゝるうき目は見ざりしものをと、くやみたるさまなり

(文意) この一首の意は、白玉か何ぞ人の問ひし時、いそかしくて、なにとも答もせざりしを、今思へばいとくやし。其のをり、露なりと答へて、其の露のはかなく消ゆるやうに、命きえなましものを、ながらへをりて、今かく悲しきめを見ることよとなり。思ふ人のなくなりたるかなしみに、かくはかなき事をもいひ出づるは、人情のつねなるべし、またろのまゝにうつせるは、例の歌の得色なりと知るべし

「これは、二條の後のいとこの女御ニノミコの御許に、つかうまつるやうにて、おたまへりけるを、かたちのいとめでたくおはしければ、ぬすみて、おひて出でたりけるを、御せうと、ほり河の太政大臣、國經の大納言、まだ下藤シノノにて、内へまわり給ふ道に、いみじうなく人の在りけるを聞きつけて、とゞめて、どりかへして、おはしける。それを、かく鬼とはいふなりけり。まだいとわかうて、後のたゞに、おはしけるをりのこととかや」

(語釋) いとこの女御とは、文徳天皇の女御、明子、のちに染殿后と申せる方なり。女御とは、中宮



につきたる女官をいふ。今の權典侍の如きもの○つかうまつるは、仕へ奉るなり○めでたきは、よ  
ろしき意なり。こゝは、容貌の美麗なるをいふ○ぬすみておひては、偷みて負ひてなり○御せうど  
は、御兄人の音便なること、前にいへり○堀河の太政大臣は、藤原基經公なり○下薦とは、奉公の年  
少くて、まだ賤官なるをいふ。今の世に、賤しく召し使はるゝものをいふも、是よりうつりて、下  
郎などの意となれるなるべし○いみじうは、甚しくなり。ヒドク泣く人のあるを聞きつけて、止め  
て取り返したりとなり○いどわかうては、甚若くてなり○后のたゞにれはしけるとは、二條の后の  
いまだ、后に立ち給はず、たゞ人にて、おはせる中の事となり○さて此の條は、後人の書き加へたる  
ものなる事、前にもいへるが如し。何となれば、此の文には、業平朝臣の歌を多くあげて、其の人の  
事を作れりとは聞こゆれど、時世官位をも、その人ならずかへて、業平ならぬさまに書きたがへ、其  
の外にも、古人の名をあらはには擧げぬが例なればなり。かく心してかける記者の、天皇の御女の  
密事をあらはし、其の御兄弟たちの名をさへ擧げて、耻づかしめ給ふべきにあらず。これ本文の意  
にたがひたれば、同じ人の筆ならぬこと、更に論なし。藤井高尙の新釋には、此の條を刪りて載せ  
ず。又今昔物語に、昔、業平之妾被<sup>レ</sup>喰<sup>レ</sup>鬼事之語と題して、此の本文の如く、鬼にくはれし事をのみ  
書きたり。それらより思ひつきて、後人のかき加へたるにやあらん

(七段)むかし、男ありけり。みやこにありわびて、あづまにいきけるに、伊勢、尾張  
のあはひの海づら、をゆくに、浪のいとしろくたつを見て

(語釋) みやこにありわびては、都に有り侘びてなり。わふは、志を失なひて、思ひ煩らふさまを

いふ。こゝも、暗に業平朝臣をいふなるべし。前の傳の處にいへるが如く、業平朝臣は、惟喬親王を  
立て奉らんと、終始力をつくし、かど、遂に藤原氏の權威におされて、其の事さへとげ得ざりしか  
は、それらの事實を暗に指せるにもあるべし○あづまは、東國をすべていふ。正しくは、あづまの  
國といふべき事なり。されど、省きて、あづまのみもふるくよりいひき。此の名は、日本武尊が、  
碓日嶺にて、東南を望みて、彼の橘姫の事をたぼし出で、「吾妻はや」と歎き給ひしにこれり。  
此の後、山東諸國を吾妻國といふと、日本紀にもしるせり。さて業平朝臣の東降のことは、古今集  
にも見えて、たしかなる事實とは知られたり○海づらは、海邊をいふ。つらは、すべて物の上の平  
らかなる部分をいふ詞なり。山づら、河づら、池のつらなど皆同じ、人の面をつらといふも、此の語  
なるべし。さて伊勢尾張の間の海邊とは、今の桑名と、宮の驛との間の入海のはてに、道ありて、此  
の比は、往來せるなるべし。又次ぎの歌は、後撰集に「あづまへまかりけるに、過ぎぬるかた戀ひし  
くおぼえけるほどに、河をわたりけるに、浪のたちけるを見て」業平とあり。それをこゝには、例の  
書きひがめて、かくは作りなしたるなり○浪のいとしろくたつを見ては、磯邊をゆくに、浪の打ち  
よせて、高きたちあがるが、いと白くあがるをいふ

(文意) こゝは聞こえたるが如く、昔、男ありしが、其の男、都にては時をうしなひて、万事意の如  
くならず。よりて、東國へゆきける道すがら、伊勢と、尾張との間の海邊をゆくに、浪のしろく立つ  
を見て、旅中の感情を歌にあらはせりとなり

とろくしく過ぎにしかたの戀ひしきに



うらやましくもかへる浪かな

(語釋) いとしくとは、事のひとつなるうへに、又、事のひとつ添ふ意にいふ詞なり。こゝはさらでも旅は過ぎにしかたの戀ひしきに、うらやましくも、浪のかへるを見て、又戀ひしさをひとつ添へたりとなり○後撰集には、二の句「過ぎぬるかた」とあり。いづれにてもあるべし○かへる浪とは磯邊に打ちよせたる浪の、引きてかへるといふ

(大意) もとやり、旅は過ぎにし方の戀ひしく覺ゆるものなるに、磯邊にたつ浪のかへるを見て、又一層都の戀ひしさを増しぬとなり

(八段)むかし、男ありけり。其の男、身はやうなきものに思ひなして、みやこにはをらし、すむべきところもどめんとてゆきけり。

(語釋) やうなきハ、無益の意とも、無用の意ともいふべし。みづから、世に益なきものに思ひなしてなり。こゝらも前の傳に論じたるが如く、業平朝臣の、到底わが志の行はるべからざる世なることを憤りて、みづから、身をおもひすてたるをいふにもあるべし。こゝの文意は、聞てえたるが如し。但、こゝハ、諸本異同あれど、今は、高尙が新釋に改めたるに依りぬ

しなの、國あさまのだけけ、けふりのたつを見て

(語釋) 信濃の國、淺間の嶽に、煙のたつを見てなり。さて尾張三河の北は、信濃にとなりて、木曾の三坂のほとりは見ゆる事もあるを、京人は、淺間も、其のあたりと思ひて、こゝに書きたりともいふべけれど、なほ考ふるに、此の東降の條々は、各、ことなるを、類を以て、書きつらねたりと見ゆれ

ば、必しも、前文につくはずして、こゝは淺間の嶽の見ゆるほどの所にてよめりと見るべし

しなのなるあさまが、たけれたつ煙

をち方ひとの見やはどがめぬ

(語釋) しなのなるは、信濃にあるなり○をちかた人とは、遠方の道ゆく旅人なり。遠近を「をちこち」などいふも、こゝのをちと同じ。さてこゝの遠方人とは、みづからのうへをいふなり。をちかたといふゆゑは、高山のだけの煙は、遠くより見ゆるものにて、見とがむるは、其の見つけをむる時の事なればなり○見やはどがめぬとは、打ちかへして、強く聞てゆる詞なれば、どがめまいか、いたくどがむとなり

(大意) おもひもかけず。高山の峯より、煙のたてば、あれはいかにと、遠方人の見とがめマイモノカ、大に見とがむといふ意なり

もとより、友とする人ひとりふたりして、もろともにいきけり

(語釋) もとよりは、はじめよりの義なり。旅の友は、途中よりつれてゆくこともあれば、はじめよりとこわれるなり○いきけりは、性きけりなり。其のほかは、聞てえたるが如し

(文意) 都よりのつれ一兩人にて、同行したりとなり  
みち知れる人もなくて、まどひいきけり。

(語釋) 道の案内を知れる人もなければ、處々にて、道に迷ひながら、往ききとなり。高尙の説に「かくいへるよしは、信濃の國のあたりにゆきては、又、三河の國に至り、八橋にて、かきつばた



咲きたるに、富士の山を見るは、五月のつこもりなるは、都人のあづまのかたの道しらで、まどひありきたるゆゑなりと、ことわりたけるに「予ありける」といへり。少し穿ち過ぎたる説なれども、おもしろくて捨てがたし。但、この説に従はば、この東降の條々は、各ことなるを書きつらねたるにはあらで、文脈相通せるものと見るべし。それも、あしからず見ん人よきを撰びてよ

みかはの國、やつはしといふところにていたりぬ。そこをやつ橋といふことは、水のくもでにながれわかれて、木やつわたせるによりてなん、やつはしとはいへる。

(語釋) やつ橋とは、大なる澤の水、左右にわかれて、數々の小川に流れたるを、田つくらん人の通はんために、木をはしにかけたるが、其のわたりに入つありけるゆゑに、おのづから、所の名ともなりけるなるべし。〇くもでは、川の蜘蛛の手の如く、いく節にもわかれ流るゝをいふ。〇さて古今集には、「三河の國八橋といふ所にいたりて」とのみなるを、こゝには、其の橋の八つある形をよく云ひしらせたるなり。文意は明らかし

その澤のほとりの木かげにおりおて、かれいひくひけり。

(語釋) こゝに澤とあるによりて、前の蜘蛛手に流るゝ小川は、澤より落ち來る水なる事しられたり。〇木かげにありおては、木影に下り居てなり。此の時、かきつばたの盛なれば、陰曆三月の末か、四月の上旬なるべく、さては、日影さすところは、やゝあつければ、涼しき陰によりて、馬より下り居たるなるべし。もしさらでも、水を飲み、かれいひを食ふに便宜なれば、木影により居たるなるべし。

し〇かれいひは、乾飯なり。和名抄に、餉をカレヒと訓めり。イを省きたるなり。餅飯を、モチヒともいふに同じ例なり。カレヒハ、今の糰なり。古代には、宿かす人なくて、旅人は、野にも山にも夜をあかしたりしなり。さる比には、飯をくはず人もなければ、乾飯を袋に入れて、携へありきしなり。さてかく旅人の不便なりしは、通用の貨幣なきがゆゑなり。その比は、米、或は布を以て、交易の媒介物としたりしなり。されば、是は奈良朝以前の風俗にて、其の以後は、錢を通貨と定めたれば、旅人も必しも食物を持ちありきゝとは見えず。續日本紀、和銅五年(元明天皇の朝)の條に、令三行旅人、必齎錢爲資、因息重擔之勞、亦知用錢之便といふこと見たり。息重擔之勞とは、かれいふを持ちありく事の勞をやめて、錢もて飯を買ふやうの事なり。さて後は、やうく錢を用ふる事となりぬれば、平安の京になりては、かれいひを旅に持ちありくやうの事はなければ、昔より言ひ馴れたるまゝに、なほこゝも、乾飯とはいへるなり。されば、こゝは今の世の如く、辨當な色に入れたる飯を食ひたるなるべし。但、下賤のものは、中世以後にも、干飯を食せるよし、榮花物語などに見えたれども、こゝは、いやしからぬ人のさまに書きたれば、なほ、まことのほしいひにはあらずと心得べきなり

うの澤に、かきつばたといふとおもしろく咲きたり。うれを見て、ある人のいはく、かきつばたといふ五もじを、句のかみにすゑて、旅のこゝろをよめと、いひければ、よめる



から衣きつゝなれにしつしましあれば

はるくきぬるたびをしづれもふ

(語釋) かきつばたは、燕子花なり。杜若の文字をも用ふるは、「ヤブメウガ」の誤用字なりといふ。燕子花は、はなあやめに似て、やゝ肥大なり。花色、紫なるを常とすれども、浅紅、白等の種々あり。夏の初をさかりとす。其の燕子花を見て、ある人がかきつばたといふ五文字を、句の上ごとに置きて、旅中の心を詠めといひければ、よめりとなり。文意は明らかなり。○歌の一首の意は、都になれにし妻あれば、はるくきぬる旅を、かなしく思ふといふことなり。○から衣きつゝなれにしとは、萬葉に、奈良の里を、から衣きならの里といひかけし如く、なれにし妻あればといふに、から衣着つゝなれにしといひかけたるなり。「きつゝ」は、着つゝと、來つゝと掛けたり。「つま」は、妻と寝どかけたり。「きぬる」は、來ぬると着ぬると掛けたり。つまし旅をしのは、二つともに助辭なり。「なる」、「つま」「はる」などは、皆衣の縁語を以ていへるなり。五句のかしらごとによる字をおきて、かくなだらかによひは、まことに巧なりといふべし

とよめりければ、みな人かれいひのうへに、涙おとして、ほどびにけり。

(語釋) かれいひは、前に委しくいへり。○ほどびは、太びの轉が。潤ひてふくるゝといふ。史記に、膠液船解ニコハナトヒトケなどあり。但、このかれいひは、眞の乾飯にはあらぬを、涙のかゝりて脹るゝといふは、いかゞとて、彼是とき曲けたる説もあれど、わるし。あまりに拘り過ぎたりといふべし。眞の彌ならずも、かれいひといふより、涙かゝりて、潤ひふくれたりといふやうに書くは、文章なり。こ

れをあながち、事實にあはずな説きなすは、物語書よまん眼なきなり

(文意) 誰も京の戀ひしきに、此の歌を聞きて、更に堪へやらず、うゝろに、涙を催しきとなり。道しれる人もなくて、旅中のかなしさ、さもと想ひやらる

ゆきくして、するがの國にいたりぬ。うつの山にいたりて、わがいらんとする道は、いとくらうほそきに、つたかづらはまげりて、ものこゝろほそく、すゝろなるめを見ることとおもふに。

(語釋) ゆきくしては、往き往きてなり。たゞ、ゆきを重ねたるのみにて、他意あるにあらず。○うつの山は、駿河の國、有渡郡に、和名抄に、内屋の里と見ねたる處なり。○わがいらんとする道とは、我がわけいらんとする有渡の山の道をいふ。○いとくらうほそきは、最暗くの音便なり。○つたかづらは、葛蔓なり。樹または岩などに延ぶ蔓草なり。道の暗く細き上に、蔓草さへ延び茂れりとなり。○ものこゝろほそく、ものは添へたる詞なれど、たのづから意を強くするなり。「ものがなし」「ものさびし」などいふ皆同じ。○すゝろは、すゝろともいふ。漫の字、また、不覺の字、また、坐の字などを訓むこと、は、不覺の意にて、おもひかけぬからきめ見る意に解して足れり。高尙の新釋に、古意の説も、臆斷の説もわろしとて、すゝろなるめは「さはあるまじきめを見るときいふ事なり」と解せり。さては、すゝろといふ語意、解せりとも覺えず。故に余はかへりて、古意の説によれり。おほかた、すゝろといふ語は、此に掲けたる如く、漫の字、不覺の字、または「故なく」などの義に解せば、誤なかるべし



(文意) 木の茂りたるさま、道に蔓草などの茂れるは、人の往來のまれなるがゆゑなり。都にをりなば、かゝる心ほそきめをも見ざるべきに、道しらぬあづまの方に來たれるゆゑに、我が身に思ひかけぬ、心ほそきめを見ることがよと、心のうちに都いでしをくやしうおもひつるなり、能く味ひて其の意をさとるべし

すぎやうざあひたり。かゝる道には、いかでかおはするといふに、見れば、みし人なりけり。京にその人のもとにとて、文かきてつく

(語釋) すぎやうざは、修行者なり。修はシユなるを、約めてスと云ひ、者はシヤなればサと成るなり。此の山中にて、修行者に遇ひたるなり。修行者とは、佛法修行のものなり。山伏などの類なり。さて修行者のことをいへるは、「夢にも人の」といふ歌をかゝんためなり。又修行者のかゝる道には、いかでかといひ、詞つきの謹しみ、かしてまりたるさまなるを思ふに、此の行く人は、身分の輕からぬ人にて、都にあるべく、所さだめありきなど、すさまじき人なることを知るべし。さては、すゝろなるめを見ること、思ひしも、道理なり。又、かゝる山路にて、修行者にあひたりといひて、いよく深山なることを知らせたり。文いと巧にて、一種の畫幅を見る心地せらるる〇見れば、みし人なりは、道ゆく人が、修行者を見れば、かねて見しれる人なりきとなり〇ろの人は、切に思ふ人をさせるなり〇つくは、今いふことづくるなり。旅中の辛酸なる事を、いたく心に感じ、都を戀ひしく思ひ出でたる折なるに、都にて知れる修行者に遇ひたれば、一層かかく戀ひしくて、文かきて事づてたりとなり。文意はあつから明らかなるべし

するがなるうつ山のうつゝにも

夢にも人のあはぬなりけり

(語釋) するがなるは、駿河にあるなり。ニアをつとめてナと成るなり〇うつ山のうつゝ、今、越ゆる山をたゝちに序にたけるなり〇一首の意は、かゝる道なれば、したひ來まされ、うつゝにあひたまはぬは、ことわりなれど、それがしを思ひ給はゞ、遙かなる道にても、心はかよふものなれば、夢には遇ひ給ふべき事なるに、更に此方を思ひ給はぬゆゑに、夢にも君のあはぬなりけり。つれなしと恨みをいひやりたるなり。すべて、人を夢に見れば、其の人の思ふ心の通ひ來て、見ゆるよしに昔よりいふ事なり。古今集、戀の歌に、「夢にだにあふことかたくなりゆくは、我やいをぬぬ人やはする」とあるを見るべし。人が除るれば、心の通ひてぬゆゑに、此方の夢に見ざるよしなり。されば、「人のあはぬなりけり」と。此方のどがにして、恨みをいひやるなり。さて此の歌は、古今六帖に「音にきくうつ山のうつゝにも、夢にも見ぬに人の戀ひしき」とある歌を、一二の句は、まうけて、たゞ序にいひたるを、此の文には、うつ山の山路の有様を、詞に書きて、さて其の所にてよめる歌としたれば、上は今越ゆる山のありさまをいひて、即、序として、下の意をいひくだせる體となりぬ。この解は新釋によれり

ふじの山を見れば、さつきをつこもりは、雪、いとこころふふれり

(語釋) ふじの山は、駿河の富士山なり〇さつきをつこもりは、五月の下旬の意なり。つこもりは、月隠にて、必しも晦のことならぬよしは、前にいへり〇此の處、新釋の辨、まことによし。其の



大要にいはい、さて歌には「かのこまだらに」とよめるに、はしの詞には、雪いとしろしといへるを、昔より人の不審に思ふ事なり。今、これを説き明らめん。むかしは、歌にこまかによめるをば、はしの詞には、れほらかにかけり。三代集の歌の詞書など、皆、さやうなり。こゝも歌に、「かのこまだらに」と、こまかにいへるゆゑに、はしの詞に、しろふとれほらかにいへり。歌を合はせ見せしうとはあれど、くはしくいは、かのこまだらなりと知られて、おもしろきなり。又、いといふ詞は、五月のつこもりといふ詞にかけて、甚しくいへるなり。「つこもりに」は、「つこもりなるに」の意なり。たどへば、俗語に、寒中にマツバタカにてといふが如し。此の「寒中に」も「寒中なるに」といふ意にて、寒中にはだかほめづらしければ、寒中といふ語にかけて、裸を眞はだかど、眞を加へて甚しくいふこと同じことなり。さて又三河にて、かきつばたの花盛りとあれば、三月の下旬に、四月の中旬までなるべきに、五月の下旬に、富士の山本なるは、道しれる人もなくて、まどひありき、こゝかしてに、住み所を求めて、とほりたるがゆゑなるべし云々と、なほ日員のみまりにかかりたることは、右意に、委しく辨あり

かのこまだらに雪のふるらん

(語釋) 時しらぬは、冬は雪ふり、夏は降らぬが、當然のことなるに、其の時をしらぬといふ義なり。五月の下旬に、なほ、雪あれば、かくいふなり○ふじのねは、富士の峯の意なり○かのこまだらは、もと、鹿の子の毛の斑なるをいふ。それよりうつりては、すべて、むらく白きをいふことゝな

れるなり。さてマダラといふ語は、曼陀羅にて、梵語なり。雑色の義なりといふ。されば、其のまどは、梵語なれど、ふるくより國語のやうに用ひ來たれるなり。かゝる例、古來おほし。例へば、テラ(寺)はもと朝鮮語なれど、おほかたは、固有の國語と思ふべし、これらも同じ例なり○一首の意は、時しらぬ山といふは、富士の峰のことよ。此の五月下旬を、何時とおもひてか、かやうに、雪のふるならんといふこゝろなり

其の山は、こゝにたどへば、ひえの山をはたちばかりかさねあげたらんほどして、なりは、しほじりのやうになんありける。

(語釋) こゝにたどへばとは、都にたどへばの意なり。「其の山は」と書き出でたるは、記者の詞にて、其の記者は、京人なり○はたちばかりは、二十ばかりなり○ほとして、今言に「ダラキニテ」なを譯すべし。高さしてなといふ意味なり。かさねあげは、高さをいふ詞なればなり。古意には、比叡山に似て、大なるよしに説かれたれど、いかに。さらば、はたちばかり、あはせたらんほとしてなとあるべきなり○なりは、形の義なり○しほじりは、諸説あれど、天野信景(尾張人)が鹽尻といふ書に、「歌人しほじりを秘ぞす。我海濱に遊びて、鹽窟を見しに、海民鹽をやくに、鹽邊に砂をあつめて、堆をなし、畦をなす、潮水來たりて、砂畦をひたす、所によりては、潮を汲みて、ひたすなり。日々にかくして、後に砂を積み、山の様を作りて、日にさらす、是をしほじりといへり。實に富士の形に似たり。歌客京に居て、海邊のことにとく、時さりて、知れる人なくなれるなり、云々としるせり。本居宣長翁、この説を評して、此にいへるやう、少し違へるにやとおぼしけれど、しほじりと



いふ物は、これなり。おのれも、鹽やく濱を所々見しに、砂を積みあげて、塚の如くしたる物、いへつともなくありて、まことに、富士の山をたといふべき形したるものなり。古意には、具字本に、「なりは」を鳴者とかけると取りて、彼の山の鳴澤の鳴る音として、しほじりを、難波の川尻のことなりと云はれたれど、いとく信じがたし。川尻なくば、川じりどこそいふべけれ。いかでか、しほじりとはいはん。されば、川尻をしかいへる例もなく、ことわりもたかへることなり。其の上、川尻は、さしもれどろくしく、鳴る物にはあらざるをや云々といはれたり。又、橘守部は、昔、京の河原院にて、潮を汲ましめ給ひし事は、いとも名高かりつれば、當時、京の人も、しほじりの形をあまねく見しりつらん。故に比叡の山と、六條河原の河原院のしほじりとをとり合はせて、こゝにいとははかけるなりけり。古今集雜に、河原の左大臣の君の、身まかりて後、彼の家にどまりてありたるに、しほがまといふ所のさまをつくれりけるを見てよめり。貫之「君まさでけふりたえにししほがまの、浦さびしくも見えわたるか那」とあり。さて顯昭の説に、池を掘り、水をたへて、潮を毎日三十石づゝくみて、海漁の魚具等をすましめたり。陸奥の鹽竈の浦をうつつして、海人のしほやく屋に、烟をたへせて、もてあそばれたるなりとあり。猶、この事、菅家文章、本朝文粹、源順、河原院賦などにも委しく見えたり云々といへり。以上の諸説によらば、しほじりといふもの形も明らかに、また此の條の文意も、おのづから、明らかなるべし。

猶、ゆきくへて、むざしの國と、しもつふとの國との中に、いと大なる河あり。ろれをすみだ川といふ。

(語釋) むざしの國は、武藏の國なり。しもつふさは、下總なり○大なる川と書けること、尤、おもしろし。其の故は、此の川を渡りては、いよく、京は遠くなるべしと思へる意を含めたるなり。京の人のかゝる東國に来て、なほ、此の川をわたりて、知らぬ方へゆかんとする心、おもひやるべし○すみだ川のあり處につきて、又、諸説あり。まづ、古意にすみだ川は、已に古今集にしかあれば、武藏と下總との間なりとのみ、我も人もおもへり。然るに、更科の日記に、下つふさの國と、むざしの境にて、ふとわ川といふ、かゝみの瀬まつざとの津にとまりて、(中畧)野山芦荻をわくるより外なくて、むざしと相摸の中に居て、あすた川といふ。在五中將のいざこととはんとよみけるわたりなり。中將の集には、角田川とあり。舟にてはたりぬれば、相摸の國になりぬ云々といへり。これによりて思ふに、もとは、相摸の國と、武藏とのあはひなる、あすた川を云ひつらんを、後人、古今集の詞書によりて、むざしと、下總のあはひとは、改めつるにや。此の文にむざしとしもつふさの云々とあらんには、いかで、更科日記にしか書かん。此の歴る所々のついでに依るにも、むざしには年歴たるやうに書けるにも、日記の如くならんと覺ゆといへり。右の古意の説を、齋藤彦麻呂が片廂に駁して、此の川の名、他國の名所を江戸へ附會したるなりといふは、大なる僻説なり。萬葉集にある角田川は、紀伊の國なり。六帖にあるすみだ川は、出羽の國なり。古今集と、伊勢物語なるは、武藏の國と、下總の國との界なり。すみだ川に限らず、國々に同じ地名あまたあれば、どかくいふべきにあらず。更科日記に、さだかならぬ記しふりなるは、委しく知らずして、書きたるゆゑなり。さてこの武藏と、下總との堺なる川を、隅田川とも、須田川ともいふは、もとすみだなるを、音



便にて、スنداといひ、又、畧きて、スダといへるにて、同じ所なり。たとへば、やむことなきを、音便にて、やんことなきと云ひ、又、畧きて、やことなきといふなどと同じ意なり云々といへり。彦麿呂の説よろし。

その河のほとりにもれおて思ひやれば、かぎりなくとほくもきけけるかなど、わびあへるに、

(語釋) 河のほとりにむれおて云々、長途のならひ、友だちもあそびさきにはなれて、牲くつのならせ、川のほとりなせにては、わたし船に同じく乗らんとて、まちあはせて、一むれになるを、むれおてといひしなるべし。むれおては、群居ムラカヒの義なり。能く心をつけてかける文なり○思ひやるとは、都のかたをなり。道をゆくほとは、まぎれて除るれせ、しばし休みては、つくづくと故郷のとおもひ出づるなり○わびあへるとは、かぎりなく遠く来て、もの心ぼそく、故郷の戀ひしくてもせんかたなき事など、いろくの悲しきすぢをいひあへるよしなり。さてかく人々口々に、かなし、つらしなどわびこといふ間に、時うつりて、わたし守がまぢかねたるさまなり。極めてたまかなるところにまで、意を用ひて、かける文なることよく味ふべし。

わたし守はや船にのれ、日もくれなんといふに、のりてわたらんぞす。

(語釋) わたし守とは、渡を守る人をいふ。それよりうつりて、船頭をもいふ。こゝは其のうつりたる方なり。さて船頭が、此の人々に向ひて、いへるなれば、「船にのり給へ日もくれ侍りなん」などいひしなるべし。それを、こゝは、記者みづから道ゆく人の如くに記したれば、船頭の語をかへて、書きたるなり。上なる修行者の詞は、いひたるまゝに、かしてまりたるさまにかきて、此の都人は、貴人なることを知らせ、こゝなるは、船頭の詞を、貴人みづから書くよしになして、記したり。自他自在にして、語明らかなるは、筆の妙といふべし。

みな人ものわびしくて、京におもふ人なきにしもあらず。さるをりしも、しろき鳥の、はしどあしどかき、鴨のおほきさなる、水のうへにあそびつゝ、いをくふ。

(語釋) 新釋に、いはく、渡邊重豊いふ。「京におもふ人なきにしもあらず」とかけるころは、此の段のはじめにいへる如く、「身をやうなきものに思ひなして、都にはをらじ、すむべき所もどめん」とて、ゆきける身なれば、京にはだしなせはなきさまに見ゆれと、京にねもふ人なきにしもあらずといふ意なりといへり。實にさやうなるべし。此の重豊といふ人は、みちの口の酒折の宮のみや人にて、はやうより、いにしへ書をひどり能くよみけるを、近き年比は高尙に従ひて、もの學ぶ人になり云々」と、此の説まことによし○はしどあしどとは、嘴と足となり○鴨は、夏秋、田または澤なせに居る鳥なり。形、水鶏に似て小さく、嘴長く、頭より翼まで、茶色なり。背は灰黒にして、小き白斑あり。胸と腹としろし。これ鴨の通常なれと、色も形も多少かはれるもあり○いをくふは、魚を食ふなり。ウチは、古くイナともいひき。此の物語は、いつこも、いをどのみかけり。當時のこどばを、そのまゝに、記せるにやあらん

京には見えぬ鳥なれば、みな人見しらず、わたし守にとひければ、これなん、み



やことりといふをきゝて、

(語釋) これなんといふ詞に、目をつくべし。わたし守が、たゞに都鳥とは答へずして、これなんといへるは、都の人々なれば、都鳥は知りておはせんものを、御存知なきにやといふ意、おのづから含まりたるなり。さて都鳥の事は、説々ありて、一定せず。今、その大要を擧げんに、拾穂抄(北村季吟)古意(加茂真淵)臆斷(僧契沖)などには、皆、都鳥を鷗と定めたり。又、武藏志料にも、都鳥は、古、さまざまの説あれども、白鷗なること疑なし。京都の人は、海に遠くして、正しく此の鳥をば見ずして、只、物にあると、人傳にのみ聞けば、それかこれかといふ人あれども、此の白鷗、まことに足と嘴とは赤くして、體は白く、いつくしき鳥なれば、鷗のさかひにめづらしければ何人か都鳥とは名つけしなるべし云々とあり。高田與清の説に、都鳥の説あまたあれど、鷗といふが、千古不易の確論なるべし。ろは鷗にも種類おほくて、形もや、別あり。小野蘭山が、本草啓蒙(四十三)に、鷗を筑前にては子コドリ、筑後にては子コサキ、上總にてはウミ子コ、武藏の本牧にてはハマ子コとよぶ由いへり。これ鳴く聲の猫に似たるがゆゑなり。源氏、若菜の下に「猫ねうく」といとうらたげになければ」とあり。今、打ち聞くには、「にやうく」となくが如し。鷗もミヤく」となく聲の、子ウく」ともニヤウく」とも通ひて聞こえて、猫の聲にいと近ければ、其猫といふ名をもよびしなり。さて都鳥のミヤは、聲によりておほせ、コドリはヨブコトリミサゴトリなどの小鳥に同じく、大鳥に對へし稱なり云々とあり。又鷗にあらすといふ説は、藤井高尙の新釋に、今は都鳥といへば、鷗の事と定まりたる如くなれど、今も國によりて、都鳥といふは、鷗とは異なる鳥をいふよし、都鳥考

序に、佐渡にて、土人の都鳥といふは、鷗にあらぬよし、鴨齋のいへる。又、衣川長秋(宣長翁門人)といふ人は、出雲の神社にまうでし道の記、田蓑の日記といふに、日野川にて、さつをの射とりたりとて、都鳥をもて歸れり。古今集に、白き鳥の嘴と足とあかき、河のほとりにあろひけり」とあり。今見るに、白き鳥とあれども、かしらと、羽のうへとは黒くて、羽の裏、背腹白なり。白きといはれしは、漕子の舟にたどろきなとして、飛びしとき、羽の裏、背腹の白きを見て、いはれしなるべし。嘴は紅、足は濃紫の色なり。(中略)嘴と足とつけながら、故郷の人に示さんとして、皮をはがせておきつ。味も小鴨の如しといへり。是等によりて思へば、都鳥は、一むきに鷗とも定めがたし云々とあり。これらはいづれとも定めがたき事なれば、見ん人、よきを撰ぶべし

名にしおはゞいさことばん都どり

わがおもふ人はありやなしやと

(語釋) 名にしおは、其の物を名にれひてあるをいふ。名高き意に用ふるは、俗なり。此の鳥の名に負ひたる如くならば、都の事をも知りなん。いさや、我がおぼつかなく思ふ消息を問はんと意なり。〇いさことばんは、いさものいはんにて、俗語にいさものまをさうなといひかくるに同じ此の詞は、高尙の説に、わがれもふ人はありやなしやといふなれば、尋ね問ふ意は、したにあれども、詞のれもてに問はんといへるにはあらず。さるを近代の人は、皆問ふ事と心得て、歌によめるも、あまた聞こえ、師(宣長翁)古今集遠鏡にも、ドレヤモノトハウと譯されたれど、それはあやまりなり。古の歌文には、問ふをことばといへる事は、ひとつもあることなし。ようせすば、問ふことに



思ひあやまりぬべし云々といへり。此の説よろし○ありやしやは、いきて世にありやしやの意なり。かぎりもなく遠きあづまの國に下りて、何事も心ぼろく、なにとつけても、故郷をおもひ出つるをりなるに、都鳥といふ名なれば、殊に都のことを思ひたして、我がおもふ人の、安否を尋ね問ひたしとの意なり。人情さもあるべし

(大意) 都といふを名に負ひたる鳥ならば、定めて、都の事を知るならん。いさものはんといひかけて、さてろのものいふは、我が思ふ人は、無事なるか、否かといふことなりと、未にとぞわりたる歌なり。都鳥は、必しも、都の事を知れりとはあらねど、かくはかなくいふは、例の古歌のつねにて、未だ人情にも近く覺ゆるなり

とよめりければ、船こまりて、なきにけり。

(語釋) こまりては、皆なり。擧の字をよむ。そこにある船中の人、皆、ことごとくの義なり。其の他は、語釋も、文意も明らかなるべし

(九段)むかし、男、むさしの國までまどひありきけり。さて其の國にある女をよばひけり。父はこと人にあはせんといひけるを、母なんあてなる人にと心つけたりける。父はなほ人にて、は、なん藤原なりける。さてなんある人にとおもひける。

(語釋) むさしは、武藏なり○よばひは、よびを延べたる言にて、もど呼の義なり。それよりうつ

りて、男が女の許に通ふ意に用ひたること、前に委しくいへり○こと人とは、異人にて、此の都人ならぬ他人をいふ○あはせんは、メアヒセンなり。嫁せしめんと意なり○あてなる人とは、上品なる人の意なり。あては、上品、また、貴人などいふ言の古言なり○心つけたりけるとは、此の都人に心をつけて、娘を此の人に嫁せしめんと思ひきとなり○なほ人とは、なみくの人にて、種姓たふどからぬをいふ○藤原なりける、當時藤原氏の專權なる世なりしかは、極めて貴姓なるよしにいへるなり。されば、母は都の人の上品なるにどおもふよしなり○さてなんは、それぞなんの意にて、そのゆゑに、それがためになどの義なり○あてなる人とは、此の都人をさせるなり

(文意) 例の男、處々さまよひて、ついに武藏の國まで行きぬ。其の國にて久しく滞在せしかば、ある女の許へ通ひぬ。しかるに、其の女の父の意中には、住所も定めず、まよひありく人なるを願ひて、田舎人はかへりて、田舎人こそ婿にもよけれとて、合はせざりけり。されど、その母は、上品なるを好む性質にて、其の土地の田舎人よりは、此の都人にと心をつけたりき。其のゆゑは、父は氏姓たふどからぬ人なれど、母はよしある藤原の氏人なりしかば、れをつから、其の意もかはりて、かくありしなるべしとなり

此のむてがねによみて、おこせたりける。すむところなん、いるまの郡、みよしの、里なりける。

(語釋) むてがねとは、がねて婿に取らんと思ふ人をいふ。坊がね、后がねなどいふも、是に同じ。拾穂抄、臆断などに、かねは鋸の器量なりといへるは、いそつたなし○これせは、送り來たすなり。



其の女の母が詠みて、此の都人の處へ送りてせるなり○すむ所なん云々、前には、たゞ、武藏の國のみあげたるを、歌にみよし野のといはんために、かくことわりたるなり○いるまは、入間の郡なり。萬葉には、イリマとあれど、和名抄には、イルマとよめり

みよしの、田のもの雁もひたふるに

君がかたにぞよるとなくなる

(語釋) 田のものは、田タノ面にて、田の上をいふ○ひたふるは、ひたすらといふも同じく、一向になり。其の方にのみ向くをいふ○下の句は、君が方にうよるといふころに、鳴くなるといふ義なり

(大意) 一首のころは、田の面の雁も、一向に君が方に心をよせて鳴くが、我もそれと同じ意をりといへるなり。則、かりを借りて、我が心と、娘の心とのよれるをあらさせるなり。もつてにをはは。母がみづからの事をこめたるなり

むてがねかへし

(語釋) むてがねは、則、都人なり○かへしは、返歌なり

わがかたによると鳴くなるみよしの、

田の面のかりをいつかわすれん

(語釋) いつかわすれん、わするゝことはあらじといふ義なり。母が娘を雁になやらへて、いひよとしたるゆゑ、かへしにも、娘を雁に見なして、ゆく末かけて、わすれぬよしをいひやりたるなり。此の歌は、おほかた、前の歌にて、語釋は明らかなり

(大意) 一首のころは、我が方によるといふころに鳴くなる、田の面の雁なれば、われもかたと思ひかはして、何時までも忘れじとなり

どなん、ひとの國にてもかゝることは、たねすぞありける

(語釋) ひとの國とは、他人の國の意にて、都よりほかの他國をいふ○かゝることは、女へ歌を贈答せるなどの、好色がましきことをいふ○たえずありけるとは、京にて、放縱なりしが、辛苦しあづまの國にさまひたれど、なほ、好色の事は、やまざりきとなり

(文意) 都にてはさらなり。他國へさまよふ間にも、かく女に歌を贈るやうの好色めきたること、絶えずありきとなり。下の條々に、其の絶えざりしさを明らかなり

(十段)むかし男あづまへ行きけるに、友だちに、道よりいひをこせける。  
わするなよほどは雲おになりぬとも

空ゆく月のめぐりあふまで

(語釋) わするよは、捨るゝこと勿れの意なり○ほどとは、道のほどにて、里程をいふ○雲おになりぬともとは、遠くなりぬとも意なり。其のゆゑは、遠く隔ちたる處を見れば、雲は下に居る如く見ゆるものなればなり。其の空ゆく雲の下に居る如く見ゆるまでに、遠くへだつとも義なり○空ゆく月の云々は、月は大空をめぐりては、又同じ所へめぐり出づるものなれば、空ゆく月の如く、同じ都にめぐりあふまでといふ意なり。此の歌は、一首の意も、おのづから、明らかし。さて拾遺集に、橘の直幹が、人の娘にしのびて、物いひ侍りける比、とほき所にまかり侍るとて、此の女の



もとに、いひつかはしけるとありて、此の歌は、直幹の歌なるを、こゝには、はしがきをかへて、一段とはしたるなり。これ例の作者の、あらぬさまに書きひがめんとせる一端といふべし

(十一段)むかし男ありけり、人のむすめをぬすみて、むざし野へおてゆくほどに、ぬす人なりければ、國の守にからめられにけり。

(語釋) むざしのは、武藏野なり○おてゆくは、率て牲くにて、つれてゆくなり○國のかみとは、國守をいふ。國守は、其の國、萬般の事を掌り、非違をも檢察すべきものなれば、人衆を出だして、追ひてからめたるなり。こゝは、まづ、男のうへを一わたりいひをはりて、更に其のくはしきさまをかける文法なり。既に前にもこの例あり。今人もはじめて、某處に遊びぬなといひて、更に後に、その遊びたるさまをかくことあり。同じ文法なり

(文意) 例の男、他人の娘を盗み出で、里遠く人なきところをしのびはしらんとて、武藏野へつれゆきしが、國守にもれて、つひにからめられきとなり

女をば、草むらの中にかくしおきて、にげにけり。

(語釋) これは、女の上をいはんために、たちかへりて、男のいまだからめられぬはじめよりいふなり。さてにげたれど、はやくからめられけりとは、上文にて、たのづから、明らかなり

みちくる人、この野は、ぬす人あなりとて、火つけんとすれば、女わびて、

(語釋) 道くる人は、道のある處を追ひくる人なり、○あなりは、あるなりの意○此の處の解、新釋の説よろし。其の大要にいはいはく、ぬす人あなりといふは、こゝに來たれる人は、男の他所にてか

らめられたるは知らずして、此の野にかくれてありと思ひてその詞なり。さるを、古意に、心得かねて、大様をいへるものなりといはれしは、違へり。そもく、國の守の、人衆あまた出だして、ぬす人を追ふには、手わけといふこととして、此方、彼方の道をおひゆくべければ、こゝの草むらの中に女をかくしおきて、逃げたる男の、彼方の道にて、からめられたるなり。さるからに、此の道を追ひくる人は、からめられたる事を知らず、尋ねてもぬすほどの見えねば、草むらの中にかくれてぞあらん、草をやきなば、あらはれつべし。出でなば、からめんとて、火をつけんとするなり云々と○女わびてとは、かくれしのびはてんとたもひつれども、火をつけて、草をやかれては、かくれてぬられねば、せんかたつきてといふ意なり。さて歌をうたへるなり。わびとは、思ひ煩ふことなるよし、前に委しくいへり、前に引ける新釋の説にて、文意も、明瞭なるべし

むざし野はけふはなやきうわか草の

つまもこもれりわれもこもれり

(語釋) なやきうは、莫燒にて、燒くこと勿れの意なり○わか草は、つまの枕詞なり○つまもこもれり云々は、夫も我も草むらの中にかくれこもりをれば、今日は燒くこと勿れとあつらへいふ言なり。さて男は逃げたれど、女の心にては、男も此の近邊に隠れをらんと思ひてなり。さてつまは、今、男より女をのみいふ言となれど、古は、夫婦、互に通はしいひたること、更に論なし。又、此の歌のはじめ、五文字は、春日野はとありて、古今集にては、野邊の歌なるを、むざし野とかへたるは、例の記者の巧なるなり。この一首の意も、おのづらか明らけし



とよむを聞きて、女をばとりて。

(語釋) とよむを聞きては、右のむざし野の歌を女の詠せるを、追手の人が聞きてなり。古は歌をよみては、聲あげて詠ひしものゆゑに、人の聞くなり○とりては、捕へてなり

ともにおていけり

(語釋) 此の處、語を省きて、簡潔にかきなせり。「男は見ぬす、哥よむを聞きて、女をば捕へたる所へ、他所にて、男をからめたる人も來あひて、さてこゝより、男女共につれていき」といふこゝろなり。能く文意を味ひて、此の意をささるべし

(十二段)むかし、むざしなる男、京なる女のもとに、きてゆればはづかし。きてえねばくるしとかきて、

(語釋) 女のもとに云々は、男より、京なる女のもとへ遣はしたる文の中の、主なる詞をとり出で、いさゝか書けるなり○聞てゆればはづかしとは、あづまにて、又、女を得たる事をほのめかして、いひまきはしたる詞なり○聞てえねばくるしとは、京の女とは、はじめより打ちつけて、かたらひける中なれば、はづかしとて、秘しおかんは、心のへたてあるやうにて、くるしといふ意なり。此の文段、まことに、おもしろきかきさまなり

うはがきに、むざしあぶみとかきて、おこせてのち、おともせずなりにたれば、みやこより女

(語釋) うはがき、<sup>ウハガキ</sup>上書なり。封表になり○むざしあぶみとは、武藏よりと書くべきを、そなたをのみかけておもふといふ心をこめて、むざし籍と、おもしらくかけるなり。武藏籍とは、昔、この國より出だせる籍、名物なりしなるべし。此の國には、むかし、高麗人を多くおかれしなれば、さるものらが作り初めたる高麗やうの籍をば、後までも出だせるか、一つの名稱となりしなるべし○おともせずなりにければとは、京と田舎との文のかよひ、昔は今の世のやうにたやすからねば、おもひながら、久しく音信することを得ざりしなるべし

むざしあぶみさすがにかけたのむねは

とはぬもつらしとふもうるゑし

(語釋) さすがは、シカシナガラ<sup>シカシナガラ</sup>の意なること、前に委しくいへり○かけたのむねは、籍は馬の左右の腹にかくるものゆゑに、かけてたのむといはん料の冠詞なり。さすがにといふ詞を、中に隔てたるは、一つの格にて、例おほし○うるゑしは、厭ふ意なり。今言もほゝ同じ

(大意) 一首のこゝろは、都とあづまを隔たりて、久しくわかれ居り、又、他の女と契り給ふやうすなれど、以前またなく睦みあひしことを思へば、さすがにかけて頼みにするには、絶えて音信したまはぬもつらし。又、とひ給ふにつけては、他の女にかよひ給ふよしを聞けば、その事のいとはきれもするよといふ意なり。彼の男より、聞てゆればはづかし、きてえねばくるしといひやりつるをうけて、恨みもはてず頼みもやらぬさまの答なり

とあるを見てなん、たへがたきこゝちしける。



(語釋) 男、京の女よりの文の中に、此の歌のあるを見て、さぞ女の心ぼろくおもふらんと、思ひやられて、悲しさの堪へがたき心持すとなり

と(ばいふとはねばうらむむさしあふみ

かゝるをりにや人はしぬらん

(語釋) といへばいふは、問へばうるさしといふなり○とはねばうらむは、つしらす恨むなり○むさしあふみ、こゝは、何も意あるにあらず○かゝるをりにやは、カヤウナル時にや、人は死ぬならんとなり

(大意) とひて隔なく、心をうちあくれれば、うるさしといひ、又、とはねば、つらしと恨む、ほかにいかんともせんすへなし。人の死ぬるといふは、かゝる時にやあらんといふ意なり

十三段)むかし、男、みちの國にすゞろにゆきいたりにけり。そこなる女、京の人はめづらかにやをほけけん。せちにれもへる心なんありける。さてかの女、

(語釋) みちの國は、陸奥の國にて、ふるくは、ミチノオクノクニといひしを、此の頃は、省きてかくもいひきと見ゆ○すゞろに云くは、何故ともなく、覺えず往き到りけりとなり。すゞろの語釋は前に委しくいへり○うこなる女は、陸奥の女なり○せちには、切になり。心に深くなり。此の外は、語釋も、文意も聞てえたるか如し

なか／＼にこひにしなすは桑子にぞ

なるべかりける玉のをばかり

(語釋) なか／＼は、例の却りての意なり○しなすは、死なんよりはの意なり○桑子は、鬘をいふ。鬘は、雌雄まゆの中にももるものなれば、うれを羨みて、いへるなり○玉の緒ばかり、玉の緒は、魂の緒の義なり。緒とは、絶ゆるに寄せたる言なるべし。さて玉のをばかりとやうにいふ時は、暫しの間なといはんが如し。玉のをは、命をいふ言なるに、玉のをの短きといふが常なれば、うれより轉りて、暫時といふ意にも用ひたるものなるべし。さてかひこは、命みじかくても、雌雄ちぎり深く、一つまゆの中にももるものなれば、羨みたるなり。此の歌は、萬葉集に「なか／＼に人どあらすば桑子にぞ、ならましものを玉のをばかり」とあるを、少しかへて、例の作者の構へたるなり

(大意) 一首の意は、れほかた聞ておたるが如く、なまじひに、戀に死なんよりは、イツソさひこに予なるべかりける。たとひ、命はしばしの間より生きざるものにもせよと、深く男に逢ひがたきを歎きたるなり

歌さへぞ、ひなびたりける。

(語釋) 人からは、もとより、歌までが、ひなびたりとなり。さへの詞に心つくべし○ひなびは、鬘の風をなすをいふ。田舎めくなどいはんが如し

さすがにあはれとやおもひけん、いきてねにけり。夜ふかく出でにければ、女、

(語釋) さすがは、前にいへるが如く、シカシナガラ意にて、歌までが田舎メイトは居るけれども、シカシナガラなり○あはれとやれもけん云々は、男の心を、作者がいふなり○いきてねにけり



りは、女の許に往きて、相率ゐて寝たりとなり

夜もあけばきつにはめなんくだかけの

まだきに鳴きてせなをやりつる

(語釋) きつといふに諸説あり。一説には、狐なるべしといふ。狐をキツとのみいへるは、萬葉にも見ゆたり。子は、むじなのナと同じく添へたる言ならんといふ。さて狐は、雞を好むものにて、田舎などにては、狐に鶏をとらるゝと常おほければ、かくよめるなりといひ、又、一説には、出羽の秋田のあたりにては、木もてつくれる、大なる箱を、家々にすゑおきて、水を蓄ふる器とせり。其の器の名を、きつといふ。其の土地の老人のものがたりに、此のきつ、昔は、おしなべて、家ごとくありしものなりといへり。近き比は、大かた、瓶を用ふることとなりて、きつをすゑおく家は、少く、其の名を知るものも多からず。これ古き東語にて、こゝは、きつといふ器の水中へ、うちはめんどいへるなるべし。今も雞の嘗鳴するを恐みて、しかさせしとするには、雞の腹を水にひたし冷せば、其の事やむといふ云々。この兩説の上しめしは、後にいふべし○はめ、前のきつの解釋によりて、此の語も解を異にせざるを得ず。もし、狐の説によらば、はめは食にて、食しめんの義なり。又、きつは水器といふ程によらば、はめなんは、水に没る事なり。今も水中へ物を没るゝを、はめ、はむるなといふこれなり○くだかけは、腐鍋なるべし。くだは、恐みていふ詞、かけは、庭鳥の古名なり。庭鳥は、カケロと鳴くより、古くはカケといひき。嘗なきして、男をかへしたるがゆゑに、腐鍋を恐みていへるなり。時鳥を醜時鳥などいふと同じ義なり○またきは、日本紀に、豫の字を訓みぬ。何に

まれ、其の時よりさきにするをいふ○せなは、夫なり。女より男をいふ詞なり。東國にては、今も若き男をせなといふがつねなり○やりつるは、かへしやりつるの意なり

(大意) きつを狐の事に見れば、一首の意は、夜もあけば、狐にはましめなん、わろき鶏の、いつも鳴く時よりは、はやく鳴きて、夫をかへしやりつる事よとの意なり。又、きつを、水器とする方ならば、夜あけなば、水器に打ち没なん、腐鍋よ、汝が嘗鳴せしゆゑに、曉すともひて、夫をかへしやりつるがくやししく悲しとなり。されば此の後、嘗鳴させらんやうに、水器に没なんとの義なり。この兩説、いづれにてもよろしけれど、若し秋田あたりの方言に、水槽をきつといふ事、信ならば、其の説れもしろし。しかにといふに、此の歌の初句、夜も明けはとあるには、水槽の方、打ち合ひて聞こゆ。さるは、狐は夜をのみ専として、「夜のどの」などの方言もあるに、夜の明けたらば、狐に食ませんといふはいかゞなるいひさまなり。よくよく夜もあけばといふ、初句を味ひて、その意をささるべし。又、ある人は、きつは、木櫃の中略せるにはあらぬかといへり。これも、一つの参考とすべし、もしきつといふ方言ありとせば木櫃の説も或は然らん

といへるに、男みやこへなんいぬるとて、  
(語釋) といへると書けるは、といひて、女は、かかく思ひ入れたるにといふ義なり。さるに、男は心とまらねば、ありすて、京へ往くとしてなり。此の外は、文意、明らかし  
くり原のあねはの松の人ならば

都のつとにいふといはよじを



(語釋) くり原のあねはは、陸奥の國、栗原郡、栗原の郷なる、姉波といふ地名なり○つとは、萬葉に、婁の字を訓せり。山づと、濱づと、旅づとなどいふ如く、其の所につけたる物を、何にても包みて持ち來たる故の名なるを、轉りては、單に土産といふ意に用ふ。こゝも然り○いさは、人を誇をいふ。今もイザイザなど、人をさうふ時にいふは、此の詞なり。こゝは、いさくどさういひて、都へつれゆかんものをの意なり

(大意) 陸奥の國、栗原の郷なる姉波といふ所に、名高き松あり。此の松が、もし人ならば、都人に見せたきものなれば、都への土産にいさといひて、誇ひゆかましを、人ならぬゆゑに、それもできずといふが、歌のふもてにて、したには、此の女の、人らしくは、都へつれゆかんものを、あまりに、田舎ものなれば、それ得せぬとの意を含めたるなり

といへりければ、よころこびて思ひけり、くどぞ、いひをりける

(語釋) いへりければ、上のあねはの松の歌を、男のいへりければなり○よころこびては、女がなり○思ひけり、思ひけりとは、此の男、我を思ひけり。思ひけりといひぐさにいひ居りきとなり。歌のしたの意を知らずして、たゞ、表面のこゝろにのみ思ひなして、我を誇ひて、都へつれゆかん心持なりと女の喜びしさまなり

(文意) かく歌の深意をも汲み得ずして、得意に、よころこびぬる田舎の女のを、こゝにあらはせるは、次段の用意ある女のを、いとゞおもしらく見せんがためなり

(十四段)むかし、みちの國にて、なでふことなき人の、むすめにかよひけるに。

(語釋) なでふことなき人とは、今言に、ナンデモナキ人などいはんが如し。兩親も、由緒ある人にもあらぬに、其の娘のことの外に、すづれたるをいはんためなり

あやしうさやうにて、あるべき女にはあらず見えければ、

(語釋) あやしうは、奇しくの音便なり。上の段の女とは、甚異にて、これは用意ある女なれば、由緒もなき女としては、あやししく思はるとなり○さやうにては、其のヤウニテの意なり。即、由緒もなき女のやうには見ねばなり。さて其の女の心のおくの、知りがたければ、こゝろみんとて、歌をよみてをくれるよしなり

志のぶ山志のびてかよふ道もがな

人のこゝろのおくも見るべく

(語釋) しの山は、和名抄に、陸奥の國、信夫とある處の山なり。今は、岩代の國、信夫に屬せり。こゝは、名所を、しのびの序におきたるのみなり○しのびてかよふとは、女の許に通ふなれば、人目をかくれて通ふをいふ○道もがなは、道もあれかしと願ふ意なり○人の心は、女のこゝろをいふ。この歌は、道おくかよふなど、山の縁語を以てしたてたるなり

(大意) 一首のこゝろは、人の心に忍びて通ふ道もあれかし。さらば、わけ入りて、おくを見るべくといへるなり。深き用意ある人は、心の奥の知りがたきものなればなり。さてこの歌の深意は、つひに我によらんした心ありや、なほ。其の心の奥を知りたしと云ふ

女かきりなくめでたしとおもへど、こゝろさがなきにびす所にて、いかゞはせん。



(語釋) めでは、愛の字の意味なり。今はめでたしといへば、單に祝ふべき義にいへど、古くは、廣くほめたる意に用ひたり。こゝは、今言に、結構など譯すべきか○さるは、然るの意にて、前の「なでふことなき人のむすめ」とあるを承けたるなり○さかなきは、古く、不善、また、不祥、または、不良な色の文字を訓せり。こゝは、よからぬ田舎ぐせなどいふほどの事に心得べし○えびすは、蝦夷にて、昔は、陸奥、出羽などはすべてねびすといへり○いかゞはせんは、都のよき人の蝦夷所に住みつくべきにあらず。さる所に生ひたちし身の、ともに都にのぼらんは、耻づかしくて、せんかたなく思ふよしなり。すべて、この女は、用意をかきさまなり

(文意) 此の女は、彼の京人をいともめでたしと思ひぬ。されば、心の奥をもあらはさんとは覺ゆれど、猶、わがあづまえびすの、田舎びたる心をあらはしては、いかゞはせん。いはでやみなんものとなり。京人をやさしくまされりとして、いよく、用意せるさまなり。上の段の愚かなる女は、用意もなく、ひなびたる歌をも、多くよみて、笑へることをも悦べるに、此の段には、かくよしある女をいひて、歌の符をもわざとつゝしみてせざるさまに書きなしたり。二條を對にしたる文のさま、妙といふべし、これこの書の得色なる所なり

(十五段)むかし、紀の有常といふ人ありけり。三代の帝につかうまつりて、時にあひけれど、のちは、世かはり、時うつりにければ、

(語釋) 紀の有常、三代實錄に、元慶元年正月廿三日、從四位下周防權守紀有常卒。左京人、正四位名虎之子也。性清警有儀望、少年(十九歳)奉侍仁明天皇、承和中權拜左兵衛大尉云々、貞觀九年、

爲下野權守、秩滿爲信濃守、十五年授正五位下、十七年爲雅樂頭、十八年至從四位下、爲周防權守、卒時年六十三とあり○三代の帝とは、仁明、文德、清和の三天皇をいふ。有常は、十九歳ばかりより、仁明天皇に仕へ奉り、さて妹の腹に、文德の一の皇子、惟喬親王うまれ給へば、時にあひけるなるべし。然るを、文德位につかせ給ひて、其の年の冬、染殿の後の御腹に、惟仁(清和天皇)親王生れ給ひて、やがて太子に立ち給ひしかば、其の後は、有常はさせる榮も聞てせずして、清和天皇の貞觀十五年になりて、官位昇れり。仍りておもふに、右の貞觀の中間より前、嘉祥の末の間、時にあはぬやうにてありしを、いとく衰へたるやうに、こゝに記せるは、例の物語なればなるべし○時にあひどは、三代の中に、はじめの御代をさせるなり。一説に、三代の間は、全く時にあひて、其の後に時を失なひしならんといへるは、國史を参照せぬ誤なり。又、「つかうまつりて」と句を切りて、時にあひけれど、のちは云々とつゞけて讀むべし。然らざれば、三代時にあひたるやうに聞きまがふ憂あるべし○世かはり云々は、長恨歌傳の時移事去、樂盡悲來とある文によりて、かけるなるべし

よのつねの人のこゝともあらず。

(語釋) よのつねは、尋常の意なり○こゝとは、如しの義なれば、世のつねの人よりも、おどろへたりとの意なり

人がらは、心うつくしう、あてはかなることをこのみて、こと人にも似ず。よのわたらひ心もなく、まづしくても、なほ、むかしよかりし時のこゝろながらに、世



の常のことも知らず。

(語釋) 人からは、人品をいふ○心うつくしうは、心のきたなからぬをいふ。前に引ける三代實錄に此の人をほめて、清誓にして儼望ありといふを、うつしひろめたる文なり○あてはかなることば、上品めきたることをいふ○こと人にも似ず、他の貧しき人にも似ずなり。他人は、貧しくなれば、權門に媚びて、昇進せん事など望むはつねなるを、有常は、まづしけれども、しかせぬとなり。これやがて、清誓の性質なるがゆゑなり○上のはたらひ心なしとは、世を渡るために、物を得んと望む心もなしとなり○むかしよかりし時の云々、はじめ時を得て榮えたりし事は、前にいへるが如し○こゝろがらとは、心のまゝにといふに同じ○世のつねことも知らずは、朝夕のつほらぬ家事をも知らずとなり、すべて、貧しきにつけては、種々に心をめぐらして、妻子をも養はんとするが、世人のつねなるを、さるわざをも知らず。昔の時にあひし世どかはらぬとなり

(文意) 有常の清貧に安んずるさまを、こゝにあげたるは、つきにかゝる人につきそひ居りては、ゆく末おぼつかなしとて、妻の出家せん事をあらはさんがためなり

とし比あひなれたるめ、やう／＼とこはなれて、つひに、尼になりて、あねのさきだちて、尼になりけるがもどへゆく。

(語釋) とし比あひなれたるめとは、年來、親しみたる妻の義なり○やう／＼は、次第次第になり○そこはなれば、床離にて、夫婦、寢所を異にする意なり、そとより轉りて、すべて夫婦の間の、うとくなる事をいふ。次第次第に、疎遠になりて、終に尼になりたりとなり。さて其の間には、いろ／＼

の事もありつらんを、省きたる文体なり○あねのさきだちて云々、此の妻の姉は、前に尼になりたるがありしかば、其の許へゆきぬとなり。

(文意) 有常は、清貧に安んじて、意どせざる人からなるを、妻は之に反して、かれこれと貧をいふさまの性質なれば、其の心合ひがたく、又、親しむことも六かしく、つひに尼になりぬるよしなり。されば、此の妻、心からすゝみて出家せるにはあらで、年老いたる身なれば、別人に嫁することもかたく、姉の尼になりてあるをたよりに、かしらおろして、うとへゆききとなり

男、まこと、むつまじき事ころなかりけれ。今はとていくを、いとあはれとはおもひけれど、貧しければ、するはさもなかりけり。

(語釋) 今はとては、今はかぎりとなり○いくは、往くなり○するわざ云々、妻と別かるゝに、ものねくるは、昔は定まれるわざと見えたり。されば、それをするわざといへり。贈るべきものもといはずして、「するわざ」といへるに心をつくべし

(文意) 女のかたより心へだつれば、實にむつまじからねど、今はかぎりとして、出でゆくには、相馴れし年月の事ども、おもひ出でられて、いとあはれとは覺ゆれど、貧しき身なれば、世の普通に、妻に與ふるわざだに、心にまかせずとなり

思ひわびて、ねんころにあひかたらひける友だちのものに、かう／＼、今はとてまかるを、何事もいささかなる事もえせで、つかはすこととかきて、おくに



便にて、懇切の意なり○あひかたらひは、相語らひにて、互に心の中を知り合へる友をいふ○かうくは、今言にカヤウくなといふに同じ。さて「かうく」より「つかはす事」といふまでは、友だちのもとへたくる、書面の詞なり。新釋に、此の文のはじめには、尼になりたるゆゑとも書きてあるべきを、其の詞をかきつらねては、さきにいへると同じやうの事、かさなりて、うるさければ、記者の心して、はゞきて。かうくといふ詞にかへたるなり。されば、かうくは、文の詞なれども、もとよりのにはあらず。まかるをとは、出で、ゆくを、かしてまりていふ文詞なり云々といへり。此の説、まことに、よろし○つかはすは、妻を姉のものとへつかはすなり。さて此の友だちは、彼のむかしの手を折りてへにける年をかすふれば

十といひつゝよつはへにけり

(語釋) 手を折りては、指を折りてなり○へにける年は、經過せる年なり○十といひつゝ云々は、四十年を経たりとなり。これを十四年の意に解せるは誤なり

(文意) 指を折りて、夫妻の中の經たる年を數ふれば、四十年になれりとなり。さてかく年經し事なれば、今はとて、出で行くに、いさゝかなる物をも與へぬが、まことに、本意なきを、あはれとおぼせといふ意を、言外に含めたるなり

この友だち、これを見て、いどあはれとおもひて、よるのものまで、おくりてよめる

(語釋) いどあはれと思ひては、友だちが、この歌を見て、まことに、不憫とおもひてなり○よるものとは、被<sup>フキ</sup>にて、今の夜具などをいふ。さてよるのものまでといひて、晝の衣服は、不足なく贈りたる事を知らせたるなり

(文意) 此の友だちは、なさけ深き人なるさまにかけたるなり

年だにも十とて四つは經にけるを

いくたび君をたのみきぬらん

(語釋) 十とては、十といひての畧言なり○たのみきぬらんは、頼みにしきぬらんの意なり。四十年の間には、幾度か君をたのみにしきぬらんとなり

(大意) 一首のころは、年だにも、十といひて四つは經にけるを、まして、其の間の月日は、かぎりもなく多きことなり。其の長日月の間には、種々の出來事もありて、細君が、いくたびか、君を頼みにしてきぬらんとなり。それを思へば、君が今わかるゝに臨みて、物おくりたきよしおぼすも道理に、あはれと思はるれば、此の物ども、いさゝかながら、進上すその意を、言外に含めたるなり

かくいひやりたりければ、よろこびにそへて

(語釋) たちかへり贈物のよろこびいひやるに、歌をやるどてなり

(文意) 友だちが、かく贈物にうへて、歌をやりければ、有常が、うのよろこびの體に、又うたをやるどての意なり

これやこのあまの羽衣うべしこそ



君がみけしにたてまつりけれ

(語釋) これやのやは、疑の辭。このは彼のにて、古言なり。これや彼の聞き傳ふる、天の羽衣ならんとなり○あまの羽衣は、神の服、また、天人の服なをいふ。こゝは、うれに擬へて、ほめていへるなり○うべこそは、諾こそにて、しは例の助辭なり。ウベハ、肯意にいふ語にて、實にしかあるべしなをいふほどの詞なり○みけしは、御衣の意にて、古言なり。又ミツともいふ○たてまつりければ、衣服なをも、むかしは、貴人には、下より調じて、奉りしものなれば、かくいへるなり。さて昔は男女の常に着る衣は、かよはしても着たりしがゆゑに、今、友だちの衣を、有常の妻にもおくれるなり。殊に、にはかの事ゆゑ、我が料にしたてたる衣を、とりあへず、おくりたるさまなり

(大意) 一首の意は、これや彼のきゝ傳へてのみありて、我等が、いまだ、見たることもなき、天の羽衣ならん。うつくしさいはんかたなく、此の世の物とも見えず。かくよき衣なれば、世にすぐれ給へる、君が御衣に奉りしは、まことに然ることなるべし。それをわれらにたまふは、甚過分なりと、いたく、先方をほめて、喜の情を述べたるなり

よろこびにたへかねて、また

語釋) 聞こえたるが如し

秋やくる露やまがふとおもふまで

あるは涙のふるに予ありける

(語釋) 秋や露やのやは、共に例の疑の辭なり、秋はものかなしきものなれば、其秋の來て、露やま

がふと思ふほどに、喜の涙が多くなつる事よとなり○まがふは、分けがたく、混することといふ。されば、こゝは涙があまり多くたれて、露かとおもふまでの意なり。さて一二の句は、秋の來てつゆかどまがふとの意なり

(大意) 一首の意は、心をかなしふる秋の來て、袖をしぼるか、露のおきまがふかと思ふばかり、我が袖のぬるゝは、よろこびに堪へずして、おつる涙にてありけりとなり

(十六段)むかし、年ころおどづれざりける人の、さくらのさかりに、見に來たりければ、あるじ

(語釋) 新釋に、年ころは、月ころの書きあやまりなるべし。年比にては、歌に年にまれなるといへるにかなはずといへり。此の説よし○おどづれざりけるは、音借せずありけるなり。此の外は、語釋も、文意も聞こえたるが如し

あだなりと名にこそたてれ櫻花

年にまれなる人もまちけり

(語釋) あだとは、かりうめなる事、また、移り易きことをいふ詞なり○年にまれなる人とは、一年のうち、稀れに來る人の意なり○此の歌は、古今集、春の上に「櫻の花さかりに、久しくとはざりける人の來たりける時に、よみける。讀み人しらす」とあり。それを、こゝには、例の一つの物語に作れるなり

(大意) 一首の意は、櫻の花は、あだなる移りやすきものと、何人もいへど、あだにはあらずして、



一年の中に、まれに来る人をもまわちて、散らでありといへるなり。さて今は、かく稀れに来る人こそ  
櫻の花よりも、かへりてあだなれど、怨みたるこゝろを裏にもたせたるなり

かへし

けふこそはあすは雪とぞふりなまし

消えずはありとも花と見ましや

(語釋) けふこそは、今日來すばなり○ふりなましは、ふるならんの意なり○消えずはありとも  
は、雪の如く散れる花が、たとひ、消えずのこりてありともなり○花と見ましやは、花と見えはせじ  
のこゝろなり○さてこの歌は、古今集に、業平朝臣の歌とあり○さて互にまけじとあらそふは、贈  
答のうたのつねなり

(大意) 一首の意は、今日來たればこそ、花とは見れ。明日は、雪と降るべし。其の雪消えずはあり  
とも、花と見ましや。花と見えはせじとなり。さてそれがしを、花よりもあだなりといはるれども、  
そなたこそ、今日こそは、明日は心かはるべければ、その人とも見おしといふこゝろを、例の裏に合  
めたる歌なり

(十七段) 昔、なま心ある女ありたり。男ちかうありけり。女うたよむ人なりけれ  
ば、こゝろみんとて、菊の花のうつろへるを折りて男のものもとへやる

(語釋) なま心あるとは、心ある人のやうにて、まの心はぬをいふ。今の世に、ナマイキなといふナ  
マこれなり○ちかうは、近くの音便なり○うつろへるは、移るを越べたる言なり。菊の花の盛すま  
たるをいふ○此の段は、貫之集に、ちかきなりなる所に、方たがへにある女の、わたれると聞きて、  
あるほどに、事にかれて、見きくに、歌よむべき人なりと聞きて、これがよむさまは、いかでこゝろ  
みんとおもへども、いとも心にしあらねば、深くも思はず、すゝみてもいはぬほどに、彼もこゝろみ  
んど思ひければ、萩の葉のもみぢたるにつけて、歌をよみてなん、たこそせたる「秋はぎのした葉につ  
けて目にちかく、よそなる人の心を予見し」貫之「世のなかの人に心をそめしかば、草葉に色も見え  
しと予おもふ」とありて、此のつぎに、十首まで贈答のうたあり。これを思ひて作れる物語なるべし  
と、古意にいへり。げにしかるべし

くれなねに匂ふはいつら白雪の

枝もどをれふるかとも見ゆ

(語釋) にほふは、色のうつつくしく見ゆるをいふ、香をいふにはあらず。月のにほひ、水のにほひな  
といふ皆同じ○いつらは、いつくすといふ意なり○どをれは、轉じてたわよともいふ。撓むばかり  
の義なり○うつろへる白きくは、あかき色のまじるものなれば、ろれに上そへて、たもふこゝろを  
いへる歌なり

(大意) 一首のこゝろは、白菊の花もうつろひては、紅ににほふといふ事なるが、それはいつくす、  
たよ、白雪の枝もたわむほどにふるかど見えて、紅のにほへる色は見えぬとあり。さて色このむ心  
と聞くに、其の色ある心は、いつくす、ふるけしき見ぬすといふこゝろを、裏にふくめたるなり。か  
くしひやるは、かへしに、いかよいふとて、其の心を見んとてのしわざなり



男、しらすよみに、よみける

(語釋) しらすよみとは、まことに、知らぬにはあらず、女の下の情をわざと知らぬかほに、かへし  
せるをいふ

くれなねににほふがうへの白雲は

をりける人の袖かどぞ見る

(語釋) うへは、うのうへの意なり○をりける人とは、白菊を折りける人なり○此の歌は、おくれ  
る歌の意を知らずよみに詠めるなれば、さらに返歌のやうにはなきなり

(大意) 一首のこゝろは、うつろへる白菊にて、紅ににほへる色のあるがうへに、白雪もふりたる  
やうなれば、折りける君が衣のかさねの袖口かどぞ見るとなり

(十八段)むかし、男、みやづかへしたる女のかたに、むだちなりける人を、あひし  
りて、ほどもなく、かれにけり。おなじ所なれば、女のめには、見ゆるものから男  
は、あるものにもおもひたらねば、女

(語釋) むかし男云々、これ貴人の北の方附の宮仕を、男のしたるなり。それゆゑに同じ所なれば  
とはいへり○むだちは、御達などの文字をあてゝ、もとは、貴女をいふことなれど、うつりては、貴  
女に仕ふる女房をいふ事となれり。こゝも然り。又上田秋成の説に、ある人、御達の説は、わろし。  
古本に、見達と書けるは、コダチと讀むべき證なりといへるはよろし。古意には、男女ともに子と唱

ある事、その一二をあげん、男子には「いさ子ども、はやく日本へ」ならの都をねるはたが子ぞ「女を  
いふは、「阿倍の市路にあひし子らはも」このをかに菜つます子」など、猶おほし。さて國史には、赤  
猪子、大葉子、又皇女の御名のみならず、仕ふる女房達にも、杉子、俊子などいと多し。ひとり、伊勢  
は、亭子院(宇多天皇)の皇子を生み給へば、大和物語に、伊勢の御やすむ所とも書けるにつきて、伊  
勢の御と稱すること、人、皆おもへど、これも、出羽の子、若狭の子等の例にて、はじめ帝のめされ  
ざりしよりの名ならんには、伊勢の子とよびしなるべし。かゝれば、すべて童名といふものにて、今  
なほ昔にかはらぬ事と承る。貴女を稱して御といふは、うしろ見はかくしき御宮づかへの人の上  
にてこそあらめ、云々とあり。これも一説とすべし○ほどもなくは、幾程もなく、暫時の意なり○か  
れにけりは、女にあふことのないなるをいふ○ものからは、ものながらの義なり○男はあるものに  
も云々は、男の方にては、一向惚れたるが如く、氣にとめざりきとなり。思ひたらねばは、思ひてあ  
らねばなり○さて此の一段は、古今集に「なりひらの朝臣、紀の有常がむすめに住みけるを、うらむ  
る事ありて、しばしの間、晝は來て、夕さりは歸りのみしければ、よみてつかはしたるをあるを例の  
かきひがめて、一條の物語としたるものなるべし

天雲のよそにも人のなりゆくか  
さすかにめには見ゆるものから

(語釋) 天雲は、遠く他所に見ゆるものなれば、よろこいふ言の枕詞なるを、下までたとへにいひ  
つゝけたるなり○さすかは、例のシカシナガラ義なり○ものからは、ものながらの義なること、



前の歌に解せるが如し

(大意) 一首のこゝろは、天雲のやうによろ外にも、人のなりゆくことかな、さらば、かくれて見えぬやうにもなるべきを、さすがに、目には見ゆるものながらの意なり。されば、眼には、ちかく見る人の、心うとくならずたるをいへるなり

とよめりければ、男、かへし

ゆきかへりそらにのみしてふることば

わが居る山の風はやみなり

(語釋) ふるは、經るなり○風とは、他の男をいふたとへ言なり○はやみは、はやさの意なり。下の句の裏のこゝろは、我がものなる女のもとなれば、立ち寄らんとおもへど、えよらぬは、又、他にかよふ人のあまたあるゆゑなりといふ意なり○古今集には、この歌は、業平朝臣とあり

(大意) 女の歌に、男を雲にたとへたれば、すなはち、雲になりて、行きかへり、空にのみしてありある事は、我が居るべき山の風のはげしきゆゑなりといふ意なり

とよめりけるは、あまた男ある女になんありける

(語釋) 此の女は、他にも多くの男ありし女なりきとなり。こゝろは、記者のことばなり

(十九段) 男、やまどにありある女を見て、よばひてあひにけり。さてほどへて、宮づかへする人なりければ、かへり來る道に、やよひばかりに、かへてのもみちの、いと

おもしろきを折りて、女のもとに、みちよりいひやる

(語釋) やまどとは、奈良の京あたりをさしていふなり。此の物語は、平安朝のはじめのほどにありつる事をかけるよしなれば、其の心ばへにて、見るべし。平安朝のはじめの人は、久しく住み馴れし、奈良の郡には、親族、または、朋友などもありて、かしてへは、をりくに行きかよふ事たえざりしなるべし。されば、かゝる事もありけるなり○よばひは、女の許に通ふをいふ。委しくは、前にいへり○やよひばかりとは、三月比といふに同じ○かへては、和名抄に、雞冠木、和名、加倍天乃木とあるこれなり。葉のかたち、蛙の手に似たるゆゑの名にて、かへるての畧言なり○もみち、こゝろは、芽の紅なるをいふ○いとおもしろきとは、かへての木は、いろくありて、芽の色も厚薄、種々あれば、其のうちによつたれたるをいふなり

(文意) 平安の都なる男、奈良の邊の女に通ひけり、さて月日經たりしが、男は仕官の身なれば、いつまでもかくてあるべきにあらずとて、女に別かれて、歸る道に、三月比なりしかば、かへての芽が紅に出で、誠に見事なりき。かゝるものを見るにつけても、女の事を思ひ出でられければ、折りて女の許へ、道よりふくるとて、歌をうへたりとなり

君がためたをれる枝は春ながら

かくこそ秋のもみちしにけれ

(語釋) たをれるは、手折れるなり○かくこそは、かやうにこそなり○此の歌の意は、新釋に、君にわが心ざしの深きにかなひて、春ながらも秋の如く、色もかく染めたりといふ意なるべし。舊註を



もに、秋といふ言になづみて、女の心のうつろふ事に、心得たるは、いかゞ、さては、かへしの暇め  
づらしげなし。又、女の心を疑ふべきよしも、上の詞に見えずといへり。此の説、まことによし

とてやりたりければ、返事は、京につききてなん、もてきたりける

(語釋) 返事は、京につききてもてきたるは、やまを遠く離れてやりたる使なるよしを知らせたる  
女なり。されば、京ちかき所のかへてのもみちゆゑに、大やうに、君が里にはといへるなり。此の外  
の詞は、聞こえたるが如し

うつろふ色につきぬらん

君が里には春なかるらし

(語釋) 新釋に、此の歌は、心ざしのおかきを、かへての若葉の色こきによろへて、いひおこせたる  
を、聞きしらぬ顔して、かくこそそのたまひおこせたるは、御心のうつろひかはれるよしにやあら  
ん。こゝもどにては、さやうの心とは見えざりき。いつのまに、うつろふ色につきぬらん、あやし  
よ。君が里には、春といふことなく、秋なるゆゑにこそといへるなりと、あるにて、語釋も、大意も、  
おほかた、聞こゆべし

(二十段)むかし、男、女いとかしこく思ひかはして、こと心なかりけり、さるを、い  
かゞありけん。いと、かなる事につけて、世の中をうしと思ひて、出で、いな  
どおもひ、かゝる歌をなんよみて、ものにかきつけける

(語釋) かしこくは、能くといふ意なり○こと心は、異心にて、思ひかはす心の外に、他心なかりけ

りとなり○いかゞありけんは、如何なるゆゑかありけんの義なり。さてこれは、記者の疑へるよし  
の詞なり。すべて、男女の中らひのあしくなるは、他心あるより起るがつねなればなり○世の中  
とは、とりもなほさず、男女の中をいふ。うしは、憂の義なり○ものに書きつけるとは、出で、行き  
しあとにて、夫の見よかして、壁、または、障子などに、歌をかきけるなり。さるは、恨をのこした  
る歌なればやかし

いでていなば心かろしといひやせん

世のありさまを人はしらずて

(語釋) いで、いなばは、出で、行かばにて、今、夫の家を出で、行かばなり○心かろしといひや  
せんは、他人が、我を輕卒なりといふかもしれずとなり○世のありさまとは、夫婦の中のありさま  
の義なり

(大意) 夫婦の中の有様の、堪へ難き事のあるをば、他人は知らずして、出で、行くを、輕卒なりと  
おほかたいふべし。まことに、くちをしきかきりなり。これみな、夫の我にしむけ給へるわざよと、  
怨をのこせるなり

とよみ置きて、出で、いにけり。此の男、かくかきおきたるを見て、けしう心おか  
るべき事もおぼえぬを、なに、よりにならん

(語釋) けしうは、怪しうといふに同じ○心おかるべき事は、今言にもかくいふ。氣ヅマリ、又、心  
配なる事ありとも、男は心づかぬに、女は心が心より、はらだちて出で、いにきとなり。さて男の心



づかぬに、女の出で、行きしなれば、上の「いさゝかなる事につけて」といふ文も、ますます能く聞  
こゆるなり。かゝる處は、ことに、此の物語文に注意すべし

いといたううちなきで、いづかたにもどめゆかんと、門に出で、とみかう見、み  
けれど、いづこをはかりともおぼえざりければ、かへりいりて

(語釋) 留守の中に、女の出で、行きしがゆゑに、男はいかゞはせんとまをへるよしなり○とみか  
うみは、どかうみめぐらすなり。左右、東西を見廻らすことにて、至極當惑のさまなり○いづこをは  
かりとも云々は、何處ならんとも、測り知られぬ意なり。今言に、心當がないなどいふに同じ。され  
ば、尋ぬるによしなくて、行く事をやめて、家に入りたるよしなり

おもふかひなき世なりけりとし月を

あだにちぎりて我やすまひし

(語釋) あだは、眞實やかなる事の反對にて、うつりやすきをいふ○我やすまひしは、われやはす  
みしの義なり。我やのやは、例の意の反對になる辭なり

(大意) 一首のこゝろは、あまたの年月を、あだに契りて、我やすみし。いとまめやかに、ちぎり  
てこそありつるに、かく出で、いぬるは、おもふかひもなき、夫婦の中なりけりとなり

といひて、ながめをり

(語釋) ながめは、今は、たゞ、眺望の意にのみ用ふれども、古くは、ものおもふさまにいふ。こゝ  
は、一首の歌をよみて、いまだ充分ならぬがゆゑに、空をうちながめて、ものおもはしげなるさまな

り。さて又よみ出でたるよしなり

人はいさおもひやすらん玉かつら

おもかげにのみいで、見えつゝ

(語釋) 人はいさ云々、人は女を指せり○玉かつらは、玉菱にて、女のかしらにかくるものなれば、  
こゝは女の上そひの事にいへり○見えつゝは、隠られぬといふことを、つゝといふ語にいひのて  
したるなり

(大意) 一首のこゝろは、女は此方を思ひやすらん、いさ知らず。我は、女の上のひの儘にのみ出で  
見えつゝ、隠られずとなり

此の女、いとひさしくありて、ねんじわびてにやありけん、いひおこせける

(語釋) ねんじわびては、今言に、こらへ兼ねてなといふに同じ。女、はじめ腹たちたる時には、少  
しの事に家出せるが、心、をさまりては、やうやう、悔ゆる心ものこりて、夫のよびかへせかして、心  
まことにまてども云々といふ義に心得べし

今はとてわするゝ草の種をだに

人のこゝろにまかせずもがな

(語釋) わするゝ草は、隠るゝといふ事を、隠草にしたてゝ、おもしらくいへるなり○だには、今言  
に、なりともといふ義なり○がなは、例の願の詞なり

(大意) 一首のこゝろは、かくわかれては、もとの如く、共に住む事はならずとも、せめて、君の隠



れたまはぬやうになりとも、したきものよとなりかへし

わすれ草うゝとだにきくものならば

おもひけりとは志りもこなまじ

(語釋) この解は、新釋の説よろし。解釋に、いはく、一首の意、そなたには、うれがしが心に、陰れ草の種をまかせずもがなといはるれど、それはたがへり。わすれ草をうゝるは、あしき事ならず。それがしは、あはれずとも、せめてろなたの心に、わすれ草を植うといふことなりとも聞かまほし。さやうに聞くものならば、そなたにも、うれがしをおもひけりと、しりもこなまじといふ意なり。しかいふゆゑは、萱草念憂(文選養生論の語)といふ事のありて、それを心にうゝるは、古歌に、我が下ひもにつけたれといひけんやうに、思を念れんとてするわざなればなり。かやうに見れば、だにといふてにをはもどき得られ、又、聞くものならばといふは、聞かまほしく思ひてといふ詞なるにも、能く叶へり。さるを、古註にも、説きひがめたるにならひて、古意、臆断にも、我がわすれ草をうゝと、ろなたに聞かば、たもひけりといふ意にせけるは、自他のたがひにて、いみじきひが言なり。しれといふ意を、知りもしなまじといふべきかは云々

又々ありしよりけに、いひかはして男、

(語釋) けには、すみてよむべし。まさりての意なり。こゝは、女はあやまりありしゆゑに、男の心をぞり、男もいさゝかなる事につけても出で、いにし女なれば、又、さやうの事もあらんかと、女の

心をとるがゆゑに、ありしに勝りて、互にうはべを繕ひて、いひかはすよしなり。思ひかはすと云はずして、いひかはすと云へるに心すべし、さていまだ、女の男の家にかへらざるさなりわするらんとおもふ心のうたがひに

ありしよりけにものずかなしき

(語釋) ありしよりけには、別かれてありし時よりも、まさりての意なり

(大意) 一首のこゝろは、いさゝかなる事につけても、出で、いにし人なれば、又やわするらんと思ふ心のうたがひに、行末たのみがたければ、わかれてありし時よりも、まさりてものかなしく思ふとなり

かへし

中そらにたちねる雲のあともなく

身のはかなくもなりぬべきかな

(語釋) 中空とは、いづれの山にもかゝる所なく、たゞよふ雲をいふ〇たちねるは、たちつゝつしてたゞよふさまをいふ〇身のけかなくなるとは、死ぬることをいふ

(大意) 一首の意は、夫の疑ひていへるを承けて、此方には、君をのみ頼みと思ふに、さやうに疑ひて、隔て給ひては、君が家にもかへられず、中空にたゞよふ雲の、横かゝる處なく、あどなく消ゆるやうに、我もよりかゝる方なくて、命、消えぬべしとなり

どはいひけれど、おのが世になりにければ、うとくなりけり



(語釋) とはいひければは、かく夫に疑はるゝは悲しきよしにはいひければなり○おのが世とは、夫の家に歸りて、もとの如く、妻となり、一家の事を、わがおもふまゝに取り行ふをいふ。さて別れてある時は、夫を戀ひしく思ひしかども、もとの如く、夫婦となりては、又、急に腹たつくせのいで、中の疎くなれるよしなり

(廿一段)むかしはかなくてたえにける中、なほやわすれざりけん。女のもとより

(語釋) はかなくてたえけるとは、何といふ<sup>た</sup>たえしたるゆゑはなけれど、互に恨の積りて、中の絶えたるをいふ。一説に、はかくしくあふ事もなくたえたるなりといふはいかゞ。はかなくは、たしかならず、また、きとせぬなといふ意なり

うきながら人をばえしもわすれねば

かつ恨みつゝなほぞこひしき

(語釋) うきながらは、憂<sup>うれ</sup>ながらなり○人をばえしもわすれねばは、人は男をさすし<sup>も</sup>は例の助辭にて、捨るゝ事を得ざればの義なり○かつは、ものゝ二つに渉る所にいふ詞なり、こゝは、恨めしきと、戀ひしきとの、ふたつにわたれり

(大意) 一首のこゝろは、つれなくて中たえ給ふは、うき事ながら、君の事を、此方には捨るゝことを得ねば、恨みつゝ、やはり戀ひしくもありとなり

といへりければ、さればよとおもひて、男

(語釋) 何といふゆゑなく、互にうらみの重りて、絶えたる中なれば、男も女も、みづからの罪と思

はず、人のどがに思ひなして、女はうきながらといふ歌よみかけ、男は女のかたよりまけて戀ひしといひおこせたるを、さればよ、女のひがこゝろえなれば、まけて従ひたるなりと思ふ意なり  
あひは見で心ひとつをかはしまの

水のながれてたえじとぞおもふ

(語釋) あひは見では、逢ひ見る事はせずなり○さればよと思ひて、しばしこりさせんの心にて、かへしにかゝる歌をばよみて、やりたるなり

(大意) 一首の意は、はじめの如く、逢ひ見ては、又よしなき事に恨みられて、中たゆる事もあらんされば、今度は、逢ひ見ることはせず、互に思ふ心ばかりをして、ありなん、しかせば、恨みらるゝ事なくて、たとへば、中島ある河水の如く、一たびはわかれしかども、かく心のひとつにあひていひかはすこと、行末ながく絶えじと思ふ、うらみられしにこりたれば、逢ひ見る事は、いなといひやりたるなり

とはいひければ、その夜、いきてねにけり、いにしへ、ゆくさきの事どもなどいひて

(語釋) こりさせんとて、逢ひ見る事はせずといひやりたれど、固より深く恨むる事のある中にもあらねば、其の夜ゆきて、ねにけるなり。はじめに「はかなくて絶えにける中」とあるを思ひ合はすべきなり

秋の夜の千夜をひとよになすらへて



八千夜しねばやあく時のあらん

(語釋) なすらへては、かりになしてといふ意なり。まことに、八千夜を一夜になさるゝものにはあらざればなり○しは例の助辭なり○ねばやのやはかに代へて、あらんの下に置きて心得べし。やのてにをはの一格なり

(大意) 秋の夜は長きものなれど、その秋の長夜の千夜を、假りに一夜になして、八千夜ねば、あく時のあらんかといふ意なり。つまり、長き夜も、相率ゐてねる時は足れりとせずとの義なり

かへし

秋の夜の千夜をひとよになせりとも

詞のこりて鳥やなきなん

(語釋) 千夜をひとよになせりともは、前の千夜を一夜になすらへてあるを承けたるなり○此の歌は、語釋も、大意も、聞こえるが如し

いにしへよりも、あはれにてなんかよひける

(語釋) 一度絶えたる中なれども、女のこりて、昔よりも殊に男によくつとめたるがゆゑなるべし。このあはれは、男の女をめづる意なり

(廿二段)むかし、おなかわたらひまける人の子ども、

(語釋) おなかは、田舎にて、都に遠ざかりたる處をいふ○わたらひは、古く活の字を訓める義にて、生活の事なり。田舎に往來して、産業を營むをいふ○子どもは、童男、童女、おたりをいふなり○

さてこゝに、親のおなかわたらひする事をかけるは、女のおやなくなりてといふ所にかけて、ゆゑあることなり。此の物語は、すべて、かゝる處に注意して見るべし

井のもとにいで、あそびけるを、おとなになりければ、男も女もはちかはして、ありけれど、男は此の女をこそえめとおもひ、女も此の男をこそとおもひつゝ、おやのあはすること聞かでなんありける

(語釋) 井のもとに云々、男も女もをさなければ、もろ共に、井のもとにいで、遊びけりとなり。さて井の本は、古書に據るに、多く樹木を植るがつねなりしかば、遊ぶにたよりよかりしなり○あそびけるを、今言にがといふことゝなるなり○はちかはしては、男も女も、互に耻ぢ合ひてなり。幼年の時、親しく遊びたれど、さすがに、成長しては、互に遊ぶことを耻ぢらひて、見ぬやうになりければといふ意なり○男は、此の女を云々は、久しく相見ねども、おさなき時に遊び馴れて、思ひかはしたる心のかはらぬをいふ○親の合はすることとは、女の親は、他の男に合はせんといふなり。さて親とは、母おやをいふなるべし。かゝる事は、母のとりはかるものなればなり

さてこのとなりの男のもとより、かくなん

(語釋) 隣の男の許より、左の歌を女へ贈れりとなり

つゝおつゝ井筒にかけしまろがたけ

おひにけらしなあひ見ざるまに

(語釋) つゝおつゝ井筒には、筒井筒にて、筒井は、筒の如くに、丸く掘りたる井をいふ。歌にて聞



方をかまへたるを、板井などいふと同じく、一種の井の形なり。さてつゝゝ井筒とは、こまらに、同じ言を繰りかへしたる者にて、「月夜よし夜よし」わするなよなよ」などいふに同じ。古歌の一格なり。實はつゝゝゝ、つゝゝゝゝゝかへしていふべきを、後のたひは、つゝゝゝゝゝいふ詞を省きて、五七の調に合はしたるなり。昔は謠方より、かく調のためにかへしたる例おほし〇かけしは、かけ橋などのかけにて、此方より、彼方へわたすをいふ語なり。こゝは、互に童の時、井筒に杖をくらすべたる事をいふ〇まろは、意義つまびらかならざれど、これといふ義に、古來用ひ來たれるは、更に論なし〇たけは、身の丈なり〇れにけらしな云々は、成長して、たけも高くなりけらしな、久しく相見ざるまにといふ意なり。けらしと、いさゝか疑ひいふは、我がたけは、みづからの目には見えぬがゆゑなり。さてかくいひやるは、おどなになりたれば、今は夫婦の契約をせんといふことを、例の裏に含めたるなり

女かへし

くらべこしふりわけがみもかた過ぎぬ

君ならずしてたれかなづべき

(語釋) くらべこし云々、まだ童の時、誰が髪長きかなと、くらぶるは、わらはへの常ある事なるべし〇ふりわけがみは、振分髪にて、髪をゆはずに、放ちて後に垂れたるをいふ。當時、すべての女のしける「すべらかし」といふも、うしろにたれたれども、それは、本を結ひて垂るゝなり。童女の振分髪は、もどをゆはず、放ちたるまゝにて、垂るゝゆゑに、髪の一つに分かるゝを、振分髪とはいふ

なり。萬葉集などに、童女波奈理といふも、此の振分髪のことなるべし〇かた過ぎぬは、肩過ぎぬにて、髪が長くなりたるをいひて、成長せるよしを示したるなり〇君ならずして云々、既にかく髪も長く、年も成長して、おどなになりぬれど、此の髪は、君ならずして、誰れか撫で愛する人のあるべきとなり。さて一首の意は、わらはをち、いづれか長きとくらべ來し、振分髪も肩を過ぎて、垂るゝほよになりぬ。君ならずして、誰れか撫でうつくしむ人あらんとなり。男の贈れると、物は異にて、意は同じく、互にみづからの事をいひて、末に情をいへり

かくいひくゝて、つひに、ほいの如くあひにけり。

(語釋) かくいひくゝとは、此の後も、かやうに、度々、歌の贈答などしてなり〇ほいは、本意の義にて、始より思ひ入れたる如くなるをいふ

さて年頃ふるほどに、女のおやなくなりて、たよりなくなるまゝに。

(語釋) さて年頃ふるほどに云々、古は女の家、男は親すみしけるに、女のおやなく成りぬれば、漸々に、貧しくなりけるなり。殊に此の女のおやは、田舎わたらひしけるなれば、これが死にては、生活のたよりに苦しきとなり

もろどもに、いふかひなくてあらんやはとて、かふちの國、たかやすの郡に、いきかよふ所いできにけり。

(語釋) もろどもには、男女共になり〇いふかひなくて云々は、徒に手を空しく日を暮らさんやの意なり。親のせしやうに、田舎わたらひせんとて、河内の國に行きけるよしなり〇かうちは、河内



なり○たかやすは、高安なり。さて生活のために、田舎わたらひしける間に、河内の國、高安の女を見そめて、通ふやうになれるよしなり。言すくなく、意をこめて、書ける女なり。能く心して、其の意をあやまらぬやうにすべし

さりけれど、此のもとの女、あしとれもへるけしきもなく、出だしたて、やりければ、男、こと心ありて、かゝるにやあらんと思ひうたがひて、

(語釋) さりければ、さありければなり○あしとおもへるけしきもなくは、詞に出だして、怨みいはぬはもとよりにてといふ意を、もの辭にこめたるなり○男云々、あまりに、女の心のうつくしきが故に、男は却りて、他の男に、心をうつせるやと疑ひてなり

せんざいの中にかくれぬて、かのかふちへいぬるかほにて見れば、此の女、いとようけさうじて、うちながめて、

(語釋) せんざいは、前裁にて、庭前に植ゑたる草木をいふ。後園に對していふ語なるべし。庭のうち、草木の蔭などに隠れ居たるなり○いぬるかほは、行くふりなり。かほは顔にて、様子といふ○けさうは、假粧にて、顔つくりするをいふ。夫の見ぬ所にも、身なりをくづさぬが、女のためなみたるよしなり○ながめては、心配して、物れもふさまをいふこと、前に委しくいへり。うちは、例の添へたる言なり

風ふけばおきつしらなみたつた山

よはにや君がひとりこゆるらん

(語釋) おきつしらなみは、沖の白波なり。さて一二の句は、たつ田山といふへかけたる序にて、他意なし○よはは、夜半にて、夜中の意なり○一首のころは、龍田山のやまごえの道はさかしく、晝だにくるしと聞くに、山の此方にて、日くれて、よはにや君が獨りこゆるらん、さすくるしくも、おそろしくも、思ひ給はんが、いとほしとなり。女の情、さもあるべし。但、この歌、しらなみといふは、盜賊を白波といへば、それをこめて、さる恐ろしき處を、夜こゆるが悲しといへるなるべしといふ説もあれど、盜賊の事まで、こめたりといはでも聞てゆべければ、なほ、序とのみ見る方、おたやかなるべし

とよみけるを聞きて、かぎりなく、かなしとれもひて、かふちへも、をさをさ、かよはずなりにけり

(語釋) 歌よむを、前裁の中にて、聞きけるは、昔は、歌をよみては、聲あげて誦ふこともありける故なり○かぎりなくかなしと思ふは、男もなさけ知れるものなりしなり○をさをさは通はずとは、今言にあまり通はずなといふに同じ

さてまれ／＼かの高安にきて見れば、はじめころ、心に／＼もつくりけれ、  
(語釋) 心に／＼は、今言に、れくゆかしくなといはんが如し。さて此の高安の女は、始の中は、心れくゆかしくも思ひたれどとなり

今はうちどけて、髪をかしらにまきあげて、をもながやかなる女の、  
(語釋) 髪をかしらにまきあげて云々、昔は、すべて女は、垂髪なりき。宮中の式に預る宮女、また



は、齊宮などは、髪あげするを禮どしたり。そのゆゑは、髪垂れて、供御などに觸るゝを恐れたるなり。但、それは、美しく擧げゆひて、恭しきさまなり。この頭に巻きあぐるは、賤しく無禮なるさまをいふ。似たる事ながら、大差あり。混ぶべからず。賤しき女は、立ち居ひまなく忙しきにより、背に垂れたるをも、額髪をも、一つに頭に巻きあげて、假りにゆふ事ありき。こゝなるもさやうなり。顔にかゝれる額髪をあぐれば、顔の長く見ゆるものなれば、ながやかなる女といへるなり。手つから、いひかひを取りて、けこのうづはものにもりけるを見て、心うがりてかすなりにけり。

(語釋) いひかひは、飯匙にて、今の杓子なり○けこは、筥子にて、飯もる器をいふ。萬葉にも、家があれば、筥にもる飯をなせあり○心うがりては、其のさまの下賤なる様子を見て、男は心にうしと思ひて、其の後は、行かすなりにけりとなり

さりければ、かの女、やまどのかたを見やりて、

君があたり見つゝを居らん伊駒山

雲なかくしそ雨はふるとも

(語釋) 見つゝををを、助辭なり。古今集の歌に、「ぬれてをゆかん」とあるをに同じ。一首のこゝろは、聞こえたるが如し。但、この歌は、萬葉集に「君があたり見つゝもをらん伊駒山、雲なかくしそ雨はふるとも」とあり。唯二の句のをもをにかへて、記者の加へたるものなり。といひて、見いだすに、からうじて、やまと人こんといへり。よろこびてまつに、

たびく過ぎぬれば、

(語釋) からうじては、今言に、やうやく、又、ヤットなどいはんが如し○やまと人とい、彼の男をいふなり

君こんといひし夜ごと過ぎぬれば

たのまぬもの戀ひつゝをる

(語釋) ものゝは、物ながらの意なり。頼みにはならじと思ひながらも、心にかゝりて、戀ひつゝを居るといふ意なり○一首のこゝろに、來んと聞こえつるに、來ぬ夜の多く過ぎぬれば、今はさるかどづれのあれど、思ひたのまれぬものながら、猶も戀ひしたひつゝ、月日の經ゆくとなり

といひけれど、男すますなりにけり

(語釋) 男すますは、男通はずといはんが如し○此の段、女の心はべの勝れたると、劣れるとの差別を書きわけたり。すべて、此の物語は、男も女も、意はへのあはれにすゞれて、賤しき舉動をなさぬをよしとして、かきたるものなり

(廿三段) むかし男女、かたおなかに住みけり。男みやづかへしにとて、別を惜しみて、ゆきけるまゝに、三とせとさりければ、まちわびたりけるに、又、いとねんころにいひける人に、こよひはあはんとちぎりたりけるに、

(語釋) 評釋にいはいく、日本書紀の孝徳天皇の卷に、有妻妾爲夫被放之日、經年之後、適他恒理、而此前夫三四年後、貪求後夫財物爲己利者甚衆と見えて、前夫の貪るをあしどのたまへるなり。女は



ひとり、世にあり経がたきものなれば、三年の後、異男にあふは、かく古よりとがめなかりき。又、  
 雜令云、雖已成、其夫没落外番、有子五年、無子三年不歸、及逃亡有子三年、無子二年不出者、並聽改  
 嫁、これは、令の二の卷、戸令第八に見えたり。さてこゝなるは、宮仕へしにとて、ゆきたるにて、令  
 のとは異なれども、かゝる御定もある事なれば、三とせの後とは、女のおもへるよしなり。古意に、  
 女をほめて、男をわろしといはれたるは、いみじき言なり。三歳みざりけるも、身を心にまか  
 せぬ宮づかへなればなり。別を惜しみて、行きけるといへるは、男のはかれがたくしたるにて、其  
 の淺からぬ心をおもはば、三年こそすとも、さるやうこそあらめとて、猶、まつべきに、異人にあはん  
 と契りけるは、女のあやまりなりけり。没落外番、又逃亡などの同じ類にはあらず云々とある説を  
 よしとす

彼の男來たりけり。此の戸、あけ給へどたゞきけれど、あけて、歌をなん、よみて  
 出だしりける

(語釋) 戸をあけて、歌をよみて出だせるは、三年こそざりけるを恨み、又、この男を入れては、今夜  
 あはんと契りたる人に逢はん、便あしければ、まづ、歌をよみて、出だせるなり

あら玉の年の三とせをまちわびて

たゞこよひこそにひ枕すれ

(語釋) あら玉は、年の枕詞のまちわびて云々は、待つにせんかたつきて、女の身のよるべなきに、  
 今宵は、異人と、にひ枕するとの意なり○にひ枕は、新枕にて、男女、はじめて逢ふをいふ。さてかく

今夜のさまを明らかに云ひ出でたるは、違なる事にて、思ひめぐらすひまもなく、心おろき田舎の  
 女の、いかにとも体よきさまには、得いはぬよしなり

といひいだしたりければ

梓弓まゆみつき弓とじを経て

わがせしがごとうるはしみせよ

(語釋) こゝも、次の歌も、はじめ二句は、弓をたどへにいへるなり。此の歌は、評釋にいへるが如  
 く、神樂歌の「弓といへばしななきものを梓弓、まゆみつき弓しなこそあるらし」といふ歌を、本哥  
 にして、譯めるなり。此本歌の心は、おしなべて、弓といへば、名にしなくはなきものを、こまか  
 にわけていふ時は、梓弓、まゆみ、つき弓、しなくこそあるなれといふ意なり。たどへ意なるべし。  
 これをとりて、こゝの歌は、夫婦といへば、ひととほりのやうなれども、宮づかへにも出づるほどの  
 事にて、種々のうき事どもを忍びつゝ、年を経て、わがうるはしく、中よくせるやうに、君も又のち  
 の夫に、うるはしくせよといへるなり。さてわが年頃うるはしくして、何事もしのび過さしよし  
 を逃べて、女の心みじかく、異男にあはんと契りたるを、深く怨むるこゝろ見えたり。本歌が、たど  
 へ歌あれば、やがて、たどへに用ひたるなり。されば、返歌も、初二句は、弓をたどへにいへり。照し  
 合はせて見るべし。かくとせば、弓の名を三つまで重ねたる事も聞てえ、此の歌に、女のいたく耻  
 ぢくやみて、深く慕へるにも叶ふべし  
 といひて、いなんとしければ、女



(語釋) と歌を詠みすて、男は立ち去らんとしたりしかば、女は、深く耻ぢてなり  
あづさ弓ひけどひかねどむかしより

心は君によりにしものを

(語釋) 此の歌も、諸説あれど、例の評釋の説よろし。其の大要にいはいはく、さきの歌を承けて、こなたにも、昔より更にもかくにも、心は君によりにしものを、見すて、いなんとし給ふは、うらめしといへるなり。とにもかくにもといふこゝろを、弓にたとへて、ひけを、ひかねといふなり。よるも、弓の縁なり。男のうたに、しなくのうき事ありしよしを、弓のうへにていへるからに、かへしも、げにさやうありし時、とにも、かくにも、心を君によせて、はなれざりしといふことを、又、弓のうへにていへるなり云々

といひけれど、男かへりにけり。女、いどかなしくて。しりにたちて、おひゆけど、えおひつかで、し水のあるところ、ふしにけり。うこなる岩に、およびのちして、かきつけける

(語釋) しりにたちては、うしろに立ちてといふに同じ。あとより逐ひかけたるなり○えおひつかでは、女は、男より足もおろければ、逐ひつく事を得ざりしよしなり○し水のあるところに云々、此の女、逐ひかけ来て、息のたゆれば、水のみんとて、立ちよれるに、即、息きれて、其の所に伏したるなり。さてせん方つきて、指をくひて、其の血して、石に歌を書きたるなり。事のきはめて切なる心さまを、能く書き取りたりといふべし○お指は、たゞ指なり。小指の意にはあらず。宇津保物

語なせに、針にて、指の血を出だしたる事あれど、こゝは、急に女の逐ひ出でたるなれば、針を持つべきにもあらねば、口にて血を出だしたるなるべし

あひ思はでかれぬる人をとゞめかね

わが身は今ぞ消えはてぬめる

(語釋) かれぬるは、離れぬるなり。萬葉にも、離の字を訓せり○とゞめかねは、とゞめ得ずといふ意なり○ぬめるは、今言に、やうすじやといふこゝろなり。かくいふは、まだ消えはてぬほどに、よめる歌なればなり○一首のこゝろは、われは、かくばかり思へども、かなたには、思はで、はなれぬる人を、とゞめ得ずして、我が身は、今、消えはつるやうすじやとなり

とかきて、いたづらになりにけり

(語釋) いたづらになるとは、死ぬるをいふなり

(二十四段)むかし男ありけり。あはしどもいはざりける女の、さすがなりけるがもどに、いひやりける

(語釋) あはしどもいはざりける女の云々は、逢ひもせず、否ともいひ放たず、男の心を惱ます女なり○さすがは、今言に、しかしながらの意なれば、否とも諾ともいはぬのみならず。つれなき中にしかしながら捨て難き情ありげに見ゆるをいふ。すべて、さすがといふは、わるき事の中にて、よき事のあるにつきていふ詞なり

秋の野にさゝわけし朝の袖よりも



あはでぬる夜ずひちまどりける

(語釋) 秋の朝、野の笹わくる袖は、いたく露にぬるゝものなれども、うれよりも、つれなき人にあはでぬる夜は、涙にぬれまゝなり○ひちは、ぬるゝといふに同じ○此の歌は、古今集戀の三にあり。但古今集には、「あはでぬる夜」とあるを、こゝには、あはでぬる夜となほして引きたるなり

いろこのみなる女、かへし

(語釋) いろこのみは、好色の意なり。逢はじともいひ放たずして、男の心を悩ますさまを、前にいひて、此の女の色このみなる事を、いたく知らせたる文なり

みるめなきわが身をうらとしらねばや

かれなであまの足たゆくくる

(語釋) 上の句は、我が身を、みるめなき浦としらねばやと、上下に打ちかへして見るべし。みるめなき浦とは、逢ひ難き身といふことなり。浦は、たゞみるめによれる詞のみなりと心得べし○一首の意は、逢ひがたき我が身と知り給はねばにや、夜ごとに、あしのたゆみに來たり給ふになり。それを、みるめのなき浦に、海人のみるめをかりにくるに譬へたるなり

(廿五段) むかし、男、五條わたりなりける女をええすなりける事と、わびたりける人の、返事に

(語釋) 新釋に、いはく「これは、ある人、男のもとに、君は五條わたりなりける女を、え得ずなり給ひける事かなと、とふらひいへるなり云々○わびたりけるとは、こゝにては、とふらふ事をいふな

り。男の女を得ずして、詫び居るをとふらふ詞なるゆゑに、それをわびたりけるとはいひしなり。たとへば、家の内に、よるこびある時は、嬉しく思ひ居るものなれば、人の訪問するをも、よるこびにくるなぞいふが如し

もろこし船のよりしばかりに

(語釋) おもほえずは、思ひもかけずの義なり○袖に涙のさわくとは、涙のふかき事をいふ。さわくは、浪によせたるなり○もろこし船は、唐船なり○よりしばかりは、よりしほどといふ詞なり。よりしのは、過去の詞なり。さて唐船のよるは、大湊にて、ことに、浪もさわくことなれば、泪のふかきよしに寄せたるなり○彼のとふらひし人を、唐船に見なし、心のうれしさを、感涙のふかきよしにいひなしたるなり

(廿六段) むかし、男、女のもとに、ひと夜いきて、又もいかすなりければ、女のおやはらたちて、手あらふ所に、ぬきすをとりて、なげすてければ、

(語釋) ひと夜いきて云々は、男は女の許へ通ひ初むれば、三夜は、必、つゝけて通ふがならはしなり。然るに、一夜ぎりにて、通はずなりぬれば、人目も見ぐるしく、又、かゝるうはきなる男に逢ひそめたるは、女の考の至らざるゆゑなれば、女の親が、立腹したるよしなり○手あらふ所に云々は、朝、むすめの起きて、手洗ふ所に、親の來て、昨夜も、男の見えざりきとて、立腹せるなり○ぬきすは、貫簀なり。盥の上に掛くる簀にて、手洗ふ水の外へ飛び散らぬ用意のものなり。此の盥の上の簀



を投げたるは、顔洗ふ時は、殊に昨夜の事を思ひ起すものなればなるべし  
たらひの水に、なくかげの見えけるを、みづから

(語釋) 盥は、水を手にそゝぎかくる時、したに置きて、水をうくる器をいふ。○なくかげの云々、  
簀は、竹を編みたるものなり。親が、ろの實を投げすてたれば、女の哭く影の、盥にうつれるなり。○  
みづからは、娘をいふ。上には、親の事をいへるが故に、こゝはことさらに、娘の歌なりとことわる  
なり

我ばかりものおもふ人はまたもあらじ

と思へば水のまたにもありけり

(語釋) 我が顔の盥にうつれるを、かくれるかに、いひなしたる、情の切なるさま想ふべし。此の歌  
は、語も大意も、聞てえたるが如し

とよめりけるを、彼のこざりける男、きゝて

(語釋) こざりける男は、一夜のみにて、來すなりたる前の男をいふ  
みな口にわれやみゆらんかはづと

水のそにてもろ聲になく

(語釋) みなくちは、水口にて、田へ水を塞き入るゝ口をいふ。盥の水は、水口の水のたまれるに似  
たれば、たとへていふ。○此の歌は、心なき蛙さへ、水の底にて、ひとりはなかず、もろ聲に鳴くなり。  
まして、我が心は、そなたにゆきて、君と共になくなれば、其のわが影の、たらひの水に見ゆるにや

あらんどの意なり

(廿七段) むかし、色このみなりける女、出で、いじければ、いふかひなくて、男

(語釋) いふかひなくては、今言に「フガイナイ」なせいはんが如し。女は、顔、好色のものにて、男  
を厭ひて、出で、行きしに、男は之を悟らず、かへりて、それを慕ひて、歌を贈るさまなり。其の男  
の心を、即「いふかひなし」とはいひしなり

などてかくあひかたみともなりぬらん

水もらさじとちぎりしものを

(語釋) あひかたみは、逢ひ難きを、かたみといひかけて、かたみとなれば、汲める水は、もりてあ  
どなくなるを以て、詞をしたてたるなり。さてかたみは、かたまともいふ。竹籠の事なり。○一首の意  
は、なに故に、かく逢ひがたくはなりぬらん。變らじと契りしものを、其の契を、女の惚れはせまじ  
きを、誠にあやしき事よと、獨りとする意なり

(廿八段) むかし、東宮の女御の御かたの花の賀に、めしあげられたりけるに、近  
衛づかさなりける人

(語釋) 東宮は、春宮とも書く。皇太子の御事なり。こゝは、東宮の御母女御を申すなり。女御は、中  
宮に次ぐ女官にて、今の権典侍などの如し。○御かたとは、女御がたの御人の賀の義なり。○花の賀と  
は、花の頃ある賀をいふ。○東宮の女御云々、近衛づかさなりける人とは、暗に二條の后と、業平朝臣  
との事をほのめかしたるなり



花にあかぬなげきはいつもせしかども

けふのこよひに似る時はなし

(語釋) 花を賞して、飽かぬ歎息は、常にすれど、今日の今宵は、御賀のわざのめでたく、おもしろさも添へば、花にあかぬなげき、格別なりとの意なり。さて裏には、彼の女御を慕ひ奉れども、及ばぬ事よど、歎息するよしを、含めたるなり

(廿九段) むかし、男、はつかなりける女のもとに

(語釋) はつかなりける女とは、男は度々逢ひたく思へど、女のいと稀れに、僅にのみ逢ふよしなり。はつかは、わつかともいふ。僅の字の義なり  
あふことは玉の緒ばかりおもほえて

つらきことろのながく見ゆるらん

(語釋) 玉の緒ばかりとは、玉の緒の短きといふより轉りて、暫時などの意に用ふ。こゝも然り○一首の意は、逢ふ事は、玉の緒の短きが如くなるに、いかなれば、我につらき君が心の長く見ゆる事ならんとなり。逢ふ事の短ければ、それに應じて、つらき心も短かくあるべきに、例のおろかに詠み出でたるは、却りて情の切に見ゆるなり

(三十段) むかし、男、宮のうちにて、あるごたちのつぼねのまへをわたるに

(語釋) 宮のうちとは、内裏をいふ○ごたちは、御孫また御等の字をあつ。婦人の尊稱なり。こゝは、宮中にて、よき女房をいふなり○つぼねは、局なり。部屋をいふ○わたるは、通ることなり

何のあたにかおもひけん、よしや、草葉のならんさが見んといひたれば、男

(語釋) 此處も、諸説あれど、新釋の説よろしからん。其の大意にいはいはく、局の前を男のわたるを見て、うちなる女の、女のあたかたきにか思ひけん。しかくいへるなり。此のいへる詞の意は、我を惚れて、何とも思はぬ男は、にくけれど、よしや、腹たてずして、草葉のはては、霜かゝるゝやうにならん。男のありさまを見んといへるなり。草葉のしげると見れば、ほどなくかるゝを、人の早くかどろかるに譬へたるなり。さがは、アリサマといふ意なり。祥の字の義にあらず云々と、此の處、こゝに詞を答きたれば、誠に解しがたけれど、暫くこの説に據るべし

つみもなき人をうけへばわすれ草

おのがうへにぞおふといふなる

(語釋) うけへは、咒祖の意にて、人の上を祈りて、あしくなす事をいふ。もとは、よきにもあしきにもいへど、此の頃は、既にあしき方にのみいへり○おのが上とは、巳が身の上の意なり。さて惚草の巳がうへにおふとは、人に惚らるゝをいふなり○一首の意は、罪もなき人をいのりて、あしくなさんどすれば、却りて、おのが身の上にあしき事ありとの意なり

といふを、ねたう女もおもひけり

(語釋) ねたうは、嫉くの音便なり。「罪もなき云々」の歌よみけるを聞きて、女も嫉く思ひけりとなり

(卅一段) むかし、男、ものいひたる女に、年ころありて



(語釋) ものいひける女とは、たゞ物を言ひたるのみならず、逢ひたる事のあるをいふ  
いにしへのしづのをたまきくりかへし

むかしを今になすよしもがな

(語釋) しづのをたまきは、倭文の麻環なり。倭文は、わが國にて、太古より織りたる文ある布なり。その倭文を織る料の卷子を、麻環といふ。續麻にて外を圍く、内を虚に巻きたるものなり。さていにしへのしづのをたまきは、繰りかへしといはん料の序なり○がなは、願ふ意の辭なり。がは、必、漏音によむべし昔あひたる女に、中絶えて、年へてのちに、戀ひしくおもひて、又、あひたきよしをいひたる歌なり

といへりけれど、何とおもはずやありけん

(語釋) 中絶したる男なれば、今更に、あひたきよしおとも、頼むべきにあらねば、女の何とも思はずやありけん、記者の詞なり

(卅二段) むかし、男、津の國、うばらの郡に、住みける女にかよひける。此のたび、かへりなば、又はこしと思へるけしきを見て、女のうらみたれば、男

(語釋) 津の國は、攝津の國なり。うばらの郡は、和名抄に、攝津國、免原とある是なり○かよひけるにて、句を切り、下にがといふ辭を入れて心得べし。外は、聞こえたるが如し  
あしべよりみちくるしほのいやましに

君にこゝろをおもひますかな

(語釋) あしべは、蘆邊にて、昔は海邊に生ずるものなれば、磯にしほのみちくるを、昔邊よりといふなり。こゝのよりは、にといふに同じ○いやましには、愈増の義にて、見るく多くなる事なり○かかなは、歎息の辭なり。さるは、かくまでも、思ふかくなるものかなといひて、心かはりするならんと、女の疑ひ怨むは、僻言を諷する意を、ふくめたるなり○一首の意は、昔邊にみちくる鹽の、見るがうちに、いやましに、ますことく、君に心を思ひますかなとなり

かへし  
こもり江におもふこゝろをいかでかは

舟さすをのさとして知るへき

(語釋) こもり江は、山陰にこもりたる江なるべし○さとして、推し測りての意なり○君が心の中に、こめたる思は、いかでか、推量して、知ることを得べきといふ縁に、舟さすをのさとして、いへるなるべし

おなか人のことばにては、よしや、あしや

(語釋) 田舎人の歌としては、よしと覺ゆといふ意なり。しかし、實に此の歌は、記者のよみたるなれば、よしとも定めず、あしやといふ詞を添へたるなり

(卅三段) むかし、男、つれなかりける人のもとに

いへばえにいばねばむねのさわがれて

心ひとつになげくころかな



(語釋) えには、不得なり。万葉に、不知をシヲニといふが如く、不を二といふは、古の一格なり。今言「いはんとすれば、言ひ得ず」の義なり○一首の意は、人のつれなきを、深く恨みて、いはんとすれば、詞には言ひ得ず。又、ろのよしいはねば、胸の静まる時なく、心一つに歎く比かなど、歎息したるなり

おもひ／＼て、いへるなるべし

(語釋) かく切なる歌を贈るは、容易の事にあらず。思案に思案を重ねて、いへるなるべしと、記者が、男の心中を推量して、いへるなり

卅四段) むかし、男、心にもあらで、たえたる人のもとに

(語釋) 心にもあらでとは、男の心の變れるはあらで、故ありて絶えたるをいふなるべし

玉の緒をあわをによりにてむすべし

絶えての後もあはんどぞおもふ

(語釋) あわをは、あわといふ結の名なり。これは、能くよりとのへて、結ぶなり○一首のこゝろは、玉の緒を、能くよりとのへて、あわといふ結にむすび堅めたるが如き二人の中なれば、たとひ、今は故ありて、中絶せるも、つひには、又、もとの如く逢はんと思ふなり

卅五段) むかし、男、わずれぬるなめりごとひごとしける、女のもとに

(語釋) とひごとは、問言なり。久しく音信し給はぬは、忘れ給ひしにかと、女のいひおこせたるに、男の答へたるよしなり

谷せばみ峯まではへる玉かつら

絶えんと人をわがおもはなくに

(語釋) 谷せばみは、谷の狭ばさになり○玉かつらは、玉葛にて、葛の事なり○おもはなくには、思はぬにといふに同じ○一首の意は、谷がせばさに、峯まではひのぼれる玉葛の、長くつゝきたるが如く、行末ながく通はんと、われは思へるに、忘れたるなるべしと、問言し給ふは、却りて、そなたの情薄きに似たりと、餘情をもたせるなり○さて、此の歌は、万葉集、十四の巻に「谷せばみ峰にはひたる玉かつら、たえんのこゝろわがもはなくに」とあるを、少しなほして、例の記者がつくりたるなり

卅六段) むかし、男、いろこのみなりける女にあへりけり。うしろめたくやおも

ひけん

(語釋) うしろめたしは、今言に、「心モトナシ」又「心ニカ、ル」なせいふに同じ。好色なる女に逢ひたるなれば、男は不安心にや思ひけん。左の歌を贈れりと、記者の詞なり

われならでし紐とくなあさがほの

夕かげまたぬ花にはありとも

(語釋) あさがほは、朝の間だけ、花さきて、夕日のかげもまたで、萎むものなり。さるかけりやすき花にはあれど、我ならでは、下紐とくことなかれとなり。これにて、一首の意明らかなり○毛辭などに、女を舜にたとへたるは、ほめたる方なれど、こゝは、かはりやすきをたとへたるなり



かへし

ふたりして結びし紐をひとりして

あひ見るまではどかじとぞおもふ

(語釋) 歌のこゝろ隠れたる所。し。但、萬葉集に、「二人して結びしひもを一人して、われはとき見ただだにあふまでは」とあり。それをつくりかへて、こゝに似つかはしくこしらへて、返歌となせるなり。この例、前にも多し

(卅七段) むかし、紀の有常、ものへいきて、久しうかへらざりけるに、いひやる

(語釋) 紀の有常は、前にいへり〇ものへいきてとは、其の事を容きて、何處とも名をあげていふ言なり。「物する」などのものと同じ。其處へゆくを、ものへゆくといふなり〇親友なる、有常が、外へゆきて、久しく歸らねば、戀ひしさに堪へずして、いひやりたりとなり

君によりおもひならひぬ世の中の

人はこれをや戀といふらん

(語釋) この歌も明らかなり。君をこひ慕ひて、はじめて思ひならひぬ。世の中の人、かやうの事をや、戀といふなるべし

かへし

なればねば世の人ごとく何をかも

戀とはいふと問ひし我しも

(語釋) ならばねばは、習はねばなり〇何をかもは、何をかマアの意也〇我しものしもは、助辭なり

り。〇一首のこゝろは、前の歌に、「世の中の人、これをやこひといふらん」といふを承けて、世の中の人ごとく、戀々といふは如何なる事をいふにかと、今までは、習はねば、人に問ひしわれも、君が戀の師となりける事となり

(卅八段) むかし、西院のみかどと申すみかどおはしましけり。

(語釋) 西院のみかどは、淳和天皇を申す。西院は、また、淳和院ともいふ。四條の北、大宮の東なり

其の帝のみこに、たかいかと申すいませかりけり。

(語釋) たかいかは、崇子内親王にて、淳和天皇の御女なり。此のみこは、承和十五年五月十五日に、御年十九にて、みまかり給へるよし、續日本後記に見えたり。御母は、橘船子、正四位上清野の女なり〇いませかりけりとは、おはしましけりといふに同じ

そのみこうせたまひて、おほんはふりの夜、其の宮の隣なりける男、御はふり見んとて、女車にあひのりて、出でたりけり。

(語釋) おほんはふりは、御葬なり。其の御葬送の作法を見んとてなり〇女車にあひのるとは、男が女に同車したるなり。これは、かくれて見に出づるさまなり

いとひささう、わて出で奉らず。うちなげきて、やみぬべかりけるあひだに、

(語釋) 眞淵翁の説に、輦車を挽きて出づるが、いとおそきを、待わびつゝ、歎息して、今は見ずし



てかへらんとする間になりといはれたるが如し

あめの志たの色ごのみ、源のいたるといふ人、これも、もの見るに

(語釋) あめのしたの色ごのみとは、天下第一の好色家といふ意なり。この詞、他書にもをほし○源の至とは、何人とも知りがたし○もの見るには、前に御葬見んとてとあれば、こゝは、たゞ、かくいひて、やはり、御葬を見ることを知らせたる文なり

此の車を、女車と見て、よりきて、とかくなまめくあひだに、かのいたる、螢をとりて、車にいたりけるを、

(語釋) とくなまめくとは、此の車は、女車なれば、好色家のつねとして、いろくど、なまめかしきさまして、懸想せりととなり

車なりける人、此のほたるの、ともす火にや見ゆらんとおもひて、けちなんとす。さてのれる男のよめる

(語釋) けちとは、消すといふに同じ○車なりける人とは、女をいふなり。何となれば、下に「男のよめる」とありて、殊に男のことを擧げたればなり

いで、いなばかぎりなるべしともしつき

年へぬるかどなく聲をきけ

(語釋) いで、いなばは、御葬の御車を挽き出でなば、これが、かぎりの御門出なるべし。身の火つきて、終りたまふも、齡、へたまふものか、かく弱くおはするを、人々の哭音を聞けど、なまめく

至に示したるなり○ともしつきは、燈盡にて、皇女の死に給ひしをいふ○年へぬるかとは、年へぬるかはの意にて、御年経たまひて、御老年のことならば、止むを得されども、いまだ、二十にも足り給はずして、かくれ給ひぬる事なれば、人々の悲しみ歎く聲を聞け、かゝる折に、女車を見て、けさうしかゝるは、折を知らざる事よとの意を含めたるなり

かのいたるかへし

いとあはれなくぞ聞こゆるともし火の

きゆるものとも我はしらすな

(語釋) 前の「なく聲を聞け」とあるを承けて、まことに、悲しく歎く聲を聞こゆる。さてともしつきと、君はいへど、佛説にも、常住不滅と説けば、きえはつるものとも、我はしらすとなり○なは、助辭なり○古意には、此の歌を脱したり

どなんかへしたりける。天のしたの色ごのみの歌にては、なほ予ありける。

(語釋) なほ予ありけるとは、尋常にてありけりとなり。なほは、なほくしなさいかと同じ。尋常といふ義なり。此の返歌、天下第一の好色家のさまにも似ず、なみくの、世の中のみさまとてれる人の如くに覺ゆとなり

「至は順が祖父なり。みこの本意なし」

此のことなき本をよしとす。後への書き入れたるものなるべし

(卅九段) むかし、わかきをのこけしうはあらぬ女をおもひけり。



(語釋) けしうはあらぬ云々、けしうは、異しくの音便にて、わろくもなしといふ義なり。勝れてよしといふ意にはあらず

さかしらするおやありて、おもひもぞつくとて、此の女をほかへおひやらんとす。

(語釋) さかしらする親とて、かしてだてする親の意なり。今言に、リコウブリスルの意なり。其のゆゑは、此の若き男が、今かたらはんとする女を、逐ひやる親なれば、かくいへるなり。こゝによりて見れば、此のけしうはあらぬ女とあるは、此の男の家に、めしつかふ女なりしなり○おもひもつゝするとは、かくておかば、思ひつきて、離れがたくやならんと、行末を危くおもふさまなり

さこそいへ、まだれひやらす。人の子なれば、心のいきほひなくて、えとゝめず。女もいやしければ、すまふちからなし。さるあひだに、おもひは、いやまさりにまざる。

(語釋) さこそいへは、今言に、サウハイヘドなといはんが如し○まだおひやらすとは、逐ひやる親とはいへ、また事のさまを見て、そのまゝにおくよしなり○人の子とは、いまだ、我が代にはあらで、父が家事をとりをる事を知らせたる女なり○心のいきほひなくて云々、かく家事萬端、父の賄ふ事なれば、愛情ふかけれど、女をどゝむる勢力なしとなり○女もいやしければとは、下婢なることを知らせたるべし○すまふは、負けじと争ふことをいふ。こゝは、家を出でじと、踏みこらへん力なしとの意なり○さるあひだに云々、女を逐ひやりもせず、父が事の上しを見てをる間に

なり。すべて、他人に制せらるゝ時は、殊にまさるが、戀のならひなればなり

にはかに、おや、此の女をおひうつ。男、ちのなみだをながせども、とゝむるよしなし。おて出で、いぬ。

(語釋) ちのなみだは、いたくなげきたるをいふ○おて出で、いぬとは、親めしつかふ人にいひつけて、其の女をつれて出でゆかしめしなり。其のゆゑは、次の文に「かへる人につけて」とあるによりて知られたり

女、かへる人につけて

(語釋) おて出で、いにし人の、かへるにつけて、男のもとへ、女が歌おれくれるなり  
いづこまでおくりはじつと人とぞいふ

あかぬわかれのなみだ川まで

(語釋) なみだ川は、かゝる名の川あるにはあらねど、飽かぬわかれの、涙を川のやうにながして、我がなげき居るよしを知らせたる意なり○一首のこゝろは、何處まで、おくりたるぞと、思ふ男の問ひたらば、涙川の邊まで、送りてかへれりぞ、答へよとなり

男、なくなくよめる

(語釋) なくなくは、泣きながらなり。送れるものゝ、かへり来て、右のうたを語るを聞きて、あはれさに堪へず、泣くなく詠めるよしなり

いとひてはたれかわかれのかたからん



ありしにまさるけふはかなしも

(語釋) 新釋にいはく、此の歌は、互にいとひては、たれか別のかたからん。わかれやすかるべし。かくおもひかはして、いとほぬ中は、わかれのかたければ、さきに、親のおひやらんとしても、まだおひやらすありし時にまさりて、今日はかなしもといへるこゝろなり。此のものは、なげきのこゝろをそへたり云々。此の説よろし。諸説、おほかた、解き得ず

とよみて、たえいりければ、おやあわてにけり。なほざりにおもひてころいひしか。いとかくしもあらじとおもふに、まことに、たえいりたれば、まどひて、願などたてたり

(語釋) なほざりとは、尋常、又、ひと、ほりなどの義なり○いひしかは、諫めいひしかにて、親は、ひと、ほりの事と思ひ、いひけりとなり○かくしもあらじとは、かうはあらじなり。絶え入るやうの事は、あらじと思ひしに、誠に絶え入りぬとなり○願など云々、神佛にやわんかけて、いかで、此の人、たすけ給へと祈りきとなり

けふの入相ばかりに、たえいりて、又の日の、いぬの時ばかりになん、からうじて、いき出でたりける。昔のわか人は、さるすけるものおもひをなんしける。今の翁、まさになんや

(語釋) 入相は、日没の比をいふ○からうじては、今言に、ヤットなど譯すべし○昔のわか人は云々、記者の評なり。凡、わかき人は、ものを深くおもひします、心のうつりゆくものなれど、昔は、人

の情ふかかりしかば、さるすけるものおもひをなんしける。今の世は、人情、おのづから、あさければ、深くものを思ふ翁といへども、まさに、爲なんやは、しはせじとの意なり

(四十段) むかし、女はらから、ふたりありけり。ひとりはいやしき男のまづしき、ひとりはいてなる男のどくあるもちたりけり

(語釋) はらからは、同胞にて、こゝは姉妹をいふ○まづしきの下に、「持ち」といふ意を合せて見るべし○あてなるとは、貴人をいふ。あては、上品などの意なること、前にいへり○どくは、徳の意なれど、中古の書には、金銀財寶に富みたるを「どくあり」といへり。こゝも然り

いやしき男もたる、しはすのつどもりに、うへのきぬをあらひて、手づから、はりけり。こゝろさしはいたしけれど、さるいやしきわざもならはざりければ、うへのきぬの、かたをはりやりてけり。

(語釋) もたるは、持ちたるなり。此の下に、がの辭を加へて、見るべし○しはすのつどもりは、十二月の晦日なり。元日の用意に、袍を洗ひたるなるべし○うへのきぬは、和名抄に、袍(和名宇倍乃岐沼)一名朝服著襦之袷衣也とあり。手づから洗ふは、貧にして、召使もなきよしなり○こゝろさしはいたしてとは、かれこれと、心配はするけれども、もと、賤しき生ひたちにあらねば、かゝる賤しきわざになれず、あやまちて、袍のかたを破りきとなり○やるは、破るの古語なり

せんかたもなくて、たゞ、なきになきけり

(語釋) たゞなきになきけりは、極めてせん方なきよしを、あらはせる文なり。外の事は、何もせ



す、ナイテバカリ居ツタとなり。明日の料にも思ひし、唯、ひとつの袍を破りたるなれば、まことに、かなしかりぬべきわざなり

これを、かのあてなる男きよて、いと心ぐるしかりければ、いときよらなる、ろうさりのうへのきぬを、たゞかた時に見いで、やるとて

(語釋) 心ぐるしかりければとは、今言に、氣の毒なりければなほいはんが如し○ろうさうは、縁袵の音を、なだらかにいへるなり。さて、この縁袵は、六位の人のきる袍なり○たゞかた時に見いで、云々は、彼の十二月の晦日のことにて、今は、明日の料なれば、いといそぐべきを思ひやれる事と、又、此の贈れる家には、かゝる物も、かねて、設けてありける富人なる事とを、知らせたる文なり  
むらさきの色とき時はめもはるに

野なる草木ぞわかれざりける

(語釋) 拾穂抄に、紫を女にたとへたり。寵のふかき時は、うのゆかりまでも、あはれに思ふとなり。野なる草木とは、紫のゆかりと見れば、いづれも、ひつまじとなり。めもはるは、目も遙かなるなり。又云、妻を大切におもふゆゑに、其のゆかりまで、あはれとおもふなれば、こゝろくるしき事を、聞きすゞしがたさに、此の袍をまゐらすとなりといへり。此の説にて、大意聞てえたり○又、古意に、此の歌は、古今集に妻のおとうとを持ちて侍りける人に、うへの衣をおくるとて、よみてやりける。業平朝臣とはしがきて、歌は右にたがはず。これは中將の妻の妹を妻として在りける男も、共に紫着るべき人にて、むらさきの袍をおくるゆゑに、歌に紫のよみて、下は、其の紫草のね

ある、同じ野の草木をあげて、皆ながらうつくしまるゝにたとへたるのみなり、云々といはれたり。合はせ見て、うのこゝろをささるべきなり

むらさきの、こゝろなるべし

(語釋) これは、古今集に、よみ人しらす。「むらさきの一もとゆゑにむらさし野の、草はみなからあはれとぞ見る」といふなり。この歌を零きて、引きたるなり。さて前の歌をたしかに知らぬよしに取りなして、むらさし野の歌のこゝろなるべしと、記者の釋したるなり。さてこの歌の意は、みなからは、皆ながらなり。大意は、一本の紫あるがゆゑに、廣き野の草木まで、皆、うつくしまるゝ心地すこのこゝろなり。一本は、わざとせまくいひて、いとひろきに對せるのみなり

(四十一段) むかし、男、いろこのみとしるゝ、女をあひしれり。されど、にくゝはたあらざりけり。

(語釋) 色このみとしるゝは、好色の女とは知りながらの意なり○あひしれりは、相互に知りあふにて、なじみになれる意なり○されどにくゝ云々は、好色なるは、かはりやすく、あしけれど、又、にくからぬ所もありとの意なり○はたは、諸説あれど、ま赤の義に解して、難なかるべし。但、又、といふよりは、すこし軽く用ふる例なり

しばしば、いきければ、なほ、いとうしろめたく、ざりとて、いかで、はた、えあるまじかりける中なりければ、



(語釋) なほは、今言に、ヤツバリの意、うしろめたきは、心もとなく、不安心なるをいふ。屢、連は、女、女の心がはりするわけもなく、さては、不安心なる事もなき筈なれど、やはり、不安心に思ふは、たのみ難く見ゆる女なればなり、○さりとて云々、さりとては、然しながらなといはんが如し。屢、かよへど猶不安心に思ふほどの女ならば、通ふことを止むべきに、然しながら、思ひきる間からにもあらざりければの意なり○いかではたえあるまじければ、行かでも亦あることを得ざればの意に心得べし。はたの語釋は、前に委し

ふつか、三日ばかり、さほる事ありて、えいかでなん

(語釋) 二日三日ばかり用事にさへられて、行く事を得ずとなり、しばく通ひても、女の心のかはらん事を心配せるに、まして、二日三日ゆかぬ事なれば、使をやりて、歌をおくり、いかに返事する予と試みたるなり

出で、こしあどだれいまだかはらじを

たがかよひちと今はなるらん

(語釋) 出で、こしは、男が女の家をなり。すなはち、出で、歸り來し、我が足だに、いまだ、消えずあらんを、うなはたは、心かはりて、異男を通はし給ふべければ、誰が通路と、今はなるらんとの意なり

ものうたがはしさに、よめるなりけり

(語釋) 記者の詞なり。この歌をおくれるは、女の心の、まことに、あだに見ゆるがゆゑに、二日三

日のほとに、變りやせんとてなりと、おくれるよしを釋したるなり

(四十二段) むかし、かやのみこと申すみこおはしましけり。そのみこ、女をおぼしめして、いとかしこく、めぐみつかうたまひけり。

(語釋) 賀陽親王は、桓武天皇、第七の皇子にて、齊衡二年に、三品より二品に進み給ひき○女をおぼしめしとは、女に御心をかけ給ふをいふ○かしこくは、能くといふ意に心得てよろし○つかうはつかひの音便なり。女に御心とやめ給ひて、よく恵みつかひ給ふゆゑに、よき女の、あまた、参りさひらふ意をこめたる文なり

いとなまめきてありけるを、わかき人は、ゆるさざりけり。

(語釋) いとなまめきてとは、大勢つかひ奉る女の中に、殊に勝れて、艶麗なる女をいふ。其の殊に勝れたる若き男は、ゆるさずして、彼是と言ひ寄りきとなり、

われのみと思ひけるを、又、人き、つけて、文やるとて

(語釋) 通ふ男の、我ひとりと思ひたるを、是よりはやく言ひかはしたる男のありて、其の男が、我のみと思ひ居る男の事を聞きつけて、うらみの文やるなり。これは、一人の女に、二人の男の言ひよるなり。古意に、一人の女に、三人通ふなりといはれたるは、いかゞ

ほど、ぎすのかたをつくりて

(語釋) 文やるとて、時鳥のかたをつくりて、女にそへたるなり。さるは、女を子規によろへたる歌、文の中に、かきてあるゆゑなり。是、古の風流のわざなりと、新釋にいへるにて、明らかなり



ほど、ぎすながなく里のあまたあれば

猶うとまれぬおもふものから

(語釋) なほうとまれぬは、やはらうとまるゝといふ意なり。此の歌は、五四と、句を顛倒して、意をとるべし。子規よ、汝が鳴く里のあまたあれば、なつかしく思ふものながら、猶、うとまるといふ意なり。是は古今集の夏の歌にて、たゞ、子規のうへのみなるを、こゝにかくはしがきを作りて、人々に心かよはする女にたとへたり

といへり。この女、けしきをとりて

(語釋) けしきをとるとは、今言に、機嫌をとるといはんが如し。男の機嫌を女のとるなり  
名のみたつしでのたをさはけさぞなく

いほりあまたにうとまれぬれば

(語釋) しでのたをさとは、郭公ホトトギスの異名なり。賤の田長の義、勸農の意にて、鳴く鳥なれば、名づくといふ。○名のみたつは、子規は、あまたの里を鳴きわたるといふ。名のみたちたるにて、實はさにあらず。あまたの人にうとまれぬれば、かなしさ、今やなくといへるなり。さて其の裏の心は、又、異人にもいふやうにのたまへど、さやうの身の上ならず、君にうとまれし悲しさにこそなげとなり。下の句に、あまたに疎まれぬればといひて、君に疎まれしかなしさになくといふことを、含めたるなり。○いほりは、田長といふより、其の人の住む家の多きを、詞の縁にいへるのみなり  
時はさつきになんありける。男かへし

(語釋) さつきは、陰曆五月なり。時をかきたるは、歌の中の郭公をたすくるのみ。是、記者の詞なり

いほりおほきしでの田長はなほたのむ

わがすむ里に聲したえずば

(語釋) 前の歌を承けて、よめるなり。一首の意は、此處、彼處に、鳴きわたる子規は、うとまされれど、我が住む里に聲たえずば、やはら、たのみにすべしとなり、「田長は」の下に「うとまされければ」といふ詞を加へて意をとるべし

(四十三段) むかし、男ありけり。あがたへゆく人に、うまのはなむけせんとして、よびたりけるに。

(語釋) あがたへゆくとは、京より任國へ行くことをいふ。○うまのはなむけとは、馬の鼻向にて、もと、旅ゆく人の、馬の鼻をうなたへ向けて、見おくるより出でたる語なり。それよりうつりては、たゞ、饒別する事にも用ふ

うとき人あらざりければ、家どうじして、盃さゝせて、

(語釋) うとき人にしのしは、助辭なり。親しき中なりければ、妻まで出だして。離別の盃さゝせりとなり。○家どうじは、家いへ主ぬしを音便にいへるなり。戸は家なり。じは主の畧にて。一家の内をつかさどる主婦をいふなり

女のさうぞくかつけんすとす。主の男よみて、裳のこしらゆひつけさす。



(語釋) かつけは、纏頭の意なり。こゝは、かつがせんの意にて、たくらんとすの意なり○さすは、妻につけさするなり○さてかやうにかけけるは、あるじの男が、妻にかはりて、よめる歌なることを知らせたる文のさまなり

出で、ゆく君がためにとぬきつれば

我さへもなくなりぬべきかな

(語釋) もなくは、裳なくと、喪なくとを兼ねたり。喪とは、すべて、よからぬ事をいふ詞なり○一首の意は、君がために、我が裳をぬぎたれば、裳のなくなりたりといふが、詞の上にて、裏の心は、君が出發を祝ひて、我が身まで、禱事なくなりぬる事よとの意なり。事もなきさまによみて、意ふかし。味はひて知るべし

此の歌は、あるが中に、おもしろければ、こゝろとよめてよまずば、腹にふかきあぢはひもいでこじ

(語釋) 右の歌は、深く意を含めたる歌なれば、注意して、解せずば、味なからんと、記者の釋しせるなり。さて此の詞なき本もあり。それもあしからず

(四十四段)むかし、男ありけり。人のむすめの、かしづく、いかで、此の男にものいはんと思ひけり。うち出でんことかたくやありけん

(語釋) かしづくは、恐付カシヅクにて、畏れ敬ひて、大切にする意なり。さてかしづく人の娘の義にて、大切にする人の娘の意なり○いかで云々は、今言に、ドウツツして、此の男にあはんと思へど、娘心には

づかしくて、いひ出で難くやありけんとなり。さて心の中に、思のむすば、れて、いはゆる、戀の病どなれるよしなり

ものやみになりて、とぬべき時に、かくこそ思ひしかといひけるを、おやまゝつけて、なくなく、つげたりければ

(語釋) ものやみとは、何病ともなく、煩ふをいふ。乃、氣鬱病なり○かくこそ思ひしかとは、死ぬべき時になり。娘がれのれの病氣は、彼の男を慕ひしたために、かくなりけるなりと、側の下婢などに語りけるを、親の聞きつけたるなり○なくなくつぐるとは、親は娘にさる事ありきども、つゆ知らずして、かく今はの時になれるが悲しく思ひつゝ、告ぐるよしなり

まどひ來たりければ、死にければ、つれく〜と、こもりをりけり

(語釋) まどひ來たりとは、娘の息のある間に、一目あはんとて、足をそらに、飛びくるさまをいふなり○かく急ぎ來たれど、かひなかりしかば、つれく〜となす事もなく、さびしく思にこもりきとの意なり

時は、みな月のつごもり、いとあつきころほひに、よひはあそびをりて、夜ふけてやゝすゞしき風吹きけり。螢たかくとびあがる、此の男ふせりて

(語釋) みな月は、陰曆六月をいふ○つごもりは、晦日をいふ、月ゴモリの義なりとぞ○あろびは、管絃歌舞の類をいふ○よひは云々は、宵の間は、柩の前にて、笛ふき、琴ひきなどして、遊びをるをいふ。人の死になる時に、管絃歌舞するは、我が國、古來の風俗なり。今も神葬に、音楽あるは、此の



遺風なるべし

とら螢雲のうへをいでしぬべくは

秋風ふくとかりにつげこせ

(語釋) つげこせは、告げよと願ふ意なり。雁は、秋風にさらはれてくるものなるに、今夜かけて涼しさの、はや秋風の吹きたちたる心地すれば、雁につげこせと、螢にあつらふるなり。臆断に、もし魂は冥漠に歸するものなれば、螢の高く飛びあがるにつけて、魂にひとたは歸りこと告げよといふ心を、雁は春かへりても、秋は又來るものなれば、よろへて雁につげこせとよめるにや。此の男みせりてといふには、此の意もあらんやうに覺ゆといへり。雲のうへまでいぬべくはとあるを思ふに、實に雁によろへて、魂にかへりてといふ意ある歌なるべきか

くれがたき夏の日ぐらしながむれば

そのこと、なくものぢかなしき

(語釋) くれがたきとは、夏の日は長きに、殊に前文にある如く、「つれく」ともりたる「なれば」、いへるなり○ながむとは、今は眺望の義にのみいへど、古は物おもふさまをいふ言なり○ものぢかなしきは、何となく悲しきをいふこと、前にいへるが如し○一首の意は、相親しむし女にあらねば、性事を思ひ出で、彼是と悲しきふしはなければ、我をこひて死にたる事なれば、その心のいとほしさに、夏の日の日ぐらし、思ひつゝけて、何となく悲しとなり

(四十五段) むかし、男いどうるはしき友ありけり。かた時さらす、あひ思ひける

を、人の國へいきけるを、いとあはれとおもひて、わかれけり。月日經て、おこせたる文に。

(語釋) うるはしき友とは、親友のことなり○あひ思ひけるをのをは、がの意に心得べし○人の國とは、他國をいふ。こゝは、京都の人より、他國をいふなれば、田舎をさしたるなり○いとあはれとは、今言に、甚のこりかしいなといはんが如し

あさましう、えたいめんせで、月日へにける事、わすれやし給ひけん、いたく、思ひわびてなん侍る。世の中の人このころは、めかるれば、わすれぬべきものにてこそあめれ

(語釋) あさましうとは、今言に、ケシカラズなといはんが如し○えたいめんせでは對面する事を得ずての義なり月日へにける事は、ことかなといふ意にて、歎息の意を含めたるなり○思ひわびてとは、おもふにせん方なきをいふ○今言に、思案にくれてなといはんが如し○侍る、こゝにては、居マスといふ意に見るべし○めかるは、目離<sup>メカリ</sup>にて、離れて相見ぬをいふ○すべて、こゝは、友だちよりおこせたる文の詞なり

といへりければ、よみてやる

めかるもおもほえなくにわすらるゝ

時しなければおもかけにたつ

(語釋) おもほえなくには、覺えぬにといふに同じ○時しのしは、助辭にて、意味なし○一首のこ



ろは、我は目かるとも覚えぬに、いかで、かやうにのたまふぞ。さてめかるとも、たほえずといふは、此方には除らるゝ時なければ、つねに面影にたつゆゑなりとなり。第二句、おもほえなくにの下に、詞を含めたるなり。味はふべし

(四十六段)むかし、男、ねんころに、いかでとおもふ女ありけり。されど、此の男を、あだなりとききて、つれなさのみまさりつゝいへる

(語釋) いかでとれもふは、今言に、ドウツして、あはやなといふに同じ○あはは、變りやすきをいふこと、前に委しくいへるが如し

大ぬさのひく手あまたにきてゆれば

おもへどえてそたのまざりけれ

(語釋) 大ぬさは、臆断に、顯昭の説を引きて、祓するに、陰陽師のもちたる串にさしたるしでなりはらへはてぬれば、これを、おのく、ひきよせつゝ、なづるものなりといへるが如し○一首のころは、大ぬさのひく手あまたなるが如く、あまたの所に通ふ君なれば、ねんころにのたまふをば、あさからす思へど、えたのみにし侍らず。それがために、よろしく、つれなく申すなりとの意なり

かへし男

おほぬさと名にころたてれながれても

つひによるせはありてふものを

(語釋) 新釋に、歌のおもては、大ぬさはひく手あまたなりと、名にこそたてれ。川にながれて、つひによるせのありといふものを、ひく手あまたなりとて、いとふべき事ならずといふ意をふくめて、いひ残したるなり。又、たとへたる下の意は、あまた所に通ふと、名にこそたてれ、見給へよ、ゆく末に、つひによる所は、あるものを、いとひ給ふは、心得ずといへるなり。其のよる所は、君なりといはでおもはせたるなり。さてなかれてもといへるは、つねのともとは異にて、もは軽く添へたるにて、ながれてといふ意なり、したの意は、行末にといふにあたるにても知るべし云々といへり。この説にて、よく聞こえたり

(四十七段)むかし、男ありけり。うまのはなむけせんとて、人を待ちけるに、ござりければ

(語釋) 文意も、語釋も、よく聞こえたり

今予しるくるしきものど人またん

皿をばかれずとふべかりけり

(語釋) 此の歌、一二の句、くるしきものど、今予しるといふべきを、それにては、五七のことばに叶はぬゆゑに、あどさきにしたるなり○一首のころは、來ぬ人を、まつ事のくるしきものど、今予しる。此のくるしさに思へば、人まつらん里をば、絶えずとふべき事なり○かれずは、離れずなり



(四十八段)むかし男、いもうどのをかしげなるが、琴ひきけるを見をりて

(語釋) をかしげなるとは艶にうつくしきをいふ此の外の語釋聞てえたるが如し  
うらわかみねよげに見ゆる若草を

人のむすばんことをしぞおもふ

(語釋) うらわかみは、未若みなり○ねよげは、寝よげなり○若草は、愛つらしくなつかしきもの故に、夫婦にもたとへたれば、妹弟にもいへるなり。又わか草なれば、行末に、人のむすばんことを思ふとなり○ことをしぞおもふのしは、例の助辭なり。一首のころは、かくばかり、共寝しよげに見ゆる若人を、人のものとなさんが、惜しく思ふとなり○すべて、この歌は、未といひ、根といひ、結ぶといふも、草の縁語にて、したてたるなり

かへし

初草のなごめづらしきことのはず

うらなくものををもひけるかな

(語釋) 初草は、若草をいふ。初草のやうにといふ意にて、めづらしといふ詞へかゝれり○うらなくは、心の裏につゝむ事なきをいふ。此の歌の意、諸説、おほかたどき得ず。新釋のみよろし。其の大意にいはいはく、此の歌の意を、たゞ言にていはし、いかなれば、かくめづらしき事をのたまふや。かねて、兄弟の事ゆゑ、うらなくへだてなく、思ひまゐらせけるかな。かゝる心ある君と、かねてしりな

ば、うらなくは思ひまゐらすまじきものを、さてくくやしといふ意にて、かなは、くやみて、嘆息したるなり。けるかなの例、昔、さやうにありける云々と、此の説にて、聞てえたり

(四十九段)むかし男ありけり。うらむる人をうらみて

(語釋) うらむる人とは、女をさせり。女の方より、あたなりと怨みたるを、そこちあたなれとらみて、よみてやれるよしなり

鳥の子を十づゝとをはかさぬとも

いかゞたのまん人のころを

(語釋) 鳥の子は、鶏の卵をいふ○十づゝとをとは、百なり○一首の意は、雞卵を百かさぬるは、至難のわざなり。しかし、この至難の事は、重ぬる術ありとも、あだにかはりやすき人の心を、とりとめん事は、術も力も及はじとなり

とらへりければ

朝つゆはきえのこりてもありぬべし

たれか此のよをたのみはつべき

(語釋) 此のよとは、男女の中をいふ言なり。こゝは、夫婦となりて、未ながく、頼みとする事ができ得べきか、否、たのむ事を得ずとの意なり○一首の意は、朝露は、はかなく消ゆるものなり。しかし、千萬のうち一つは、消えのこる事もあらん。然るに、世間のあたにかはりやすき男の心は、千



萬の中に一つも、かはらぬといふはなし。君も今は「いかゞたのまん」な色のたまへと、程なくかはるべければ、頼みにしたりとも、未とげぬ事ならんと、歎きたる意を含めたるなり

また男

吹く風にこそぞのさくららはちらすとも

あなたのみがた人のこゝろは

(語釋) こゝろは、去年なり○前の歌に、朝つゆのたどひをとりて、巧にいへれば、此の歌も、深くたくめるよしなり。一首の意は、去年の櫻の花の、吹く風に散らすある事は、もとよりあるまじきことなれど、もし、それはありとも、あゝ、たのみがたし。人の心はといへるなり○この歌は、六帖に、在原のとき春のうたに「ちらすして去年のさくらはありつとも、人のこゝろをいかゞたのまん」とあるを、少しなほして、こゝに合はせたるなり

又、女かへし

ゆく水に數かくよりもはかなきは

おもはぬ人をおもふなりけり

(語釋) 數かくとは、一二三の數の文字を書くをいふ○はかなきは、今言に、ヤクニタ、又なといはんが如し○一首の意は、流るゝ水に、數書くは、忽、きて、跡のどまらねば、まことには、はかなき事なれど、うれよりも、思はぬ人をおもふは、すこしのしるしも見えねば、まさりてはかなき事なり

となり○このうた、古今集には、戀に入れたり

あだくらべかたみにまける男をんなの、しのびありきしけることなるべし

(語釋) あだくらべは、互ひにまけじと、あだなるふるまひをなすことなり○かく互に、たのみ難きよしの歌などよみかはすは、男女のあだくらべして、しのびありきしける事なるべしと、記者の詞なり

(五十段)むかし男、人のせんさいに、菊うゑけるに

(語釋) せんさいは、前栽にて、庭園をいふ

うゑしうゑば秋なき時やさかさらん

花ころちらめ根さへかれめや

(語釋) うゑしうゑばのしは、助辭にて、植ゑ植ゑばなり。戀ひ戀ひて、ぬれくてなさいふ々同じく、重ねていふは、其の事をおもくいふにて、こゝは、よく植ゑばなさいふほとの意なり○一首のこゝろは、能く植ゑたれば、秋のなき時はなければ、年々に、必、さくべし。花は散るべけれど、根まで枯れじとなり○根さへは、根どもにといふ義なり

(五十一段)むかし男ありけり。人のもとより、かざりちまきをおこせたりける返事なり

(語釋) かざりちまきは、飾糶なり。チマキは、和名抄に、以菰葉糶米、以灰汁糶之、令爛熟也。



五月五日、之とあるこれなり。昔もちまきは、こもにてつゝむ事なれど、こゝなるは、あやめにて包みたりきと見ゆ。唐土にては、あしの葉、竹の葉にて、つゝみ、我が國にても、今は竹の葉にてもつゝむなれば、中昔の頃、あやめにても包むことありしなるべし。されば、歌にもあやめかりと詠めるなり。又飾といふは、五色の糸してくゞり巻きたれば、いへるなるべし。

あやめかり君はぬまにぞまどひける

われは野に出でゝかるぞわびしき

(語釋) 君には粽を賜はんとて、あやめかりにこゝかしての沼にまどひ給ひ、我はまた、雉子をまゐらせんとて、野に出でゝ獵したりと、君が勞を謝し、また、我が勞をも擧げたるなり。古人は、賢横なれば、我が勞せる事をもあげて、人にいひたぐるがつねなり。

とて、きしをなんやりける

(語釋) 聞こえたるが如し

(五十二段)むかし、男、あひがたき女にあひて、ものがたりするほどに、どりの鳴きければ

(語釋) あひがたき女とは、何か事情ありて、たやすくは、逢ひがたかりし女なり。○どりは、鶏をい

ふ

いかでかく鳥のなくちん人志れず

おもふこゝろはまだ夜ふかきに

(語釋) 人しれずは、人に知られずの畧語にて、歌詞なり。○一首の意は、何として、かく鳥は鳴くことならん。まだ曉には至らじ。心のうちには、まだ夜ふかしと思ふにとなり。

(五十三段)むかし、男、つれなかりける女に、いひやりける

(語釋) つれなしは、強顔などの字をあつ、なつかしからぬにて、よそくしく、氣つよくソシタヌ顔するさまをいふ

行きやらぬ夢路をたどるたもとに

天つ空なるつゆやおくらん

(語釋) 行きやらぬは、行くことの出来ぬなり。○一首の意は、つれなき女なれば、現に行きてあふべきよしもなし。せめて夢になりとあはんとて、こなたの心はゆかんとすれども、女の方にてつれなければ、たましひ通はず。女のもとへ行きやらすして、終夜ゆめちをたどりて、目さめて見れば、涙どもたぼえぬほど、訣のぬれたるは、夢路には、空の露やおくらんとかこてゐるなり。

(五十四段)むかし、男、おもひかけたる女に、えうまじうなりての世に

(語釋) えうまじうなりての世とは、女を我が物とせんと、彼是、周旋したれども、え得られぬやうになりたる時にの意なり

おもはずはありもすらめと言のはの

をりふしごとれたのまるゝかな



(語釋) この歌も、諸説とまき得じ。新釋よろし。其の説にいはいく、拾穂、臆断など、古今集なる、上の川よしや人こそつらからめ、はやくいひてしては捨れじ」といふ歌と同じ心なりとて、言のはどは、はやくたのめおきたる、言のはのやうにいひ、右意にも、其の意にどかれたれど、うはあやまりなり。さやうの意にはあらず。一首の意、まことには、女の心におもはずあらめと、たまさかに通ふ文のことば、よそながらあひ見る時の言の葉なとの、こなたを思ふやうにきてゆれば、其のうらふしごと、たのみにする事かな、たのみてもかひなし、得らるゝ女にはあらぬものをと、うちなげきたる意を、かなのてにはにこめたり。かくとかがれば、はしの詞にもあはず。言の葉のをりふしごとにと、つよきたる詞の意にも、更に叶はざるなりと、此の説にて、聞てえたり

(五十五段)むかし、男、ふして思ひ、おきておもひ、おもひあまりて

(語釋) おして思ひ、おきておもひは、思のいと切なるさまなり。つぎの歌は、たゞ、涙のおかきよ

我が袖は草のいほりにあらねども

くるればつゆのやどりなりけり

(語釋) この歌は、大やう聞てえたるが如く、草の庵は、露しげきものなるが、我が袖は、うの草のいほりにあらねど、暮るれば、戀のおもひまさりて、涙のかわく時なく、いはゆるつゆのやどりなりけりとうち歎きたるなり

五十六段)むかし、人忘れぬものおもひする男、つれなき人のもどに

(語釋) 人しれぬものおもひは、人にかくいひ出づることの出来ぬ物おもひなり。こゝは、身分に叶はぬ、高貴の人を戀ひしたひたるよしなり。そのゆゑは、歌に我から身をも、くだきつるかなどありて、及ばぬ戀なる事を知るゝなり

こひわびぬあまのかるもにやどるてふ

われから身をもくだきつるかな

(語釋) こひわびは、及ばぬ戀にて、せんかたつきたるよしなり。○われからは、蟹の刈藻に、やどる虫なり。されば、二三の句は、われからをいはんための序なり。○やどるてふは、やどるといふの約言なり。○一首の意は、身分をも顧みず、及ばぬ戀にせん方つきて、心はもとより、身をも碎きつるよ。さてく、かひなき事に、からきめ見ることよと、歎息せるなり。○此の歌は、古今集、題しらす、典侍藤原直子のうたに「あまのかる藻にすむ虫のわれからと、ねをころなかめ世をばうらみじ」とあるを少しかへて、はし詞をも作りたるなるべし

(五十七段)むかし、心つきなき色このみなる男、長岡といふところに家つくりてをりけり

(語釋) 心つきなき色このみとは、似合はしからず、相應せぬさまの好色家をいふ。されば、隣の水もも、いみじきすきものゝしわざやなと、あさけりたるよしなり。○長岡は、山城の國、乙訓郡にあ



りて、桓武天皇の三年より、十三年まで、都なりし地なり

ろこの隣なりける宮ばらに、こともなき女どもありけり。

(語釋) 宮ばらは、宮原にて、殿ばらなさいふに同じく、宮たちといはんが如し。こゝは、宮たちの二三人も、一所に住み給へる宮殿のさまなり。舊説に、宮腹にて、后、また、皇女の腹に生れ給へる御子をいふといへるは、わろし〇こともなきは、難なきの義にて、今言に、大抵よろしいなさいはんが如し。すぐれたるをいふにはあらず〇女どもありけりは、宮づかへして、ありけるなり。さて一人ならぬことは、女どもとあるにて知るべし。

おなかなりければ、田からすとて、此の男、見をりけるに、

(語釋) 田舎の事なれば、めしつかふ奴僕等に、田をからすとて、此の男、門にいでも、見まはり、萬事指揮し居けるになり

いみじのすきものゝまはざやとて、あつまりいりきければ

(語譯) 此の處も、新釋の説よろし。其の要にいはいはく、すぐれたる好色の人のしわざよとたはふれいひて、あつまり入り来るなり。いみじとは、ものゝ勝れたるをいふ詞なり。すかもは、好色の人をいふ。やはよといふに同じ。さて此の男は、色このむといふきこえあるに、田からすとて、出で、どかく行ふは、艶だち色好む人のすべきわざならねば、女どものわざと戯れて、いみじのすきものゝしわざよといへるなり、ざるを、拾穂、臆斷などに、皆、いみじの云々といふ詞を、男の家居のおもしろきをほめ興する意にとかれたるは、いたくたがへり。家居のことならば、すきものゝすまひ

やとこそいはめ。しわざといひては叶はず。又、家居をほめられたらんには、男のにげて、おかくかくるゝゆゑもなしと、此の説、まことに、いはれたり

此の男、にげて、おかくかくれければ、女

(語釋) 門に出で、いろく指揮しむたるに、いみじのすきものゝしわざやと、女にいはれたれば、耻ぢて、奥へ逃げ隠れたるなり

あれにけりあはれいく世のやどなれや

すみけん人のおとつれもせぬ

(語釋) やどなれやは、宿なればにやの義なり〇一首の意は、荒にけり。ア、幾世經たる宿なればにや、昔、すみけん人の、絶えて訪ひかどづれもせぬならん。うれゆゑに、かくは荒れたるならんどの意なり。さて實は、男のかくれて見えねば、人すまで、年經しやどの荒れたるよしに、戯れていへるなり

といひて、あつまり來おてありければ、此の男

(語釋) 一旦は、男はちて隠れたれど、女ども入り來て、戯れる歌よみかけて、ろくに居れば、男もさすがに、まけし心れりて、戯れかへしたるよしなり。「來おてありければ」とあるに、心をつけて、此の關係をよく心得べし

むぐら生ひてあれたるやどのうれたきは

かりにもれにのすたくなりけり



(語釋) ひぐらは、葎の字を訓す。生ひ茂る草なり○うれたきは、日本紀に、慨哉の字を訓める意にて、憂はしきをいふ詞○すだくは、多く集まるをいふ。水鳥のすだくなをいふも、同じ語なり○あれにけりと、女よめるを承けて、御歌のどほり、ひぐら生ひ茂りて、荒れはてたるやどのうれはしきは、かりろめにも、おろろしき鬼の多集なりといひて、彼の女どもの群り來たるを、鬼にたとへて惡み戯れたるなり

どなんいひ出だしたりける。此の女ども、ほひろはんといひければ

(語釋) ほひろはん云々は、はじめ男が門に出で、とかく指揮しをりける事なれば、已等も穂ひろけん。伴ひて田へ出でたち給へと、再、たはふれかけたるなり

うちわびてれちぼひろふときかませば

われも田づらにゆかまじものを

(語釋) 此の歌の意は、穂ひろはんといひて、いざなひ給へども、戯れのおそびぐさにし給ふ事なれば、もろどもに、え出です。もし、世にわびて、落穂ひろひ給ふときくならば、我も田づらに行きて、拾ひてまゐらせんものをと、戯れていへるなりと、新釋にいへるが如し

(五十八段)むかし男京をいかか思ひけん。ひんがし山にすまんどおもひいりて  
そみわびぬ今はかぎりの山里に  
身をかくすべきやどもとめてん

(語釋) すみわびぬは、都に住み詫びたりとなり○やどもとめてんは、宿求めたしとなり○一首の

意は、おほかた聞てえたる如く、憂事ありて、都に住む事がいやになりたれば、かねて身の終は、山里に思ひ居りたる事なれば、其のかぎりの山里に隠遁して、人に知られぬ宿求めてんとなり。其の故は、人に知られぬ宿ならば、さまで、憂事もあるまじければなり

かくて、ものいたくやみて、しにいりたりければ、れもてに水を、ぎなどして、いきいで、

(語釋) ものいたくやみては、何疾といふ事なく、重くわづらへるよしなり。憂事に、あまり心勞せるより、氣鬱病など、引きおこせるさまなり○しにいはは、痛く胸にさしてみなとして、息の絶えたるよしなり○おもてに水るときは、面に水瀧ぎにて、絶息せるものを驚かし醒めしめんがためには、今もする事なり

わがうへに露をおくなるあまの河

とわたる船のかいのしづくか

(語釋) とわたるは、門渡にて、あまの河の湊をいふ○あまの河は、天上の川なり。銀河などいふこれなり。○かいは、楫にて、水をはねて、船をやる具なり○一首の意は、我が一度死にたるに、顔の上における露にて、蘇生せり。されば、此の露は、この世のものにはよもあらじ。天上のあまの川の門わたる舟の車にやあらんぞれもへるまゝをよみたるなり

といひてぞ、いきいでたりける

(語釋) さきに、「いき出で」といひて、又、こゝにかくいふは、重ねせるやうなれど、重ねていひて、



詞をささむる文法、古文にはまゝある事なり

(五十九段)むかし、男ありけり。宮づかへいそがはしく、心もまめならざりければ、いへとうじ、まめに思はんといふ人につきて、ひとの國へいにけり。

(語釋) まめは、眞實の意なる事、前に委しくいへり○いへとうじは、家刀主にて、一家の主婦なる事も前にいへり○男、宮仕に多忙にて、おのづから、女の許へ疎遠に、殊にそれほど眞實の志も見えざりき。然るに、已はかやうに疎遠にはせし。眞實にれもふといふ人のありて、それが、田舎へ行くに、つきてはきけるなり

此の男、うその使にて、いきけるに、

(語釋) うそは、豊前の國、宇佐八幡宮をいふ。此の官は、古來、おもくあがめ給ひしかば、御代のはじめには、必、勅使を立て給ふ例なりき。さらでも、事とある時には、勅使をつかはさるゝなり

ある國の志ぞうの官人の、めにてなんあるとき、て、

(語釋) しやうは、祇承の字音を、なだらかに訓めるなり。勅使を祇承する官人にて、今の世に、馳走役人などいはんが如し。さてこれは、國司をはじめて、郡司、驛長などまでをいふべし。此の男のもとの妻、今は此の祇承の中の官人の妻にてありと、男の聞き傳へてなり

女あるじにかはらけとらせよ。さらすば、のまじといひければ、かはらけとりて出だしたりけるに、さかななかりける。たちばなをとりて

(語釋) 女あるじは、其の家の主婦、乃、妻をいふ○かはらけは、杯をいふ○とらせよとは、手に取

りて、飲んでさゝせよの意なり○さかなのさかは、酒なり。なは菜にまれ、魚にまれ、酒のあはせにするものを廣くいふ詞なり。こゝは、菓子すなはち橘を酒肴に出だしたりけるなり。されば、此の橘を取りて、女に與ふとて、うれによせたる歌をよみたるよしなり

さつきまつばな橘の香をかげば

むかしの人の袖の香する

(語釋) さつきまつばは、五月待なり、橘は五月をまちて、花さくものなればいへり○はな橘の香をかげばは、今とりて與ふるは子なれども、子によりて、花によせていへるなり○むかしの人とは、昔、わが親しみし人をいふ○一首の意は、橘の花の香をかげば、昔あひ見し人の袖の、香に能く似たれば、うれにつけて、むかしの人を戀ひしく思ふとなり○此の歌は、古今集に、四月の郭公と、五月の郭公との間に入れられて、何となき昔人の香を思ひ得たる歌なるを、こゝには、右の詞を作りて、其のさかなにせる橘によりて、もとの妻によみて與へたる事になせるなり

といひけるに、思ひ出で、尼になりて、山に入りける

(語釋) 評釋にいはいはく、といひけるに予思ひ出で、とは、昔、わすれぬ意なる夫の歌を聞きて、女の我が心みじかくて、別かれし事をくやしうも、恥づかしうも思ひ出でたるなり。しか見ざれば、尼になりて、といふ詞につゝかず。古意に、此の使、もとの夫ならんとは、思ひもよらざりけるに、かくよみたるを聞きて、ふと驚きはちて、尼になれるなりと、どかれたるは、いかゞ。たどひ、歌よむをきかずとも、夫とせし人を見まがふやうなく、歌をきいたりとて、いかでか、ふとおどろく事の



あらん云々といへるは、いとよし

(六十段)むかし、男、つくしまでいきたりけるに、これはいろこのむなり。すきものぞと、すだれのうちなる人の、いひけるを聞きて

(語釋) つくしは、筑紫にて、九州の古稱なり○これは云々とは、此の人、色好むなりといひて、又くりかへして、好色家やといへるなり○男の通るを、簾中に居る女の、此の男を見知りたるが、他の知らぬ女にいひ聞かせたるよしなり。それを男が聞きて、歌よみかくるさまなり

そめ川をわたらん人のいかでかは

いろになるてふことなかるべき

(語釋) いかでかはのは、軽く添へたる言なり。いかでかの意に見るべし○てふは、といふを約めたる詞歌なること、前にいへり○そめ川は、筑紫にある川なり○一首の意は、此の筑紫に来て、染川を渡りたらんに、いかで、色に出でざる事を得んやといひて、こは所がらなりと、却りて、其の人をうちかへしたるなり○此の歌は、拾遺集に、題しらす。業平朝臣としてあげたり。されど、拾遺集は、すべて、おぼつかなき事多ければ、或は此の物語より、業平朝臣としたらんも知りがたし

女かへし

名にしおはゞあだにやあるべきたはれ嶋

浪のぬれぎぬきるといふなり

(語釋) ぬれぎぬとは、無き名を負ひたるをいふ。浪のぬれぎぬとつゞけるには、浪は物をぬらす

ものなれば、島の縁語にいへるのみ○此の歌、諸説區々なり。ろの中、古意と、評釋との説、おほかたよろし。其の大意にいはいはく、染川をわたたりたる故に、色になりたりとのたまへと、たゞへば、たはれ島も、たはれといふ名におはゞ、あだにあるべき島なれども、更にあだなる事なし。されば、たはれといふは、なき名なりと人もいふ事なり。染川も其道理にて、ものを染めて、色になす事はなし。染といふは、なき名なるを、此の川を渡りたるゆゑに、色になりたりとのたまふは違へり。もとより、色なる君なりと、打ちかへしていへるなり云々

(六十一段)むかし、男の年ごろおとづれざりける、女、心かしくやあらうざりけん。はかなき人のことにつきて、ひとの國なりける人につかはれて、もと見し人のまへに出で来て、ものくはせなどしけり。

(語釋) 年ごろおとづれざりけるとは、男の心かはりて、音信せざりしにはあらで、なにか事情ありて、疎遠に打ち過ぎたりしなり。其のゆゑは、男、いにしへのにはひはいづらといふ歌よみたるに、女は答もせず、なきたるにて知るべし○はかなき人のことにつきてとは、かく疎遠なる男を、あてにして居らんよりは、田舎へ行きなば、またよき事もあるべしなと云ひて、人の誘ひたるなり。さて其の誘ふ人のいふ事の、たしかならず、浮きたる事なれば、はかなきとはいへるなり○ひとの國とは、他國の意なり。こゝは、都よりいふなれば田舎を指せるなり○もと見し人とは、彼の事情ありて、年ごろ、音信せざりし男をいふ○ものくはせなどとは、此の女、人の家に使はるゝ下婢なる故に、客人の前に出で、給仕したるなり



ながき髪を、きぬの袋に入れて、遠山すりの長さ、あを、ぞきたりける。

(語釋) ながき髪を云々、背に垂れたる髪を袋に入るは、衣服をよこさじとてするわざにて、しき女のさまなり○あをを、襦にて、あはせの衣がつねなれど、綿を入るもあり。衣服の上にはおる物にて、今の世の羽織の如きものなり。さて襦は、うちくには、身分よき人も着るとあれど、人の前などに用ふるは、下賤の者に限れり。殊にこゝは、下婢の事なれば、布にて作れる襦なりしなるべし。又、襦は、大抵、男の着るものなるに、便利なれば、こゝは女なれども、着たりしなり。またたけ長きを着たるも、女なればなるべし○遠山すりとは、草の汁などにて、遠山のかたをすれるなり。我が國にては、古來、草摺の衣を賞せる風俗なりき

よさり、このありつる人たまへど、あるじにいひければ、れこせたりけり。男われをば、しらすやとて

(語釋) よさりは、夕さりなどいふと同じく、夜といふに異ならず○ありつる人たまへとは、男が女の主人に向ひて、是の下女を與へ給へといひしなり○われをば知らずやとは、我をば、見念れたるか。なにがしなりと、男が下女に問ひかけたるなり

いにしへのにほひはいづらさくら花

ちれるがこどもなりにけるかな

(語釋) いづらは、いづれと探す意を含める詞なり○こどもとは、如くの意なり○一首の意は、昔のにほひやかに、美麗なりし容貌は、何處へ消え失せたる予。散れる櫻花のにほひ無きが如くなりけり

かく衰へしめたるは、わが、年比、音信せざりしゆゑに、つまらぬ人にそののかされ、今は人に召し使はるゝ身とまでなりける事よと、悲しく思ふこゝろをこめたるなり。かく解かざれば、歌の意ふかからず。けるかなといふ詞に、心をつけて、此の意を悟るべし

といふを、いとばつかしとおもひて、いらへもせで、わたるを、などいらへもせぬといへば、なみだのこぼるゝに、目も見えず、ものもいはれずといふ。又、男

(語釋) いらへは、答なり。今の世に、返事といふに同じ。耻づかしくて、答もせざりしを、何ゆゑと、又、問はれて、涙のこぼるゝに、目も見えず、ものも云はれずと、答へたるよしなり  
これやこのわれにあふみをのがれつゝ

年月ふれどまさりがほなる

(語釋) これやこのは、物二つにわたる時の詞なること、既に前に委しくいへり○まさりがほなるとは、つれなさのまさりがほなるの意にて、答せぬを、かくいひなしたるなり○一首の意は、これが彼のわれを厭いて、逢身をのがれつゝ、年月ふれど、思ひなほらす、つれなさのまさりがほなる人かとの意なり○これやこのといふは、終の句にいひ残したる人かといふ詞へかゝれり。いひのこしたる詞へかけんとて、なるどは結びたるなり

といひて、きぬぬきてとらせけれど、すてゝにげにけり。いづちいぬらんとも知らず

(語釋) きぬは、衣服をいふ○とらせは、取らせにて、與ふるをいふ○すてち云々は、何處ともな



く、逃げ出で、ゆくへしれずなりぬとなり。いたく、恥ぢたるさま見るやうなり  
(六十二段)むかし、世こころあるおうな、いかで、このなさけあらん男にあひ見  
てしがなとれもへど、いひ出でんにもたよりなければ、まことならぬゆめがた  
りを、むすこ三人をよびあつめて、かたりけり。

(語釋) 世こころは、色好む心をいふ。おうなは、嬬にて、老女をいふ、若き女と混ふべからず。老  
女にて、猶、色このみなりけるなり。このなさけあらん男とは、下の在五中將を指せるなり。この  
は、今の彼のといふに同じ。あひ見てしがなは、逢ひ見たしとなり。がなは、願望の意なり。いひ  
いでんにもたよりなければとは、老女なれば、在五中將を戀ひ慕ふよしを言ひ出でんも、似つかは  
しからず、便なきなり。されば、夢語にして、よろながら、三人の子に語り聞かせ、暗によく夢どき  
せしめんの意にて、話せるよしなり。

ふたりの子は、なさけなくいらへてやみぬ。三郎なりける子なん、よき御男、い  
でこんどあはせるに、此のおうな、けしきいとよし。

(語釋) ふたりの子は、太郎と、二郎となり。三郎は、第三の子なり。よき御男、いでこんどあは  
せたるは、母の暗にさやうなる夢をつくりて、話せる下こころを知りて、解き合はせたるなり。抑、  
夢合といふことは、昔よりありて、そのわざは、夢を解く人の言によりて、凶夢も吉夢となり。吉夢  
も凶夢なる事ありといふ。故に今こころの三郎が母のを吉夢に解きなしたれば、母はさてこそ、我  
が心に叶ひたれと思ひて、氣色、甚、よしとなり。

こと人は、いとなさけなし。いかで、この在五中將にあはせてしがなとおもふこ  
ころあり。

(語釋) こと人は、異人にて、在五中將ならぬ人をいふ。なさけなしは、はじめに、在五中將は、情  
あかき人なるよしいへれば、在五中將にくらべては、異人は情なしとなり。

狩りしありきける道に、いさあひにけり。  
(語釋) 狩りしありきしは、在五中將なり。  
馬の口をとりて、かうくなんおもふといひければ、あはれがりて、いきてねに  
けり。

(語釋) 馬の口をとりとは、中將の乗りたる馬の口を、三郎がとりとめてなり。さて馬の口をみ  
づから取りて云々といふは、中將の氣色をとる意を含めたる文なり。かうくなん云々、かうく  
は、今言に、カヤウカヤウなどいふに同じ。さてこころは、異人は情なしと、三郎が思ふよしを、中將に  
ひたりとも見らるべく、又、かくかくなん、我が母の思ふと、中將に告げたりとも解せらるべし。古  
説にも、兩様あり。いづれにてもありぬべし。あはれがりて云々、例のなさけあかきしわざの一端  
を知らせたるなり。

さてのち、男、見えざりければ、おうな、男の家にいきて、かいまみけるを、男、ほの  
かに見て



(語釋) 一度来てねたるのち、中將、見えざりしかば、老女、心配して、家にゆきて、中將の様子を伺ひけるを、中將ほのかに見てなり○かいまみは、物の間なをよりのぞき見るをいふこと、既に前に委しくいへり

ももどせに一とせたらぬつくもがみ

我をこふらしれもかげに見ゆ

(語釋) ももどせに一とせたらぬは、年老いたるさまを、甚しくいふ意なり○つくもがみとは、髪につくもの花に似て、短きをいふ。つくもは、和名抄に、辨色立成云、江浦草、和名、豆久毛とあるべし。江浦草は、ふとむといふものにて、藟の類なり。此の草の花、老人の頭の髪みじかきに似たれば、此の江浦草の花に似たる髪を、つくも髪といふとテ○一首の意は、老女の甚しく年老いて、短き髪その儂の見ゆるは、我を戀ひしたふ様子なるが、あはれなりとなり○下の句は、おもかげに見ゆ、我をこふらして、顛倒して意をとるべし。又、此のうたは、老女の來たるを見て、しらぬよしによみしなり○ももどせに一とせ足らぬといひて、いたく年の老いたるをいひ、又、つくもがみといひて、ろの老髪を知らせたり、これはわろくいふにはあらで、憐みおもふ方に心得べきなり。又、儂に見ゆるは、心の通ひくれば、夢に見ゆる如く、戀ひしたふがゆゑに、心の通ひ來て、儂に見ゆるならんどのこゝろなり、能く味ひてさるべし

といひて、うまにくらおかせて、出でたつけしきを見て、うばらからたちともし

らす。はしりまどひて、家にきてうちふせり。

(語釋) 我を戀ふらしかもかげに見ゆといふ、なすけある歌をうたひて、すぐさま、馬に鞍をかせて、出づる様子なれば、老女は、必、わか許に行き給ふならんとして、つねの道をゆく暇なく、荆棘の生ひしげれる野路をふみわけて、我を急いで、急ぎかへりぬとなり

男、このおうなのせしやうに、しのびてたてりて見れば、おうな、うちなげきて、ぬとて

(語釋) 男も嬬のかいまみたるやうに、嬬の家に來りて、しのびて見ればの意なり○ぬとては、寝とてなり

さむしろに衣かたしきこよひもや

變ひしき人にあはでわがねん

(語釋) さむしろは、延喜式に、廣席、狹席など見えて、狹き席をいふ○衣かたしきは、獨ねのことなる事、前にいへり○この歌は、古今集に、上の句は、同じくて、下の句は、我をまつらんさぢのはしびめとあるを、例のつくりかへて、こゝに入れたるなり。實に、こゝには能く叶ひて、あはれなる歌となれり○一首の意は、狹き筵に、夜の衣をかたしきて、今宵も戀ひしき人にあはで、まろねするこどかどうち歎きたるなり

とよみけるを、男あはれと思ひて、その夜はねにけり。



(語釋) 右の歌を、女のうたひけるを、戶外に立てる男の聞きて、あはれさに堪へず。内に入りて、いねたりきとなり

世の中のれいとして、思ひおもはぬ人あるを、此の人は、そのけちめ見せぬ心な  
んありける

(語釋) れいは、例の義なれど、こゝは、ならはしなどいはんが如し○思ひおもはぬ云々、世の中の男は、たほかた深く思をかゝると、冷淡なるもあれど、此の人は、さるけちめなく、まことに、物のあはれを知りける人よとなり。たゞへば、若くうつくしき女を愛して、衰へたるを退ぐるは、なべてのならばしなれど、此の人は、さる偏頗の事なかりきとなり。これ物のあはれを知るといふことにして、すべての物語書の骨體なり。殊にこの物語は、物のあはれを知らせんとてしくみたるものなれば、かゝる人を、最、人がらよきやうに記せり。その心して、全篇の意を味ふべし○けちめとは、差別また、區別などの字の意なり

(六十三段) むかし、男、女、みそかにかたらうわざもせざりければ、いづくなりけん、あやしさによめる

(語釋) この條、いたく省客せる文にて、うち見たる處にては、意をとりがたし。諸説あれども、評釋の説いと詳らかなり。其の要にいはいはく、これは、たかき宮づかへする女の、男をこゝろみんとて、名をかゝりて、文おこせるに、男は、いひよりてあひみんと思へど、女は、しばしてゝろみんとて、密

々にかたらふわざをさへせざりければ、さきに文おこせるは、宮づかへする女房とは知らるれど、名をかゝるゆゑに、いづくの局よりなりけん、知られねば、ここのさまあやしさに、歌よみてやるなり。さるは、文のつかひはする人あらめど、女のかたより、口がためして、いづこもいはざるにこそ。さて、昔、男女の文おくるは、けさう心ありての事なれども、今の世のさまとは異にして、花、紅葉につけて、あはれなる歌ども書きてれくりて、其の返事のやうを見こゝろむる事どもありき。されば、文おこせたりとて、頼むべきにあらず。こゝもそれなり。此の段は、いたく事すくなく、客きて書ける文なれば、心をやりて見ざれば、どき得がたし。ふるき註ども、わろし云々。又、いはく、臆斷に、みろかにかたらふわざもせねば、女の常にすむ所、いづくにかありけんも知らず、あやしみて詠みてやるなりといへり。これは、大かた、本文のまゝにいひて、更にどける所なく、いと拙し。古意に、こはもといひかはし、女の、宮の内などにあるが、其のあり所もいひ知らせねば、且、女の心をもあやしむなりといはれたり。もし此の説の如くならば、いづくなるらんとあるべきなり。けんといへるに叶はず。師のいはれたるは、けんといふ詞いかゞ。いづくなるらんとあるべきにや。もし、又、けんを助けていはゞ、物語の地の詞として、いづくにての事なりけんを見るべしといはれたり。けんをいかゞといはれしは、古意の説によられたるゆゑなり。又、地の詞としてといはれしも、いかゞいづくなりけんあやしさにとつときて、男のおもふ意をいへる詞なるをや

吹く風に我が身をなごば玉すだれ

ひまもとめつゝしらぶじものを



(語釋) 玉すだれとは、簾の美麗なるをいふ。○ひまは、隙なり。すきをいふ。○一首の意は、我が身を形も色もなき、風になさば、玉簾の隙を求めて、宮づかへせる女房の局の中に入りて、文おこせるは、何處のたれといふ事をしるべきに、風に身をなす事かなはねば、心にまかせずと、歎きたるなり。○此の歌は、樂葉の旋頭歌に、いきの緒に、われは思へど、人めおほみ、ころ吹く風にあらば、しばしく逢ふべきものを、又、玉だれの、をすのすけきにいりかよひ、こねたらちねの、母がどはさば、風と申さん又、妹がぬる床のあたりに岩くゝる、水にもかもや入りてねなましなどあるによりて、例のつくれるなるべし。

かへし

とりとめぬ風にはありとも玉すだれ

たがゆるさばかひまもとむべき

(語釋) とりとめぬは、手に取りとめぬをいふ。○一首の意は、たどひ、色も形も見ぬ風になりたまふとも、玉だれの中へは、誰もゆるさねば、隙もとめて、入るやうの事は、得したまはし。ならぬ事なりといへるなり。

(六十四段)むかし、みかどの時めきつかはせたまふ女の、いろゆるされたるありけり。大みやす所とて、いますかりける、御いとこなりけり。

(語釋) 時めきつかはせは、女に時を得させて、仕ひ給ひしなり。すなはち、御寵愛の盛なるをいふ。○いろゆるされとは、禁色をゆるさるるにて、これも時めきて、寵愛したまひしを、知らせたる文なり。さて禁色には、染色と、織物と、二種ありて、其位にあらざれば、着ることを得ざるなり。延喜式に、凡、諸禁色者、總雖下衣不聽服用とあるは染色なり。又、同式に、有禁禁色者形(謂綾羅錦綺之類)とあるは、文織物なり。されば、此の二つをゆるさるるを、色ゆるさるとはいふなり。○大みやす所とて、いますかりけるのいますかりとは、ねはしましけりといふに同じ。さて源氏物語などの例を考ふるに、皇子を生み奉れば、皆、みやす所といふ例なれば、こゝは、天皇の御母君ゆゑに、かくいへるなるべし。此の大御息所は、まづは、清和天皇の御母后(明子)を申せるにて、いとこは、高子(後に二條后)の御事なるべし。在原なりける男とは、業平朝臣を思はせたるなり。されど、業平の高子を相知れるは、文徳天皇の御時にて、清和天皇の高子を寵し給ふ比は、此の朝臣、四十餘の歳にて、官位共に昇れること、史に見えたれば、此の時のことにはあらず、例の書きひがめたるなりけり。

殿上にさむらひける在業なりける男の、まだいとわかかりけるを、此の女、あひしりたりけり。男、女がたゆるされたりければ、

(語釋) 殿上にさむらひは、つねに、殿上に祇候せるなり。○いとわかかりけるは、すべて、物語にわかしいふは、極めて幼稚の時をいふ。こゝも、いまだ、十三四位の時なれば、女方にゆきとすることをもゆるされて、ありつととなり。○女がたは、女方の意にて、女の住める局をいふ。○あひしるとは、夫婦のかたらひするをいふ。時代をあらぬさまにかきひがめたることは、前々にもいへるが如し。女のある所にいきて、むかひをりければ、女いとかたはなり。身もほろびなん。か



くなせるといひければ

(語釋) 女の云々は、男が女の居る所に行きて、對坐し居りければなり。をさな心にも慕はしくて、つねに、女の處にありけるなり○いとかたはなうは、甚だ見ぐるしなをいはんが如し。かたはは、片羽にて、すべて不具なるをいふこと論なけれど、こゝは、見ぐるしといふほをに解すべし。かゝ、毎日我が室に来て、對坐し給はんは、いと見ぐるし。さては、わが身はもとより、御身も、共に滅びたまはんとなり○かくなせろは、かくし給ふ勿れなり。女がかく男に注意したりとなり○身もほろぶなんは、名はもとより、身もの義に見てもよろしけれど、やはり、我が身はもとより、御身もの義に見る方おたやかなるべし

思ふにはしのぶることぞまけにける

あふにしかへばさもあらばあれ

(語釋) 思ふには、行きてあひ見んと思ふをいひ、しのぶは、人目いかゞとしのびかくるゝをいふ○あふにしかへばは、逢ふに換へばなり。しは、例の助辭なり○さもあらばあれは、今言に、サウモアラバアレといふ義にて、たとひ、かくありともよしなをいふことゝなり○一首の意は、相見んと思ふ心と、人目いかゞとしのぶ心と、心中に争ひしが、遂にしの方の心まけて、人目もはゞからずかく毎日来て、對坐し居るなり。かくては、身もほろびんどのたまへと、逢ふに換へば、よし、身はほろびても、をしからずとなり。かくいひて、前の身もほろびなんといへるに答へたるなり○此の歌は、古今集に「おもふには忍ぶることぞまけにける、色には出でじとれもひしものを」といふ上の

句をとり、「いのちやはなにぞはつゆのあだものを、あふにしかへばをしからなく」といふ下の句を少しかへて、例のつくれるなり。ざるを、新古今集に、この歌を、業平朝臣としたるは、いかゞ。歌のさまさへ、本末、少しといふのはぬ心地するを

といひて、さうしにおりたまへば、いとさうしには、人の見るをも、しのばでのぼりおければ、此の女、思ひわびて、里へゆく。

(語釋) さうしは、曹子にて、此の女の部屋をいふ○おりは下りにて、臺盤所より、曹子に下り給ふなり。一本にをりどあり。さらば、居りなれども、れりどある本。よろしかるべし。臺盤所は、禁秘抄に、臺盤所三間、北間朝餉、方敷黄端疊、東倚子其南女房簡入袋と見わたる所なり○いとさうしには云々、臺盤所に居るうちは、さすがに、はれの所なれば、少しは、たしなみて、對坐し居たるに、曹子にては、いとさうしします、人目もはゞからねば、女もせんかたつきて、わが里へゆかれたりとなり。わびての語釋は、前にくはしくいへり

されば、なにのよきことゝおもひて、いきかよひければ、みな、人きゝて、わらひけり。

(語釋) なにのは、今言に、ナンノソレガなをいふに同じ。一本に、なにを、なんに作れり。それもあしからず○よきこととは、女の里へゆくは、よき事と男のおもふなり。女がわが里へゆきしを、かへりてたよりよき事と思ひて、通ひきとなり。此の他は、聞てえたるが如し



つとめて、どのもつかさの見るに、くつはとりて、おくになげいれてのぼりぬ。

(語釋) つとめては、朝はやくなり。晨の字なきをあつ○とのもづかさは、主殿司にて、毎日、早朝に宮庭の洒掃をつかさどるものをいふ。早朝に、宮庭をめぐりて、下部ともの掃ひ清めたるあとを見分するものなれば、その官人に見つけられたるなり○くつはとりて云々、靴は従者または下部なとのとるべきものなるに、みづから、取りたるは、しのびて、昨夜、女の里へゆき、今かへる處にて、さる従者などもなきさまなり。又、宿直したる殿上人の靴は、奥に入れなく所なれば、うこへなげ入れたるなり、たゞ、脱きすておきては、宿直したるやうに見ねばなり。かやうにして、殿上へのぼりぬとなり。こゝは、三代實錄に、業平のことをしるして、放縱にして、かゝはらずなどある心ばへにて、かけるなるべし

かくかたはにしつゝありわたるに、身もいたづらになりぬべければ、つひに二ろびぬべしとて、この男、いかにせん、わがかゝる心やめたまへと、佛神にも申しけれど、いやまさりにのみれば、つゝ、なほ、わりなく、こひしうのみればえければ、

(語釋) かたはにのみは、見ぐるしくのみなり。女にはなれぬやうにするをいへり○ありわたるとは、日を経るをいふ。女につけまどひてのみ目をわたりきとなり。かくては、女の身も、わが身も罪なはれて、戀もかなはずなり、又、つひには、滅ぶることにも至らんとなり。されば、この戀やむやうにぞ、神佛に祈願せられ、彌、まさりて、止むべくもあらずとなり○わりなくは、むりに、あながちになどの意なり

おんやうじ、かななきよびて、戀ひせじといふ、はらへのぐして、なんいきける。

(語釋) れんやうじは、陰陽師なり。中古には、何事にも、罪、けがれなどのある時は、陰陽師、神巫などにたのみて、祓といふ事をする風俗なりき。こゝも、身のほろぶるまで、戀するは、なにか物のたゞりなきにて、心の惑へるにやとて、祓をするなり○はらへのぐとは、祓の具にて、祓するにつけて、神に供ふる物をいふ。此の供物は、祓の大小によりて、差あり。大祓には、馬、釜、麻、布、人像などを、さまざまの具を出だせり。こゝは、私の祓なれば、さる物までは、供へざるなるべし○いきけるは、鴨の川邊に行きけるなり。祓は、水邊にて行なはざればなり

はらへけるまゝに、いとゝかなしき事、かすまさりて、ありしよりけに、こひしくのみおぼければ

(語釋) いとゝかなしきこと云々、祓のしるしなきよりなり○ありしよりけにのけは、萬葉に、殊、勝、異などの字を訓める意にて、ありしよりも、殊にまさりての意なり。祓せぬうちよりも、まさりて戀ひしとなり。けは、清音によむべし

こひせじとみたらし川にせしみるき

神はうけずとなりけけるかな

(語釋) みたらし川は、何處にても、社のほぞりにある川をいふ詞なり○みるきは、身蔭にて、身の



罪けがれを拂ひ清むるをいふ○この歌は、聞てゐたるが如く、戀のやむやうにと、みたらし川に、みろぎせるを、神も受け給はず、いよく戀ひしくなりぬる事よと歎きたるなり○此の歌、古今集に逢はぬ人を戀ふる篇に入りて、よみ人しらすに、下の句、神はうけずもなりにけらしなどあるを、少しかへて、例のつくれるなり

といひてなん、きにける。

(語釋) きにけるは、祓の場所より、家に還り來にけるなり

此のみかどは御かほかたちよくおはしまして、曉には、ほどけの御名を御心に  
いれて、御こそは、いとたふとくて、申し給ふを聞きて、

(語釋) 此のみかどは、暗に清和天皇を指し奉れるなり。三代實錄に、天皇風儀甚美、端嚴如神、性寬明仁慈、溫和慈順、好讀書傳、潛思釋教、鷹犬之遊、漁獵之娛、未嘗留意とあるをもてかけるなるべし○曉には云々は、曉のおこなひとて、佛名を唱ふをいふ。帝の御心に入れて、たふとく御聲にて、佛名を申したまふは、女心には、殊に尊く聞きなせるなるべし。女の佛の道に入りやすきは、むかしも今も同じ風俗なればなり

女はいたうなきけり。かゝる君につかうまつらで、すくせつたなくかなしき事、  
この男にほたされてとてなん、なきにける。

(語釋) 女はいたうなきけりと、まづいひて、再、ろのなしゆゑよしをくはしくいへるは、一つの女法なり。かゝるたふとく君に仕へ奉ることの出来ぬさはりのこれるは、前世の因縁ならんとす

○すくせは、宿世の字音にて、前世といふに同じ。さてかゝるめでたき君に仕ふる事を得ざるは、前世の因縁とはいひながら、此の男にほたされての義なり○ほたされは、被<sub>レ</sub>絆なり。和名抄、調度部、鞍馬の具に、絆、釋名云、絆(和名保太之)半也、物使<sub>レ</sub>半行不得<sub>二</sub>自縦<sub>一</sub>也とあるものにて、馬のほだしよりおこりて、行くべき方へゆかれぬ妨となる物をいふ

かゝるほどに、みかどきこしめしつけて、此の男をながしつかはしてければ、彼の女をば、いとこのみやす所まがてさせて、殿のくらにこめて、志をりたまひければ、くらにこもりてなく、

(語釋) ながしは、流罪にせるなり。當時の流罪は、近流、(越前、安藝)中流、(信濃、伊豫)遠流、(伊豆、安房、常陸、佐渡、隠岐、土佐)の三等ありき。こゝは、都近き越前の國なるべし。前に身もほろひ、身もいたづらになりぬべしといふは、こゝをいへるなり○彼の女をば云々、彼の五條の皇太夫人のこれはする宮をも去らしめて、倉にこめて、戀らしめたりとなり○まがては、罷出にて、尊所より賤所へゆくをいふこと、前にいへるが如し。すなはち、殿中を出だして、倉にたこめられたればいふ○しをりは、木の枝などをしをりたどめるが如くして、人をこらしむるをいふ。すなはち、いためくるしめる事なり。○落窪物語にも「この北の方にこめて、ものなくはせろ、しをりこらしめてよ」など見えたり

あまのかるもにすむむしのわれからと

ねをころなかめ世をばうらみじ



(語釋) 上の句は序にて、一首のこゝろは、かく倉にこめられて、わびじきめ見るも、皆、わが身のあしき事よりこれるなれば、音を泣くべし。世の人をば、怨みじとなり○あまのかるもにすむ虫の解は、前に委しくいへり○此の歌は、古今集に、典侍直子朝臣の歌とあるを、例のこゝにかり用たるなり。まことに、あはれおかし

どなきをれば、此の男、人の國より夜ごとけきつゝ、笛をいとおもしろくふきて、聲はいどをかしようて、歌をぞあはれに、うたひける。

(語釋) 人の國とは、他國の義なり。此の男は、流罪に處せられて、近くも越前なるべきに、夜ごと都へ來たること、もとよりあるべからず。かゝる事は、例の虚實うちまじへて。作りなせるなり○歌をぞあはれうたひけるは下にある「いたづらに行きてはきぬる」の歌をいふ。ながされたる國より、しのび來て、もし女の聞きもやすると、心いれて、笛ふき、聲れもしろく、歌うたふよしなり、女のうたを前に出だして、男のうたをれくに出だしたる、まことに、おもしろし

かゝれば、此の女、くらにこもりながら、それにうあなるとはきけど、あひ見るべきにもあらでなん

(語釋) 女は、笛の音のれもしろく、うたふ聲のあはれなるを聞きて、此の男なりとは聞き知れど、倉にこめられたる身の、出づべくもあで、歌よめるよしなり

さりとともと思ふらんころかなしけれ

あるにもあらぬ身をば知らずて

(釋語) さりとともは、サウアリともにて、我は流罪に處せられたれど、毎夜々々、いく度も、かくうたうたひ、笛ふきたらば、女もきゝ知りて、逢ふこともあるべしと、男の思ふこゝろを承けてはいへるなり○あるにもあらぬは、ありてもなきが如き身といふ義なり 一首の意は、おほかた、聞こたるが如く、毎度いたづらにしのび來たまふが、まことに、悲しき事よ。我はくらにこめられて、あれども無きが如き、身をも知らでとなり

と思ひをり、男は女しあはねば、かくしありきつゝ、うたふ。

(語釋) これもひをりは、女のなり。右の歌は、女の心中に思ひをるのみにて、もとより、倉の中なれば、うたふべきにあらず。故に此は、女の心を知るによしなく、いつまでも、女にあふまでは、うたひありくなり○女しのしは、例の助辭なり○かくしありくとは、前の笛ふきうたうたひて、女に逢ふまでは、ありくをいふ

いたづらにゆきてはきぬるものゆゑに

見まほしさにいさなはれつゝ

(語釋) 物ゆゑには、ものながらの義なり○つゝは、いひまほして、のこる意をふくめたるなり○一首の意は、かひなき事に、ゆきては歸りきぬるものながら、逢ひ見んもおもふこゝろに誘はれつゝ、なほ、度々ゆく事よとなり○この歌は、古今集に見えたるうたなるを、例のよきほとのところに、用ひなせるなり

「水尾の御時なるべし。大みやす所は、染殿の皇后なり。五條のきときとも」



(語釋) 此の一段のさま、水尾(清和)帝の高子を寵し給ひし時のさまにかきしかば、「水尾の御時なるべし」といひ、且、うの頃に、大夫人と聞ゆるは、御母染殿の後なれば、染殿の皇后なりとかけり、されど、寔に高子のいとこと申すは、文徳天皇の御母、五條后なれば、いと子といふによりて、五條の後といふ説もありとて、後人の註せるが、本文となれるなるべし。さて業平朝臣と、高子と、相知りたるは、文徳天皇の御時なるべし。いかにとなれば、業平は、仁明天皇の御時、正六位上にて。文徳實錄には、一所も見ぬす。清和天皇の貞觀四年に、正六位下より、從五位下に轉じて、右近衛權少將となり。同五年、左兵衛佐と見えてより、官位、いよく、昇進せり。然れば、此の文の如きと、清和天皇の御時に至りては、あらざりける證にて、文徳天皇の御世にありし罪なりしを知るべし。さて染殿后も、貞觀六年に、皇太后となりたまひ、高子も、同八年に女御となりぬ。然るを、大みやす所といふこと、例の物語といひながら、實をたづぬれば、田村天皇(文徳)の御時の事にて、田村の御母后、五條后のまだ大みやす所と申せる時の事ともひ定めて後、この物がたりの時代をも、人をも書きまざらしたるを知るべしと、古意にいへり

(六十五段)むかし男、津の國に志る所ありけるに、あに弟、ともだちなどひきおて、なにはのかたにいきけり。なきさを見れば、船どものあるを見て

(語釋) しる所とは、領地の義なること、前に委しくいへり。攝津の國に、領所あるによりて、兄弟朋友うちつれて行きととなり。こゝは、難波の浦へ、眺望にゆきたるなるべし。○舟どもとは、多くの舟あるをいふ

なにはづをけふころみつの浦とどに

これや此の世をうみわたるふね

(語釋) みつの浦は、三津の浦なり。故に「とどに」といへり。三津を數の三つに取りなせるなり。三津浦は、日本紀、齋明天皇の卷に、發自難波三津之浦とある所なり。又、三つに見るをかけてはいへるなり。○一首の意は、難波津を、今日見るに、三つの浦とどに、舟どもかすくあり。これや、此の世をわたるありさまならん。こゝの海わたる舟はといふ意なり。まことに、波間こゝ舟は、世をわたるにたふべきものなればなり。○うみをわたるを、古人の説に、世を倦みといふにかけたりといふ説もあれど、さまで、深く見るにも及ばざるべし。たゞ、海渡るの義にてあるべし

これをあはれがりて、人々歸りにけり

(語釋) この歌を、人々めで、歸りにきとなり

(六十六段)むかし男、せうわうしに、おもふとちかいつらねて、いづみの國へ、きさらぎはがりて、いきけり。

(語釋) せうわうは、逍遙の字音なり。逍遙は、日本紀に、アソアと訓みれるが如く、心をやりて遊ぶをいふ。○思ふとちは、今言に氣のあへるといふに同じく、睦しき人々をいふ。○かいつらねは、かきつらねにて、かきは、添へたる詞なり。ひきつれての意なり。○きさらぎは、陰曆、二月をいふ。衣更着の義かどや

かふちの國、いこまの山を見れば、くもりみ、はれみ、たちねる雲やます。あした



よりくもりて、ひるはれたり。雪いとまろう、木の末にふりたり

(語釋) 生駒山は、峯をかぎりて、東は大和、西は河内なり。其の和泉の國へゆくどて見る方は、河内なれば、こゝには、河内の國、いこま山とはいへるなり。くもりみはれみは、くもりつ、はれつといふに、ほゞ、同じ。〇たちゐる雲は、起ち居る雲にて、峯などより起る雲と、又、静まり居る雲といふ。さて昨日までは、さやかなりしが、今日は、朝より雪空になりて、晝はれたれど、見わたせば、雪ふかくつもりぬとなり。けしき見るやうなり

うれを見て、彼のゆく人、なかにたゞひとりよみける

(語釋) 聞てえたるが如し

きのふけふ雲のたちまひかくこふは

花のはやしをうしとたりけり

(語釋) かくさふは、かくすを延べたるのみ。〇一首の意は、雲のたちまひかくすは、花の林のうつくしきが、人に見はやするゝを、嫌みてならんとなり。〇雪いとしろう木の末にふりたるは、まことの花の林の如く見ゆるまゝに、例のをさなく詠みたるなり

(六十七段)むかし、男、いづみの國へいきけり。津の國、すみよしの郡、すみよしの里、すみよしの濱をゆくに、いとおもしろければ、おりおつゝゆく。ある人、すみよしの濱をよめといふに

(語釋) 郡も郷も濱も、同じ名の所を以て、詞のあやとし、さてれもしろければといひて、まことに

其の所の景色のよきまに、書きなせるなり。〇おりおつゝは馬より下りて、眺望もし、又、あるきもするをいふ

雁なきてきくの花さく秋はあれど

春のうみべにすみよしの濱

(語釋) 此の歌は、聞てえたる如く、雁なき、菊の花さき、いろく人の愛する秋はあれど、其の秋のけしきも、春の海邊にはまさらじとなり。新釋に、春のうみべにといひて、まさらじといふ意をこめ、すみよしのはまといひて、霞わたれるけしきを見ればといふ意は、いはでしらせたる歌のたくみなり。歌の詞に、みな人、よますなりにけりといふも、歌のたくみなるをめでゝの事なりといへるは、解し得て妙なり。〇住吉をすみよしといふには、後の事にて、こゝも、スミノエとあるべしといふ説あれど、すみよしといへるも、新らしきことにはあらず。和名抄などにも、すみよしと訓めり。されば、あるくはスミノエといひし事、論なけれど、此の物語の頃には、すみよしといひしなるべし。土佐日記などにも、すみよとあり

とよめりければ、みな人よますなりにけり

(語釋) 上の歌をめでゝ、皆人、歌をよますに歸りきとなり

(六十八段)むかし、男ありけり。うの男、いせの國に、かりの使にいきけるに

(語釋) かりの使といふは、勅使をつかはして、時をせさせて、捕らせ給ふ事なり。拾穂抄に、國守の國を治むるやうを見せたまはんために、狩の使として、つかさず事なるべしといへるは、さもあ



るべし○此の條は、古今集、戀の三に、業平朝臣の、伊勢の國にまかりける時に、齋宮なりける人にいとみそかにあひて、又のあした、人やるすべなくて、思ひをりけるあひだに、女のもとよりおこせたりけるどて、この二首あるを、かく詞をかへて、一條とせるなり。さて狩の使の事は、史には、使の人々をも、前の事をも、委しく記したれど、業平朝臣をつかはされし事見えず。此の朝臣、もはらざる事すべき年齢は、清和天皇の御代なれど、此の御代には、狩の使はとめられて、一度も此の事なし。陽成天皇の元慶八年に、再びおこされたれど、此の朝臣は、既に卒せり。されば、例のあらぬさまに、時代を作りなせるなり

かの齋宮なりける人のおや、つねのつかひよりは、此の人、よくいたはれといひやりけり。おやのいふ事なりければ、いとねんころに、いたはりけり。

(語釋) 齋宮は、いにしへ、天皇の御即位ある毎に、内親王、又は、女王の、いまだ、嫁し給はざるを選びて、伊勢の神宮と、加茂神社とに、奉祀せしめ給ひぬ。共に之を齋王イハヒミといひ、其の居所を、齋宮といふ。又、伊勢なるを、齋宮といひ、加茂なるを、齋院といひき○おやは、母おやなるべし○いたはれは、今言と同じく、大切にせよといふ義なり○此の齋宮なる人を、ある説に、怡子内親王に、文徳天皇の皇女、惟喬親王の御同腹、御母は、紀の名虎の女、靜子なりといへり。此の文にも、惟喬の親王、紀の有常、業平のしたしく交れるよし見ゆれば、殊に、ねんころにせよと、母のいひやれると有るなを以て考ふれば、より所あるに似たり。然るに、古意など、いたく、之を辨じて、齋宮は、皇女なるが上に、最、神聖なるべきものなるに、業平と通せるやうの事はあるべからずといへど、は

じめにもいへるが如く、當時は、男女の間、まことにみたりがましく、淫猥の氣、天地に満ちたる時なれば、其風俗をにくまば、別論なれど、ひとり、業平のみ責むべきにあらず。かゝる風俗の世には、又、皇女といへども、臣下と通じ給ひしことなしともいふべからず。當時を評するに、今日の如く、男女の間の關係、整然たる倫理を以てせむるは、酷といふべし。當時、かゝる事ありたりとて、何ばかりの事かあらん。されど、むかし男ありけりとやうに書きおこしたる一條の物語なれば、之を以て、必しも、人をおし、時代を考ふべき、必要なしといは、もとより別論なし

あしたには、かりに出だしたて、やり、ゆふさりは、こゝにかへりこそせけり。かくねんころに、いたはりけるほどに、いひつきにけり。

(語釋) 出だしたて、は、齋宮の御心つけて、出だしやり給ふなり○ゆふさは、夕至ユフサの義なり○こゝにかへらせけりは、齋宮へかへらせ給ひしなり。狩の使は、國司のもとにやどるがつねなれど、母よりよくいたはれといひおこされしかば、特別の御もてなしにて、齋宮の殿にやとし給ふよしなり○いひつきにけりとは、ねんころに、いたはり給ふをたよりに、いひよりつきて、密事ヒソカいひたまひしよしなり

二日といふ夜、男、われてあはんどいふ。女も、はた、あはじともおもへらば。されど、いと人めしげければ、あはず。

(語釋) 二日といふ夜とは、今言に、二目メノ晩などいはんが如し○われてあはんは、わりなくあ



はんの義なり。わりなくは、道理なしの約言にて、無分別になどいふに同じ。古今集の俳諧歌に、よひのまに出で、いりぬるみか月の、われてもの思ふ比にもあるかなどいふ歌も、わりなくもの思ふといふ意にて、こゝとおなじ用ひさまなり。○はたは、又の意のかるき詞といふ説、まづ、よろしからん。この事、なほ、前に委しくいへり

つかひさねとある人なれば、とほくもやどさず。女のねやも近くありければ、女人をしづめて、ねひとつばかりに男のもとに來にけり。

(語釋) つかひさねとは、使の中に、主とする人をいふ。婢さね、客さねなどいふも同じ。日本紀に、主神をかみさねと訓みたるによるに、これも、使主とかく意なるべし。○とほくもやどさず云々は、齋王、すなはち、内親王の御ねまも、殿中のおくまりたる間なるべく、又、此の勅使をやとせし給ふ所も、とほくはなれたる室にはあらで、いはゆる、上段の間なるべし。されば、女の間も近くありければとはいへるなり。○しづめては、殿中の人々をねさせて、後のこゝろなり。○ねひとつとは、昔は、一時を、四つにわかちて、子一つ、子二つ、子三つ、子四つとやうにいひき。他の時もしかり。いはゆる、子の一刻ころに、男の室へしのひ來にけりとなり

男、はた、ねられざりければ、どのかたを見出だしてふせるに、月のおぼろなるに、人のかけするを見れば、ちひさきわらはをさきにたて、人たてり。

(語釋) 男、はた、ねられざりけりと、女の事の心にかかりてなり。○どのかたは、戸の方ともいへべけれど、外の方の意なるべし。こゝは、男かもしも女の來たらんかと、外の方の月を見ながら、はしちかく、かりに倚り臥し居たるさまなり。○ちひさきわらはを云々、れとなは、心かき給へば、少女をつれ給へるよしなり。いかに殿中なりとも、貴女は、ひとりあるき給はねば、しのひながらに、少女を供につれ給へりとなり。又少女は、あとにつれ給ふべきに、さきにたて、とあるは、少女は、殊に殿中をあるきて、勅使のやせれる室なをも、かねて、能く知りたりけんゆゑに、さきにたて、しるべせしめられきとなり

男、いどうれしくて、わがねる所におていりて、ねひとつより、うしみつまであるに、まだ、何事もかたらひあへぬほどに、かへりにけり。男、いとかなしくて、ねむなりけり。

(語釋) わがぬる所におては、我がたくなる間へつれゆきてなり。○ねひとつより云々は、前にもいへるが如く、子の一刻より、丑の三刻までなり。○まだ何事も云々、相思ふ男女の逢ふは、秋の長夜も短きならひなれば、まして、春の夜とて、いまだ心に思ふかたはしをだに、語らぬうちに、女はかへりにけりとなり

つとめて、いぶかしけれど、わが人をやるべきにあらねば、いと心もとなくて、待ちをれば、明けはなれて、しばしあるほどに、女のもとより、詞はなくて

(語釋) つとめては、朝の將に明けはなれんとする頃といふな。最の字をあつといふかしは、萬



葉に、詩偈の字をイブカシども、オボツカナシども訓める意なり。なごりをしくて、男ねずなりにける事なれば、心の中に、思のひすばれて、我よりたよりやるべきか、又、彼方よりたよりやあるなど、まつ間の、どやかくに、心の亂れて、はれぬをいふ○あけはなれては、夜の明けて後をいふ。例のわらはが文以て來たるなり。男、披きて見れば、文の詞はなくて、歌のみありきとなり。さて文の詞のなきは、思の切にて、いかにともいふべきよしなきさまなり

君やこしわれやゆきけんおもほはす

夢かうつゝかかねてさめてか

(語釋) 一首の意は、昨夜、相見しやうにればゆるは、君が我が許へ來させるにか、或は、おのれが、君のもとへ行きしにか、其のいつれなるかを覺えず。さては、夢にてありしかとなり。はかなく別かれて、後朝の切なる心、さもありぬべし○夢かうつゝかとは、夢かといふが主にて、うつゝかといふは、軽く見るべきこと、新釋の説のごとし。漢文の緩急なといふも、急の意強く、緩の意かるし。かゝる例は、和文にも、漢文にも、あることなり○萬葉に「うつゝにか君が來させる夢にかもわれはまごへる戀のしげきに」とあるを、本歌として、つくれる歌なるべし

男、いといたう、なきて、よめる

かきくらす心のやみにまごひにき

夢うつゝとはこよひさだめよ

(語釋) 下の句、こよひさだめよを、古今集には、世人さだめよとあり。こゝはなほして引けるなるべし○一首の意は、昨夜のことは、我はたかきくらす心に、君のおほせらるゝ事を、定むべくもあらねば、今宵來て、いづれとも、定め給へとなり○心のかにかくに亂れて、暗くなるを、やみにたごへていへるなり。これも心の切なるさまあらはなり

とよみてやりて、かりに出でぬ。野にありけど、心はうらにて、こよひだに、人しづめて、いととくあはんと思ふに、

(語釋) かくて、獵に出で、野を踏みわけ歩けど、女を思ふ心の切にて、うかくと、心の空なるよしなり。萬葉に「わざもてが夜戸出の姿見てしより、心空なり土はふめども」などあり○こよひだにとは、昨夜はあふほどもなかりしかば、せめて、今宵は、人をはやくねさせて、あはんとおもふよしなり。人しづめては、人をねしづましむるをいふ

國のかみ、いつきの宮のかみかけたる、狩の使ありとき、て、夜ひと夜、酒のみしければ、もはら、あふ事もいせで、あけば、尾張の國へこさんとすれば、男も女も、人しれず、血のなみだをながせど、いあはむ。

(語釋) 國のかみ云々は、伊勢の國守にて、齋宮寮の頭を兼ねたるをいふ。かけたるは、兼ねたるの義なり。眞淵翁の古意に、欠けたると見られたるは、つたなし。兼をかけたといふは、常のことなり。この國守にて、齋宮寮の頭を兼ねたる人が、齋宮に來たりて、勅使を饗應して、終夜酒筵を張りきとなり



り。此の酒宴のために、逢ふ事も出来ず、さればとて、明日は、尾張の國へ越さんとすれば、悲しさのあまりに、血の涙を流して、わかれぬとなり○もはらはは、何事にもあれ、其の事のみするをいふ。こゝは、一向に、又、少しもなといふほどの事なり

夜、やうく、あけなんとするほどに、女がたより、出だすさかづきに、うたを書きて、出だしたり。どりて見れば、

(語釋) 夜漸々あけんとする頃、女の方より、杯のおもてに、歌をかきて、出だせりとなり

かち人のわたれどぬれぬにしあれば

(語釋) かち人は、徒歩人なり○えにしは、縁に、江をかけたるなり○歩にてわたるに、ぬれぬほどの水は、いと浅きを、二夜とだに逢ひがたき、浅き縁なりといへるなり。たゞ一夜、かりろめのちぎりにて、かくわかれまらするは、まことに浅き縁よとなり

どかきて、末はなし。其のさかづきのうらに、つい松のすみして、うたの末をかきつゝ

(語釋) 末は、歌の下をいふ。歌の上下を本末とも、つねにいふ。さて下のなきは、男につきてよとの意を示したるなり。又、杯のうらに書きたるは、おもてに、本のかきてあるが故なり○つい松云々新釋にいはいく、つい松は、續松を音便にしかいへるにて、たい松と同じものなり。このすみしてかけるは、よるの道は、さきにたつ人、松をもして、ゆくことにて、江家次第、二十の巻、童五位元服の條

にも、五位二人取續松明、並前行とあり。こゝも、夜をこめて、出でんとするゆゑに、とも人の、松ともして、庭にまち居るべければ、其のわちたるすみをひろはせて、書けるなり。旅よそひして、はし近く出で居たるさま見るが如し。をりふしあたり、硯もなく、いそぐゆゑにもあるべし。臆斷、古意など、つい松といふ名の意のみいひて、うのすみしてかけるゆゑをときもらされたるは、おろそかなり云々

またあふ板の關はこねなん

(語釋) こは、又、いかにもして、逢ふ時もあらんと、女を慰めていへるなり。其の中に、都にかへりても、逢坂をまたも越えて、伊勢に來たりて、逢はんといふ意をこめたるなり。抑、この贈答は、互にしげき人目を忍びて、はかなきちぎりにてわかるゝなげきを、江の水の浅きにいひなし、又、あひ見んと慰むるを、逢坂の關をゆるに擬へなど、すべてかくし詞にて、巧にしくみたるなりとて、こゝに歌の末といふは、七々の句なるゆゑに、かりに末といへるにて、實は連歌ともいふべきにて、おまゝの思ふ心を述べたるなり。されば、あながち、本末を合はして、一首の歌とはいふまじきなり。契沖法師は、一首の歌にせんとて、かにかくに説きなされたるは、なか／＼にわろし

あくれば、をばりの國へ越えにけり

(語釋) 越えとは、國の境を出づるをいふ。伊勢より、尾張へ行くに、山もなければ、越ゆるは、河を越えたるなるべしといふ説もあれど、いかゞ、河にはわたるとこそいへ。越ゆるとはいふまじきなり。たゞ、國境を出でたるを、こゝには越ゆるとはいへりと見る方、おだやかなるべし、



(六十九段)むかし、男、かりの使よりかへりきけるに、大淀のわたりにやどりて、  
うつきの宮のわらはべにいひかけける

(語釋) 大淀は、延喜の神名式に、伊勢の國、多氣郡に、竹大與杵の神社ありて、即、齋宮の同じ郡に  
て、遠からぬ所なり。かつ齋宮くだり給ふ時、まづ、こゝにはらひして、齋宮へ入りたまふ例なり。あ  
る説に、伊勢、尾張の道のわたり口なりとあるは、いかゞあらん。こゝは上の條の同じ度にて、尾張  
より京へ歸るとて、伊勢を又經るに、大淀といふところに宿りたれば、齋宮より、御使のあるが中  
に、彼の心じりのわらはべもありしかば、それにいひかけたりとなり

みるめかるかたはいづこをさとして

われにをしへよあまのつりふね

(語釋) みるめは、見る目を、海松<sup>うみまatsu</sup>めにかけて、さて海松のある所は、海人のよく知れるものなれ  
ば、釣舟の竿もて、さし教へよといふ、たとひ歌なり。彼の見し後、あひ見るよしもなく、わびし  
に、齋宮に又あひまゐらせんには、いかがしてよからん、一度みちびきせる童女なれば、かうくし  
てよからんと、吾にをしへよとなり。それを、海邊にての事なれば、その物もてたとひたるなり。  
又しのびたることにて、人に知られぬやうに、いへるにてもあるべし。この歌は、小野篁の「人には  
つけよあまのつりふね」の歌をれもひて、例の記者のつくれるなるべし

(七十段)むかし、男、伊勢の齋宮に、内の御使にてまねりければ、彼の宮にすき

こといひける女、わたくしことにて

(語釋) すきことは、舊説に、好色の事とも、又、榎子<sup>えのこ</sup>といふ女の名なりともいへり。何れにても聞  
てゆれど、こゝは、好色の意に見る方よろしからん。常に好色なるからに、勅使にさへすきといひ  
かけたるなり。この女は、齋宮の侍女なり。さてすきといふ言の原義は、すべて、物をこのまじうす  
るをいふ。それより轉りて、好色、また、風流などの義ともなりぬ。○わたくしこととは、齋宮の御  
を、勅使へつたふるにはあらで、侍女がわたくしことにて、よめる歌なりといふ意なり。  
ちはやぶる神のいがきもこねぬべし

大宮人のみまほしさに

(語釋) ちはやぶるは、神といふ語の冠辭なり。○いがきは、忌垣<sup>いまたか</sup>の約にて、みだりに、人の入るまじ  
垣をいふ。即、神のいます所の垣は、みだりに、人の入るまじきものなれば、たとへていへるなり。○  
大宮人とは、殿上の大内に居る人を、ひろくいふ稱にて、こゝは、勅使をさしていふ。○一首の意は、  
大宮人のせちに見まほしければ、神の御禁制なる、忌垣も、みだりに越えて見んと思ふなりよし、た  
りありて身のほろふるも、いとほしとなり。さて神とは、齋宮をしたにさしていへるなり。齋宮の  
したひたまふ君を、わたくしに慕ひまつることなれば、齋宮のたより必あるべしと、それをあそ  
る意を、含めたるなり。これをはしがきに、わたくし事にてとは、かけるなり。○さてこの歌は、万葉  
に、「ちはやぶる神のいがきもこねぬべし、今はわが名のをしけくもなし」、又、同集に、「ゆふかけて  
いはふやしるもこえぬべし、おもほゆるかも戀のしげきに」などあるによりて、例の記者のつくり



なせるものなるべしとおぼゆ

男かへし

こひしくばきても見よかしちはやぶる

神のいさむる道ならなくに

(語釋) 道ならなくには、今言に、道デナイノニなどいはんが如し○一首のこゝろは、男女相慕ふは、神の禁じ給ふ道ならぬに、神の忌垣も越えぬべしなどやうに、ことごとしくいふべき事ならねば、戀ひしくば、來てあひ見よかしとなり

(七十一段)むかし、男、伊勢の國なりける女に、又もえあはで、隣の國へいくとていみじう恨みければ、をんな

(語釋) こゝの女とあるは、上の齋宮にて、一夜あへる人をいふと見えたり

大よどの松はつらくもあらなくに

うらみてのみもかへる浪かな

(語釋) 松を女に、波を男にたとへて、我がつらきにはあらぬを、われを恨みがほに、かへるかなと、女のいふなり○この歌は、古今集、在原元方のうたに、「あふことなきにしよる浪なれば、うらみてのみみたちかへりける」と、あるによりて作れるなるべし

(七十二段)むかし、そこにはありときけど、せうそこをだに、いふべくもあらぬ

女のあたりをありきて、男のおもひける

(語釋) せうそこは、消息の字音にて、文、また、詞をいふがつねなれど、こゝは、懸想詞をいひかくる事だに出來ぬ女の上しなり。さるは、まもる人などのありて、きびしきゆゑなるべし

めには見て手にはとられぬ月のうちの

かつらのことき君にぞありける

(語釋) 月中桂樹のことは、支那にて、はやくよりいへり。和名抄にも、兼名苑をひきて、月中有河、河上有桂、高五百丈とあり。我が國にても、ふるくよりいひきを見ゆ。萬葉集に、「めには見て手にはとられぬ月のうちの、かつらのこときをいかにせん」といふ歌あり。こゝのは、萬葉のを、少しかへたる例のわざなること、明らかなり

(七十三段)むかし、男、女をいたううらみて

(語釋) 一本に、この詞をおとして、前段につづけたるは、わるし

いはねふみかさなる山はへだてねど

あはぬ日おほくこひわたるかな

(語釋) 岩ねふみかさなる山とは、岩ほなを踏みつ、越ゆる山は、深く險阻なるものにして、人の通ひがたきものなれど、さる重なる山は、隔てねど、相思はねば、あはぬ日おほく、戀ひし戀ひしと思ひわたるかな、まことに、つれなき、君が心かなと、うらみて、歎息したる歌なり○この歌は、萬葉



集に、「石根ふみかさなる山はあらねども、逢はぬ日おほみ戀ひわたるかな」とあるをとりて、例の作者の、少しかへたるものなること著し

七十四段)むかし、男、いせの國なる女に、京にゐていき、あはんどいひければ、女

(語釋) 男、伊勢の國なる女に逢ひをめしかと、伊勢にては、ながく逢ひかたき事情おこりて、京につれゆきて、あはんどいひけるなり

大よどのほまにおふてふみるからに

心はなきぬかたらはねども

(語釋) 大よどの濱に生かておは、みるの序にて、意味なし。みるは、海松に、見るをかけたるなり。一首の意は、よそながら見るからに、徳のこゝろは、なき和きて、をさまれば、此の國に居て足れり。京へゆくは、否といへるなり

といひて、まして、つれなかりければ、男

袖ぬれてあまのかりほすわたつみの

みるをあふにてやまんどはする

(語釋) 海松は、袖をぬらして、海人が、かりては濱にほすものなれば、上の句は、みるといふ序にいへるのみ○一首の意は、見るからに、心はなきぬといふは、よそながら、あひ見るを逢ふとしてやまんとするにか、さてく、うなたは、薄情なることなれど、恨みたる意なり

女

岩まよりおふるみるめしつねならば

しほひしほみちかひもありなん

(語釋) 此の歌の解、諸抄まちくなり。古意には、こはかく見る事だにかはらであらば、之を朝夕のかひにてころあるべき物なれど、右の大淀の歌と、又、同意なり。ましてつれなかりければとかけるは、こゝをいふなり。又、海松は、岩に生ひて、かつ色かへぬものなれば、つれなくばといへるは、うれによれる語にもあるべし。しほ干、汐満は、萬葉に「あしづの海しほみ汐みつ時はあれど、いづれの時はが戀ひざらん」とよめるは、時あることをいひ、此の歌には、朝夕に、常にいふ意にていへり。然るを、此の語に泥みて、或は男の心のかはりかはらぬたどひと思ひ、或は世の中は、かはる事もあれば、逢ふ時もあらんをいふなと思へるは、皆わろし云々と見えたり。又新釋には、いはまよりは、岩まにといふ意なり云々。此の歌、おふるといふまでは、みるをいはんための序なり。みるめは、海松を詞のかもてには、意は見る目なり。しほは助辭なり。さてしほひ、しほみちといふ詞、拾穂抄には、男の心のかはる意にいひ、臆断には今こそえあはぬ時なりとも、又、あふ時のあらんずるをまてといふ意と、又、しほのみちひの定めなき如くなれば、さだめなきをたのみて、かひありてあふことあらんやといふ意と、二説に説き、古意には朝夕に、つねにといふ意なりといはれたり。これらの説をも、みなわろし。師説に、岩まより云々、此の歌の四の句、説き得たる人なし。しほひしほみちは、とまれかくまれといふ意なるを、海の詞にて、いへるのみなり。今



はどもかくもあれ、未つひには、かひありて逢ふこともあらんといへるなりと、いはれたり。此の説も、なほ、とき得られたるにあらず。未つひには云々といふこと、此の歌のころに、更になき事なり。此の女は、よろながら見るのみにして、逢ふことは、否といひはてたるなり。さるからに、又此の歌の、かへしに、つらき心は、袖のしづくかと、男のつよく恨みたる歌よめるなり。よく思ふべし。おのれ此のうたの意をときあかさ。よろながらにても、逢ひ見ることつねならば、京にいきても、此の伊勢の國に居りても、いづれにしても、かひありなんといひて、なほ、京にいふ事を、うけひかぬ意なり。かひありとは、見る事のつねならば、それがかひあるなりと、女はおもひていへるなり、かひは、是を詞のおもてどしたり。しほひに、貝のあるは、更なり。しほみちに、貝もありなりとは、涙の下にあるをいへり。かく見ざれば、かひもといふものには聞えず。たどへたる意をいはず、京にいきて、かひあるは更なり。伊勢に居りても、なほ、かひもありといへるなり。それは見ることのつねなるゆゑなり。しほひは、しほのひきされば、を去りて、京にいふ事にいひ、しほみちは、こゝにみちてある事なれば、伊勢に居るにたどへたりといふはひがことならじ。かくときてこそ、一首のころつらぬきてはきこゆれといへり。新釋の説。まことに、こまやかにして、舊註にまされり

又、男

涙にぞぬれつゝしほる世の人の

つらきころろは袖のしづくか

(語釋) 涙にぞぬれつゝしほるは、人のつれなきさに、涙の雨の如く、袖にふりかゝれば、堪へがたくて、ぬれくしほるさまをいへるなり。世の人の、つらき心は云々は、此のしほる袖の雨のおほきは、一とほりの涙にはあらじ。すべて、世の人のつらき心は、袖の涙となるにか。されば、つれなき君が心も、我が涙となりて、かく袖を、いみじく、ぬらすならんといふ意なり。○袖のしづくかは、袖の涙といふ意なり。たゞ上に涙にぞ云々であるがゆゑに、「しづくか」といへるなり

よにあふことかたき女になん

(語釋) 世の中に、すぐれて、逢ふこと難き女になんとなり。

(七十五段)むかし、二條の後の、まだ、春宮のみやすところと申しける時、

(語釋) 春宮のみやす所とは、春宮(皇太子)の御母儀をいふ。女御、更衣なども、御子を生みまつれば、御息所と申すなり。こゝは、二條の後の、いまだ、皇后に立ち給はずして、御息所と稱せる時のことなり。古今集、雜の部に、「二條后、東宮の御息所と申しける時、大原野に詣てたまひける日、よめる、在原業平朝臣」とて、下の歌あり

氏神にまうでたまひけるに、

(語釋) 二條の後は、藤原氏にませば、其の氏神は、天兒根命をいふ。この神は、鎌足公常陸の國にて生れ給ひしかば、そこにまつりてありしを、奈良の比、三笠山に遷し、又平安の都となりて。此の乙訓の大原野にうつし祭られたること、大鏡に見えたり。さるを、はじめて、大原野にうつし給ひしは、嘉祥三年に閑院の左大臣冬嗣公なりといふ説あれど、此の公は、嘉祥のまへ。天長三年に、薨じ



たまひぬゆゑに、閑院の左大臣云々といふ説は、實録をも見ぬ人のわざなり。さて二條の后を御息所と申しけるは、清和天皇の。貞觀十一年より、同十八年までの間をいふなるべし。(貞觀十一年二月一日、此の御息所の生み奉りたまふ皇子(陽成)太子に立ちたまひ、元慶元年正月一日に、御即位ましくて、其の御息所、高子は皇太夫人にのぼり給へばなり)ざるを、右の年月の間に、此の御息所、氏神詣のこと、實録にも、古記にも見ぬされば、おぼつかなければ、古今集と、此のおみとに、かくあるゆゑに、右の如く、東宮の母儀とはいふなり。

近衛つかさにさむらひける翁、人々のろくたまはりけるついでに、御車より九まはりて、讀みてたてまつりける

(語釋) 近衛つかさにさむらひける翁とは、時に業平朝臣を指したるなり。さて業平朝臣は、元慶元年正月(五十一の時)左近衛の中將となりたれば、近衛つかさとはいへるなり。然るに、今年、彼の太子(陽成)も位につき給ひしかば、御母を御息所とはいふまじきなり。又此の業平朝臣、貞觀六年に左近衛少將になりし時のこともいふべけれど、さては、高子を御めやす所と申さぬ以前のことなり。とにもかくにも、時代をかきひがめたるを、例の作者の心しらびなりける。○ろくは、祿にて、後世の褒美のこともいふと、前に委しくいへり

大原やをしほの松もけふころは

神代のことをおもひいつらめ

(語釋) をしほの松とは、ろくに鎮座し給ふ、天兒屋根神を松に擬していふなり。住吉の神を、住

吉の松など、歌にいふと同じさまなり。○天兒屋根神は、藤原氏の祖先の神にて、天孫降臨の時より、皇室を護り奉り、其功、他の神にすべし給へり。然るに、此の神の御子孫なる、東宮の御息所は、天皇をまもり奉る妃夫人などおほき中に、すべし給へることなれば、此の御息所のまうで給ふを見そなはずにつけて、御みづから、神代のことをおぼし出てたまふなるべしとなり。さて下のころは、松を御息所に比して、はやく密事をおぼし出で、や、此翁に、人より殊に御車より祿たまふならんといふ意をふくめて、よろこぶさまにぞりなしたり。かくとかすては、前の詞がきはいたづらになりぬべし。能く味ひてよ

とて、心にもかなしとや思ひけん、いかゞおもひけん、しらすかし

(語釋) とては、といひての義なり。○男、歌にしかよみて、心にもいかばかり、昔おもひ出で、悲しかりけんとなり。右の詞書のみにて、心をうへたるさま、猶あきらかならねば、此詞をうへて、さぞらしむるなり。いかゞありけんしらすかしとかきたるは、下意ありつらんよしをおもはせしむる例の作者のたくみなり

(七十六段)むかし、田村のみかどと申すみかどおはしましけり、その時の女御、九かき子と申す、いまそかりけり、

(語釋) 文徳天皇、崩御まして、山城の國、葛野郡、田邑の郷、眞原丘に葬り奉りぬ。(この時、天安二年八月)より、田村のみかどと申す。○女御かたき子云々は、文徳實錄に、嘉祥三年七月、藤原朝臣多賀幾子爲女御と見え、三代實錄の天安二年十一月の條には、從四位下藤原朝臣多加幾子卒、多加



幾子者右大臣從二位良相之第一女也、少有雅操云々と見えたり○いまそかりは、おはしますといふが如く、御座の字をあつること、前しに委しいへり

それうせ給ひてのちのみわざ、安祥寺にて、やよひのつこもりにしけり、

(語釋) たかき子のうせ給ひしは、天安二年十一月なること、前にいへるが如し○のちのみわざとは七七日の間の佛事をいふ○安祥寺は、或る説に、山科にあり。五條の後、順子の建てたまへる寺なりといふ。文德實錄に、齋衡二年六月、詔以安祥寺預於定額云々、三代實錄、貞觀元年四月の條に、綠皇太后御願、置安祥寺年分度者三人云々など見えたれば、この頃、おもくあつかはれし寺なることは、更に論なし○やよひのつこもりは、三月の下旬をいふ

人々、さゝげものたてまつりけり。たてまつりあつめたるもの、千さゝげばかりありけり。

(語釋) さゝげものは、捧物にて供物をいふ。之を字意のまゝに、ホウモチといへることも、物語女みに、これかれ見えたり○千さゝげは、捧物の數の多きをいふ

そこばくのさゝげものを、木の枝につけて、堂の前にたてたれば、山もさらに堂のまへに、うごき出でたるやうになん、見えける。

(語釋) 神佛、または、貴人に、物をさゝぐるには、必、木の枝につく。こゝは、堂のまへの廣きところなれば、特に大なる枝につけたりしならん。されば、まことに、山のうごき出でたるやうに見え

たるなるべし。この女の形容まことに巧なり

其のころ、右大將にいまそかりける、藤原の常行と申すいまそかりて、講のをはるほどに、歌よむ人々をめぐらして、けふのみわざを題にて、春のこゝろばへある歌、たてまつらせたまふ

(語釋) 常行大將は、天安二年十月、從五位下周防權守より、右近衛少將となりて、多加幾子の身まかり給ふ時は、いまだ官位ひくかりき。こゝは、後よりまきらして、かけるなり。さて此の常行は、右大臣良相公の一男にて、右の女御の兄君におはせり。さてこの人の、右大將になられるは、貞觀三年のことなり。時代をかきまきらせるは、例のことなり○講とは、法事にて、經を講じなどするゆゑにいふ。其間は、人皆、聞き居りて、他事すべきならねば、おはるほどに、歌よませらるゝなり

右の馬の頭なりける翁、めいたがひながらよみける

(語釋) 右の馬の頭は、時に業平朝臣をさせるなるべし。朝臣は、貞觀五年に、右馬頭となりぬ。此の御わざの比は、いまだ翁といふべき年ならねど、例のまぎらしたるなり○目はたがひながらは、さゝげ物を山なりと、見たがへてよめる歌のこゝろなればなり

山のみなうつりてけふにあふことは

春のわかれをどふとなるべし

(語釋) 此の女御の御わかれと、春(三月下旬なれば)のわかれとを、兼ねていふなり。その御わか



れを吊ふとて、山も入らば、此處へうつり来るならんと、をさなくよめるなり○山もみな云々といへるは、如來の入滅には、海水飛涌、大山崩裂すなど、經文に見えたれば、女御の身まかり給ひしを、如來の涅槃にならへ、且、その捧物を山と見たれば、即、山としてよめるなり○前にいへるが如く、女御のうせ給へるは、天安二年十一月十四日なり。辛未のその日より數ふれば、貞觀元年正月二日、四十九日にはあたるを、三月の下旬といひ、春のわかれとよみしなど、皆、日數をもかへたるは例のわざなり。さて此の歌は、作者のよめるなり

とよみたりけるを、今みれば、よくもあらざりけり。そのかみへ、これやまさりけん、あはれがりけり

(語釋) そのかみは、當時の義なり○あはれがるは、おもしろがるをいふ○こゝは、記者のよみてみづから、昔のことになしつるなり

(七十七段)むかし、たかき子と申す女御、おはしましけり。うせ給ひて、な、七日のみわざ、安祥寺にてしけり。

(語釋) 前と同じたびのことなるを、ここに、筆をおこしてかけるは、此の書につねなり。但こゝは、山科の事をいはんとてなるべし

右大將、藤原の常行といふ人、いまそかりけり。そのみわざにまうで給ひて、かへさに、山志なの禪師のみ子おはします。うの山しなの宮に、瀧おとし、水はしらせなどして、おもしろく、つくられたるに、まうでたまひて、

(語釋) かへさは、歸るさにて、歸途の義なり。こゝの女は、歸途に、山科の禪師のみ子のおはします宮にまうで給ひてと、つゞけて見るべし。さて其の間に、其の宮のさまをいひたるにて、この休歌にも、女にも、多きことなり○禪師のみ子は、法親王をいふなり。この頃、禪師といふは、法師といふに同じく用ひたるが如し○瀧おとし、水はしらせ云々、かのづから景色にはあらで、ことさらに、作りなしたるなり。下に、島このみ給ふ御子なりとあるに、照應せしめんと女のたくみなり。必をつけて見るべし

としごろよそには、つかうまつれど、ちかくは、いまだつかうまつらず。こよひはこゝにさむらはんと申したまふ。親王よろこびたまひて、よるのおましのまうけさせたまふ。

(語釋) としごろは、年來の意なり○よろにはつかうまつれと云々、遠ながら心を寄せて、仕へ奉れとの義なり。つかうまつるは、總べて、貴人に對して、そのために周旋奔走する事にもいひ、又は傍に侍して、御物語などすることにもいふ○さむらはんは、侍候する意なり○よるのおましは、新釋に、御子の夜の御座なり。晝は、おもての方におはし設けて、出で居たまひ、常行大將、止宿になりたれば、夜は、又、うちくの方にて、御酒宴などあるべしとて、夜の御座のまうけをさせ給ふなりといへり。されど、やはり、舊説の如く、常行大將を止宿せしむべき、寢所の設をさせ給ひきといふよき○さて山科の禪師の補王は、仁明天皇の四の皇子にて、眞正尹を聞てわしを、貞觀元年



五月に、入道したまへり。こも又、此の女御の後のみわざの頃は、まだ入道したまはざるを、昔、かきたがへたるは、例のことなり

さるに、かの大將出で、人れたばかりたまふやう、

(語釋) 出で、は、親王の御前より、退り出で、なり○たばかりは、たは添へていふ詞にて、たは、はかりといふに同じ。慮、また、測などの義にて、考へはかる事なれど、轉じては、人と相談するやうの事をもいふ。こゝはその意なり

みやづかへのはじめに、たゞ、なほやはあるべき。

(語釋) みやづかへとは、常行大將が、今夜、親王の御許にあれば、敬ひていへるなり○なほは、黙の字の意なり。なほあるとは、何ともせず徒にあるをいふなれば、なほやはあるべきは、其の反響にて、たゞ黙してあらるべきか、あらぬの意なり

三條のおほみゆきせし時、

(語釋) 三條のおほみゆきは、貞觀八年三月廿八日に、右大臣良相の、百花亭へ御幸ありし事をいふなるべし。此の事、三代實錄、十二の巻に見えたり。さて良相を西三條右大臣といへば、三條の大御幸とはいへるなるべし

紀の國の千さどのはまにありける、いとれもしろき石、たてまつれりき。

(語釋) 千さどのはまは、紀の國、熊野の邊なりといふ。海邊には、いろくの雅致ある石おほきものなれば、それを大御幸の時のためにとて、良相公へ、紀人の奉りしよしなり

大みゆきの後、たてまつりしかば、ある人のみさうしのみまへの溝にすゑたりしを、嶋このみたまふ君なり。此の石をたてまつらんとのためひて、御隨身舎人して、どりにつかはず。

(語釋) こゝも、例の詞を省きたれば、聞こえにくし。新釋の説よろし。其の説に、紀の國は、都に遠ければ、大御幸におくれて、もて来て奉りしかば、かみ無くて、御曹司の前の、みまにすゑおかれたるなり。島このみ給ふとは、庭をつくるには、水のながれ、島山などのけしきあるさまにつくる事なれば、今の世に、庭をこのむといふを、昔は、島このむといひけん。さまに瀧おとし水はしらせなどしてといへる、すなはち、庭このみ給ふしわざなり。庭好みたまふ人は、石をめでたまふものなればとて、奉り給ふなりといへり○御隨身舎人は、常行大將のとも人なり

いくほどもなくて、もてきぬ。此の石、きゝしよりは、見るはまされり。これを、たゞに奉らば、すゑなるべしとて、人々に歌よませ給ふ。

(語釋) たゞには、直ちになり○すゑなるは、漫に、又、不慮になどの意なり。こゝは、その石を、徒に奉りては、あまり不慮なる心地して、興なしとて、歌よませ給ふとなり

右の馬の頭なりける人なん、あをき苔をきざみて、まさるのかたに、此の歌をつけて、奉りける

○伊勢物語講義



あかねども岩にすかふる色見えぬ

心を見せんよしのなければ

(語釋) あかねどもは、飽かねどもなり○かふるは、代ふるなり○一首の意は、親王をおもひ奉る心のほそを見せむらせんと思へど、心は色も姿もなく、見せ奉らんやうなし。されば、岩に代へ表して、見せたまつる。これのみにて、足れりと思ふにはあらねどもといふ意なり

となんよめりける

(語釋) 聞てえたる如し

(七十八段)むかし、氏の中に、みこうまれたまへりけり。

(語釋) むかし云々、何の氏ともいはず、打ちつけにかくいへるは、此の書は、業平物語なれば、かく書きて、在原氏の中にいふ意なり。さく此の皇子は、行平卿の御むすめ、更衣文子、貞観十六年に、清和天皇の御子、貞數親王を生みたまつれる事をいふなり

御うぶやに、人々歌よみけり。御おほちがたなりける、翁のよめる

(語釋) 御うぶやにとは、御産屋の祝にの義なり。産家に、三日の夜、七日の夜なさいはふは、古よりの例なり○御おほちがたは、御祖父方にて、行平卿の弟、業平朝臣をさせるなり。この時、業平朝臣は、五十一歳にあたるべければ、翁といふもよしありけり

わが門にちひろあるたけをうゑつれば

夏冬たれかかくれざるべき

(語釋) ちひろは、千尋の義にて、殊に丈たかき竹のことなり○わが門は、我が門と、一門とをかねていへるなり○一首の意は、我が門のあたりに、世にまれなる、千尋の竹を栽ゑて、その陰もひるれば、我が氏族、家親のもの、たれか、このかげにかくれざるべき、皆、かくれて、夏は、すゝみ、冬は、霜雪をおほひて、あたゝかならんとなり。さて裏に、一門に、珍らしく御子生れ給へば、此の皇子の御陰によりて、氏族のもの、ことごとく、御恵を蒙るべしといふ意を、含めたるなり

これは、貞數のみこ、時の人、中將の子となんいひける。兄の中納言、行平のむすめのはらなり。

(語釋) 聞てえたる如し。但、この文は、一本になし。後人の書き入れたるものなるべしと、先輩

もいはれたる如く、なき本をよしとす

(六十九段)むかし、おどろへたる家に、藤の花うゑたる人ありけり。いとおもしろうさけりけり。そよひのつむもりに、雨をぼふるに、をりて人のもとへたてまつるとて、よめる

春はいくかもあらじとおもへば



(語釋) 三月の下旬にて、殘る春は、幾日もあらねば、雨の降るに、強ひて、この藤の花を折りて、たてまつる事よとなり

(八十段)むかし、左のおほいまうちぎみ、いまろかりけり。賀茂河のほとりに、六條わたりに、家をいとおもしろくつくりて、すみたまひけり。

(語釋) 左のおほいまうちぎみとは、左大臣の事なり。こゝは、左大臣、源融公のことなり。公は、嵯峨天皇、第八の御子にして、承和元年に、元服し給ひ、源姓を賜はりき。嘉祥三年、從三位に叙せられ、貞觀四年、左大臣となり、寛平七年、七十四にして、薨せられ、正一位を賜らる。此の公の河原院は、六條、坊門の南にありき。こゝは、其の家をいふなり。古今集の「君まさで烟たえにし鹽がまの、うらさびしく見えわたるかな」といふ歌の註に、顯昭がいはいく、河原の院に、いみじき家を造りて、池をほり、水をたへて、潮を毎日三十石づゝ汲み入れて、海底の魚貝等を住ましめたり。陸奥の國のしほがまの浦をうつして、鯉の鹽やく屋に、烟をたへせて、玩ばれけるなり云と見えたり。なほ、源順の、河原院の賦にも、此のこと、委しく見えたり

かみな月のつてもりがた、きくの花うつろへるさかり、もみちのちくさに見ゆるなり。

(語釋) かみな月は、陰曆、十月をいふ。うつろへるさかりとは、衰へうつろふ最中といふにかなじ。ちくさは、千種の義にて、紅葉の、こく薄く、さまざまに見ゆるをいふ

みてたちおはしまさせて、夜ひとよ、酒のみしあそびて、夜あけもてゆくほどに、

此の段のおもしろきをほむる歌よむ。そこにありけるかたおおきな、板じきのしもにはひありきて、人にみなよませはて、よめる

(語釋) 夜ひとよは、夜をほしなり。酒のみしは、酒宴するをいふ。夜あけもてゆくは、夜の漸く明くるをいふ。もては、かろく見るべし。かたる翁は、下賤の翁の義なり。かたるは、もと、乞食をいふ語なれど、轉じては、卑賤なるものをいふ。板じきの下とは、疊をしきたる次なる板敷の、其の下の方の地上をいふ。人に皆よませて云く、卑賤なる翁なれば、人にですぎぬやうに、皆、人のよみたるのちに詠むさまなり

しほがまにいつかきけん朝なぎに

釣する船はこゝにやらなん

(語釋) 朝なぎは、朝の間の波のなきて、穩かなるをいふ。よらなんは、書れかしといふ意なり。一首の意は、こゝをまことの鹽竈の浦に見たて、この遠き陸奥のしほがまへ、何時の間にか、我は來にけん。今、朝なぎのけしき、いはん方なし。定めて、この朝なぎを機として、釣する船も出づるならん。其の船、こゝによれかし。又、一層のなかめならんとなり

となんよみける。みちの國に、いきたりけるに、あやしくおもしろき所をおほかりけり。わがみかど、六十餘國の中に、しほがまといふところに、似たる所なかりけり。さればなん、かの翁、さらにてゝをめで、志ほがまに、いつかきけんとは、よめるなりける



(語釋) みちの國にいきたりけるには、彼の翁の、はやき時に、陸奥に行きて見たりしゆゑに、かくはいへるよしなり○わがみかどは、我が朝といふに同じ○似たる所なかりけりは、此の浦の風景、殊に勝れて、他にこのけしきに似たる所もなしといふ意なり○さればなん云々は、六十餘國に、似たる所もなきほどの勝地なれば、彼の翁、まことのしほがまなりとおもひて、此の歌をよみたるは、ことさらに、こゝをめでての事なりと、記者のいへる詞なり。

(八十一段)むかし、これたかのみ子と申す御子おはしましけり。

(語釋) 惟喬の御子は、文德天皇、第一の皇子にて。御母は、紀の靜子、正四位下紀の名虎の女におはせり。此の親王は、承和十一年に生まれ給ひ、貞觀十四年七月に、出家したまひ、法名を算延と申しき。おほ、總論の處に、委しくいへり。参考すべし。

山さきのあなたに、みなせといふどころに、宮ありけり。年ごとの、櫻の花さかりには、その宮へなん、おはしましける。

(語釋) 山崎は、山城の國、乙訓の郡にて、水無瀬も同じ所なり。類聚國史、三代實錄等に、水生とある所なり。こゝに、惟喬親王の御別業ありて、櫻のさかりには、必、おはします例なりきとなり。

其の時、右の馬のかみなりける人をつねにわておはしましけり。時世へて、久しくなりければ、其の人の名をすれにけり。

(語釋) こゝの右の馬は、業平朝臣なること、下の歌をもにて、明らかなり。さるを、ことさらに、其の名、念れにけりといへるは、かへりておもしるし。

かりへ、ねんごろにもせで、酒をのみのみつゝ、やまと歌にかゝれりけり。

(語釋) かりは、鷹狩をいふ。一説に、こゝのかりは、あまり突然なれば、櫻がりの意にはあらじかといへど、なほ、鷹狩の事に見る方よろし。此の物語は、極めて文を省きたるかきさまなれば、こゝも、例の省きたるなり。それは、水無瀬、交野あたりは、名高き狩場なれば、親王の別業を、こゝに立て給へるも、狩に便ならんがためなるべし。されば、其の所にゆづりて、殊更に、狩の事をいはぬなり、さて其の目的なる狩は、かたはらになして、心とめてもせぬよしなり○やまと歌とは、唐詩に對していふ事なれど、うつりては、たゞ、歌といふべき處にも、かくいふなり。こゝも然り。

今かりする、かた野のなきさのねんのさくら、ことに、枝もしろし。その木のもとにおりわて、枝を折りて、かざしにさして、かみなかしも、みな、歌よみけり。うまのかみなりける人の、よめる

(語釋) 古意に、こゝは水生より、河内の國の交野郡の交野に至りて、狩りしたまふなり。こゝは、天皇の御狩場なれど、まだ、其の頃には、禁せられざりしか、又、一の御子なれば、心にまかせて、遊びたまふか。さて其所の渚の院は、度々、御狩あるゆゑに、離宮めきたる院のありしにや。此の親王のは、既に水生にあれば、又はあらじかし。此の院のさまは、土佐日記にも見わたり云々といはれたり○おりわては、馬よりなり○枝を折りてかざしにさして云々、櫻の枝を折りて、頭にかざすは、いたく、花を賞衛するしわざなり。

世の中にたえてさくらのさかさらは



春のこゝろはのどけからまし

(語釋) のどけからましは、開けくあらましなり。のどけしは、今言に、ユウ／＼したる意なり○此の歌、今古集にも、土佐日記にも出でたり○一首の意は、さかぬほとは、咲をまち、咲く時は、散るををしみ、盛なるほとは、雨をいとひ、風をおそれなを愛するあまりに、心のいとまなきより、なべて世に櫻といふものゝ、絶えてなくば、春の心は、なか／＼、のどけならんとなり

どなんよみたりける。又、人のうた

ちればこそいとゞさくらばめでたけれ

うき世になにか久しかるべき

(語釋) めでたければ、今言に、結構なれなといふに同じ○此の歌は、前の歌を承けて、君は、櫻の花が、早く散るゆゑに、心のどけならず、わろしどのたまへと、我はさは思はず、櫻は結構なるものなるうへに、散ればこそ、いとゞよけれとおもふなり。その故は、此うき事おほき世に、どうしてか久しくあるべき。はやく見きりて、散るも道理よとなり○さて右の二首は、此の親王、つひに、世を遁れ給ふ前兆のやうにつくれるなり。この親王、御位に即きたまふべかりしを、其房大臣のからひにて、弟の惟仁親王の立ち給ふ勢なりしかば、御不平の事ありしは、既に總論にくはしくいへるが如し。参照して事實を知るべし

とて、その木のもとはたちてかへるに、日ぐれになりぬ。御ともなる人、酒をもたせて、野より出できたり。この酒をのみてんとて、よに所をもどめゆくに、あまの

河といふところに至りぬ。

(語釋) 御ともなる人云々、此の人は、渚の院に從ひまゐりたる人にはあらで、これも、御供なる内の人、水無瀬の宮より、直ちにまゐれる人といふ○野のかたより云々は、渚の院の方にはあらで、野の方より出で来たりの意なり。酒をもたせて来たるは、もとの酒の盡きたらんことをおもひてなり○あまの河は、交野の近邊にあり

みこれ、馬のかみ、大御酒まいる。みこののたまひける、かた野をかりて、あまの河のほとりにていたるを題にて、うたよみて、さかづきはさせとのたまひければよみて、たてまつりける

(語釋) 大御酒は、神、また、貴人にまゐらす酒をいふ○まゐるは、まゐらすといふ義にて、盃を献るをいふ

かりくらししたなばたつめにやどからん

天のかばらにわれはきにけり

(語釋) かりくらしは、待暮し居ての義なり○たなばたつめは、織女をいふ○天の河原は、天上の天の河原にとりなしたるなり○一首の意は、天の河原は、織女の家ある處なれば、わざと、待りくらししてその織女に、宿からんとす

と聞こえければ、此の歌をみて、かへす／＼、すしたまひて、かへしえしたまはず。紀のありつぬ。御供につかうまつれり。うれがかへし



(語釋) すしたまひは、誦し給ひなり。此の歌のおもしろさに、幾度も吟誦したまひて、御感のあまり、返歌も、おと出でねば、有常が、代りて、返歌せりとなり。

いとせにひとたびきます君まてば

やどかす人もあらじとぞおもふ  
(語釋) 織女は、たぐ、彗星をこそ待て、他人に宿はわさじとおぼゆとなり。此の君は彗星。人は織女をさせるなり

かへりて、宮に入らせ給ひぬ。

(語釋) これは、日くれて、歸り給ふなれば、都の宮にはあらで、天の河の近邊なる、水無瀬の宮なるべしと、古意にいへるが如し

夜ふくるまで、酒のみものがたりして、あるじのみこ、あひて入りたまひなんとす。十一日の月も、かくれなんとすれば、彼の馬のかみのよめる

(語釋) あるじのみこは、惟喬親王をいふ○あひては、酔ひてなり

あかなくにまだきも月のかくるゝか

山のはにげていれずもあらなん

(語釋) あかなくには、飽き足らぬになり○まだきは、時よりもはやくをいふ○かくるゝかのかは、かなの意にて、歎息の詞○なんは、願の意なり○この歌は、親王の寢所に入りたまはんとするを、月の入るにたとひたるなり○一首の意は、見あかぬに、入るべき時刻より、早く月のかくるゝ

事かな、山の端にげて、入れずもがなといひて、下の意は、親王の御ねますを、名残をしつたるなり  
みこにかはりたてまつりて、紀のありつね  
おしなべて峯もたひらになりなん

山のはなくば月もかくれじ

(語釋) なりなんは、りなの約、らなればならなんといふを延べたるなり○一首の意は、山のはにげて、入れずもあらなんと、君のたまふ如く、われも、おしなべて、峯も平地のやふになれかしとおもふなり。月は、山の端にかくるゝものなれば、山の端なくば、かくれじといへるなり

(八十二段)むかし、みなせにかよひたまひし、惟喬のみこ、れいのかりしにおはしますとも、馬のかみなるおきな、つかうまつれり。日頃へて宮にかへりたまひけり。

(語釋) 水無瀬に通ひ給ひしは、御別業のありけるゆゑなり。そのよし、前段にあれば、省きてかけるなり○宮は、都の宮なり

御おくりしてとくいなんと思ふに、大御酒たまひ、ろくたまはんとて、つかはさざりけり。此の馬のかみ、こゝろもどながりて

(語釋) 御おくりしては、水無の宮より、京の宮へ御送りしてなり。日頃へたることなれば、疾くかへらんと、馬のかみは思へど、親王は、今宵は、宮にとよめんの御心にて、御暇たまはぬよしなり○ろくは、禱にて、御褒美などいふに同じきこと前にいへり○心もどながりとは、早く御暇たまはら



んと、待ちかぬるよしなり。さて歌をよめるなり

枕とて草ひきむすぶ事もせし

秋の夜とだれたのまれなくに

(語釋) この舊註、まち／＼なり。新釋の説よろし。其の要にいはいはく此の歌の意は、日頃、旅にありつれば、今宵は、家にかへるべし。とらめ給ふとも、かりそめの枕もとらじ。せめて、秋の夜となりとも、たのみにすべき長夜の頃ならば、今しばし悠々としても、宜しけれとも、三月の短夜の頃にては、さやうに、たのまれぬに、かくひきとらめ給ふは、つらし。はやく、御暇たまへといふ意を、いひのこしたるなり。草ひきむすぶ事もせしとは、かりそめの枕もせしといふことを、旅に出でたるをりたのひとは、秋の夜ならば、悠々としても、夜長なればと、たのみにせらるゝといふ。たのまれなくには、たのまれぬにといふ意なれば、いひさしたる詞にて、かくとらめ給ふは、つらし。はやく、御いとま給へといふ詞の外に残れり云々

とよみける。時は、やよひのつこもりなりけり。みて、大どのこもらで、あかしたまひてけり。

(語釋) 三月のつこもりなりけりとは、春の短夜の頃なるをしらせたる文なり○大どのこもらで、大殿だいだんからでなり。貴人のいね給ふを、大殿こもるといふ。親王が、かく大どのこもらで、酒宴などして、夜をあかし給ふは狩場のなごり、他かすおぼしてなるべし

かくしつゝ、まうでつかうまつりけるを

(語釋) かくしつゝは、かく御狩の御供は、更なり。かへらせ給ひても、終夜、御酒宴の御物語などして、仕へ奉りきとなり。古意には、親王の大殿こもらであかし給ふは、出家し給はんとて、名残を惜しみたまひしなりといはれたれど、新釋には、「枕とて」の歌よみしは、出家し給ふ時とは、年月へだれりといへり。いづれに見ても、ありぬべし

思ひの外に、御くしおろさせ給ひて、小野といふ所に、すみ給ひけり。

(語釋) 思ひの外は、案外の義なり。惟喬親王は、第一の御子にて、世の御おぼえもおはせるに、出家し給へれば、馬の頭の案外に覺えたるよしなり。三代實錄に、貞觀十四年七月、惟喬親王、寢疾しんじやく 出家、爲沙門とあり。此の時、御年二十九○小野は、山城の國、愛宕の郡なり

む月にをがみ奉らんとて、まうでたるに、ひるの山のふもとなれば、雪いとたか

し。まいて、みむろにまうで、をがみ奉るに

(語釋) む月は、陰曆、正月をいふ○雪いとたかし云々、雪のたかく積りて、なれぬ都人のあゆみかねたれど、こゝろざしのおかければ、強ひて、あゆみて、御室みむろに詣でたるなり

つれ／＼と、いとものがなしくて、おはしましければ、や、久しくさむらひて、いにしへの事など、思ひ出で、聞こゑさせけり。



るが、もの悲しきなり○いにしへの事とは、水無瀬、交野に狩りし給ひしことなどは更なり。すべて世に勢のおはしける時の事をいふ。これ、惟喬親王の世を憤りまして、隠遁したまへる事をあらはせるなり。これも、總論にいへり

さても、さむらひてしがあとおもへど、れほやけ事どもありければ、えさむらはで、夕ぐれにかへるとて

(語釋) 今宵は、こゝに止まりて、御物語したく思へど、去り難き公事ありて、其の日の夕ぐれに歸るなり。正月なれば、公事のしげきこと、似つかはし

わすれては夢かどぞ思ふおもひきや

雪ふみわけて君を見んとは

(語釋) おもひきは、兼ねて思ひて、ありけるやはの意にて、案外なるをいふ○天皇の御位にもつきたまふべき君の、山里の雪の中に、つれくとしておはするを見て、こは夢かとおもふとなりとてなん、なくなく、きじける

(語釋) 泣きながら歸り來にけりとなり。この詞にて、歌のこゝろ、いとよあはれに覺ゆるは、例の作者の巧なるなり

(八十三)むかし男ありけり。身はいやしなながら、母なんみこなりける。その母、長岡といふところにて、すみけり。

(語釋) 身はいやしなながら云々、こゝろのいやしは、下賤の義にあらず。官位のひくきをいふなり。

暗に、業平朝臣のこをいふ○母なんみこなりけるは、業平朝臣の母は、伊登内親王なれば、かくいふ。さて伊登内親王は、桓武天皇第八の皇女なり。業平朝臣の御父は、阿保親王にて、御母も、内親王なり。しかるに、時勢を得ずして、つひに、身をはからかし、世をいとひたることは、總論にいへる如し

子は京にみやづかへしければ、まうづとしけれど、志ばく、えまうです。みど

子にさへありければ、いとかなしうしたまひけり。

(語釋) まうづとしければ、詣でんとしければなり。心にかけて、詣でんとしければ、宮仕いとまなかりしかば、たびくも詣ですとなり○ひとり子にさへありければ、殊に、寵愛せる意なり。業平朝臣は、伊登内親王の一人子なればなり。三代實録に、業平者、故四品阿保親王第五子、正三位行中納言行平之弟也、阿保親王娶桓武皇女伊登内親王、生業平云々と見えたり。業平と行平と、父の同じきことは、更に論なければ、母は異なりて、伊登内親王の御腹には、業平一人なりしなり○かなしうしたまふとは、殊に、勝れて愛し給ふ義なり

さるほどに、志はずばかりに、とみの事とて、御文あり。おどろきて見れば、ことごとばなくて、

(語釋) さるほどには、然ある程になり○しはすは、陰曆、十二月をいふ○とみは、頼の子をあつ。にはかなるをいふ。こゝは、急なる事とて、御消息ありきとなり○ことごとばなくてとは、異事なくの義なれば、他の事はなにもなく、たゞ、つぎの歌のみありきとなり



おらぬればさらぬわかれのありといへば

いよ／＼見まくほしき君かな

(語釋) さらぬわかれとは、去りがたく、逃がれ難き、別の意にて、死別をいふ。いよ／＼は、物の一つある上に、今やひとつ添はるやうの意ある詞なり。○見まくほしきは、見たく思ふの意なり。○此の歌、とみの事として、などあるをおもふに、伊登内親王が、病に臥し給へる時の歌なるべし。○一首の意は、老いぬれば遁れがたき死別といふ事のありといへば、さらぬだに逢ひたきに、いと、君には逢ひたく思ふことよとなり

となんありける。これを見て、馬にもものりあへず、まおるとて、いといたう。うちなきて、みちすがら思ひける

(語釋) 馬にもものりあへずは、馬に乗るひまもなくなり。京より長岡は遠ければ、馬にて往くべきに、馬に草飼ふ暇も、心いそがれて、出で往きよとなり。○みちすがらは、道々なり。このあたり、文、簡にして意ふかし

世の中にさらぬわかれのなくもがな

千世もといのる人の子のため

(語釋) がなは、例の願望の意なり。○人の子とは、たと、子といふ意にて、こゝは、自分のことなり。○一首の意は、世の中に、遁れがたき死別といふことは、なくもがな。千世もまじませと、いのる我が身のためにとなり

(八十四)むかし、男ありけり。わらはよりつかうまつりける君、御ぐしおろしたまひてけり。

(語釋) つかうまつりける君とは、暗に惟喬親王を申せるなり。業平朝臣は、惟喬親王より年まより。されば、わらはよりつかうまつるとは、いふまじけれど、かく事實をあらぬさまにかきまぎらしたるは、例の作者の心しらばなり

む月には、かならず、まうでけり。おほやけの宮づかへしければ、つねには、あまうです。されど、もとの心うしなはで、まうでけるになんありける。

(語釋) まうでは、貴き人の許へゆくをいふ。こゝも、親王なればいふ。正月は、今の世にも、人のもとへ禮にゆく事あれば、其の心にて、必、まわれりとなり。○もとの心うしなはで云々、惟喬親王には、はじめより仕へ奉りしことなれば、親王、御出家の後も、もとの心を失はずして、訪ひ慰めまらせきとなり

むかしつかうまつりし人、ぞくなるせんじなる、あまたまわりあつまりて、む月なれば、ことだつとて、大御酒たまひけり。

(語釋) せんじは、前にいへる如く、禪師にて、法師をいふ。されば、ぞくなるせんじなるとは、俗人と、法師をいふなり。○ことだつとは、常に異なるをいふ。正月なれば、つねの月には、異なりとて、御酒たまひきとなり

雪こぼすがごとふりて、ひねもすにやます。皆、人あひて、ゆきにふりこめられた



りといふを題にて、歌よみけり

(語釋) 雪こぼすがことは、雪のいたく降りて、入れたる物をこぼすが如くなるをいふ。ことは、如くなり○ひねもすは、終日の意なること、前にいへり。かく大雪なりしかば、人、皆、杯をいくたびもめづらして、酔ひきこなり

おもへども身をしわけねばめがれせぬ

雪のつもる予わがこゝろなる

(語釋) おもへとはは、こゝに、何時までも、まらんと思へどもなり○身をしわけねばは、しは助辭にて、身を分けねばの意なり。ろのゆゑは、此に止まらんと思へど、宮仕にいそがしき身なれば思ふにまかせず、身をそたつに分くることもならねばなり○めかれせぬは、目離せぬにて、目をなたすよく見るをいふ○一首の意は、惟喬親王の御許に、いつまでもさらはんと思へど、宮仕する身は、思ふやうにもまかせず、つく／＼見て居る、このゆきの積もりて歸りがたくなるぞ、我が本意にはありけるとなり

とよめりければ、みこいといたうあはれがりたまうて、御うぬきて、たまひけり

(語釋) みこは、惟喬親王を申す○あはれがりては、歌のおもしろきを覺し給ひてなり○御うは、御衣なること、既にいへり

(八十五)むかし、いとわかき男、わかき女をあひいへりけり。おの／＼、おやありければ、つゝみて、いひさしてやみにけり。年比へて、女のもとより、猶、この事と

げんといへりければ、男、うたをよみてやれりけり。いかゞおもひけん

(語釋) わかき男とは、幼き男といふ義なり。わかき女も同じ○いひいへりけりは、契らんといひよりしなり。こゝは、男の方より契らんといひよりしなり。されど、當時は、互に親ある身なれば、恐れ包みて、いひ出で、止みしが、年を経て、今度は、女の方より、猶、この事、隠られず、しどげんといひやりしかば、男、いかゞ思ひけん、かゝる歌をよみて、やりきとなり○いかゞおもひけんは、女の心をいふにあらず。男の方にかけて見るべし

今までにわすれぬ人は世にもあらじ

おのがさま／＼年の經ぬれば

(語釋) こゝの解、新釋よし。其の説には、歌のこゝろは、猶、この事をげんどのたまへど、いひかはさんどしたりしは、互に幼きほの事にて、其の後、異男にあひ給ひなど、おのがさま／＼年經ぬれば、今までに、わすれぬ人は、世にあらじ。君もわすれ給ひしものにて、今、また、さやうにいひたまひても、まことに思ひ給ひてのことにはあらじ。たのみ難しといへるなり。さるは、はじめいひかはさんどしたる中なれば、かく女の心を疑ひたる歌は、よむまじき事なれば、「いかゞおもひけん」と、はしに記者の詞をそへたるなり。心をつくべし。おのがさま／＼とは、此の女、その後、こと男にあひて、わすれられなとして、又、はじめいひさしたる男に、かたらはんとしたるものと予思はるゝ。さるからに、かく疑ひたる歌よみて、やりて、やみたるなり云々

とてやみけり。男、女のあひはなれぬ宮づかへになん、出でにける



(語釋) 男、女をなにも思はず、其の女の居る、ひとつ所へ、宮づかへに出でけりとなり○あひはなれぬは、一つ宮をいふなり

(八十六)むかし、男、津の國、うばらの郡、あしやの里に、しるよし志て、いきて住みけり。むかしの歌に

(語釋) しるよししてといふ意は、初段にくはしくいへり。参考すべし○むかしの歌には、たゞ、古歌にといふ意なり

あしこのやのなだの志ほやきいとまなみ

つげのをぐしもさゝすきにけり

(語釋) この歌は、萬葉集、石川郎女が歌に、「しかのあまはめかりしほやきはいとまなみ、くしげの小櫛どりも見なく」とありて、筑前の國、しかの海人をよめるなるを、所をかへ、詞をかへて、この芦やの里の古歌としたるは、例の作者のたくみなるなり○一首のころは、あし屋のなだのしほやく蓋が、いとまなみに、とりまぎれて、つげの小櫛もさゝす、容貌をつくることだにせず、世をわたるとなり

とよみけるは。この里をよみけるなりけり。こゝをなん、あしやのなだとはいひける。

(語釋) ひかしの歌にといふより、この詞までは、皆、記者のことばなり  
此の男、なまみやづかへしければ、それをたよりにて、衛府のすけども、あつまり

きにけり。この男のこのかみも、衛府のかみなりけり。

(語釋) なまは、前になま心とある處にいへるが如く、すべて、其の事に精熟せざるをいふ、生意氣生兵法などのなまと同し。こゝは、散位、または、權官などにて、知行所にゆきて、遊びなどしてをるをいふなるべし○うれをたよりに云々、衛府の佐とも來たれるを見れば、業平朝臣の右兵衛權佐なりし時を、暗にいへるなるべし。衛府の佐とは、左右衛門、左右兵衛の佐などの人々をいふ○このかみは、兄をいふ。これも、暗に、行平卿をさせるなり。衛府のかみとあれば、行平卿の左兵衛督などにてありし時をいへるなり。此の兄弟の任官、年代のたがひあるを、かく同時のやうに書きまぎらしたるは、例のことなり

其の家のまへのうみのほとり、あろびありきて、いき此の山のかみにありといふ、ぬの引の瀧見にのぼらんといひて、のぼりて見るに、

(語釋) いさは、人を誘ふ詞なり○ぬの引の瀧は、布引瀧にて、あしやの里と同郡なる、山中にあり生田川の水上なり。海邊より見れば、まことに、布を引きかけたる如く、二段におつる瀧なり。ゆゑにこの名ありといふ

其の瀧ものよりことなり。たかさ、二十丈、ひろさ、五丈ばかりなるいしのおもてに、志らきぬにいはをつゝめらんやうになん、ありける。

(語釋) ものよりことなりとは、他のなみくの瀧に異れりとの意なり○いしのおもてに云々、石の面になり。この下に、「ながれおつ、其のなま」といふ詞を加へて見るべしと、新釋にさへるが如し



○つつめらんとは、包みたらんの義なり

さる瀧のかみに、わらふだのれほきさして、さし出でたる石あり。其の石のうへに、はじりかゝる水は、せうかうじ、くりの大さにて、こぼれれつ。そこなる人にも、みな瀧のうたよます。かのゑふのかみまづよむ

(語釋) さるは、さあるの畧言なり○わらふだは、和名抄に、圓坐を訓めり、後の世の圓坐といふものも、これに同じ○せうかうじは、小柑子なり。三代實錄に、太宰府例貢小柑子云々など見えて、今の世の金柑なるべし。又、大かうじといふは、今の密柑のことなるべし○ゑふのかみは、行平卿をさせること、前の文にて知るべし

わが世をばけふかあすかどまつかひの

なみだの玉といづれまされり

(語釋) まつかひは、待つ間の意なり○一首の意は、年老いたる、我が命の、今日か明日かど待つ間の、何となく、心ぼそく、落つる涙の玉と、今見る瀧の水玉と、其の數のおほきこと、いづれまさるならんとなり

あるじ、つぎによむ

(語釋) あるじは、業平朝臣なり

ぬきみだる人こそあるらししら玉の

まなくもちるか袖のせばきに

(語釋) ぬきみだるは、貫き亂るなり。瀧の白玉をまことの白玉に見なして、よめるなり一首の意は、瀧の上にて、緒に貫きたる、あまたの玉をぬきみだして、散らす人あるらうな、白玉のひまなくも散りかゝる事かな、我が身、いやしく、袖せばくて、多くはつゝみあへぬにとなり

とよめりければ、かたへの人わらふことばやありけん。此のうたをよみて、やみけり。

(語釋) かたへの人とは、あるじの外の人にて、側にありし人々をいふ○わらふことばにやありけん云々は、よき歌の中に、わらきを出だしたれば、わらひとなりて、興さめたるにやありけん、人は、歌よますとなりけりとなり

かへりくる道とほくて、うせにし宮内卿もちよしが家の前すぐるに、日くれぬ。  
(語釋) かへりくる道とほくて云々、布引の瀧のほとりより、葦屋の里へは、三里ほどあればかくらふ○宮内卿もちよしは、いかなる人にか、知るによしなし

やどりのかたを見やれば、あまのいざり火、おほく見ゆるに、彼のあるじの男、よむ

(語釋) いざり火は、漁に用ふる炬火をいふ

はるゝ夜の星か川べのほたるかも

わがすむかたのあまのたぐ火か

(語釋) 新釋に、いはく、いざり火を、遠く見れば、げに星か、螢かど見まがふけしきあり。晴るゝ夜



としもいへるは、すこしにても、くもりたる夜は、星の數おほく見えねばなり。川べの螢とは、螢は川邊におほきものなればなり、一首のこゝろは、やどりのかたを見やれば、きら／＼するもの、かす／＼見ゆるは、暗夜の空の星か、川べにすたく螢か、あの見ゆる光は、マアと、奇異なるを歎息して、これもへば、これはわがすむかたの螢のたく火ならんかといへるなり。かく解きたるは、第三句の螢かもといへるによれり。此のやすめ詞のどとくそへたるとは、歎息の意あれば、かならず、おのが説の如くなるべし云々といへるぞよき

とよみて、家にかへりきぬ。其の夜、南の風ふきて、なごりの波、いとたかし。つとめて、其の家のめのこともいでも、うきみるの浪によせられたるひろひて、いへのうちにもてきぬ。

(語釋) 家にかへりきぬは、あしやの里の家になり○南の風ふきて云々、この南面は海なれば南風ふけば、濱邊に浪たかくよせ来るなるべし。其の夜、烈風なりしかば、其のなごりの波、夜あけても、いと高きなり○つとめては、其の翌朝はやくの意なること、前にいへるが如し○めのこは、女の子にて、すべて婦人をいふ事なるべけれど、こは、家にめしつかふ女と見えたり○みるは、海松なり浪にゆられて、浮きて、濱邊により来るをいふ。さてかく女どもの海松をひろひくるは、客人にまわらせんとてなるべし

女がたより、其のみるをたかつきにもりて、かしはをおほひて、出だしたり。うのかしはにかくかけり

(語釋) つきは、坏なり、坏は、すべて、食物をいふ、器をいふ。其の中に、たけ高きを、高坏とはいふなり○かしはをほひて云々、柏の葉は、木葉の中にも、はゞ廣くて、おほふにたよりよければなるべし。上代には、かしはに食物を、たゝちに盛ることさへありき。膳部を、カシハデとよひは、其の證ともいふべきか

わたつみのかざしにさすといはふも

君がためにはをしまざりけり

(語釋) わたつみは、海神をいふ○かざしは、挿頭なり。人は、花、紅葉などをかざしやすなれど、海神は、藤をかざしにさゝんどなり○さすとは、さすとして。の意なり○いはふは、いつくといふ意に同じく、大切にすることをいふ○一首の意は、海の神のかざしにさすとして、大切にしたまふ藻も、君がたのため惜しませず、風にて濱邊へよせれば、取りてまわらすなりとなり

おなか人の歌にては、あまれりや。たらすや

(語釋) あまれりや、たらすやは、あまれの方おもく、たらすやは、たゞ、添へたる詞なり。前の「よしやあしや」とあるに同じ。参照して、其の意を知るべし。この歌、田舎人のとしては、あまれりといふこゝろなり

(八十七)むかし、はとわかきにはあらぬ、これかれ、友だちどもあつまりて、月を見て、それがなかに、ひとり

(語釋) いとわかきにはあらぬ云々、いとわかしと物語書にいへるは、十二三歳より、二十歳以下



の人をいふなり。こゝは、わかきにはあらぬれば、二十歳以上なること、いふも更なり。諸抄に、四十歳位の事ならんども、又は、四十歳以上の事ならんどもいへり。これ、つぎの歌は、月に對して老を感じたる歌なればなり。されど、新釋には、いそわかきにはあらぬと、こと更にことわれるは、二十より、三十までの年なるべし。三十位になれば、随分ものゝあはれを感じて、かゝる歌よまんも、似つかはしからぬわざにはあらずといへり。いづれにてもあるべし。さて古今集には、隠しらすとあるを、かく詞をうへたるなり。歌は、まがふべくもあらぬ、業平朝臣のうたなり

おほかたは月をもめでしてこれぞこの

つもれば人のおいとなるもの

(語釋) おほかたは、凡といふに同じ○めでしは、愛せずの意なり○これぞこのは、今言に、コレガアノなにくじやといふに同じ。古言に、彼のといふべきを、このといふこと多し○此の歌のこゝろは、大抵の事ならば、おもしろき月をも、おかくはめてし、これが、彼のつもりつもれば、人の老となる、年月の月なるものととなり、さて此の歌、上の句は、天の月の事をいひ、下には、年月の月に轉じたるなり。巧なること想ふべし

(八十八)むかし、いやしからぬ男、われよりは、まさりたる人をれもひかけて、年へにけり

(語釋) いやしからぬは、身分のかるからぬをいふ。身の輕からぬ人は、容易に口にもいひ出だし、かぬべきに、まして我よりまさりたる身分の人を慕ふなれば、いひいで、承知せられぬ時は、いよ

く、外聞わろきわざなれば、つゝみはマかりて、年を經にけるなり  
人しれずわれこひしなばあぢきなく

いづれの神になき名おふせん

(語釋) 人しれずは、口に出ださねば、思ふ人のしらぬをいふ○あぢきなくは、もと、味氣なくにて、今言に、ウマクナイ、又、グナイワロシなといふ語なり。うれよりうつりて、無益、また、いたづらなとの意となれり。こゝも、うつれる方にて、意きこゆ○一首のこゝろは、思ふこゝろを人に知られず、いたづらに戀ひ死なば、人は神のたゝりにて、死にきといふべし。さては、神になき名おふせ奉る道理なるが。其の無名のつみを負せまつらん神は、いづれの神にかあらんとなり。諸説くどくしきが多し。新釋の説よるし

(八十九)むかし男、つれなき人を、いかでとおもひこひわたりければ、あはれとやおもひけん。

(語釋) つれなき人を、いかでとおもひ云々、男、わが方にたやすく離かぬ女を、せうずして、手に入れんと思ひて、年比、戀ひわたりきとなり。女も、はじめは、かくつれなかりしが、男の年比熱心なるにほだされて、あはれと思ひけんとなり

さらば、あすものこしにて、ものばかりをいはんといへりけるを、かきりなく、うれしく、又うたがはしかりければ、おもしろかりける櫻につけて

(語釋) さらばあす云々、前にいへるが如く、女も男の情のあつきにほだされて、然らば、あすあは



んといひしなり○ものさしにて、ものいふとは、簾、または、かすまななどを隔て、話するをいふ○かぎりなくうれしくおもふは、男がなり○おもしろかりける櫻とは、花のさかりなる櫻をいふ。かくさかりなる花を折れるは、程なく散るものなれば、歌に、今日こころかくはといはんためなり。用意こまやかなりといふべし

さくら花けふこころかくはにほふとも

あなたのみがたあすのよのこと

(語釋) あなたは、あといふに同じく、歎息の詞なり○一首の意は、おほかた聞て悉たる如く、櫻花今日こころかくさかりに句ふとも、嗚呼、たのみがたけれ。明日は散るかもはかりがたし。君もこの花の如く、今日こころかくのたまへれと、明日の夜のことは、たのみがたしといへるなり

といふ心ばへもあるへし

(語釋) この解、舊説わろし、新釋にいはいく、戀の歌は、あなたを心あさきさまにいふが、つねの事なれど、さばかり、つれなき人の、にはかになびくさまにいへることなれば、男のうたかひて、あなたのみがた、あすの夜の事といふ心ばへも、實にあるべしと、記者のいへる詞なり云々

(九十)むかし、月日のゆくをさへなげく男、やよひのづこもり

(語釋) さへは、物の一つある上に、また加はるやうの處に用ふる詞なり。そのうへなどの義なり。こゝも思ふ人に逢ふ事の出来ぬのみか、月日のいたづらに、経ゆく歎ある意を、含めたるなり○やよひのづこもりは、三月下旬の義なること、前にいへるが如し

をしめども春のかぎりのけふの日の

夕ぐれにさへなりけるかな

(語釋) さてこの歌は、後撰集に、題しらす、よみ人しらすとありて、第三句を「けふもまた」に作り。後撰集にては、たゞ、春のつくるを惜む歌なるを、こゝには、詞を加へて、思ふ人にえあはで、いたづらに、過ぎゆく月日を惜しむに、今日は、春のわかれもうちそへて、いとゞ、をしくかなしき心とせり。作者の巧みなること、驚くに堪へたり

きゝしる人もなしや

(語釋) 右の歌、たもてには、春を惜しむ意をあらはし、うらには、思ふ人に逢はで、月日の経ゆくをうらむるなるが、此の歌のこゝろを、聞き知る人もなしやとなり。これ記者の詞なり

(九十一)むかし、をどこ、こひしさきつゝかへれど、女にせうろこをだに、にせ

でよめる

(語釋) きつゝかへれとは、戀ひしさに、度々、女の居る近邊までは、來たれども、逢はでかへれとの義なり○せうろこは、消息にて、女にて音信することをいへと、こゝは、戀想詞をいひかくるをいふ。戀想詞をいひかくるをも、せうろこといふこと、前に委しくいへるが如し

あしべこくたふゝしをぶねいくろたび

ゆきかへるらんしる人なしに



をいふ○いくろたひは、幾十度なり○あまたいひ来たれど、女にさとりもしられでかへるを、芦のしげみを行きかへる、小舟の見えぬにたどへたるなり○こは、古今集によみ人しらす、「堀江こゝ樹なし小舟こぎかへり、同じ人にやこひわせるべき」とあるをなほして、例の作者のつくれるものなるべし。又、棚なし小舟といふことは、萬葉などにもよめり

(九十二)むかし、男、身はいやしなくて、いとたかき人を、おもひかけたりけり。すこしもたのみぬべきさまにあらすやありけん。ふしておもひ、おきておもひ、思ひわびてよめる

(語釋) 身はいやしなくて云々は、身の官位などひくゝて、勢力なき身なるに、すぐれて官位の高き人を懸想したるなり○すこしもたのみぬべきさまにあらすやありけんは、記者の詞なり。男はいとく戀ひしたへど、少しも、頼みどすべき様子見えすして、女はつれなきよしなり○ふしておもひ、おきて思ひは、其の思、切にして、身も轉帳するまでこがるゝよしなり

れふなく、れもひはすべしなうへなく

高きいやしきくるしかりけり

(語釋) おふなくは、随分の義にて、我が身の分にしだかふ意○なうへなくは、比類なくの意にて、比類せざるをいふ○一首のこゝろは、身の分に應じたる戀こそすべけれ、賤しき身にて、比類せざる、いはゆる世にいふ、灯燈につりがねといふ如き、不相應の戀は、すまじき事よ、かく成りがたくて、くるしきもの予となり。成らぬこひにわびて、後にさされるさまなり。此の歌の解は、古意の

讀、まことによろし

むかしも、かゝることありけり。世のことわりじやありけん

(語釋) むかしもかゝることありけりは、今人も、戀に貴賤の區別なく、かゝる事、世におほし。やはり昔の人にも、かやうなることありきとなり○世のことわりじやありけんは、戀のためには、かく苦勞するも、古今、共にまゝあるならひなるは、これ人情の道理にやあらんとなり

(九十三)むかし、男、女ありけり。いかゞありけん。其の男、すますなりにけり。のちに、男ありけれど、子ある中なりければ、こまかにこゝろあらねど、時々、ものいひにこそせけり。

(語釋) すますなりにけりとは、男が女の許へ通はぬやうになれるをいふ。すむは、住むにて、男女、共に居ることをいふ○のちに男ありければ、はじめの男にはあらで、異男なり○子ある中なりければ、はじめの男とは、子まで生みたる間なれば、むかし、相住みし時にくらべて、こまやかに語り合はねど、しかしながら、舊情もだしがたくて、時々ものいひやりきとなり

女のかたに、悉かく人なりければ、扇にかきにやれりけるを、今の男のものすどて、ひと日、ふつか、おこせさりせり。

(語釋) 此の處の文きこえにくし。但、新釋に、女のかたにぞ、句を切りて、此のこゝにてにはは。扇に云々へかゝれり。此の女、繪かく人なりければ、女のかたに、扇にかきにやれる心なり。ものすどは、来て居ることを、大やうにいへる詞なりといへり。しばらく、此の説に従ふべし○大和物語に、



染殿の内侍といふ、いまずかりけり。それを、よしありのおどと申しけるなん、時々すみたまひける、物をよくしたまひければ、御衣をもをなんあづけさせたまひけるに云々、又、いはく、在五中將すますなりてのち、中將のもとより、きぬをなんたせたりける。これにあらはひ(洗ひを延べたる詞)などする人なくて、いとわびしくなると、いひやりけるを、猶、必して給へどなんありければ云々とあるは、この文をかきかへたるものなるべし。元來、大和物語は、伊勢物語を書きかへたる處おほし。其の中に、人の名を明らかにかけるは、さるいひつたへありし故にもあるべく、又は、推量してあてたるにもあるべし、されば、必、證とはしがたきこと更に論なし

かの男、いとつらくて、おのがきこゆる事をば、今までしてたまはねば、ことわりと思へど、猶、人をばうらみつべきものになんありけるとて、よみてやれりける。時は、秋になんありける

(語釋) いとつらくて、甚、つらく思ひての意なり○おのがきこゆる事をば云々、これよりなんありけるまでは、男の詞なり、きこゆることは、こゝにては、頼む事といふほどの意なり。おのれ、今は住ますなりて、異男の來て居る事ゆゑ、己が頼みたる、扇の繪をすみやかにかゝぬは、道理なりと思へど、猶、うらめしくおぼゆとなり○時は、秋になんありけるは、記者の詞にて、つぎの歌に、今の男を秋に、我が身をすぎにし春にたどへたれば、うれを釋したるなり

秋の夜は春日わするゝものなれば  
霞に霧やたちまさるらん

(語釋) この歌の一首の意は、秋の夜には、過ぎにし春日の事をわするゝが、人情のつねなり。其の故は、春の霞よりも、秋の霧がたちまさりて、よきゆゑならんとなり。さて裏には、我を隠れて、今の男に思ひつき給ふは、我にまさりて、今の男の、容貌の美しきがゆゑなるべしとなり。己を春と、霞とに見たて、異男を秋と霧とに見たてたるなり。さて霞より霧のかた、たちまさるといひて、怨むる意を含めたるなり

どなんよめりける。女かへし  
千々の秋ひとつの春にむかはめや

もみちも花も共にこそちれ

(語釋) むかはめやは、むかはんやは、むかひはせじの意なり○一首の意は、千々の秋も、一つの春にむかひはせじ。いたく劣れり。されど、秋の紅葉も、春の花も、共に散りやすきものにて、頼みがたしとなり。秋の紅葉を、今の男に、春の花を、はじめの男にたどへたるは、いふまでもなし。贈答ともにたくみなりといふべきなり

(九十四)むかし、二條の后につかうまつる男ありけり。女のつかうまつりけるを、常に見かはして、よばひわたりけり、いかでものむしにだに、たいめんして、おぼつかなく思ひつめたる事、すこしはるかさんといひければ、女、いとこのびて、ものむしにあひにけり。ものがたりなどして、男

(語釋) 常に見かはして云々は、男も女も、二條の后に仕うまつられたれば、常に、互に見たるよしな



り○よばひは、呼ぶを延べたる言なり。こゝは、男の女を慕ふことに用ひたり。なほ、この詞、くはし  
くは、竹取物語講義にいふべし○いかに物ごしにだに云々は何と予して、たゞひ、障子あすまを隔  
てでも、逢ひたしと、切に思ふさまなり。かくいふは、女のつれなくして、容易に逢ひがたきよしな  
り。たいめんは、對面なり○おぼつかなく云々は、我に靡くか否か、不安心におもひつめたるさまな  
り。おぼつかなしの語釋は、前にいへり○はるかさんは、晴るかさんにて、今言に、ハチサンといふ  
に同じ。始終、女の心を不安心に思ひつめたるを、逢ひて、いさゝかにも、はらさんとなり○し  
びては、人しれず、かくれてなし

ひこぼしにこひはまされりあまの川

へだつる關を今はやめてよ

(語釋) ひこぼしは、彦星にて、牽牛をいふ。我が戀は。その彦星にもまされりとなり。彦星は、年  
に、一度、織女に逢ふといへど、我はたましくあふ夜も、かく物ごしにてへだてれば、彦星の織女  
を慕ふよりも、我が戀は、まされりとなり○あまの川は、牽牛、織女の事をいへれば、其の語の縁と、  
下のへだつといふ語の冠辭どにけるなり○關は、今、物ごしに逢ふをいふとも見ゆれど、なほ、是  
まで打ちとけずして、月日へたるをたどひたるなるべし。さてつれなかりし間は、止むを得ざれど、  
かくしのびて、逢ふとならば、此の隔つる關を、今はやめてよといふ意なり。一首のこゝろは、これ  
づから、聞こむたるが如し

この歌にめでと、あひにけり

(語釋) 此の歌は、まことに切なるおもひをあらはしたるなれば、うれに感じて、女の心もとけて、  
逢ひにけりとなり

(九十五)むかし、男ありけり。女をどかくいふこと、月日へにけり。いは木にしあ  
らねば、心ぐるしとやおもひけん。やうく、あはれ思ひけり。

(語釋) いは木にしあれば云々、この女も、岩や木の如く、無情なるものにあらねば、さすがに、氣  
の毒どや思ひけん、漸々に、あはれと思ひきとなり。心ぐるしとは、今言に、氣の毒なといふに同じ。  
古意に、苦に思ふと解せられたるは、いか

その比、六月のもちばかりなり。女、身にかさ、ひとつ、ふたつ出でたりければ、い  
ひおこせたる、今は何の心もなし。身にかさもひとつふたつ出できけり。時も  
いとあつし。すこし、秋風吹きたちなん時、かならず、あはんどいへりけり。

(語釋) もちは、望の字をあつ。されど、必しも、十五日か、十六日の事にはあらで、今いふ中旬など  
の意に見るべし○かさは、瘡にて、腫物の類をすべていふ。こゝは、今いふ、ねぶなどいふもの、  
出でたるなるべし○今は、何の心も云々より、かならずあはん」までは、女のいひおこせたる詞な  
り。是よりさきは、故ありて、つれなくしつれど、今は君の情をあはれと知りぬれば、何の思ふ子細  
もなし。唯、たまたま、身に瘡も一つ二つ出で、殊に時も、六月中旬にて、盛夏の折なれば、少し秋風  
たちて、清涼なる時折に、逢はんとなり

秋たつころほひ、女のち、其の人のもとにいくべかなる事き、て、いひの、し



り、くせちいできにけり。

(語釋) この文、いたく、省略せるがゆゑに、解しにくし。但、新釋に、ろの人のもとにいくとは、女のひかへられて、男のもとにいくことなり。昔は、女の家、男のかよひてすむ事なるに、女をひかへんとするは、父に知られじと、おかくしの女ゆゑありて、女をひかへとりかくさんと、かまへたるなるべし。さるからに、父、その事をきつつけて、はら立ちいひのゝしるなり。くせちは、中昔の俗語にて、今の世に、やかましき事いできたるといふが如し。さて此の段、女は、母のもとにをり、兄は父のもとにをりて、家の異なるなり。さ心得て見るべし。其の上しを、くはしからぬは、中むかしは、大かたかやらの事なればなりといへり

さりければ、此の女のせうどにはかた、むかへに來たりければ、女、かへでののはつもみちをひろはせて、歌をよみて、かきれく

(語釋) さりければ、サアツケレばにて、前を承けていふ語なり。○せうとは、兄人の音便にて、兄のことなり。○にはかに云々は、此の女を、母のもとにおきては、いかなる事の出でこんも計りがたければ、兄がむかへて、父のもとにおかんとするよしなり。○はつもみちは、初紅葉なり。七八月の頃にもまれには、色づきて、おつる木の葉もあるものなれば、ろれを拾はせたるなり。かくせるは、木の葉ふりしく云々といはんためなり

秋かけていひしながらもあらなくに  
木の葉ふりしくえにこそありけれ

(語釋) 此の歌、心得がたし。古意には、歌の意は、契りし事も、かくあらぬさまに成りゆくは、まこと、浅き縁にて、有りけりとなり。さて既に、秋風吹き立ちなん時に、あはんと契りしをいへば、其の時も過ぎて、木の葉の散りしくといひて、月日のうつり來しを、詞のつゞけにてしらせ、かつ、木の葉のちりつもる水は、浅くなるものなるをもて、あさき縁に江をろへて、たどへたり。かくむつかしきは、例の記者の歌なりといへり。又、新釋に、此の歌の解、拾穂、古意ともにおろそかなり。さては、あらなくにといふ詞にかなはず、臆断も、ときさま、ねろろかななるうへに、くたくしくして、一首の意、きこえず云々。この一首のころ、みな月の比より、秋風吹きたちなん時、かならずあひまゐらせん、とかくせんなど、秋かけていひしとほりにもあらず、いひしことは、むなしくなりぬるに、いたづらに、其の秋のみは來て、木の葉ちる時節になれり。さてくあさくはかなき縁なりきと、散れる木の葉につけて、いへるなり。さて木の葉ふりしく江は、水あさくなるものなれば、浅き事のとへにも、かねいひて、江に縁をかねたり、とき得がたき歌なり。よくく、心とよめて、見るべし云々といへり。まづは、新釋の説によるべきか

とかきおきて、かしてより人おこせば、これをやれとて、いぬ。さてのち、つひに、よくてやあるらん、あしくてやあるらん、いにし所も志らす。

(語釋) かしてより、人おこせば云々は、彼の男の許より、人よこしたらば、之をやれと、召しつかひの女などに、紅葉にかきたる歌をわたしおきて、父の許へゆきたるなり。○さてのちは、サウシテ後の義なり。○よくてやあるらん、あしくてやあるらんは、男が女の身のうへをおもふて、ろをいふ



なり○いにし所もしらすは、行方も知られぬよしなり

かの男は、天のさか手をうちてなんのろひをるなる。

(語釋) 天のさか手をうちてなん云々、天のとは、いにしへの常にて、天より傳へたる事をはじめとし、物の稱美にも、奇妙なる義にも、冠らせいふ辭なり、さか手は、古事には、手を我が前の方にて打ち、凶事には、後方に手をめぐらして、打つなり。古事記上卷、事代主神、この國を天孫に避けて、海に入りたまふ時の文に、即踏傾其船。而天逆手矣、於青柴垣打成而隱也と見えたるは、逆手を拍ちて、船を青柴垣にしたまへるにて、今の世にいふ、まじなひなるを、こゝは、呪詛するわざにいへるなり。よりておもへば、上古には、逆手をうつは、たゞ、禁厭のわざなりしを、中昔には、呪詛する事に用ひたりきとも見えたり

むくつけき事、人ののろひごとは、れふものにやあらん、れはぬものにやあらん。今こそは見めとぞいふなる

(語釋) むくつけきは、恐ろし、又、氣味がワロイなどの意なり。こゝは、すべて、記者の詞なり。男の呪詛するを恐ろしき事かな、呪詛といふ事は、ろの呪詛せらるゝ身に負ふものにやあらん、おもはぬものにやあらん、それは知らねど、此の男は、今におもひしらせんとて、逆手を拍ちて、のろひをるなりとなり○むくつけといふ詞を、舊説に、報いがましき、又、むごきといふ詞なりなど、どかれたるは、更にあたらず

(九十六)むかし堀河のおほいまうちきみと申す、いまそかりけり。四十の賀、九

條の家にてせられける日、中將なりけるおきな、

(語釋) 堀河のおほいまうちきみ云々、おほいまうちきみとは、太政大臣をいふ。これは、基經公、すなはち、昭宣公のことなり。公は、貞觀十四年八月に、三十七にて、右大臣の左大將となりたまひ、四十は、同十八年なり。此の時、まだ、業平朝臣は、中將ならず、翁ともいふべからぬほどなるを、かくいふは例の此の文の書きざまなり。されど、歌は、古今集にありて、此の朝臣のなること、論なし○四十の賀云々、四十歳を初老といひて、祝ふことは、懷風藻に、正六位上刀利宣令詩五首賀五八年、從五位上總守伊岐連古麻呂一首五言賀五八年宴云々と見えたり。されば、古代よりの習慣なり。皆、藤原の朝より、奈良の朝のはじめまでの人々なればなり○九條の家も、基經公の家なるべし

さくら花ちりかひくもれ老いらくの

こんといふなる道まがふがに

(語釋) ちりかひは、散りちがふ意なり。老いらくとは、唯、老といふ事に用ふ○がにには、爲にの義なり○一首のこゝろは、櫻花よ、あまたちりちがひて、ろこらくらくせよ、老といふもの、來ん道まがふためにとなり○老をば、人の如くよみなしたるが、例のをさなくておもしるきなり。古人の歌には、かゝるをさなきが多き事、前にも屢いへり

(九十七)むかし、おほきいれほいまうちきみときこゆるおはしけり、

(語釋) 此の文は、文徳、聖和の御時のさまに書きたれば、其のほどの太政大臣は、藤原の長房公なり。公は、忠仁公と謚し、清和天皇御外祖父、天安元年二月に、太政大臣となり、同、四年、從一位に叙



せられ、二年十二月、攝政となり、貞觀十四年九月に薨せられき。堀河の太政大臣と申せるこれなり。こゝは、必しも、忠仁公と定むまじけれと、暗に公の事をかもひて、かけること、更に論なかるべし。

つかうまつる男、なが月ばかりに、梅のつくり枝に、雉をつけて奉るとて

(語釋) なが月ばかり云々、古意に、長月としもかけるは、夏より八月まで、雉を賞せず、又、冬春は、まことの梅花あれば、作枝は用ふべからず。かれこれ思ひて、長月ぞよきほどとて、いへるなるべし。之を以て思ふに、梅が枝に、雉をつくるも、花のある時は、其のまゝつくべきなり。花をこきおろして、つくるが故實なりといふは、故實を守るが如くにて、古意にはあらずといへり

我がたのむ君がためにとる花は

ときしもわかぬものにとぞありける

(語釋) この歌は、古今集にも、六帖にも、初の句は「かぎりなき」とありて、題しらす、よみ人しらすとあり。されば、時ならぬ、かへりさきの花など折りて、朝廷に奉りし時の歌なるべし。それを、こゝには、はしがきに、梅の作枝とし、雉をつけたりと書きて、ときしもの詞に、きじをかくせりとつくりにしたるなり。○一首のこゝろは、我が頼みにする、君のために折る花は、我が心のいつもかはらぬならひて、其の花も、時をわかつたず、つねに、咲きてあるものにぞありけるといふ意なり。かくいさゝか詞をかへて、意を異にせるは、この作者の例の事なり

とよみて、たてまつりたりければ、いとかしこく、をかしがりたまひて、使にろく

まへりけり

(語釋) かしこがりは、賢きとりなしなりと、ほめたる詞なり。○をかしがりとては、今言に、たもしるがりとては、んが如し。すぐれて、風流なりとめでたまふなり。○ろくは、祿にて、今の月俸、年俸なをいへと、うつりては、今の世の褒美などの義にもいふ。こゝもしかり。なほ、くはしくは、前にいへり。さてこゝは、記者の、みづから作りて、且、ほむるは、例のとりにしなり

(九十八) むかし、右近の馬場のひをりの日、

(語釋) 新釋にいはいく、此の右近の馬場のひをりの日といふ事は、顯昭の説にて、やすく聞こむたるを、世に難義なりといひ傳ふるなり、世々の物しり人たち、とやかくやと思ひめぐらし、いろくにまぎらはしくはいひなしつゝ、今はまことに、難義とすなれりける。かこれ、顯昭のために、其のきたるぬれ衣をとりすてんとす。まづ顯昭の袖中抄に。右近の馬場は、一條より大宮の方をいふ。それより東の方は。左近の馬場なり。五月三日、左近の荒手詰、四日右近の荒手詰、五日左近の眞手詰、六日右近の眞手詰にして、此の眞手詰の日、すなはち、ひをりの日なりといへるは、よくあたれることなり。さるを、岡部の翁、又、本居翁などは、此の日の競馬、騎射は、此の馬場にてはなきを、顯昭のしらすいへるなりとて、馬寮式、騎射式、左右近衛式の文をもひき出で、五月五日、六日の競馬騎射は、大内の馬場にて行はれて、帝 武徳殿にみゆきし給ひて、見たまふ事を、くはしくははれたり。されど、この説は、いまだしき事なり。そのゆゑは、五月五日、六日に、大内の馬場にて、ある競馬騎射は、帝のみゆきありて見たまふほどの事にて、延喜式にしるされ、左右近衛の馬場にてあるは、其



のうちならしゆゑに、式には、さほうをしるされざるなり。荒手番、眞手番といふ名をおもふべし。乗手、射手をつがひて、ろひる心にて、俗語に、あらこゝろみ、本こゝろみといふが如し。北山抄に、正月十五日、兵部手結、十七日觀射、十八日賭射とあるにてもしるべし。兵部の手結は、賭射のうちならしにて、同じ心ばへなり云云、さて五月三日、四日は、あらこゝろみなり。五日、六日は、其當日にて、大内の馬場にまゐらぬさきに、左右近衛の馬場にて、本こゝろみをする事なれば、眞手番とはいふなり云々、此の眞手番は、朝はやくありけん、歌に、「あやなくけふやなかめくらさん」といへるも、あしたによめるにてこそ、よくかなへれ。大馬の馬場なるは、みだりに、人の見にゆく事かなはねば、此の本こゝろみを見んとて、物見事も出づる事なりけり。今昔物語には、今はむかし、右近の馬場に、五月六日、弓行ひけるに、在原業平といふ人、中將にてありければ、大臣屋につきたりけるに、女車、大臣屋ちかく立ちてといへり。(かく右近の馬場に、五月六日、弓行ひけるに、今昔物語にさだくと見えたるを、岡部翁、本居大人など考へもらして、物に見えぬよしにはいはれたるなり) かねれば、右近の馬場にて、五月六日に、騎射ある事さだかにして、五日には、左近の馬場にてあるべき事、もとよりなり。されば、岡部翁の説も、本居大人のいはれたる事も、皆あやまりにありける。さて左近の荒手結のものに見えたるは、西宮記曰、是日、左府荒手結、恒例三日行之、而依大内御廳殿上佐籠御物忌、因彼日不行云々とあり。かゝれば、三日は、左近の荒手結にして、四日は、右近の荒手結なることも知られたり。かく荒手結といふ事あれば、眞手結もあるべき事、論なし云々。五日、六日の眞手結は、かみにひき出でたる、今昔物語袖中抄を證とすべし。さて又ひをりといふ事は、古

意には、引櫛、又は櫛欄ならんといはれたれど、うけがたし云々、これも、袖中抄に、眞手番の日は、射手の近衛舍人、榻の尻をまへさまに引きたりて、まへにはさむゆゑにいふといへるよりよしかりける。いさゝかなるよしにて、ものゝ名となること、いにしへのさまなり。近衛舍人着榻事、西宮記、十七の巻、賀茂祭警固の條にも、近衛舍人着榻半臂等、候陳と見えたり。眞手番の日は、やがて、大内の馬場にまゐる事なれば、榻を着するなるべし云々と見えたり。この説にて、聞こえたり。むかひにたてたりける車に、女のかほのしたすだれより、ほのかに見えければ、中將なりけり。男のよみてやりける。

(語釋) むかひに云々は、此の男の、物見る馬場の埒を隔て、むかひの方に、女車は立てたるなり。○かほは、顔なり。ふるくは、かほといひて、總身の事にもいへど、こゝは、單に顔と見てよろし。○したすだれは、西宮記、十七の巻に、婦人之車傍なりとあり。車籠といふとは、異なり。下すだれは、車籠の下の方にそへて、かくるものなり。○中將云々、或る説に、中少將は、馬場のれど、屋に着くべければ、女車など入る處は、遠くて見えす、又、歌よみてやるべくもあらずなどいへど、此の文は、例の書きかへたるなれば、實を以て論ずまじきなり。古今集、戀に、右近の馬場のひをりの日、向ひに立ちたりける車の、下すだれより、女の貌のほのかに見えければ、よみてつかはしける、業平朝臣とありて、つぎの歌を載せたり。

見ずもあらずみもせぬ人のこひしくは

あやなくけふやながめくらさん



(語釋) あやなくは、理なくにて漫の字などをあつ。今言に、わけもなくなどいはんが如し○ながめは、物れもひながら見るをいふ。たゞ、眺望の義に用ふるは、あたらす○一首のこゝろは、きはやかに見たるにもあらず、又、見ぬにもあらぬ、人の心にかゝりて、わけもなく、たゞ戀ひしくて、今日は物れもひくらさんとなり。さて其の人とさだかに知りたし、名のり給へといふ意を、餘韻にもたせたるなり。されば、返歌に、知るしらぬ云々とは、いへるなり

かへし

志る志らぬ何かあやなくわきていはん

おもひのみこそしるべなりけれ

(語釋) 一首の意は、さやうに、其の人を知ると知らぬとを、異なる事にのたまふが、わけもなき事なり。たゞ、深く思ひ給へ、さし給はゞ、其の御おもひこそ、案内者となりて、あひたまふやうになれといふ意なりと、新釋にいへるにて、聞こえたり

のちは、たれど知りけり

(九十九) むかし、男、後涼殿のはさまをわたりければ、

(語釋) はさまは、こゝは、殿と殿との間をいふ○後涼殿とは、清涼殿の後北にあるゆゑにいふ。されば、はさまは、後涼殿と、清涼殿との間なることしる

あるやんごさなき人の、御つばねより、わすれ草を、志のふ草とやいふとて、さし  
いださせたまへりければ、たまはりて、

(語釋) この處、諸註いかゞ、新釋にいはく、やまと物語には、みやす所の御方よりとあり。げにさやうならんと思はるゝ事なり。されど、此の物語にては、ある貴女の御局と見るべし。その貴女を、

此の男、もと相知れりしかども、かく禁中にまわり給ひて、時めき給ふ事なれば、中たえたるなり。さてこゝは、かく中たえて、消息もなきは、隠れたるならん。されど、さはいはで、中たえたるは、おほやけをはかりて、しのぶゆゑにやあらんといふ心を、あらはにいにはば、側の人のきゝ知りやせんとて、わすれ草をさし出だして、わすれたるならんといふ心を知らせ、又、しのぶゆゑとやいふらんといふ心を、此の草をしのぶ草とやいふと、草の名を問ふさまに、いひまぎらして、人のきゝ知らぬやうにと、したるわざなり。さるを、昔より、女の用意ありて、ものしたるよしを、考へえたる人なかりしかば、いづれの註も、みなときえざりき云々○わすれ草は、萬葉などにも、萱草と書きたるがおほし。和名抄にも萱草、一名、念憂(和名和須禮久左)と記し、後撰にも、「おもふとはいふものからにともすれば、わするゝ草の花にやあらぬ」、又、枕草子に、六月に、念草の花さける事もかきたり。されば、今も萱草とて、憂の比、黄なる花の咲くものをいふ事、明らかし。しのぶ草は、和名抄、若の類の中に、垣衣一名、烏韭(和名之乃布久左)とありて、ことなる草なること明らかなるを、大和物語には、れなじ草を、しのぶやと、わすれ草をいへばと書れたるは、心得がたし。一章に、二名ありといふは、あやまりなり

わすれ草おふる野べと見るらめど

こはしのぶなりのちもたのまん



(語釋) これまで中たえたれば、げに愈れたるならんぞ、見給ふらめと、さにはあらず、人目を忍ぶゆゑに、中絶せるなり。されば、又、逢ふ時もあらんと、心にたのみてあり。ゆく末も、たのまんの意なり。それを、男も側の人に知られぬやうに、草によせて、まぎらはしたるさまなり。

(百)むかし、左兵衛督なりける、在原の行平といふ人ありけり。その人の家に、よき酒ありとて、うへにありける人々のまんどて、來たりけり。

(語釋) 行平は、三代實錄に、貞觀六年三月、從四位上、備前權守、在原朝臣行平爲左兵衛督と見たり。貞近朝臣は、貞觀十二年正月、右中辨となり、同十六年、左中辨には轉せれば、行平左兵衛督なる時は、貞近は、左中辨にあらず。又、下にいふ太政大臣は、(忠仁公)同、十四年に薨じたまひて、貞近まだ右中辨の時なり。かく事をかへたるは、例の事なり。○よき酒は、濁酒と清酒とある中に、清酒をいふなるべし。○うへにありける人々とは、殿上にありける人々なり。○「人々のまんどて來たりけり」、この詞は、もとなきを、本居翁の補はれたるなり。まことに、この詞なくては、文意きこえず。

左中辨藤原の貞近といふ人をなん、まらうどさねにて、其の日は、あるじまうけしたりける。

(語釋) まらうどさねとは、客のうちの主となる人をいふ。婿さね、使さねなどいふも、その主となる人をいふなり。○あるじまうけは、響應するをいふこと、前にもいへり。

なさけある人にて、かめに花をさせり。その花の中に、あやしき藤の花ありけり。

(語釋) なさけある人とは、風雅心ある人の義なり。これは主人の行平をいふ。○うの花の中にいふにて、種々の花ありしことを知らせたる文なり。注意すべし。

花のしなひ、三尺六寸ばかりなんありける。

(語釋) しなひは、花ぶさの長さがりたるをいふなり。今の世の藤の花は、五尺、六尺ほどさがるもあれど、古はつくらすして、おのづから、咲きたれば、長きがまれにて、三尺六寸ぐらゐなるは、珍らしかりしなるべし。

うれを題にて、歌よむ、よみはてがたに、あるじのはらからなる、あるじまうけしたまふと聞きて、來たりければ、どらへてよませける。

(語釋) はらからなる云々は、同胞なる男といふ意に見るべし。行平朝臣の同胞はほくて、たれどもいひがたければ、これも、業平朝臣をあてたるなるべし。さて業平朝臣は、歌にすべれたる人なるを、歌の詞しらぬよしにかき、又、この歌のわるきなど、皆、記者の狂言なり。○あるじまうけし給ふと聞きて來たるは、これも、賓客をもてなさんどて、來たれるなり。

もとより歌のことは、しらざりければ、すまひけれど、しひてよませければ、かくなん

(語釋) すまひは、争ひなり。こゝは、辭退するをいふ。○かくなんは、下によみけるといふ詞を含めたるなり。

さく花のしたにかくる、人おほみ



ありしにまさる藤のかけかも

(語釋) おほみは、おほさにの意なり○ありしにまさるは、いよく榮えゆくをいふ○かもは、鳥の歎息の意なり○つぎの詞を以て見れば、藤原の太政大臣の、先祖にこえて、榮えたまふも、同じ氏族にて、其近朝臣の如き、よき人々の、其の下に多ければ、かくはあらんと、其の日の上客をはじめて、其の席なる、藤原氏の人々を、藤の花によそへてよめるなり

などかくしもよむといひければ、おほきおとゝの、榮花のさかりにみまうかりて、藤氏のことじさかゆるをおもひて、よめるとなんいひける。みな人、うしろすなりにけり

(語釋) なほかくしもよむ云々は、此の席にある人の問の詞なり○いまそかりては、おはしましてといふ意なり○皆人云々は、此の歌をよみ出でたる時は、人皆、いかにかくはよむと、そしらすとするさまなりしかと、かやうくのわけにて、藤氏のことじ、榮ゆるをよみたりと答へたりしかば、皆人、そしらすなりにきとぞなり

(百一)むかし、男ありけり。うたは、よまさりけれど、世の中をれもひしりたりけり。

(語釋) 世の中を思ひしりたりとは、世の中の人情を、よく知たりとなり。元來、歌は、物のあはれを旨とするものなれば、歌よむやらの人は、すべての人情にも通じをるが、つねなれど、此の男は、歌はよまねど、人情はかかく、ものゝあはれを知りきとなり。さるは、氏族なる女の、尼となりて、山里にあるを、うらやめるよしの歌などおくれるは、まことに、なまけかき事なればなり

あてなる女の尼になりて、世の中をおもひうむじて、京にもあらず、はるかなる山里にすみけるもどに、もどしぞくなりければ、よみてやりける

(語釋) あては、上品の意なること、前にいへり○うむじては、今言に倦みはてといふに同じ○しずくは、氏族の字音なり○元來、世をすてたる尼の許へ、男が歌をおくるなどは、尋常にあらねば、殊に氏族なるよしをこどわりたるなり。之を、もど逢へる中なりなど、説けるはわろしそむくどて雲にはのらぬものなれど

世のうき事ぞよそになるてふ

(語釋) うむくどては、世を背くどてなり○雲にはのらぬものなれどは、仙人などのやうに、雲に乗りて、空中を飛び行くといふが如き、ことごとしきわざにはあらねどなり○一首のこゝろは世を背くどて、雲に乗りて、飛びゆくものにはあらねど、山里にうつりすめば、おのづから、世の愛事よそになるといふよしに、うけたまはれば、君にもさこそおはすらんと、問ふよしなり。さて餘韻に、羨まし、我も世をいとへばといふ意を、含めたるなり

(百二)むかし、深草のみかどにつかうまつりける男ありけり。いとまめに、じちやうにて、あだなるこゝろなかりけり。

(語釋) 深草のみかどとは、仁明天皇の御事なり。此の帝崩じ給ひて、深草山に葬り奉られしかば、かく申すなり○まめは、眞實の意なること、既にいへり○じちやうは、實様の字音にて、やはり眞實



なるをいふ。かく重ねていふこと、此の比の書には、例はほきことなり

さるに、心あやまりやしたりけん。

(語釋) かく眞實忠直なる人が、親王たちのつかひ給ふ女に、ものいふは、あるまじき事なれば、心あやまちやしたりけんとは、いへるなり

みこたちの、つかひたまひける女を、あひしりにけり。さて朝にいひやる

(語釋) みこは、親王をいふ。此の外は、聞こえたるが如し  
ぬぬる夜のゆめをばかなみまどろめば

いやはかなくもなりまさるかな

(語釋) 昨夜逢ひしは、たゞ、夢の如く覺えて、はかなければ、せめて、又、さだかなる夢にだに見んとて、まどろめば、その夢をも見ず、いよく、はかなくなりまさる事よとなり○此の歌は、古今集にては、業平朝臣のなるを、たれどもさすべからぬやうに探りなしたるは、例の事なり

どなんよみてやりける。さる歌のきたなげさよ

(語釋) 歌のきたなげさよとは、眞實なる人の、ぬしある女に逢ひし事なれば、思ひなほして、過を改むべきに、さはなくて、いよく、切なる情をよみてれくりたれば、かくいふなり。自記の書なれば、卑下して、いへるなりといふ舊説は、いかゞ

(百三) むかし、ことなる事なくて、尼になりける人ありけり。かたちをやつしたれど、ものやゆかしかりけん。賀茂の祭見に出でたりけるを、男、うたよみてやる

(語釋) ことなる事なくて云々、かしられるして、尼となるなどは、大抵、子におくれたりと云々、父か、夫を失ひたるが如き、よのつねならぬ事ありて、世をはかなみてのしわざなるを、此の人は、さる格段なる事なくて、尼になれるよしなり。されば、親はやつして、尼となりたれど、世の中の事、ゆかしくて、賀茂の祭見にも行きたるなりけり  
世をうみのあまとし人を見るからに  
めくばせよどもおもほゆるかな

(語釋) うみの云々、世を倦みて、尼となれるは、海の邊にいひなして、髪はみるをかりとりて、人にくはすものなれば、海邊喰せに、目くばせをかねたるなり。目くばすとは、今の世にもいふ如く、おもふ情を、目にて知らするをいふなり。こゝは、尼なれども、物ゆかしくて、祭見に出でたるは、われに目くばせして、戀の情をよせよと思はるゝよしなりとの意なり

(百四) むかし、男、かくてはまぬべしといひやりたりければ、女

(語釋) かくては死ぬべしとは、男が女に對して、かくつれなくては、こがれじに、死ぬべしと、いひやりけるなり

まら露はけなばけななん消えずとも

玉にぬくべき人もあらじを

(語釋) これは、男は、いと切に戀あるを、女の情なきを擧げて、一つの興とせるなり○一首の意は、よしや、消えなばきえよ、消えずありとも、玉とぬきて、めづる人はあらじものとなり。露を男



にたとへたるなり

とらへりければ、ねたしとおもひけれど、こゝろざしは、いやまさりけり

(語釋) ねたしとれもひければ、かくつれなき女なれば、男は嫌くおもへ、其の容貌の美麗なる

に、深く迷へるなれば、志はいよく切になりまさるとなり

(百五)むかし、男、みこたちのせうえらしたまふ所にまうで、たつた川のはど  
りにて

(語釋) せうえらほ、逍遙の字音にて、遊びたのしむ義なること、既にいへり○こは、古今集に、二

條後の東宮のみやす所と申しける時に、御屏風に、立田川にもみぢ流れたる圖かけるを題にて、よ

めるとて、素性法師の「もみぢ葉のながれてとまるみなどには、紅をかき浪やたつらん」といふ歌の

つぎに、業平朝臣の歌とてあるを、此の文に、端の詞をかへて、とりたるは、例の事なり

ちはやぶる神代もさかずたつた川

からくれなねに水くゝるとは

(語釋) 立田川に、紅葉の流るゝは、紅にて水を絞り染めにしたりと見ねて、其の珍らしさ、いふは

かりなし。神代には、珍らしき事、さまざまあれども、其の神代にも、紅に水をくゝりやめにしたる

ことは、聞き及ばずとなり。紅の下を、水のくゝる事にとける説は、あやまりなること、更に論なし

○ちはやぶるは、神の枕詞なり

(百六)むかし、なまあてなる男のもとに、むたちありけり。うれを、内記なりける。

藤原のどしゆきといふ人、よばひけり。

(語釋) なまあては、生上品の意なり。殊に、勝れて上品なりといふにはあらで、なまゝくの上品な

るをいふ。すべて、ナマとは、熟せざる義にて、生意氣、生書生などのナマと同じ○むたちは、御達に

て宮仕の女房にもいへど、こゝは、さる貴女をいふにはあらで、此の生あてなる人の、召しつかふ女

をいふなり○敏行朝臣は、ある説に、貞觀元年に少内記に任せられしよし見えたり。此の書、時代を

ばわざと書きかへたれど、又、その人になき官をば、かゝぬ例なり。心して見るべし○よばひの事

は、前にいへり

此の女、かほかたちはよけれど、いまだわかければにや、文もをさくしからず。

詞もいひおぼらず。いはんや、歌はよまさりければ、

(語釋) をさくしは、立ち優りてはきくしたるをいふ。こゝは、をさくしからずなれば、いま

だ年若くて、文もはきくとは書き得ぬよしなり。おもふに、此の女は、十五六やらのさまなり○

詞もいひおぼらずは、いまだ世なれずして、艶書の詞のいひさまを知らぬよしなり

かのあるじなる人、あんをかきてやりけり。めでまどひにけり。さてをどこのよ

める

(語釋) あんは、案にて、下書のことなり○めでまどひにけりは、案外に、文の詞のよろしきをめで

たるなり○ある説に、此の女を、業平の朝臣の妹なりといへど、櫻東なし。事のさま、妹どもおぼし

けれど、さらば、兄人など書くべきに、あるじの男であるは、妹とせぬかきさまなり。此のことは、古



今集に、業平朝臣の家に侍りける女のもとに、よみてつかはしける、敏行とあるをれもふに、業平朝臣の母、伊登内親王に仕ふる女のやうに聞こゆ  
つれづれのながめにまさる涙川

袖のみひちてあふよしもなし

(語釋) ながめは、物れもひながら見る意と、長雨をかねたり○ひちては、ぬれてといふに同じ  
○一首の意は、連日つゝきて雨やまぬ比は、殊に、ものさびしく、いよく戀ひしきおもひのまされども、涙に袖のぬるゝばかりにて、あはるゝ様子もなしとなり

かへし、れいの女にかはりて

(語釋) 例の主人が、女にかはりて、よめるなり

あさみこそ袖はひづらめなみだ川

身さへながるときかばたのまん

(語釋) あさみは、あささの意なり○ひづは、濡るゝなり○一首のこゝろは、君が涙川のあさ、にこそ、袖はぬれぬ。さては、深く思ひ給ふとはたのみにしがたし。身もながるばかりとうけたまはらば、たのみにしまゐらせんとなり。このうたは、萬葉に、「廣瀬川袖つくばかり淺きをや、心をかめて我が戀ふるらん」とあるを思ひて、よめるなるべし

といへりければ、男、いといたうめで、ふみばこにいでて、もてありくとぞいふなる。

(語釋) 男、歌のれもしろきをめで、文箱に入れて、持ちありきて、したしき友たちなせには、見せなせしたりとなり

おなじ男、あひてのち、文れこせたり。

(語釋) あひてのち云々、前なるは、いまだ逢はぬうち的事、こゝなるは、逢ひて後の事なりと、こゝとされるのみなり

まうでこんとするに、雨のふりぬべきになん、見わづらひ侍る。身さいはひあらば、此の雨はふらじといへりければ、れいの男女、女にかはりて、よみてやらす

(語釋) まうでこんとするには、参らんとするにの義なり。これより、雨はふらじといふまでは、男の文の詞なり。今、参らんとするに、雨のふるを厭ひ煩ひぬ。此の身、もし、僥倖なる身ならば、かく折あしく、雨はふるまじと、極めて切なる情をあらはしたるなり○れいの男とは、彼のあるじの男のことなり。此の邊の文、簡にして意かかし

かすくにおもひおもはずとひがたみ

身をしる雨はふりうまされる

(語釋) かすくには、今の言に、深切にといふが如し○とひかたみは、問ひ難さにの意なり○身をしる雨とは、そなたが 眞實、深く我をれもふか否かをためし見る雨なりとの意なり○一首のこゝろは、深切に、そなたがれもふか、おもはぬかは、問ふとも知りがたし。何時も、体よくおもふよしにのたまへばなり。さるに、今、雨のふりまさるは、そなたの深切のほどを試験するに、甚、便宜な



り。此のふりしきる雨にぬれつゝ見えなば。深切なりと知り。見えすば、おもはぬ身を知るべしとの意なり。この歌の解、舊説いかゞ。新釋よろし

とよみてやれりければ、みのも笠もとりあへで、しとゝにぬれて、まどひきにけり

(語釋) しとゝは、雨に、いたくぬれたるさまをいふ。今言に、ヒツシヨリなどいはんが如し。男は前の歌を見て、おもふか思はぬかを、雨にてためすとの事なれば、笠笠を着る暇もなく、雨にぬれつゝ、まどひ來にけりとなり

(百七)むかし、女、人のこゝろをうらみて  
風ふけばとはに涙こそいはなれや

わがころも手のかわく時なき

(語釋) とはは、常磐の畧にて、つねに、いつもの意なり○涙こそ岩なれやは、岩なればにやの意なり○一首の意は、我が衣手のかわく時なくぬるゝは、つねに、涙こそ岩なればにや。さてく、涙の多き事よとなり。さてはしの詞にて、涙はうらみの涙なる事をしらせたるなり○此の歌は、貫之集にあり。又、新古今集にも、戀の一に出で、貫之のうたなり。但、共に「岩なれや」と「磯なれや」とあり。いさゝか、句をかへて、例のつくりなせるなり

とつねのことくさにいひけるをきゝおよびける、男

(語釋) 右の歌を、女がつねの言々さにいひるよしを、男が聞きおよびて、つきの歌をよみける

よしなり

よひごとにかはづのあまたなく田には

水こそまされ雨はふらぬぞ

(語釋) よひごとには、蛙は多く響になくものなればいふ○水こそまされ云々は、蛙の鳴くといふより、鳴けば、涙もあるものなれば、その蛙のなく涙に、雨はふらぬぞ、水まさるが如く、我が涙もおほしとなり○一首の意は、そなたは、衣手のかわく時なく、涙はほしといはるれども、我が涙も、決してうれにれとらず、たとへていはゞ、響ごとに、蛙のれほく鳴く田には、雨ふらすして、水まさるが如き涙なりといひて、涙のれほきを争ひしなり。さてその涙の多きは、憂事おほきしるしなればなり。拾穂抄、臆断などの説はいかゞ。前にもいへるが如く、贈答のうたは、すべて、かく先方よりいひおこせる事を承けて、争ふさまにいふがつねなり

(百八)むかし、男、友たちの、人をうしなへるがもとにやりける

(語釋) 人とは、思ふ人の意にて、妻などをいふなるべしと、新釋にいへるが如し

花よりも人こそあだにけりけれ

いづれをさきにてひんどかみし

(語釋) 花は、はかなくあだなるものなるに、此の春は、うの花より人こそはかなくなりたまへれ、君は、かねて、花と人といづれかさきに戀ひしたはんと思ひ給ひし、必、花をとおもひ給ひしならん。しかるに、花のちらぬさきに、思ふ人を失ひ、戀ひしたひ給ふことよと、歎きたるなり。みしは、



思ひしの意なれど、花につきていふなれば、かくいへるなり○此の歌は、古今集、哀傷の部に入りて、詞書に「櫻をうゑてありけるに、や、咲きぬべき時に、かの植ゑたりける人、みかりければ、其の花を見てよめる、紀茂行」とあり。こゝも、はしの詞に、少し花のことあらば、歌の意は、一段なるべし

(百九)むかし男、みそかにかよふ女ありけり。それがもとより、こもひ夢になん見えたまひつるといへりければ、男

(語釋) みそかには、密かになること、屢いへり。密かに通へる女の許より、手紙にて、今宵、うたゝねの夢に、君を見て、いと戀ひしなといひよこしたりとあり

おもひあまりいでにしたまのあるならん

夜ふかく見えばたまむすびせよ

(語釋) たまむすびといふ事は、當時の物語書にたほく見えたり。諺に、人だまを見て、「魂は見つぬしはたれどもしらねども、むすびすむる下がへのつま」と三たび唱へて、衣の下がへのつまを結ぶ事といへり。此の諺の歌は、ふるきものにはあらざるべし。されど、魂むすびといふ事の、ふるくよりいへる事なるは、論なし○一首の意は、しのび逢ふ中なれば、却りてれもひ切にして、魂のうかれ出でにし事もあるならん。そなたのうたゝねの夢に見えつるは、すなはち、其のうかれたる魂なるべし。猶、夜ふかく、魂の見えなば、魂むすびして、そこにいとめ給へとなり

(百十)むかし、男、やんごとなき女のもとに、なくなりける女をどふらふやう

にて、いひやりける

(語釋) やんごとなきは、貴きをいふ。貴女のもとにありける女に、しのびて通じけるが、なくなりければ、それを吊ふやうにて、主の貴女に、ほのかにもひを漏らしたるなり

いにしへはありもやしけんいまだしる

また見ぬ人をこふるものとは

(語釋) この歌は、心おほかた明らかなり。いにしへは、ありもやしけん、それは、いざ知らず。まだ見もせぬ人を、戀ふるものとは、我が身には、今ぞ知りぬとなり。さてかくはかなきものれもひをする事かなといふ意を含めたり。又、表面の意は、いひよらんとするほどに、なくなりたる女を戀ふるよしにて、裏面には、未、しらぬ主の貴女を慕ふこゝろをこめたるなり

(百十一)むかし男、つれなかりける人のもとに

こひしとはわらにもいはし下紐の

どけんを入はそれとしらなん

(語釋) 戀ひしと、殊更にいはし、我が戀ふるしるしには、必、君が下紐解けん、其の度こそ、我が戀ふる事を知れかしとなり。古諺に、人にこひらるれば、下紐とくといひならへる事あれば、かくはいへるなり○この歌は、後撰集、戀に、女のもとにつかはしける、在原元方とあるなり。こゝも、例のあらぬさまにかきかへたるなり

かへし



し九紐のしるしとするもあらなくに

かゝるかごとはかけずあるべき

(語釋) しか戀ふるしるしとせよとのたまへど、我が下紐はどけじ、かくばかりいたづらなるいひよせ言は、いひかけ給はで有るべきものか、これは、そら言なりといふ心なり。ふるき諺をたのみて、いひやりしに、しるし見ぬすと答へられしは、おもしるきなり

(百十二)むかし、男、ぬんじろにいひちぎりける女の、ことさまになりければ

(語釋) ことさまになりければ、異様になりなければにて、今まで懇親なりし女の、異男に契りて、心かはれよしなり。さては、うらめしく悲しくおもふべければ、かくいひて、歌のこゝろを深からしむる、例の巧なり

すまの蟹のしほやくけふり風をいたみ

おもはぬかたにたなびきにけり

(語釋) すまのあまの鹽焼く煙、風のはげしさに、彼方へは靡くまじと思ひしに、案外にも、彼方へなびきぬる事よとなり。我がおもふ女の、あらぬ方になびきつきたるをたとへたり○この歌は、古今集の戀にあり。萬葉に「つなの浦に鹽やく烟夕されば、行き過ぎかねて山にたなびく」又「しかのあまの鹽やく煙風をいたみ、たちはのぼらで山にたなびく」などあり

(百十三)むかし、男、やもめにておて

(語釋) やもめは、和名抄に、無妻曰寡、(夜無乎)無夫曰寡(夜無女)とありて、老いて夫なきをヤモ

メといふこと、更に論なし。されど、此の比より、男女、通じて獨居せるものを、ヤモメといひきと見えたり。今の世にも、いふことなり。又、支那も、同じ事にて、孟子の註には、老而無妻曰寡、老而無夫曰寡とあれど、爾雅には、凡無妻無夫通謂之寡とも見えたり

ながゝらぬいのちのほどにわするゝは

いかにみじかきこゝろなるらん

(語釋) 逢ひたる女の念れしうち、男はなほ慕ひて、男女をも呼ばて、やもめにてありつゝ、恨みてよめるなり。一首のこゝろは、聞こえたるが如し

(百十四)むかし、仁和のみかど、せり河に行幸したまひける時、なま翁の、今はさる事にげなくおもひけれど、もどつきにける事なれば、大たかの鷹がひにて、さむらはせたまひける。

(語釋) 仁和のみかどは、光孝天皇を申せるなり。仁和は、其の御代の年號なり、芹河行幸のこと、は、仁和二年十二月十四日なること、三代實錄に見えたり。ろのをりの事なるべし○なま翁とは、生翁の義にて、いたく年老いたるにはあらぬをいふ。年老いては、鷹飼は似合しからずれもひけるなり○もどつきにけるとは、はじめより、鷹飼の方につきにけることなればといふ心なり○大鷹のたかかひとは、大鷹飼、鶴飼とてある、その大鷹の鷹飼なり。西宮記、十一の巻に見えたり○さて此の行幸の時、行平、供奉にて、翁さびやとよまれたる事、後撰集に入りて、うたがひなし。さるに、此の物語にては、業平朝臣の供奉して、よめるが如くつくりなしたり。此の朝臣は、此の時、已に卒



せられて、七年ののちなるを、猶、かくも作りなせるは、此の文のつねなりと知るべし

すりかりぎぬのたもとに、鶴のかたをつくりて、かきつけける

(語釋) すりかりぎぬは、摺狩衣なり。西宮記十一の卷、王卿衣服の條に、大鷹々飼者着地摺獵衣とあるこれなり○つるのかたをつくりて云々、こは加茂祭に放免のものゝきものにけづり。花をぬひつけたるごとく、作りたる鶴のかたを、袂にぬひつけたるなるべし(加茂祭放免の圖は、伊藤講師の徒然草講義、第二十五號に、其の圖をのせたり参照すべし)○さて後撰集に、嵯峨の帝の例にて、芹川に行幸したまひける日、在原行平朝臣「さがの山みゆきたえにしせり河の、ちよの古道あとはありけり」又同日、たかゝひにて、狩衣のたもとに、鶴のかたをぬひて、書きつけゝる、同人「翁さび人などがめそ」云々とあり。これを以て、かけるなるべし

翁さび人などがめそかり衣

けふばかりとぞたつもなくなる

(語釋) 翁さびのさびは、すさびの意にて、手すさび、口すさびなどいふすさびに同じ。すさびは、もと進といふ意に、其の方に心の進むをいふ。こゝは、翁の心やりに、摺狩衣のたもとに、鶴のかたを縫ひなど、翁の狩場のなごりにおもふ心やりに、かくはれやかなるさましたりとなり。それを、人などがひるなかれとなり。さて下の句に、今日ばかりと、名残のをしさにといふを、ことわれるなり。それを、鶴にうつしていへるなり。鶴も、鷹にとらるれば、今日ばかりと思ひて、聲たてゝ鳴く、それと同じことなりといふ心なるべし

おほやけの御けしきあしかりけり、おのがよはひを思ひけれど、わかゝらぬ人は、きゝおひけりどや

(語釋) おほやけは、天皇の御事なり○御けしきは、御氣色にて、御心に障りたるゆゑ、みけしきあしかりきとなり○おのがよはひを云々、記者の詞なり。帝も今年五十七にはしければ、御身に聞き負ひ給ひて、御けしきあしかりつらんどなり。されど、わかゝらぬ人は云々といふを、たゞちに、天皇の御事に見たる説は。わるし、これは、なべての人を、記者がいへる詞なり。しかし、天皇の御けしきあしくおはしけるも、之を聞き負ひ給ひしゆゑなりと知らせたる文なり

(百十五)むかし、みちの國にて、男女すみけり。都へいなんといふ。此の女、いとかなうて、うまのはなむけをだにせんとて、おきのね、みやこしまといふ所にて、さけのませてよめる

(語釋) みちの國は、陸奥の國をいふ。都の男、陸奥の國へゆきて、女と住みしが、再、都へいなんといふをりの事なり○そまのはなむけは、馬の鼻向にて、もと旅行する人の馬を、その方へ向けて、わかれをつくるよりうつりて、たゞ、饑別の意にいふ詞となりぬ○おきのねは、沖の井、みやこしまは、都島なるべけれど、此の名所、陸奥の國にあるべし。されど、その所は今知られず○又、一本に、この一々たりのはなしなし。落ちたるなるべし  
おきのねて身をやくよりもかなしきは

みやこしまへのわかれなりけり



(語釋) れきは、熾なり。熾は、和名抄に、和名、オキヒ、猛火也とあり○一首の心は、熾を身にすゑてやくは、あつく堪へがたきものなるが、それより、一段かなしく堪へがたきは、君は都へ、吾はここの島邊(陸奥の國)へのこる別なりけりとなり○この歌は、古今集の物の名に、沖の井、都島をかくして、小野小町がよめる歌なるを、かくはし書をつくりて、一條の物語としたるなり  
 とよめりけるにめで、とまりにけり

(語釋) 聞こえたるが如し

(百十六)むかし、男、すゝろに、みちの國までまどひいきけり、京におもふ人にいひやる

(語釋) すゝろは、前にもいへるが如く、案外に、又、漫になを尋すべし。都の人の行くまじき、遠國へまどひ行きたる意なり

なみまより見ゆるこし、まの濱ひさき

ひさしくなりぬ君にあひみで

(語釋) この歌は、萬葉の「浪間より見ゆる小島の濱久木、ひさしくなりぬ君にあはすして」とあるを、少しなほして、一條としたること、明らかなり○上の句は、久しといはんための序のみ。君に合はずして、久しくなりぬ。まことになつかしとなり○ひさ木は、濱邊に生ふる楸のたぐひをいふ。萬葉に、「吉野にて赤人(ぬば玉の夜のふけゆけば久木たふる、清き河原に千鳥しばなく)など見えたり

何事もみなよくなほりにけりとなんいひやりける

(語釋) 古意にいはいはく、むかし放縱なりし事ども、今はよくなほりたりといへり。此の詞、たゞに見ては、此の文の意にかなはず云々。此の説よろしかるべし。今までは、好色なる心のすまみに、本の妻をば、大かたに思ひてありつるを、さる心なほりてより、今更になつかしく、おぼゆるよしの歌をよみてやり、又、昔、放縱なりしことの、皆、なほりたりといひやれるよしなり

(百十七)むかし、みかど、住吉に行幸したまひけり

(語釋) 本居宣長翁いはいはく、此の條、すべて詞足らず、他條の例に似ず、歌も誰が歌ともわきまへがたく、神の現形も、俄なり。他條の例にていはく、「むかし、男、帝の住吉に行幸したまひける御供に仕ふまつりてよめる、「我が見ても」云々とよめりければ、大神云々などころあるべけれ云々と、此の説、まことにさる事なり。此の條は、詞をあまたおどせるものと見たり

我が見ても久しくちりぬ住吉の

きしのひめ松いく代經ぬらん

(語釋) おほかた聞こえたるが如く、住よしの岸のひめ松は、我が見來たりてよりも、年久しきものなるに、其のはじめ生ひろめし時より、今までは、幾代か經しならんとなり○此の歌は、古今集に、題しらす、よみ人しらすとあるを、はしの詞をつくりて、一條の物語としたるなり

おほん神、げきやうしたまひて、



(語釋) げきやうは、現形の字音なり。御神、形をあらはして、歌よみたまへりとなり。そのゆゑは我が見ても歌に感じ給ひきとやうに、かきなせるなり  
むつまじと君はまらさやみづかきの

久しき世よりいはひそめてき

(語釋) みづかきは、久しの枕辭なり○君とは、帝を申すなり○いはひは、こゝは、守る意なり○一首のこゝろは、我むかしより朝廷を守りそめて、今も、なほ、君を守ることなれば、むづまじと、君は知り給はずやと、神のたまふこゝろなり

(百十八)むかし、男、ひさしくおどもせで、わするゝこゝろもなし、まねりこんどいへりければ、女

(語釋) 久しくおどもせで云々、久しく音信もせぬ人の、参り来んといふは、言の上のみ、体裁つゝろひいふを知らせたる女なり

玉かづらはふ木あまたになりぬれば

たえぬことのはうれしげもなし

(語釋) 玉葛の、あまたの木にはひひろがりたるやうに、君は彼方此方へ、体よき言いはるゝ事なれば、音信のたえぬのみは、格別、うれしと思はずとなり

(百十九)むかし、女、あだなる男のかたみとて、れきたるものどもを見て

(語釋) あだは、前にいへり○かたみは、形見の意にて、昔、ありつる人の形のかはりに、其の物を見るゆゑにいふ。遊仙窟に、念記の字をカタミと訓めり

かたみこそ今はあたなれこれなくば

わするゝ時もあらましものを

(語釋) 形見こそ、今は敵なれ。これなくば、まぎれて隠れらるゝこともあるべきにどの意なり○これは、古今集に、題しらす、よみ人しらすとある歌なり

(百二十)むかし、男女のまだ世経ずとおぼえたるが、人のもどに、志のびてものきこえてのち、ほどへて

(語釋) 此の處、かよひ、次の歌の解、新釋の説よろし。其の文にいはいく、男女の中を世といへば、まだ男にあはぬ女ならんとおもはるゝを、女のまだ世へす云々とはいへるなり。しかいへるは、わかき女に、ものいはんとすれども、つれなきに、こはまだ世へぬ女なれば、うひくしくして、かゝるならんとおもひをよしなり。歌につれなき人のといへるを、合はせ見るべし。さてさやうにおもひしは、目き、たがひにて、ろの女、異人にしのびてあへるなり。其の後、ほどへて、あまたの男にやあひつらんとおもひにくみて、歌よみてやるなり

あふみなるつくまのまつりとくせなん

つれなき人のなべのかず見ん



(語釋) つれなき君を、近江の國の、筑摩の神の産子にして、祭にかづきたまふ、なべの數見たらんには、さやあまたならんと思ふに、はやく見まほしければ、其のまつりとくせよかしといふ意なり。かくいふは、彼の神の祭には、女の一生のあひだ、あへる男の數ほと、なべをかづきてわたるといふ事のあればなりけりと、例の新釋にいへり○近江の筑摩は、御厨なれば、延喜式などに、おほく出でたり。此の神は、文徳實錄に、仁壽二年二月、授近江國筑摩神從五位下と見へたり

(百二十一)むかし、男、梅つぼより、雨にぬれて、人のまかりいづるを見て

(語釋) 梅つぼは、内裏の凝花舎のことなり。前庭に、梅を栽ゑたれば、梅壺ともいふなり。藤壺、桐壺などいふ、皆この類なり○まかりとは、尊き所より、賤き所へ行くをいふ。まゐるといふ語の反對なり。然るに今の世に、人の許へゆくを、罷り出づといふは、古言の意に叶はず

うぐひすの花をぬふてふかさもがな

ぬるめる人にさせてかへさん

(語釋) がなは、例の願望の意○ぬるめるは、濡るゝやうすといふ義なり○此の歌は、今古集に、「鶯の笠に纏めてふ梅の花、そりてかさゝん老かくるや」とあるなどによりて、記者のよめるなるべし○一首のこゝろは、鶯の梅の花をぬふといふ笠もがな、其の笠を、ぬれてゆく人にさせて、家にかへさんといへるなり

かへし

鶯の花をぬふてふかさはいな

おもひをつけよほしてかへらん

(語釋) 雨にぬれて、梅つぼよりまかるを、鶯の纏めてふ花笠をさせて、かへさばやどのたまへと、これをばほしからず、たゞ、うなたの思ひを付けられよ、さらば、袖をほして立ちかへるべしとなり。おもひのひを、火にどりなしたるなり

(百二十二)むかし、男、ちぎれる事、あやまれる人に

(語釋) 契れる事を、隠れたる女にいひやるなり

山しろのおでの玉水手にむすび

たのみしかひもなき世なりけり

(語釋) この歌は、六帖にも見え、又、新古今集戀にもあり○むすびは、掬の字をあつ。すくひ汲ひことなり。玉水を掬ひてたのみしと言ひかけたるにて、上の句は序なり。たのみしたを隔て、のみしに掛けたる序なり○玉水は、袋草子に、井出の玉水とて、めでたき水ありて、性來の人、手にひすびて、のむといへり。玉は、ほめていふ詞なり○一首の意は、おほかた聞てえたるが如く、約束せる事を深くたのみにしたりしかひもなき世にて、かく隠れられたりと、恨み歎きたるなり

といひやれど、いらへもせず



は、あるまじきにくきしわざなるを擧げて、次條の、まことある女のさまを、つよく聞かせん料なるべし

(百二十三)むかし、男ありけり。深草にすみける女を、やうくあきがたにやおもひけん。かゝる歌をよみけり

(語釋) あきがたにや云々は、厭方にや思ひけん。出で、去んとする歌よめりとなり○これは、古今集、雜部に、深草の里に住み侍りて、京へまうで來とて、そこなりける人に、よみておくりける、業平朝臣とありて、此の前後、友だちなどの贈答せる篇なれば、是もしたしき人におくりつらんを、此の文には、夫婦となりて、住みける女にむかひて、よめる事とつくりかへたり。されど、古今集にもかへしは、よみ人しらすとあれば、女にてもありけん。其のつぎに、男とちの贈答も、戀の如くよみたるによるに、たゞ、したしき女とは知られたり

年を経てすみこしやとを出で、いなば

いとゞ深草野とやなりなん

(語釋) 年を経て、いたく草ふかく住みなしたる郷を、我がすて、いなば、まことの野とやならんといひて、所の名の深草野を、巧に詞になしたるなり。歌のこゝろは明らかなり

女かへし

野とならばうづらとなりて鳴きをらん

かりにだにや君はこざらん

(語釋) 君のおほせらるゝ如く、果して野とならんには、吾は鶉となりて、鳴き居らん。しかるに、君は狩にだに、來給はざるべしとの心なり○鶉は、あれたる野にさるものなれば、年を経て、住みこしやとの、いたくあれたるを知らせたるなり

とよめりけるにめで、ゆかんとおもふこゝろ、なくなりけり

(語釋) 前の條には、男のしたへとも、女のまことなきをいひ、こゝには、男のあきがたになりて、出で、いなんとするを、女のうらむるけしきもなく、たゞ、野となるまゝに鳴きをりつゝ、いとせめて、狩にこんよすがをだに待ち居らんとけふかぎりなき女のまことをめで、男のどゞまれる事をいへり。作りなしたるものといへど、これを讀むとき、あはれすゝ、さるはなし。されば、此のこゝろを添へんとて、巧に、はしの詞をかへ、はたそれ、男女の中らひをいふ終なれば、いとまたはれたりし事ともの末に、しかしながら見る人、心をせよとて、記者の心せるにやあらん。見よ、次の二つの條に、故あるつらねざまなるを、古意にいはれたるは、卓見といふべし

(百二十四)むかし、男、いかなりける事をおもひけるをりにか、よめる

(語釋) いかなる折とあらはさずして、かくいへる、なかく、こゝろ深し  
おもふこといはでぞたゞにやみぬべき

われどひとしき人しなければ



(語釋) たゞには、萬葉集に、黙然の文字をよめるにて、聞てえたり○人し。し文字は、例の助辭なり○一首の心は、おほかた聞てえたるが如く、思ふことは、無限にあれど、黙して止みぬべし。おのれと同じやうなる感慨をもちし人の、なき世なればといふ意なり。總論のところにもいへるが如く此の物語、すべて事實は、いろ／＼に書きひがめて、何人の作にて、何人の事實といふこともわからぬやうになしたれど、實は業平朝臣、藤原氏の專横なるを憤り、おのれの不遇を歎じたるあり、掩ふべからざるものあるが如し。すなはち、此の歌の如きは、大に時勢を憤慨したること、見えたり。歌も姿情たかくして、業平朝臣の詠なるべしとおぼゆ。新勅撰集には、業平朝臣としてあげたり。なほ、この條は、總論の處と参照すべし

(百二十五)むかし男、わづらいて、こゝちしぬべくおぼえければ

(語釋) こゝちは、心持の略なること、前にいへるが如し○古今集には、「やまひして、よわくなりにつひにゆく道とはかねてきゝしかど

きのふけふとはおもはざりしを

(語釋) この歌は、意も詞も、あきらかななり。歌は、かくてこそ、餘情も深きものなれ。しかるに、後世の如くたくみていはんとするは、なかくにわらし。業平朝臣は、元慶四年五月二十八日に、年五十六にて、卒せられぬ。されば、これはそのほとの歌にやあらん

伊勢物語講義終

明治二十六年五月十日 印刷  
 明治二十六年五月十五日 發行  
 明治二十七年十月十日 再版  
 明治三十三年五月二十日 第八版

正價金廿五錢

講述者 今泉定介

發行者 伊藤岩治郎

印刷者 杉原弁次郎

發賣所 誠之堂書店



府立城北中學校國文科講師 大塚彦太郎講述

史科日記講義

全 正價金三十錢 郵税四錢



從二位伯耆東久世通福君題  
從三位子爵福羽美靜君題詞  
東京侍講本居豐顯大人閣

從三位末松謙澄先生叙  
從六位小中村清矩大人序  
松風増田子信君譯

# 新編紫史

一名通俗源氏物語

和本仕立 合本全十帙(二十冊)實價壹帙(二冊)金七十五錢宛  
洋紙摺 壹篇(則和本二冊合)實價四十五錢宛每篇郵稅六錢宛

新編紫史は源氏物語を通譯したるものなり夫源氏物語は我邦小説の巨擘にして空前絶後の大著威  
神泣鬼の妙筆なること古來既に説ありされば鎌倉時代より今日に至るまで學士文人これに注釋を  
施すもの殆四十家に下らず然るも猶其讀み難く解し易からざるを以て後世の人其書を耳にして其  
文を目にせず是を以て京傳馬琴以上には小説なしと爲して徒に支那西洋の稗史に容戀す豈悲しき  
業ならずや松風先生書て大學に在りて本邦の文學を修め文辭尤精妙を推さる先此書を譯して容  
易くこれを通讀するを得るの便を興へられたり文は會て原書の意を失はず語は古雅に偏せず卑俗  
に陥らず坊間刊行の小説に比すれば眞に玉石の別あり抑本書の利益は意匠の絶妙のみならず當  
時の人情風俗及び京洛の景況宮中并に朝神の有様等より一般の世態を詳に叙したれば人をして親  
しく一千年前の時代を経歴せしむるの想あらしむは是他の歴史等に於ては決して見ることを得ざる  
ものたり荷皇國人たるものは必先一讀すべし其の珍貴たり將た讀まざるを愧つべきの妙史なり  
●本書初帙及二帙共賣切の處今般再版出來仕候  
東京神田區鍛冶町四番地 誠之堂

今國文學勃興の機運に際す弊堂此に見所斯學專門各大家の熱心  
や國文學勃興の機運に際す弊堂此に見所斯學專門各大家の熱心  
な贊助を得編輯主任を置き國文學界と題する講義録を發刊す本誌一地方遠隔の地  
て斯學を修めむとする者境遇に親しく師に就く事能はざるに餘り有り  
る者教科の餘暇進んで大に研むる所有らむとする者或は  
●學試驗又學措試驗等は一度本誌を精かば其希望は忽達せらるべし其目的の  
志す者の必ず坐友に備へざるべからざるものなり

## 月刊 國文學界

第壹號 十一月一日發行  
一冊凡百頁每一日發行  
日二回發行 一ヶ月三拾錢六ヶ  
購讀一ヶ月三拾錢六ヶ  
月壹圓七拾錢一ヶ月三  
圓三拾錢外に郵稅二冊に  
付一錢替爲は●今川橋  
局宛●郵券代用一割増

- 平治物語講義 國學院講師 今泉定介
- 萬葉集講義 高等師範學校教授 島山健
- 増鏡講義 國學院講師 落合直文
- 日本俗語文典 女子高等師範教授 松下大三郎
- 有職故實 專門學校講師 關根正直
- 言語學 專門學校講師 高橋龍雄
- 保元物語講義 城北中學校講師 三木五百枝
- 落窪物語講義 前大學教授 內藤耻叟
- 大鏡講義 第一高等學校教授 中村秋香
- 古事記講義 國學院講師 栗島山之助
- 評釋摸範土佐日記 專門學校講師 久保惠憐
- 告檢定試驗志願者 文部檢定試驗委員 高橋龍雄
- (餘興) 俗語評註 岡田正美

發行所 東京神田區鍛冶町四番地 誠之堂 東海信文社 ●上田屋 ●北條館 ●良明堂 其他各地



定價金八十錢

雙木園主人編述

江戸時代 戯曲小説通志

挿畫和裝半紙本全四冊美裝

郵稅十四錢

若し。本邦に於ける。文學發達の最盛期を擧ぐれば。江戸時代に若くものなるべし。和漢の文學は。さて置き。殊に戯曲と小説とに於て。最も絢爛の結果を見る。蓋。群芳の蕾を破り。百花の香を放つも。以て其の華美に喩ふるに足らざる也。况又。夜雨玉碎け。高山水落つるの妙響ある者に於て。手を。近世英人動もすれば。エリササス。朝を擧げて。其の文學の發達を誇る。然れども。本邦江戸時代の文學は。未必らずしも。之に下らざるなり。然るに。從來の習慣として。戯曲小説としいへば。婦人遊戯の玩物の如く輕視し。嘗て讀者の取る所とならざりしは。實に一大恨事なりと云はざるべからず。要するに。戯曲と小説とは。社會の反映なり。人心の汚隆。邦家の盛衰共に。之と聯系して。相離れざるものなれば。其の源委流派の如きは。苟も文學に志あるもの。知らざるへからざるものとす。今雙木園主人。此に慨する所あり。近世に起れる。戯曲小説の事歴を網羅し。名けて江戸時代戯曲小説通志といふ。上は寛永慶安より。下は文久慶應にいたるまで。江戸開府以來。凡二百四十餘年間の文學歴史にして。第一篇。戯曲の部には。淨瑠璃本。及び演劇脚本の發達を叙し。併せて其の文例を示し。第二篇。小説の部には。浮世草紙。洒落本。人情本。草雙紙の發達より。遂に寶錄物。讀本。滑稽本の變遷沿革に及ぼし。又文例をも示せり。第三篇。傳紀の部には。小瀬甫庵。鈴木正三。井原西鶴。近松門左衛門。竹田出雲。並木宗輔。福内鬼外。山東京傳。曲亭馬琴。式亭三馬。十返舎一九。爲永春水を首め。外數百名にかゝる。奇行逸話を採録し。殊に作者の肖像は勿論。淨瑠璃本。小説本の挿畫凡數十種は。一々古風を模刻して。當時の真相を失はざらんことを務め。又年表。索引をも付したれば。極めて人名の搜索に便なり。希くは諸君子。一本を御購讀の上。近來の奇書なりと賞し賜は。弊店の光榮。之に過す。

注意！此の種の書籍は近頃社標の類書多し購客各書林に就き誠之堂出版部々著の何書と御指名とを

生田目經德編 和本全八冊

高等女學校 女子師範學校 教科用書

新定 女子國文讀本

定價 從一至四各金廿貳錢 從五至八各金廿五錢

この書は著者が女子教育に従事せるを以て其授業の經驗に富み且女子の稟性を熟知し嘗て適當なる高等女學校國語教科書なかりしを憂へて編する所なりされは編纂の體裁事項皆當時の情勢に合し實地に適せざるはなし其材料の撰擇を略記せば高尚貞淑なる女徳を涵養し家政經濟其他婦人に必要の事を輯録し歴史地理及すべての學科との關係をはかり文章の難易雅俗を考へ往々和歌を交へ載せて文學の趣味を覺知せしむるを務め授業の時期を量りて成るべく其季節のものを擧げたり又學年週時を測り毎卷の紙數を定め最授業習得に便益ならしめ尙女子師範學校の教科にも應用せしむべく毎卷に完結したり編纂に意を用ひたる未この書の如きものを見ざるは閱者のとくに了知する所なり

發行所

東京市神田鍛冶町(電話本局九四九)

誠之堂書店



三島中洲題字 古志學人輯釋  
岡三二慶校閱

### 文章形容詞範

和本文二冊 正價金三十錢  
郵税金四錢 切手一割増

形容詞(憤然荒爾の類)文に要なる  
猶手まね足まねの談話に要なるが  
如し手まね足まねに非らざれば尋  
常言語の言ひ顯はし得ざる處言ひ  
顯はし得る者なく形容詞の文に要  
なる此の如し而て世に其書ならし  
此書の粹に上る所以なり輯る所は  
悉く古來の名家が用ゐる者にして  
語々温雅妥當部門を類し此を引用  
に便し毎語其用書用例を掲げて其  
據り處あるを示し特に其字義に至  
ては精確校訂苟も謬辭なきを期す  
實に作文者譯文者必須の書なり

發兌元 東京神田 誠之堂  
鍛冶町 (電話本局九四九)

西村天囚居士著

(筒井年峯子書)

# 紀行八種

菊判美本 紙數百卅頁 正價金卅錢 郵稅四錢

●金剛山 列風雷雨の日金剛山に登り古山伏雨後の月を賞し南朝の遺跡を吊へり

●春衫輕笏錄 大和に天誅組を祭り伏見に九烈士の墓を訪ひ足利の木像を評して嵯峨野なる小楠公首墓の由来を録す

●風流順禮 殿島に遊びて山陽道に上れる道の記にして同伴は風流少一法師なり

●雲の行方 木曾山の山奥深く分け入りて浮世に還き山村の人情風俗を叙したり

●觀佛記 地獄谷の禰養を携ふて岩石に彫れる佛像を求めて幽を聞き歌を題はせり

●河内紀行 天野山に登り觀心寺に遊びて南朝の古蹟遺物を觀て遂に捕母の墓跡を察めたり

●奥山羽水 奥羽の山水を採りて浮島の奇境を寫せり

●奈良巡 奈良巡りの乘りにて名所及び古實物を訪ひて委しく品評を費せり

## SELF GUIDE FOR TRAVELLERS IN JAPAN.

發行所 神田區 鍛冶町 (電話本局九四九) 誠之堂 賣捌各

酒井拾彦先生實地踏查圖

東京府城北中學校長 今泉定介先生述

## 平家物語講義

合卷 全五冊(挿圖)  
菊判紙數 凡壹千二百頁  
壹册正價 金三十五錢  
郵稅 各 金六錢宛

漢文を用ひずして能く漢文の莊重をうつし國文を用ひてよく國文の軟弱に陥らざるものは戰記文にしくはなし特に平家物語は其の調の流暢なるもの文の自在なる優に源平盛衰記れよび太平記を凌駕せり古來世人の賞賛しておかざるも亦故ありといふべし然れども是等戰記文の常としされば古人も戰記文を解釋せるもの殆稀なり今日中等教育普通文の模範として最も適當なる本書の一の詳解なく學生諸君をして隔靴搔癢の歎あらしむるは誠に教育界及文學界の一大缺點といふべし本店こゝに見る所あり今泉先生に請ひて數年間先生刻苦の稿を世に公にする事とすをゆるさる本書の價値はこゝにいふまでもなく讀者諸君の公評にまかせん唯本書の最も特色とする所を掲ぐれば左の如し

(第一)本書本文は數本を以て最も鄭重に校訂したる事  
(第二)講義は最も簡にして其の要を得たれば初學の人と雖も容易に解せらるべき事  
(第三)每卷甲冑刀劍弓矢等すべて武家の故實に關する圖を附して詳解したる事

## 今泉定介先生講述 方丈記講義

正價金 拾八錢  
郵稅 金 二錢



終

